

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ

報告書全体のダウンロードはこちらから [PDF](#)[はじめに](#) [PDF](#)

- [1 学習状況調査Web報告書公開の趣旨](#)
- [2 学習状況調査を生かした授業改善までのプロセス](#)
- [3 報告書の概要と活用に向けて](#)
- [4 授業改善のヒント](#)

I 調査の概要 [PDF](#)

- [1 調査の趣旨](#)
- [2 調査の対象](#)
- [3 調査の実施方法](#)
- [4 調査結果の処理](#)
- [5 調査結果の返却方法](#)
- [6 調査の内容](#)
- [7 到達基準の設定について](#)
- [8 到達基準による判定と今後の指導に向けて](#)

II 調査結果の概要 [PDF](#)

- [1 教科ペーパーテスト及び児童生徒意識調査の概要](#)
- [2 児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像](#)
[小5／中1／中2](#) [共通グラフ](#)
- [3 児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像](#)
[小5／中1／中2](#) [小5グラフ／中1グラフ／中2グラフ／共通グラフ](#)
- [4 教師意識調査から見た佐賀県の教師像](#)
[小学校／中学校](#) [共通グラフ](#)

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

- | | | |
|-----|--|---------------------|
| 小学校 | 1 国語:日常生活で使える言語活動を意識した指導 | PDF |
| | 2 社会:知識や技能の定着を図るためにも、既習事項や生活との関連をもたせる授業を | PDF |
| | 3 算数:算数的活動を効果的に取り入れて、数学的な考え方を育てる授業づくり | PDF |
| | 4 理科:児童の体験の充実の保証と考えを交流しあえる授業づくり | PDF |
| 中学校 | 1 国語:「自分の考えの形成」に導く言語活動の充実を | PDF |
| | 2 社会:「思考力・判断力・表現力」を育てる言語活動の充実を | PDF |
| | 3 数学:知識・技能の習得を図り、思考力・判断力・表現力をはぐくむために | PDF |
| | 4 理科:生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導の徹底 | PDF |
| | 5 英語:書く活動を日常的に取り入れた授業づくり | PDF |

Ⅳ 意識調査の結果の分析

意識調査結果の分析に当たって

児童生徒意識調査質問項目の構成

教師意識調査質問項目の構成

児童生徒

- 1 [学校生活](#)
- 2 [学習動機](#)
- 3 [学習活動\(教科全般\)](#)
- 4 [生活習慣](#)
- 5 [家族関係](#)
- 6 [課外活動や部活動、地域における生活](#)

教師

- 1 [教科全般における指導法の工夫](#)
- 2 [学習環境の活用](#)
- 3 [家庭学習への関与状況](#)
- 4 [教師の指導観](#)
- 5 [学校組織マネジメントに対する意識](#)
- 6 [IT・少人数指導の成果と課題](#)

Ⅴ 自校データの分析と活用

学校の状況に応じた指導方法の工夫改善へ向けて

最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > はじめに

はじめに ～学習状況調査を生かした授業改善までのプロセス～

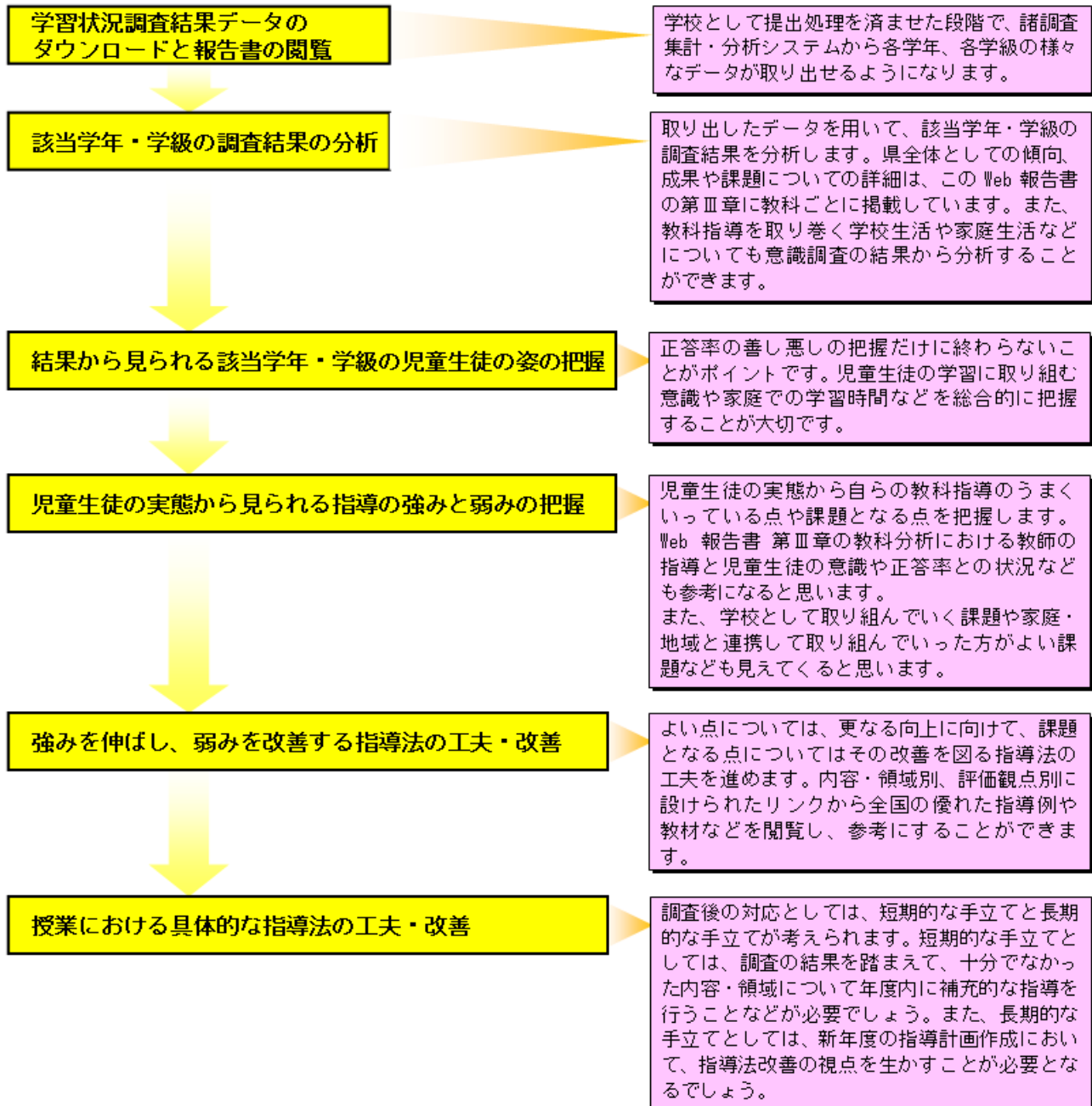
1 学習状況調査Web報告書公開の趣旨

佐賀県では、平成14年度から小・中学校学習状況調査を抽出調査で実施し、佐賀県の学力に関する課題の把握に努めてきた。平成18年度からは県全体の把握に加えて、各学校の教師が児童生徒一人一人の学習状況や学習・生活に対する意識等の実態を具体的に把握し、改善を図ることができるように、全数調査を実施してきた。また、調査結果をできるだけ学校現場の教師が生かしやすいように返却することに努めてきた。平成19年度より調査報告書をWeb発信することにより、より多くの教師が必要に応じて、必要な部分を活用できるようにした。また、平成21年度より調査時期を4月に変更することにより、年度中の早い時期に調査結果を各学校に返却できるようにした。平成22年度は、4月19日・20日に調査を実施した。7月2日には県正答率を公表し、個票をダウンロードできるようにした。各学校の調査結果を自動的にグラフ化する分析ツールについては、7月27日に公開した。

Web報告書では、佐賀県における今回の調査の結果概要や小学校・中学校の各教科における学習状況について詳細に分析し、学習指導及び児童生徒の学校生活・家庭生活の見直しに向けての示唆となるように努めた。各学校における児童生徒の学習状況や生活状況を把握し、よさや課題を見つけ出してほしい。更に、解決の一つのアイデアとして、Web報告書の関係ページを学校全体で活用していただくことを期待する。よさや課題はそれぞれの地域や学校によって異なる。また、学校においても学年・学級、更には児童生徒の一人一人によさもあれば、課題を抱えている場合もあるであろう。教師がよさや課題に目を向けて指導を行っていくためにも、このWeb報告書を積極的に活用していただきたい。

2 学習状況調査を生かした授業改善までのプロセス

学習状況調査結果の公表から授業改善までのプロセス PDCA サイクルの Check Action から新たな Plan へ



上の図は「学習状況調査結果の公表から授業改善までのプロセス」を図式化したものである。多くの学校において、すでに調査結果の分析が進んでいるものと推察される。分析を進めていく中で、今年度中に早急に手立てを取ることが必要な短期的課題や、次年度の教育課程編成や年間の指導計画作成に当たって考慮すべき長期的課題などが見付かるであろう。今年度内に見極めと具体的なアクションを起こしていただきたい。

また、小学校であれば、調査対象である第5・6学年だけのこととしてとらえるのではなくて、中学年、低学年での指導はどうであったかというような視点をもって取り組むことが大切である。中学校であれば、第2学年での結果が最終学年である3年生でどのようになっているのかという視点をもって、義務教育修了までの指導の在り方について考えることも必要であろう。更には、小学校第6学年から中学校第1学年というつながりの部分についても、校区内での連携を図ることを期待する。大切なことは、教師一人一人の取り組みとともに、学校や地域が組織的、継続的に取り組みをすすめることにあるのではないだろうか。

3 報告書の概要と活用に向けて

第Ⅰ章は「調査の概要」についてまとめている。児童生徒意識調査と教師意識調査における設問の意図やカテゴリについても説明をしているので、各学校での分析の参考にしていただきたい。また、平成19年度から導入した到達基準の設定と到達基準との比較による調査結果の分析方法についてもまとめている。各学校における目標設定の参考にしていただきたい。

第Ⅱ章は、「調査結果の概要」についてまとめている。各教科の県正答率、評価の観点別正答率など県全体の傾向を把握することができるようになっている。各学校の調査結果を重ねてみることで、各学校のよさや課題が見えてくるであろう。また、児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(主に子どもの学校生活・家庭生活の様子が概観できる)、佐賀県の学習者像(学習に対する意識や取り組み態度などが概観できる)、教師意識調査から見た佐賀県の教師像(教師の指導の様子や指導に対する意識などが概観できる)をまとめている。

第Ⅲ章は、「各教科の調査結果の分析」についてまとめている。各教科における学習と指導の状況や成果と課題、更には、具体的な設問を取り上げての指導法改善の視点などをまとめているので、参考になる点については、指導に生かしていただきたい。

第Ⅳ章は、「意識調査の結果の分析」についてまとめている。「児童生徒意識調査」については、児童生徒の学校生活・家庭生活など学習を取り巻く生活の状況について分析している。正答率等との関連が見られる部分については、その結果を記載している。学校生活におけるよさや課題の把握を進める上での参考になるであろう。また、家庭への協力を依頼する場合においても参考となるデータが得られるであろう。「教師意識調査」については、教師の意識と正答率等との関連について記載している。複数の教科に関係する内容や総合的な学習の時間の取り組み、学校組織マネジメントにかかわることなどについてまとめている。グラフなども示しているので、各学校の状況と照らし合わせながら、読んでいただき、参考になる点については指導に生かしていただきたい。

第Ⅴ章は、「自校データの分析と活用」についてまとめている。根拠に基づく学校改善にかかわって、自校の調査結果を活用する視点について述べている。

4 授業改善のヒント

まずは、一人一人の教師が、自分の目の前にいる児童生徒の様子を思い浮かべながら、報告書を読んでいただきたい。「自分の学校の子どもはどうなのか?」とか「自分が指導している子どもたちはちゃんとできているのか?」など思ったことについて、諸調査集計・分析システムからデータをダウンロードして、調べてみてはどうだろうか。そこで見付かったよさや課題について、「もっと伸ばしてあげたい」「何とか改善を図りたい」ことについて、報告書の中の提言などをヒントにしながら、よりよい指導方法を自校の学習環境や自分の授業に取り入れることが授業改善の第一歩であろう。

しかしながら、個々の教師の取り組みだけでは、学校全体としての改善には至らないことが多い。1人の教師が6年間(中学校では3年間)を通して指導するというはまれであるし、中規模以上の学校では、学級集団も毎年変わるのが一般的である。系統的、継続的な指導を進めていくためには、どうしても学校としての共通理解・共通実践が必要であろう。また、様々な取り組みが行われてはいても、取り組みの教育的な意義や取り組む際の留意点などを指導する側のすべての教師が認識していなければ、数年で形骸化してしまうこともある。

問題を解決するためには、調査の結果や、日々の指導から得た経験知の中から、自校の課題となることを、すべての教師が共通に認識することが第一歩であろう。学校内での校内研修や教科部会において、システムから得たデータや報告書における提言などを参考にして、自校の児童生徒について考えてみるのが大切であろう。

よさについては、自校の成果として保護者や地域に対してもアピールすることができるし、更に伸ばすための手立てを考えていけば、ますますよい結果をもたらすであろう。課題については、改善に向けて、何らかの共通実践が必要であろう。どのような実践が望ましいかということについては、報告書の中でも多岐にわたって、提言をしている。これらを参考にしつつ、目の前の児童生徒のことをしっかりとイメージして、必要な実践内容を導き出していただきたい。その際、関係するすべての教師が、継続的に共通実践できる内容であることをしっかりと確認することが大切であろう。

課題となることは、国語、算数(数学)、理科、社会、(英語)の教科だけにかかわることではない場合もあろう。調査の対象とはなっていない教科においても、授業の進め方や宿題の出し方、学習形態の工夫など共通に取り組むべきことが多くあ

る。関係教科だけの課題とせず、学校全体として取り組むことが大切であろう。

教科指導における課題だけでなく、学校生活にかかわることや家庭生活にかかわることについても課題は見付かるであろう。課題の解決に向けては、生徒会(児童会)担当や養護教諭などが中心となって、手立てを考えていくことや、保護者会などを通して保護者に協力を求めていくことなども考えられる。この際もシステムから得たデータや報告書の資料などが有効に活用できるであろう。

採点・入力と多くの教師の尽力によって実施された学習状況調査だが、得たデータには無限の可能性がある。教師一人一人のアイデアや学校の創意工夫によって、授業改善・学校改善が実現し、佐賀県の児童生徒によりよい指導がなされることを望みたい。

最終更新日：2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > I 調査の概要

I 調査の概要

1 調査の趣旨

県教育委員会は、小学校及び中学校学習指導要領に示されている目標や内容の実現状況を把握するため、学習状況調査を実施する。併せて、児童生徒の学習に対する意識や態度及び生活習慣、教師の指導に関する意識を把握するため、意識調査も実施する。

また、各学校が、児童生徒一人一人の調査結果を踏まえた指導改善を行うとともに、教育委員会は、課題解決に向けた施策の見直しや充実を図る。

2 調査の対象

(1) 調査対象

[児童生徒]

県内の公立小学校第5・6学年の児童全員、公立中学校第1・2・3学年の生徒全員を対象とする。県立中学校及び特別支援学校の小学部・中学部に在籍する児童生徒も対象とする。ただし、特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の中で、対象教科に係る当該学年の学習指導要領に基づく目標・内容等の指導を受けていない児童生徒については対象としない。

[教職員]

上記の調査対象児童生徒のうち、平成21年度に小学校第4・5・6学年、中学校第1・2学年を担当した教職員。ただし、平成21年5月以降に採用された講師については対象としない。

(2) 調査対象学校数及び調査対象人数

[児童生徒]

小学校	171校	第5学年	8,528人
		第6学年	8,548人
中学校	95校	第1学年(県立学校を含む)	8,412人
		第2学年(県立学校を含む)	8,266人
		第3学年(県立学校を含む)	8,162人
特別支援学校	3校	小学部第5学年	4人
※学年ごとに実施校数を示している。	2校	小学部第6学年	2人
	4校	中学部第1学年	7人
	2校	中学部第2学年	6人
	2校	中学部第3学年	8人

[教職員]

小学校	第5学年(平成21年度 小学校第4学年担当)	455人
	第6学年(平成21年度 小学校第5学年担当)	491人
中学校	第1学年(平成21年度 小学校第6学年担当)	516人
	第2学年(平成21年度 中学校第1学年担当)	669人
	第3学年(平成21年度 中学校第2学年担当)	519人

3 調査の実施方法

(1) 調査実施日及び実施教科

	平成22年4月19日(月)	平成22年4月20日(火)
小学校第5学年	社会・理科	国語・算数
小学校第6学年	社会・理科	
中学校第1学年	社会・理科	国語・数学(算数)
中学校第2学年	社会・理科・英語	国語・数学
中学校第3学年	社会・理科・英語	

※ 児童生徒意識調査については別途時間を設けて実施

※ 教師意識調査については平成21年度末に別途時間を設けて実施

※ 中学校第1学年数学の調査問題については、小学校第6学年の学習範囲を中心に出题しているため、内容は算数となる。

(2) 調査時間

ア 教科ペーパーテスト

小学校 各教科とも45分 各学校で時間を設定して実施

中学校 各教科とも50分 各学校で時間を設定して実施

イ 児童生徒共通意識調査

小学校・中学校とも20～30分程度、各学校で時間を設定して実施

ウ 教師意識調査

10～20分程度、各学校で随時実施

4 調査結果の処理

(1) 採点・入力

学習状況調査(ペーパーテスト)については、各学校において採点を行い、教育センター諸調査集計・分析システムを利用して、Web上から採点結果を入力する。教師意識調査・児童生徒に対する意識調査についても、同様にその回答状況をWeb上から入力する。なお、入力作業については、県に依頼することもできる。

(2) 集計・分析

集計作業により教科ごとの設問別正答率、内容・領域別正答率、評価の観点別正答率を求め、本県において設定した到達基準(第7節を参照)との比較により、その実現状況を測る。また、意識調査の回答状況と正答率の相関に着目した分析を行う。その際、各学校における指導の状況を数値化するために学校スコア(※3参照)を算出して分析に用いる。

これらの集計結果を基に、各教科における傾向及び成果と課題を明らかにし、今後の指導に向けての提言を行う。なお、分析については、教育センターにおいて行う。

5 調査結果の返却方法

(1) 集計・分析システムによる返却

調査対象となった各学校に対しては、諸調査集計分析システムを介して、当該校の調査結果を返却するとともに、今後の指導法改善に生かすことができる情報を提供する。調査結果個票は、各学校を通して、児童生徒に返却する。

(2) 調査報告書による返却

調査結果から見られる県全体の傾向、各教科における成果と課題、これからの指導に向けての提言などをまとめた調査報告書を、諸調査集計分析システム等を介して、県内の各学校及び関係機関に配信する。

6

調査の内容

(1) 教科ペーパー
テスト

ア 実施教科

小学校第5学年は国語、社会、算数、理科の4教科

小学校第6学年は社会、理科の2教科

中学校第1学年は国語、社会、数学(算数)、理科の4教科

中学校第2学年は国語、社会、数学、理科、英語の5教科

中学校第3学年は社会、理科、英語の3教科

※ 中学校第1学年数学の調査問題については、小学校第6学年の学習範囲を中心に出题しているため、内容は算数となる。

イ 調査問題

県が独自に作成した問題によって構成する。

「活用」に関する問題について

本県学習状況調査においては、全国学力・学習状況調査解説資料において示されている次の2つの出題範囲・内容のうち、〔主として「活用」〕にかかわる問題作成の枠組みを基にして、各教科の「活用」に関する問題を作成している。

・〔主として「知識」〕…国語A、算数・数学A

身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など

・〔主として「活用」〕…国語B、算数・数学B

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容など

ウ 出題範囲

前学年で学習した内容を中心に出题する。

(2) 児童生徒意識
調査

ア 意識調査の目的

本県児童生徒の学校生活・学習動機・学習活動やそれを取り巻く生活習慣・家族関係・地域における生活などについて広く調査し、その実態を把握する。学習にかかわっては、更に詳細に各教科の学習に対する意識や学習に臨む態度の実態を把握する。また、それらが児童生徒の正答率(※1参照)とどのようにかかわっているのかということ、及び教師の指導理念や指導法についての意識が児童生徒の学習に対する意識や態度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

イ 調査方法

児童生徒を対象とした質問紙法による調査を行う。

ウ 質問項目の構成

(ア) 学校生活

(イ) 学習動機

(ウ) 学習活動(教科全般)

(エ) 学習活動(各教科)

(オ) 生活習慣

(カ) 家族関係

(キ) 地域における生活

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

質問項目		小学校 [全42問]	中学校 [全46問]
(ア) 学校生活		1・2・3・5・6・37	1・2・3・5・6・41
(イ) 学習動機		(2)・4・39・40	(2)・4・43・44
(ウ) 学習活動 (教科全般)		7・8・9・11	7・8・9・11
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	12 ア・13 ア 14・15・16・17・ 18	12 ア・13 ア 14・15・16・17
	社会	12 イ・13 イ 19・20・21・22 ・23	12 イ・13 イ 18・19・20・21 ・22
	算数 数学	12 ウ・13 ウ 24・25・26	12 ウ・13 ウ 23・24・25・26
	理科	12 エ・13 エ 27・28・29	12 エ・13 エ 27・28・29・30
	英語		12 オ・13 オ (31・32・33…中2のみ)
(カ) 生活習慣		10・31・32・33 ・34・35	10・35・36・37 ・38・39
(キ) 家族関係		30・36・38	34・40・42
(ク) 地域における生活		41・42	45・46

エ 質問の意図

(ア) 学校生活

質問は[学校適応]と[友達関係への志向性]の2つのカテゴリーからなる。[学校適応]は、学校生活の楽しさ、勉強に対する興味、学習状況や教師との関係など児童生徒の学校への適応度について問う。また、[友達関係への志向性]は、友達をつくることについての考えなど友達関係への志向の高さについて問う。これら2つのカテゴリーの相関から児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、大人になってからかなえてみたい仕事(ゆめ)の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

授業で分からないときの対応、授業以外の勉強時間や勉強の方法、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科についての興味や理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(カ) 生活習慣

読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、情報収集の手段など生活習慣全般について問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

(キ) 家族関係

きょうだい数、家族の接し方、家族に対する意識について問うことにより、児童生徒の家族関係に対する意識の実態について把握する。

(キ) 地域社会における生活

課外活動や習い事の頻度、地域における行事などへの参加の頻度について問うことにより、児童生徒の授業外における活動や地域での活動への参加の実態について把握する。

(3) 教師意識調査

ア 教師意識調査の目的

本県教師の指導理念や指導法についての意識、日々の授業における指導の実際を把握することを目的とする。また、それらが児童生徒の正答率とどのようにかかわっているのかを明らかにすることを目的とする。

イ 調査方法

調査対象学年を指導している教職員を対象とした質問紙法(教職員ポータルを介してWeb上から該当者が直接入力する方法)による調査を行う。

ウ 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～4	設問2～4
(イ) 学習環境の活用	設問5～8	設問5～8
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問9～16	設問9～16
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問17～24	設問17～25
(オ) 教師の指導観	設問25～28	設問26～29
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問29～31	設問30～32
(キ) ティームティーチングや少人数指導の成果と課題	設問32～37	設問33～38

エ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

(キ) ティームティーチングや少人数指導の成果と課題

ティームティーチングや少人数指導に携わる教師を対象に、ティームティーチングの際の役割分担や少人数指導における習熟度別編成の導入頻度など実施方法にかかわる現状、指導法改善の頻度、ティームティーチングや少人数指導の成果と課題について問うことにより、県の施策であるきめ細かな指導の実現状況と基礎学力定着の状況を把握する。

7 到達基準の設定について

(1) 調査結果の解釈に当たって

調査問題の作成に当たり、事前に設定した設問ごとの難易度に適合したものとなるよう、複数の委員が本県の児童生徒の実態を踏まえながら、指導に当たってきた経験に基づいて、問題内容を協議し、検討を重ねている。

問題の難易度は、調査した児童生徒のうち正答することが期待される者の人数の割合で示し、これを「期待正答率」と呼ぶ。本調査では、「期待正答率」として、各設問に「十分達成」「おおむね達成」という2つの基準値を設定している。

「おおむね達成」は、最低限これを上回る児童生徒が正答することが期待される人数の割合であり、下回っている場合は、学習内容の定着に課題があり、早急に改善の手立てが取られる必要があると考える。また、「十分達成」は、学習内容の定着が十分満足できると判断される基準であり、上回っている場合は、各地域・学校における取り組みの成果として評価できるものとする。

「期待正答率」を基にして算出した「到達基準」と調査結果の「正答率」を比較することにより、到達度を測ることができる。また、経年的な調査結果の比較により、定着に係る動向を知ることができる。各学校においては、調査結果に基づいて自校の取り組みを検証し、課題に応じた重点目標を設定し、解決に向けた指導の工夫・改善を図っていくことが期待される。

(2) 基準設定方法の選択

到達基準の設定に当たっては、1972年にエーベルが提唱した「エーベル法」に橋本重治が修正を加えて考案した「修正エーベル法(橋本エーベル法)」(※2参照)を基本的な考え方として採用する。採用の理由として、個々の小問の判断に基づく設定方法として理論的に優れている「エーベル法」をより簡略化して利用できるようにしたものであること、この方法は実際に「教研式標準学力検査CRT」などにも採用されていることなどが挙げられる。

(3) 設定方法の概要

各小問(著書の中では「アイテム」と表現)を、関連性と困難度のマトリックスにおいて分類する。関連性は、「基礎的・基本的」(後への関連性が高い目標を測る問題)と「発展的・応用的」(比較的高度で、後の学習への関連性がそれほど高くない目標を測る問題)の2区分とし、困難度は「平易」「普通」「困難」の3区分とする。(表1のとおり)ただし、基礎・基本に分類される困難な目標は現実的ではないので、除外する。すべての小問は、表1中の(A)(B)(C)(D)(E)のいずれかに割り振られる。

表1 修正エーベル法におけるアイテム分類表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	(A)	(B)	—
発展的・応用的	(C)	(D)	(E)

また、それぞれの分類欄ごとの期待正答率は表2のように定められている。

表2 修正エーベル法における五つの分類ごとの期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0. 85(85%) (A)	0. 80(80%) (B)	—
	0. 65(65%)	0. 60(60%)	
発展的・応用的	0. 75(75%) (C)	0. 70(70%) (D)	0. 65(65%) (E)
	0. 55(55%)	0. 50(50%)	0. 45(45%)

(注) 上の数字は「十分達成」、下の数字は「おおむね達成」の場合を示している。

この表に基づいて、到達基準が算出される。

(4) 設定に当たって
の具体的な手
続き

- ① 調査問題を小問単位で、評価観点別及び内容・領域別に分類する。
- ② 評価観点別(もしくは内容・領域別)に分類された小問を表1に沿って、(A)～(E)に振り分ける。「知識・理解」「技能」「言語事項」などの観点についての小問の多くは「基礎的・基本的」に属するが、一部に「発展的・応用的」に属するものもあると考えられる。また、「思考」「資料の解釈・利用能力」「観察・実験の能力」「読解力」などの観点については、「発展的・応用的」に属する小問が多いと考えられるが、一部「基礎的・基本的」に属するものも含まれることが考えられる。
- ③ 分類が終わったら、評価観点(もしくは内容・領域)ごとに分類表の各欄の小問数を確認する。
- ④ あらかじめ定められた期待正答率表(表2)の値を基にして、各評価観点(もしくは内容・領域)ごとに「十分達成」「おおむね達成」それぞれの到達基準を算出する。

表3 修正エーベル法による到達度基準の算出例

分類欄	小問数	十分達成		おおむね達成	
		期待正答率	小問数 ×期待正答率	期待正答率	小問数 ×期待正答率
(A)	4	0.85	3.40	0.65	2.60
(B)	3	0.80	2.40	0.60	1.80
(C)	2	0.75	1.50	0.55	1.10
(D)	2	0.70	1.40	0.50	1.00
(E)	1	0.65	0.65	0.45	0.45
合計	12	合計	9.35 (77.9%)	合計	6.95 (57.9%)

表3は、ある観点(もしくは内容・領域)において(A)～(E)に分類される小問がそれぞれ4問・3問・2問・2問・1問であった場合の計算例である。それぞれの期待正答率と小問数の積の合計から導き出した得点を全小問数で割った数値(合計欄の下に示している%)がこの観点(もしくは内容・領域)の到達基準ということになる。

(5)本調査で設定した期待正答率表

本調査では、前に述べた理論を参考に、小学校と中学校の学習内容の違いなどを考慮して、次の表4と表5のように期待正答率を設定した。

表4 小学校における期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0.85(85%) (A) 0.65(65%)	0.80(80%) (B) 0.60(60%)	—
発展的・応用的	0.75(75%) (C) 0.55(55%)	0.70(70%) (D) 0.50(50%)	0.65(65%) (E) 0.45(45%)

表5 中学校における期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0.75(75%) (A) 0.55(55%)	0.70(70%) (B) 0.50(50%)	—
発展的・応用的	0.65(65%) (C) 0.45(45%)	0.60(60%) (D) 0.40(40%)	0.55(55%) (E) 0.35(35%)

8 到達基準による判定と今後の指導に向けて

(1) 到達基準を設定することの効用

従前、佐賀県小・中学校学習状況調査においては、国立教育政策研究所が平成15年度までに実施した教育課程実施状況調査の調査問題を使用して、その全国平均正答率を一つの指標として用いてきた。

国が公表した全国平均正答率はあくまでも設問ごとのものであって、評価の観点別、内容・領域別については公表されていなかった。そのため、評価の観点別、内容・領域別については、県が便宜的に、国が公表した設問ごとの全国平均正答率を束ねて算出した。また、平成15年度以前に実施された調査の結果との比較という点において、調査実施年の隔たりは年々大きくなっており、その信頼性や客観性についても課題があった。

平成19年度には調査問題の6～7割を、平成20年度より調査問題のすべてを県が独自に作成し、設問ごと、評価の観点別、内容・領域別に到達基準を設定した。

本調査では、県があらかじめ設定した到達基準との比較において、県としての成果と課題を明確にすることができるとともに、各学校においても、到達基準との関係において、自校の学習指導の成果と課題を把握することが可能となっている。

県正答率との比較においては、常に県下の約半数の学校がそれを上回ることはなく、課題意識だけが先行することになるとともに、自校の結果が県平均に比べよければ、全国の中の県の状態にかかわらず、安心してしまう可能性もあった。

到達基準を設定することにより、県下のすべての学校が基準に到達することも現実にも可能となる。また、結果が振わなかった点についても、県正答率をいいわけにすることなく、しっかりと自校の課題として把握できるようになった。

(2) 到達基準の「十分達成」と「おおむね達成」のラインについて

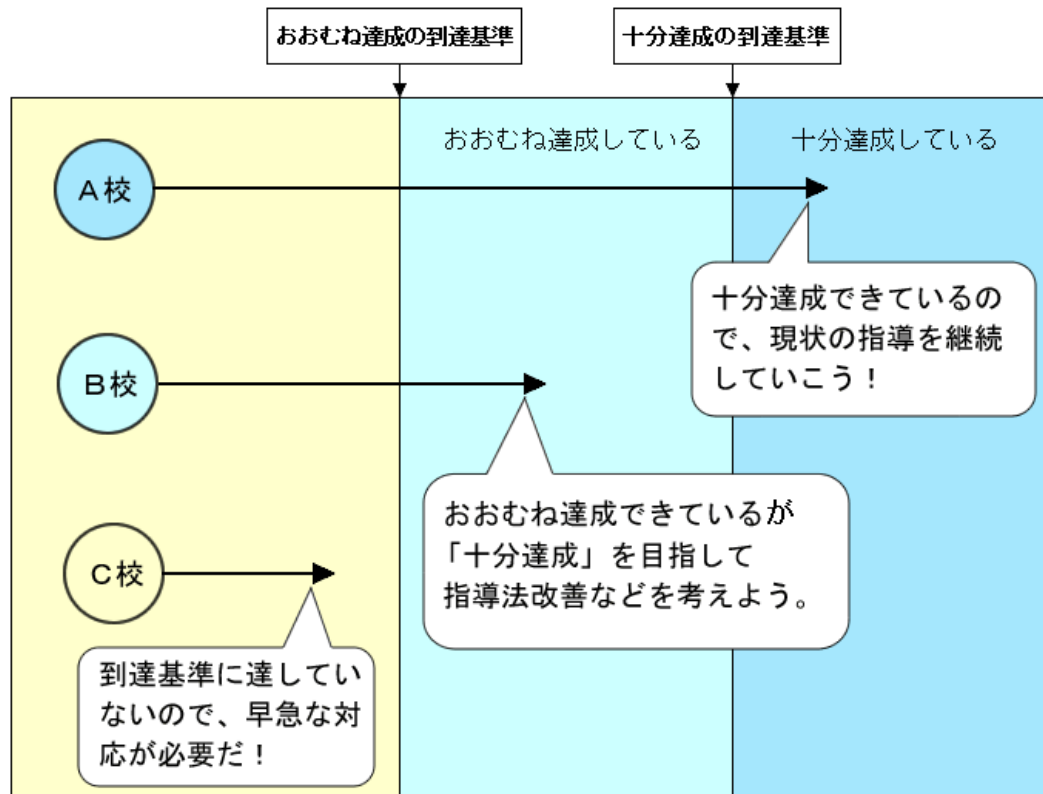
到達基準は、「おおむね達成」と「十分達成」の2つの分割点を設定することにより、各学校における到達の状況が明確となり、目標の設定が容易となった。

「**おおむね達成**」に到達していない教科や評価観点、内容・領域については、緊急の課題であり、早急の対応が望まれる。必要に応じて年度内の補足的な指導などを施した上で、新年度につなげる必要があるであろう。

「**おおむね達成**」には到達しているが、「**十分達成**」には到達していない教科や評価観点、内容・領域については、県が示す最低基準は達成していると考えられるが、更なる向上が望まれる。新年度の教育課程編成にかかわって、指導法改善等に取り組むことが望ましい。

「**十分達成**」に到達している教科や評価観点・内容・領域については、現状の指導が効果的に働いていることの表われであり、十分に成果が見られると考えられる。現状の指導を継続して差し支えないであろう。

到達状況についてイメージ図



図の中では、便宜上、A校、B校、C校としているが、校内においては、A、B、Cを学級や一人一人の児童生徒とイメージして考えていただきたい。また、矢印(→)を教科正答率としてとらえるだけでなく、教科内における特定の評価観点や内容・領域の正答率と考えることにより、分析の幅が広がるであろう。

以上のように、各学校、各学年、各教科の到達状況を把握し、今後の短期的、又は長期的なビジョンの中で、児童生徒への対応や教師による指導法改善が図られることを期待したい。

(3) 今後の指導に向けて

到達基準との比較により、各学校において、教科、学年、学級などにおける指導の実現状況を把握することができたら、その強みを更に伸ばし、弱みを克服するために、個々の教師が指導法の改善に取り組むこととなる。

諸調査集計・分析システムから自校及び県全体の結果を集計したデータ及び分析ツールがダウンロードできるようになっている。また、県全体の成果と課題、及びこれからの指導に向けては調査報告書の第三章において教科ごとにまとめている。授業改善に向けての提言については、各学校の現状と照らし合わせながら、参考となる点を活用していただきたい。

註

※1 正答率

正答率とは、学習の定着状況を示すために用いる、各設問における正答者数(準正答者数を含む)の解答者数に対する割合である。本報告書では、下記の方法で設問ごと正答率を算出している。

設問ごと正答率＝正答者数の合計÷(解答者数の合計－その他の数の合計)

県正答率	算出の方法
教科正答率	当該教科すべての設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)
内容・領域別正答率	当該内容・領域にかかわる設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)
評価の観点別正答率	当該評価の観点にかかわる設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)

[→児童生徒意識調査へもどる](#)

※2 修正エーベル法

修正エーベル法(橋本エーベル法)の詳細については、下記の文献等を参考にいただきたい。

橋本 重治 『到達度評価の研究 その方法と技術』 1981年 図書文化社

橋本 重治 『続・到達度評価の研究 到達基準の設定の方法』 1983年 図書文化社

[→基準設定方法の選択へもどる](#)

※3 学校スコア

学校スコアとは、教師意識調査及び児童生徒意識調査の結果から、各学校における教師の指導や児童生徒の意識等に関する回答状況を数値化することを目的として、質問項目に対する回答選択肢ごとにポイントを付けて重み付けを行うことにより、独自に算出した値である。

(例) 宿題を出していますか。

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1 多くの時間を出している | → 100ポイント |
| 2 どちらかといえば出している | → 66ポイント |
| 3 どちらかといえば出していない方が多い | → 33ポイント |
| 4 全く出していない | → 0ポイント |

各学校の教師、又は児童生徒の回答状況を上記のようなポイントに換算して、その学校の平均値を求めたものを学校スコアとして、分析に用いている。

[→集計・分析へもどる](#)

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 全体の概要

II 調査結果の概要

教科ペーパーテスト及び児童生徒意識調査の概要

1 教科ペーパーテスト 全体の概要

○ 平成21年度調査に対して、「十分達成」を上回ったのは1教科(小学5年社会)から2教科(小学5年社会、中学2年国語)に増えたが、中学1年社会が「おおむね達成」を下回った。

今後、全学年・全教科が「十分達成」を目指すためには、各教科の観点 や領域、基礎と発展、活用などの視点において、それぞれのよさや課題をしっかりと把握し、よさを伸ばし、課題を克服するための指導の工夫が求められる。

○ 平成21年度の正答率との比較においては、「活用」に関する問題の割合数の違いなどがあり、一概に単純な比較はできないが、各学年・各教科の「十分達成」の到達基準を1.00 としたときの正答率の比率を比較すると、おおむね同程度であった。

- ・小学5年では、3教科が平成21年度と同程度、1教科がやや低下
- ・中学1年では、2教科が同程度、1教科が向上、1教科が低下
- ・中学2年では、2教科が同程度、1教科が向上、2教科が低下

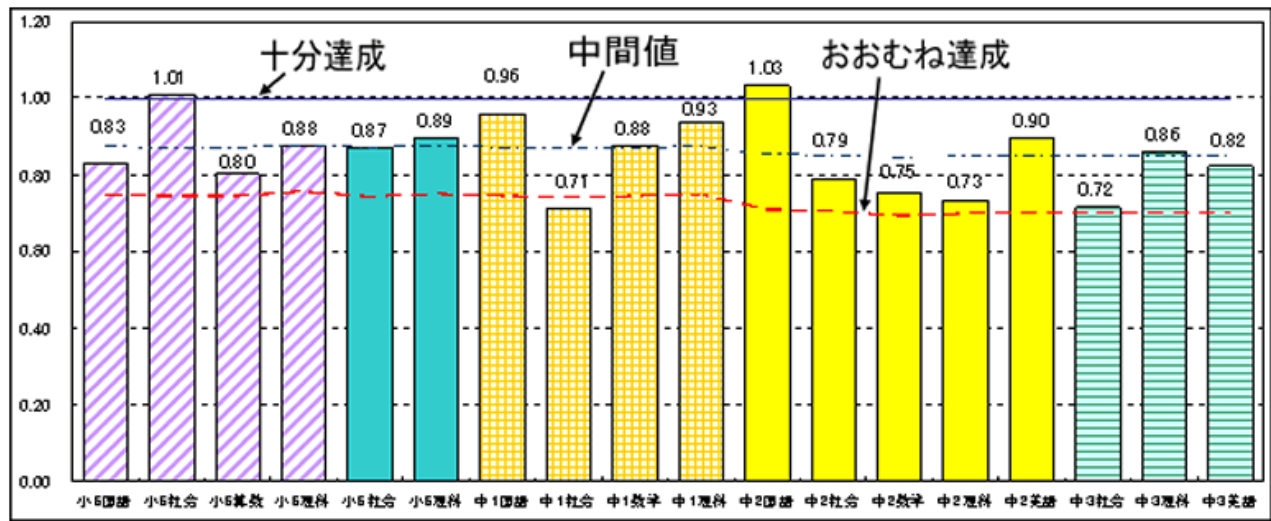
各学年・教科の到達状況

学年	教科	平成22年度			(参考)平成21年度		
		県正答率	到達基準	県正答率/ 到達基準 (十分達成)	県正答率	到達基準	県正答率/ 到達基準 (十分達成)
小学5年	国語	66.0	79.4/59.4	0.83	66.1	79.8/59.8	0.83
	社会	78.7	78.0/58.0	1.01	79.3	76.5/56.5	1.04
	算数	62.7	78.1/58.1	0.80	62.3	78.3/58.3	0.80
	理科	71.8	81.8/61.8	0.88	73.6	78.0/58.0	0.94
小学6年	国語	全国学力・学習状況調査問題を実施			-	-	-
	社会	67.7	77.6/57.6	0.87	-	-	-
	算数	全国学力・学習状況調査問題を実施			-	-	-
	理科	71.3	79.8/59.8	0.89	-	-	-
中学1年	国語	75.2	78.5/58.5	0.96	64.0	78.6/58.6	0.81
	社会	54.7	77.1/57.1	0.71	62.0	77.4/57.4	0.80
	数学(算数)	68.5	78.1/58.1	0.88	66.4	77.4/57.4	0.86
	理科	74.1	79.3/59.3	0.93	73.0	77.5/57.5	0.94
中学2年	国語	71.0	68.8/48.8	1.03	67.6	71.7/51.7	0.94
	社会	53.7	67.9/47.9	0.79	61.3	68.0/48.0	0.90
	数学	48.9	65.2/45.2	0.75	52.5	65.4/45.4	0.80
	理科	48.8	66.4/46.4	0.73	50.5	68.2/48.2	0.74
	英語	60.1	67.0/47.0	0.90	64.0	68.0/48.0	0.94
中学3年	国語	全国学力・学習状況調査問題を実施			-	-	-
	社会	48.0	67.1/47.1	0.72	-	-	-
	数学	全国学力・学習状況調査問題を実施			-	-	-
	理科	57.7	67.1/47.1	0.86	-	-	-
	英語	55.2	67.1/47.1	0.82	-	-	-

※到達基準は、十分達成/おおむね達成 のラインを示している → [到達基準の設定について](#)

県の各教科正答率の「十分達成」に対する割合をグラフに表すと次のようになる。「十分達成」を1.00としたときの、各教科正答率の比率を示している。「おおむね達成」の基準は各教科で若干異なる。

■各学年・教科正答率の「十分達成」に対する割合



2 教科ペーパーテスト 教科ごとの概要

① 国語

- ・ 小学校・中学校ともに、読むことや書くことにかかわっての基礎的な能力は身に付いている。
- ・ 物語文の叙述に即して書かれている内容を的確に読み取ることなどが良好であった。
- ・ ことわざや慣用表現、四字熟語など「言語についての知識・理解・技能」の習得についてもおおむね良好であった。
- ・ 読み取ったことを基に自分の考えを書いたり、必要な情報を取り出して、それについての自分の意見をまとめたりすることなどについては課題があった。

《指導改善のポイント》

- 条件にしたがって自分の考えを書いたり、自分の意見をまとめたりするような学習活動の充実
- 日常生活や社会生活とのつながりを意識した言語活動を位置付けた指導の工夫

② 社会

- ・ 平成21年度に引き続き、小学5年は良好であり、特に社会的な問題について自分なりの考えや解決策を論述する力などが身に付いていた。
- ・ 小学5年で出題した「地域の生産・販売」など、身近な社会を扱う内容については良好であったが、小・中学校の歴史分野には課題があった。
- ・ 中学1年は全般的に課題が見られ、特に資料を基に社会的な事象の特色や関連を考えたり、意味を解釈したりして説明する力に課題があり、特に明治時代以降の歴史の理解が不十分である。
- ・ 中学2・3年では、知識・技能の定着には一定の成果が見られたが、社会的な思考力・判断力の育成には課題があった。

《指導改善のポイント》

- 歴史分野の学習における児童生徒の興味・関心を高め、知識・技能の確実な定着を図る指導の工夫
- 資料等を基に事象を説明したり、自分の考えをまとめたりする学習活動や、討論や意見交換を通して、自分の考えを見直したり、深めたりするような学習活動の工夫

③ 算数・数学

- ・ 小学校・中学校ともに数量や図形などを数学的に表現・処理する力は全体的に身に付いている。
- ・ 公式を用いて面積を求めたり、速さと道のりから時間を求めたりすることは良好であった。
- ・ 小学校においては、数学的な考え方をはぐくむことに課題があった。
- ・ 中学校においては、知識・理解の定着を図る、数学的な考え方をはぐくむことに課題があった。

《指導改善のポイント》

- 小学校においては、図、式や言葉を使って自分が考えた解き方を説明し合わせるなど、算数的活動の充実を図った指導の工夫
- 中学校においては、移行措置に伴って追加された内容についての対応と、身に付けた知識・技能を活用することができるような数学的活動の充実を図った指導の工夫

④ 理科

- ・ 小学5年は平成21年度を下回ったが、中学校は、平成21年度と同程度であり、おおむね良好であった。
- ・ 実験器具の正しい使い方や測定器具の数値の読み取りなど観察・実験の技能・表現に関する内容は、小学校では課題があったが、中学校においては良好であった。
- ・ 小学校では、「ものの燃え方」など日常生活で実感しやすい内容の理解は良好であったが、「電磁石の性質」など実体験が少ない内容の理解には課題があった。
- ・ 中学校では、観察・実験の結果を分析して自分なりに解釈したり、解釈したことをグラフや文章で表現したりする力に課題があった。

《指導改善のポイント》

- 小学校においては、観察・実験を通して、実感を伴った理解を図ることや、実験器具などの実際の操作を通して、体験的に技能の習得を図ることができるような指導の工夫
- 中学校においては、目的意識を明確にして観察・実験に取り組ませたり、観察・実験の結果を整理し、自分の考えを表現させたりするための指導の工夫

⑤ 英語

- ・ 「聞くこと」「読むこと」の理解の能力は全般的に良好な結果であった。
- ・ 「聞くこと」「読むこと」において、場面に応じて適切に応答する際に必要とされる思考力や判断力には課題があった。
- ・ 「書くこと」については、英語で自分の考えを書くような問題においての無解答率が高く、到達度の分布状況において二極化が見られるなどの課題があった。

《指導改善のポイント》

- 教師と生徒、生徒同士のコミュニケーション活動やスピーチなどの言語活動を取り入れた指導の工夫
- 日常的に書く活動を取り入れた指導の工夫と書かせる内容の工夫

3 児童生徒意識調査の経年比較

- ・ 中学2年では、平日、土・日曜日や休日ともに、学校の授業以外の学習時間が平成20年度から年々増加している。
- ・ 「国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを積極的に発表している(小学5年)」「数学の時間に、問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えている(中学1年)」など、学習活動への興味・関心をもって授業に意欲的に取り組んでいる生徒や、粘り強く学習に取り組み、学習したことをすすんで活用しようとしている児童生徒が年々増加している。
- ・ 「学校での勉強は大人になってから役に立つ」と感じている児童生徒、「大人になってからやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒は、ともに年々増加している。

4 教科ペーパーテストと児童生徒意識調査の関連（ここでいう正答率は、各学年の全教科平均正答率を示す）

- ・ 土曜日・日曜日や休日の学習時間が長い児童生徒ほど、正答率は高い傾向にあり、この傾向は学年が上がるほどより顕著である。
- ・ 「勉強が好き」と回答している児童生徒ほど、正答率が高い。
- ・ 各教科の「授業が楽しい」と回答している児童生徒ほど、正答率が高い。
- ・ 「習った漢字を自分で文章を書くときに使うようにしている(小学5年)」「理科の時間に、観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしている(中学2年)」など、各教科の学習活動に意欲的に取り組んでいる児童生徒ほど、正答率が高い。
- ・ 読書の時間が長い児童生徒や朝食を毎日とっている児童生徒ほど、正答率が高い傾向にある。

《指導改善のポイント》

- 中学校では、生徒の土・日曜日や休日の過ごし方、家庭学習等についての学校と家庭が連携した指導の工夫
- 児童生徒の知的好奇心を喚起し、楽しく意欲的に取り組むことができる授業の工夫
- 学校と家庭が連携した読書指導の工夫

最終更新日:2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(小学校第5学年) → 中学校第1学年 中学校第2学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

学校生活

- 学校適応** はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
- ・学校での生活は楽しい……………85%
 - ・勉強が好き……………53%
 - ・学校では落ち着いて勉強できている……………76%
 - ・なにか困ったことがあったとき、先生に相談する……………53%
- 友だち関係への志向性**
- ・友だちをつくることは大切……………96%
 - ・友だちといっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………89%

学習動機

- はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
- 学校での勉強は、大人になってから役に立つと思う**……………95%
- 大人になってから、かなえてみたいゆめ(仕事)がある**
- ぜひやってみよう仕事がある……………81%
 - 何となくやってみよう仕事がある……………26%

学習活動

- 授業の中で分からないことがあったとき、どうすることが多いか**
- 友人にたずねる……………58%
 - 親にたずねる……………51%
 - その場で先生にたずねる……………41%
 - 自分で調べる……………37%
- 学校の授業以外に1日どのくらい勉強するか**
- ア 月曜日から金曜日
- 30分～1時間……………35%
 - 1時間～2時間……………25%
- イ 土・日曜日や休日
- 30分～1時間……………30%
 - 30分より少ない……………27%
- 1週間のうち、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしているか**
- していない……………70%
 - 2日……………12%
 - 1日……………10%
- ふだん学校の授業以外でしている勉強**
- 宿題があれば宿題をする……………84%
 - 興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする……………31%
 - 復習をする……………29%
 - 予習をする……………23%



生活習慣

- 朝食**
- 週5～6回(毎日)とる……………95%
 - 週3～4回とる……………2%
 - 週1～2回とる……………2%
 - まったくとらない……………1%
- 読書をする時間**
- 30分～1時間……………19%
 - 10分～30分……………34%
 - 10分より少ない……………22%
 - まったく読まない……………13%
- テレビやゲームなど自由に過ごす時間**
- 3時間以上……………16%
 - 2時間～3時間……………14%
 - 1時間～2時間……………22%
 - 30分～1時間……………23%
- 家の手伝い**
- 毎日……………34%
 - 週3～4回……………23%
 - 週1～2回……………21%
- 寝る時間**
- 午後9～10時……………53%
 - 午後10～11時……………29%
 - 午後11時より後……………8%
- 世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするためにふだんやっていること**
- テレビのニュース番組を見る……………66%
 - 親の話聞く……………45%
 - 新聞を読む……………27%
 - 本や雑誌を読む……………27%

家族関係

- きょうだいの数(自分はそのぞく)**
- 0人……………13%
 - 1人……………39%
 - 2人……………33%
- はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
- 家族といっしょにいる方がひとりであるより楽しい**……………87%
- 家にいるとき、家族の人はあなたにどうしているか**
- よいことをすると、ほめられる……………61%
 - よくないことをすると、きびしくしかられる……………53%
 - 「勉強しなさい」とよくいわれる……………47%
 - 「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる……………44%
 - 勉強についていわれることはない……………20%

地域社会における生活

- 課外活動や習い事などをどのくらいしているか**
- まったくしていない……………27%
 - 週に1～2回……………27%
 - 週に3～4回……………25%
 - 週に5回以上……………20%
- 地域での行事や祭り、ボランティア活動などにどのくらい参加するか**
- まったく参加しない……………18%
 - 年1回～半年に1回……………48%
 - 月1回～月2回……………30%
 - 週に1回以上……………5%

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第1学年) → 小学校第5学年 中学校第2学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

学校生活

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合

■**学校適応**

- 学校での生活は楽しい……………91%
- 勉強が好き……………42%
- 学校では落ち着いて勉強できている……………81%
- なにか困ったことがあったとき、先生に相談する……………47%

■**友だち関係への志向性**

- 友だちをつくることは大切……………97%
- 友だちといっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………90%

生活習慣

■**朝食**

- 週5～6回(毎日)とる……………95%
- 週3～4回とる……………3%
- 週1～2回とる……………2%
- まったくとらない……………1%

■**読書をする時間**

- 30分～1時間……………19%
- 10分～30分……………39%
- 10分より少ない……………17%
- まったく読まない……………14%

■**テレビやゲームなど自由に過ごす時間**

- 3時間以上……………26%
- 2時間～3時間……………22%
- 1時間～2時間……………24%
- 30分～1時間……………16%

■**家の手伝い**

- 毎日……………29%
- 週3～4回……………23%
- 週1～2回……………26%

■**寝る時間**

- 午後9～10時……………25%
- 午後10～11時……………47%
- 午後11～0時……………19%
- 午前0時より後……………6%

■**世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするためにふだんやっていること**

- テレビのニュース番組を見る……………84%
- 親の話聞く……………46%
- 友人の話聞く……………38%

学習動機

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合

■**学校での勉強は、大人になってから役に立つと思う……………92%**

■**大人になってから、かなえてみたいゆめ(仕事)がある**

- ぜひやってみたい仕事がある……………55%
- 何となくやってみたい仕事がある……………30%



学習活動

■**授業の中で分からないことがあったとき、どうすることが多いか**

- 友人にたずねる……………77%
- 親にたずねる……………55%
- 自分で調べる……………41%
- その場で先生にたずねる……………29%

■**学校の授業以外に1日どのくらい勉強するか**

ア 月曜日から金曜日

- 30分～1時間……………32%
- 1時間～2時間……………32%

イ 土・日曜日や休日

- 30分～1時間……………30%
- 1時間～2時間……………23%

■**1週間のうち、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしているか**

- していない……………70%
- 2日……………15%
- 3日……………7%

■**ふだん学校の授業以外でしている勉強**

- 宿題があれば宿題をする……………92%
- 復習をする……………44%
- 試験があれば、それにそなえて勉強する……………41%
- 予習をする……………36%

家族関係

■**きょうだいの数(自分はのぞく)**

- 1人……………39%
- 2人……………37%
- 3人……………11%

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合

■**家族といっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………81%**

■**家にいるとき、家族の人はあなたにどうしているか**

- よくないことをすると、きびしくしかられる……………85%
- よいことをすると、ほめられる……………58%
- 「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる……………51%
- 「勉強しなさい」とよくいわれる……………50%
- 勉強についていわれることはない……………21%

地域社会における生活

■**部活動・社会体育や習い事などをどのくらいしているか**

- まったくしていない……………27%
- 週に1～2回……………23%
- 週に3～4回……………17%
- 週に5回以上……………33%

■**地域での行事や祭り、ボランティア活動などにどのくらい参加するか**

- まったく参加しない……………18%
- 年1回～半年に1回……………58%
- 月1回～月2回……………23%
- 週に1回以上……………2%

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第2学年) → 小学校第5学年 中学校第1学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

学校生活

■学校適応 はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
 ・学校での生活は楽しい……………84%
 ・勉強が好き……………27%
 ・学校では落ち着いて勉強できている……………73%
 ・なにか困ったことがあったとき、先生に相談する……………32%

■友だち関係への志向性
 ・友だちをつくることは大切……………95%
 ・友だちといっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………86%

生活習慣

■朝食
 週5～6回(毎日)とる…93% 週3～4回とる…3%
 週1～2回とる…2% まったくとらない…1%

■読書をする時間
 30分～1時間…18% 10分～30分…36%
 10分より少ない…15% まったく読まない…18%

■テレビやゲームなど自由に過ごす時間
 3時間以上…28% 2時間～3時間…25%
 1時間～2時間…25% 30分～1時間…14%

■家の手伝い
 毎日…24% 週3～4回…23% 週1～2回…31%

■寝る時間
 午後9～10時…11% 午後10～11時…38%
 午後11～0時…36% 午前0時より後…14%

■世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするためにふだんやっていること
 テレビのニュース番組を見る…87%
 友人の話を聞く……………50%
 親の話を聞く……………50%

学習動機

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
■学校での勉強は、大人になってから役に立つと思う……………82%

■大人になってから、かなえてみたいゆめ(仕事)がある
 ぜひやってみたい仕事がある……………46%
 何となくやってみたい仕事がある……………34%

学習活動

■授業の中で分からないことがあったとき、どうすることが多いか
 友人にたずねる……………79%
 親にたずねる……………41%
 自分で調べる……………41%
 その場で先生にたずねる…33%

■学校の授業以外に1日どのくらい勉強するか
 ア 月曜日から金曜日
 30分～1時間……………27%
 1時間～2時間……………33%
 イ 土・日曜日や休日
 30分～1時間……………26%
 1時間～2時間……………27%

■1週間のうち、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしているか
 していない…61% 2日…18%
 3日……………11%

■ふだん学校の授業以外でしている勉強
 宿題があれば宿題をする……………93%
 試験があれば、それにそなえて勉強する…53%
 復習をする……………38%
 予習をする……………31%



家族関係

■きょうだいの数(自分はのぞく)
 1人…40% 2人…38%
 3人…10%

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
■家族といっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………71%

■家にいるとき、家族の人はあなたにどうしているか
 よくないことをすると、きびしくしかられる……………63%
 「勉強しなさい」とよくいわれる……………55%
 よいことをすると、ほめられる……………53%
 「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる……………48%
 勉強についていわれることはない……………21%

地域社会における生活

■部活動・社会体育や習い事などをどのくらいしているか
 まったくしていない…8%
 週に1～2回……………7%
 週に3～4回……………7%
 週に5回以上……………78%

■地域での行事や祭り、ボランティア活動などにどのくらい参加するか
 まったく参加しない…27%
 年1回～半年に1回…61%
 月1回～月2回……………11%
 週に1回以上……………1%

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

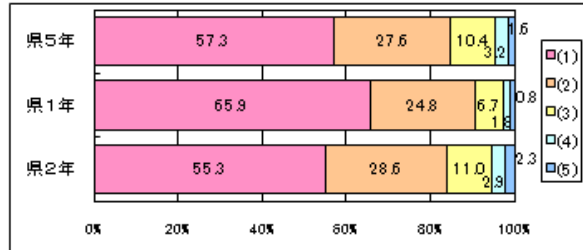
児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像

学校生活

学校適応

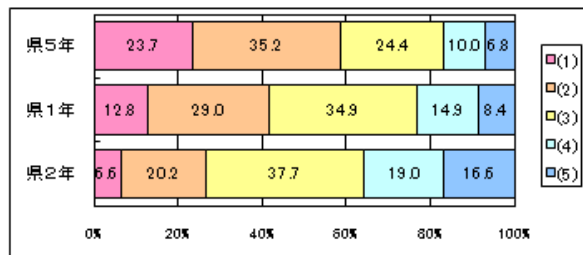
(1) 学校での生活は楽しいですか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1) 楽しい	57.3	65.9	55.3
(2) どちらかといえば楽しい	27.6	24.8	28.6
(3) どちらでもない	10.4	6.7	11.0
(4) どちらかといえば楽しくない	3.2	1.8	2.9
(5) 楽しくない	1.6	0.8	2.3



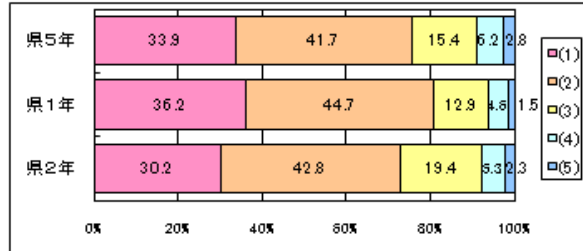
(2) 勉強が好きですか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1) 好き	23.7	12.8	6.6
(2) どちらかといえば好き	35.2	29.0	20.2
(3) どちらでもない	24.4	34.9	37.7
(4) どちらかといえばきらい	10.0	14.9	19.0
(5) きらい	6.8	8.4	16.6



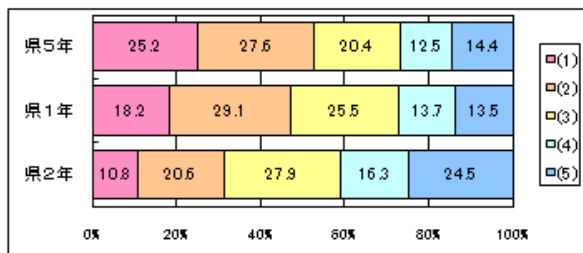
(5) あなたは学校では落ち着いて勉強することができますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1) できている	33.9	36.2	30.2
(2) どちらかといえばできている	41.7	44.7	42.8
(3) どちらでもない	15.4	12.9	19.4
(4) どちらかといえばできていない	6.2	4.6	5.3
(5) できていない	2.8	1.5	2.3



(6) なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか。(%)

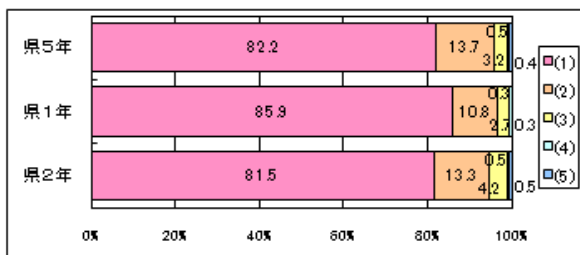
	県5年	県1年	県2年
(1) 相談する	25.2	18.2	10.8
(2) どちらかといえば相談する	27.6	29.1	20.6
(3) どちらでもない	20.4	25.5	27.9
(4) どちらかといえば相談しない	12.5	13.7	16.3
(5) 相談しない	14.4	13.5	24.5



友だち関係への志向性

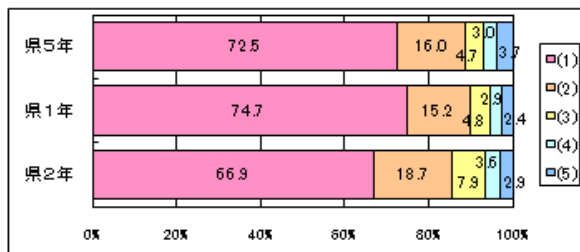
(3)あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)大切だ	82.2	85.9	81.5
(2)どちらかといえば大切だ	13.7	10.8	13.3
(3)どちらでもない	3.2	2.7	4.2
(4)どちらかといえば大切でない	0.5	0.3	0.5
(5)大切でない	0.4	0.3	0.5



(4)友だちといっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思いませんか。(%)

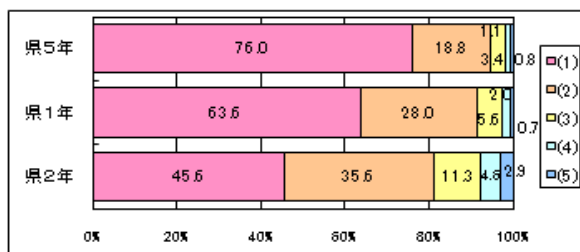
	県5年	県1年	県2年
(1)よくそう思う	72.5	74.7	66.9
(2)ときどきそう思う	16.0	15.2	18.7
(3)どちらでもない	4.7	4.8	7.9
(4)あまりそう思わない	3.0	2.9	3.6
(5)まったくそう思わない	3.7	2.4	2.9



学習動機

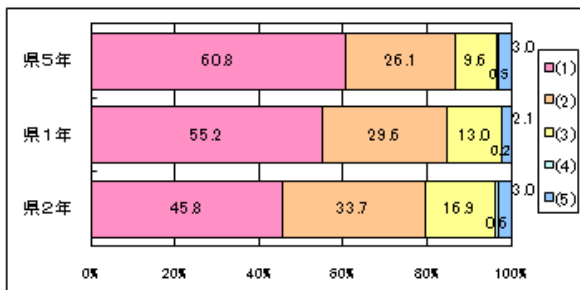
(4)学校での勉強は、大人になってから役に立つと思いませんか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)そう思う	76.0	63.6	45.6
(2)どちらかといえばそう思う	18.8	28.0	35.6
(3)どちらでもない	3.4	5.6	11.3
(4)どちらかといえばそう思わない	1.1	2.0	4.6
(5)そう思わない	0.8	0.7	2.9



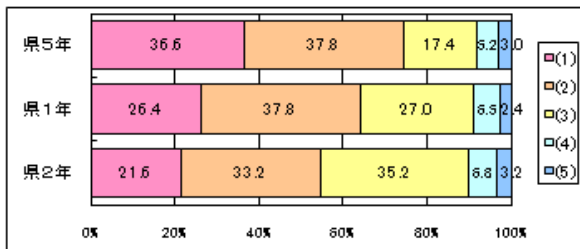
(43)あなたには、大人になってから、やってみたい仕事がありますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)ぜひやってみたい仕事がある	60.8	55.2	45.8
(2)まだはっきりしていないが、何となくやってみたい仕事がある	26.1	29.6	33.7
(3)今はやってみたい仕事が見つからない	9.6	13.0	16.9
(4)大人になっても、仕事はしたくない	0.5	0.2	0.6
(5)仕事のことを考えたことがない	3.0	2.1	3.0



(44)[(43)で1または2と答えた人のみ] その仕事は、あなたが大人になったら、できるようになると思いませんか。(%)

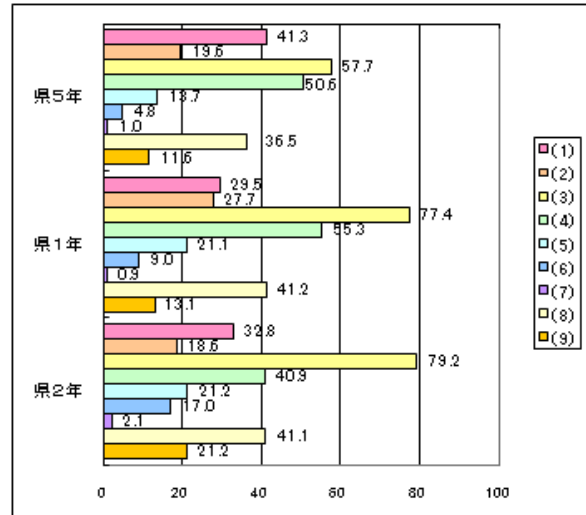
	県5年	県1年	県2年
(1)そう思う	36.6	26.4	21.6
(2)どちらかといえばそう思う	37.8	37.8	33.2
(3)どちらでもない	17.4	27.0	35.2
(4)どちらかといえばそう思わない	5.2	6.5	6.8
(5)そう思わない	3.0	2.4	3.2



学習活動

(7)授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか。※複数回答 (%)

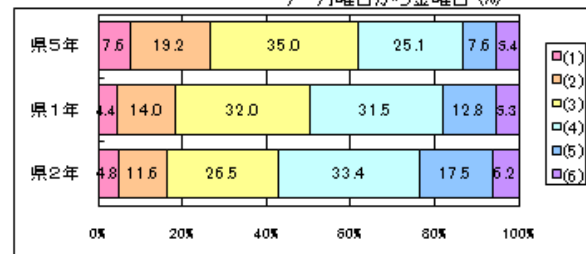
	県5年	県1年	県2年
(1)その場で先生にたずねる	41.3	29.5	32.8
(2)授業が終わってから先生にたずねに行く	19.6	27.7	18.6
(3)友人にたずねる	57.7	77.4	79.2
(4)親にたずねる	50.6	55.3	40.9
(5)きょうだいにたずねる	13.7	21.1	21.2
(6)じゅくの先生にたずねる	4.8	9.0	17.0
(7)家庭教師の先生にたずねる	1.0	0.9	2.1
(8)自分で調べる	36.5	41.2	41.1
(9)そのままにしておく	11.6	13.1	21.2



(8)ア学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか。(じゅくの先生との勉強時間もふくみます。)

ア 月曜日から金曜日 (%)

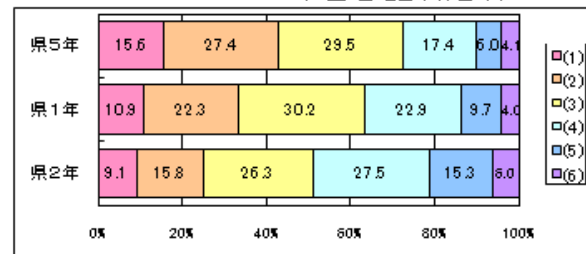
	県5年	県1年	県2年
(1)まったくしない	7.6	4.4	4.8
(2)30分より少ない	19.2	14.0	11.6
(3)30分以上、1時間より少ない	35.0	32.0	26.5
(4)1時間以上、2時間より少ない	25.1	31.5	33.4
(5)2時間以上、3時間より少ない	7.6	12.8	17.5
(6)3時間以上	5.4	5.3	6.2



(8)イ学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか。(じゅくの先生との勉強時間もふくみます。)

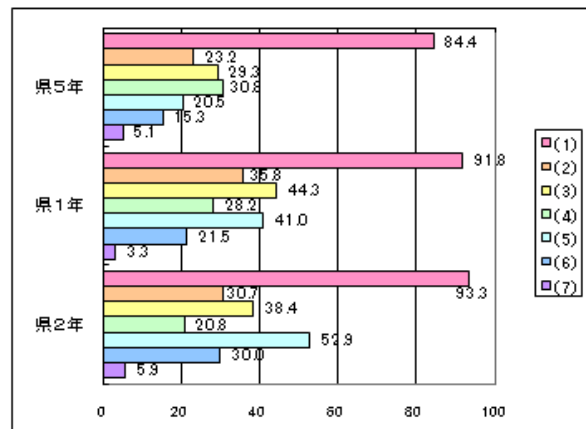
イ 土・日曜日や休日 (%)

	県5年	県1年	県2年
(1)まったくしない	15.6	10.9	9.1
(2)30分より少ない	27.4	22.3	15.8
(3)30分以上、1時間より少ない	29.5	30.2	26.3
(4)1時間以上、2時間より少ない	17.4	22.9	27.5
(5)2時間以上、3時間より少ない	6.0	9.7	15.3
(6)3時間以上	4.1	4.0	6.0



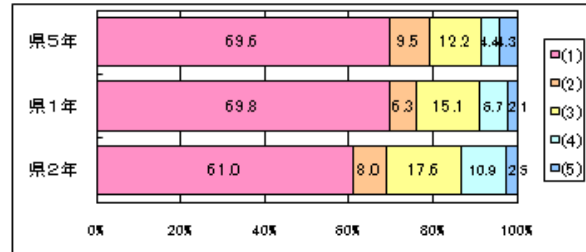
(9)ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は、次のうちどれに近いですか。※複数回答 (%)

	県5年	県1年	県2年
(1)宿題があれば宿題をする	84.4	91.8	93.3
(2)予習(前もって学習しておくこと)をする	23.2	35.8	30.7
(3)復習をする	29.3	44.3	38.4
(4)興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする	30.8	28.2	20.8
(5)試験があれば、それにそなえて勉強する	20.5	41.0	52.9
(6)じゅくや家庭教師の先生と勉強する	15.3	21.5	30.0
(7)まったくしない	5.1	3.3	5.9



(11)1週間のうち、何日じゆくに通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか。ただし、習い事はのぞきます。(%)

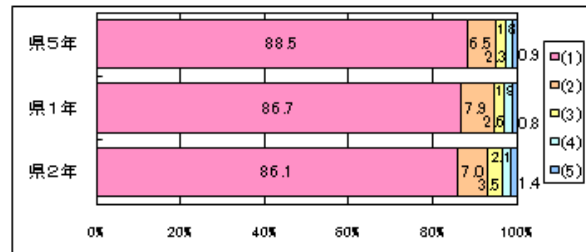
	県5年	県1年	県2年
(1)していない	69.6	69.8	61.0
(2)1日	9.5	6.3	8.0
(3)2日	12.2	15.1	17.6
(4)3日	4.4	6.7	10.9
(5)4日以上	4.3	2.1	2.5



生活習慣

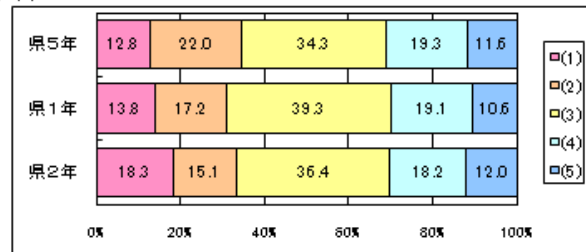
(35)朝食をとりますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)毎日とる	88.5	86.7	86.1
(2)週に5~6回とる	6.5	7.9	7.0
(3)週に3~4回とる	2.3	2.6	3.5
(4)週に1~2回とる	1.8	1.9	2.1
(5)まったくとらない	0.9	0.8	1.4



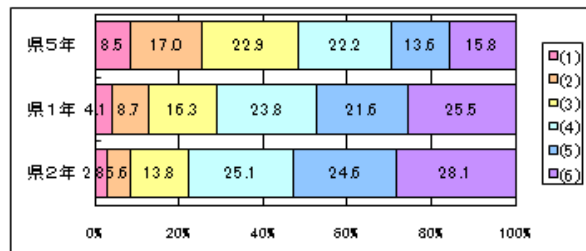
(36)学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか。朝読書や昼休みの読書など学校内での読書もふくみます。土曜日、日曜日のはのぞいてください。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)まったく読まない	12.8	13.8	18.3
(2)10分より少ない	22.0	17.2	15.1
(3)10分以上、30分より少ない	34.3	39.3	36.4
(4)30分以上、1時間より少ない	19.3	19.1	18.2
(5)1時間以上	11.6	10.6	12.0



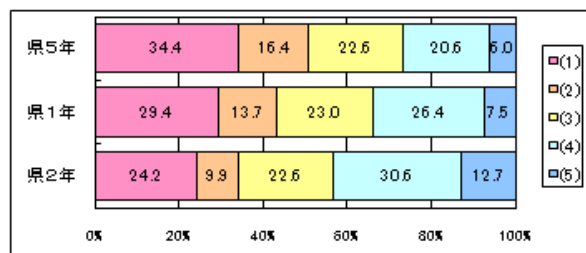
(37)テレビやゲームなど、学校から帰ったあとと自由に過ごす時間は、読書の時間をのぞくと、1日にどのくらいになりますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)まったくない	8.5	4.1	2.8
(2)30分より少ない	17.0	8.7	5.6
(3)30分以上、1時間より少ない	22.9	16.3	13.8
(4)1時間以上、2時間より少ない	22.2	23.8	25.1
(5)2時間以上、3時間より少ない	13.6	21.6	24.6
(6)3時間以上	15.8	25.5	28.1



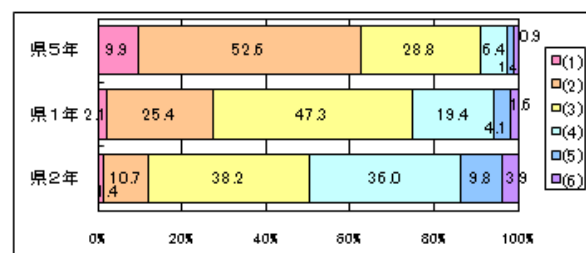
(38)家の手伝いをどのくらいしていますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)毎日している	34.4	29.4	24.2
(2)週に5~6日	16.4	13.7	9.9
(3)週に3~4日	22.6	23.0	22.6
(4)週に1~2日	20.6	26.4	30.6
(5)まったくしていない	6.0	7.5	12.7



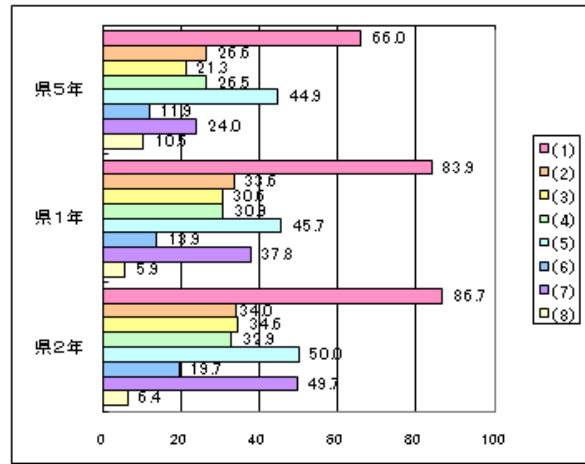
(39)夜は何時くらいに寝ますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)午後9時より前	9.9	2.1	1.4
(2)午後9時~10時までの間	52.6	25.4	10.7
(3)午後10時~11時までの間	28.8	47.3	38.2
(4)午後11時~0時までの間	6.4	19.4	36.0
(5)午前0時~1時の間	1.4	4.1	9.8
(6)午前1時より後	0.9	1.6	3.9



(10)世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするため、ふだん、行っていることは何ですか。※複数回答(%)

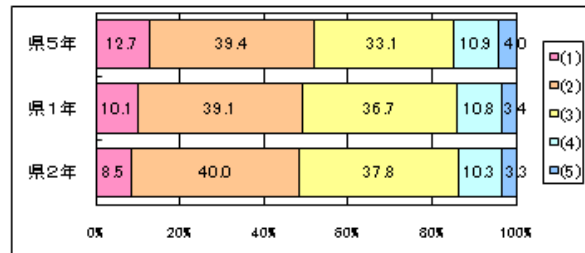
	県5年	県1年	県2年
(1)テレビのニュース番組を見る	66.0	83.9	86.7
(2)新聞を読む	26.6	33.6	34.0
(3)インターネットを利用する	21.3	30.6	34.6
(4)本や雑誌を読む	26.5	30.9	32.9
(5)親の話聞く	44.9	45.7	50.0
(6)きょうだいから話を聞く	11.9	13.9	19.7
(7)友人の話聞く	24.0	37.8	49.7
(8)とくに何もしない	10.5	5.9	6.4



家族関係

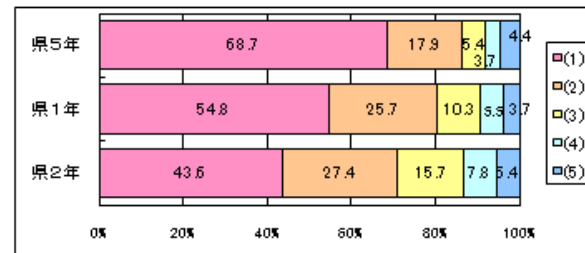
(34)あなたには何人のきょうだいがありますか。あなたはふくめません。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)0人	12.7	10.1	8.5
(2)1人	39.4	39.1	40.0
(3)2人	33.1	36.7	37.8
(4)3人	10.9	10.8	10.3
(5)4人以上	4.0	3.4	3.3



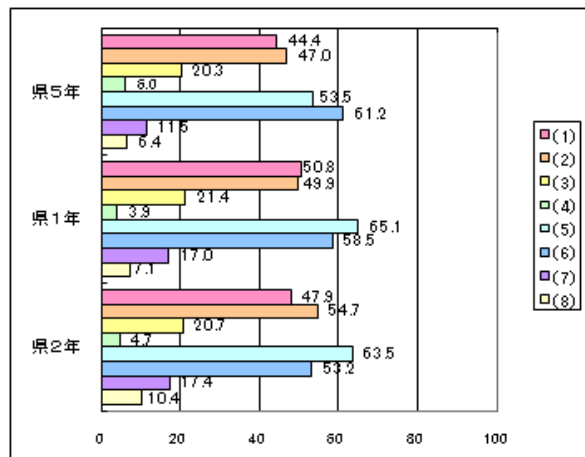
(42)家の人といっしょにいるほうが、ひとりでのより楽しいと思いませんか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)よくそう思う	68.7	54.8	43.6
(2)ときどきそう思う	17.9	25.7	27.4
(3)どちらでもない	5.4	10.3	15.7
(4)あまりそう思わない	3.7	5.5	7.8
(5)まったくそう思わない	4.4	3.7	5.4



(40)日ごろ、家の人はあなたにどうしていますか。※複数回答(%)

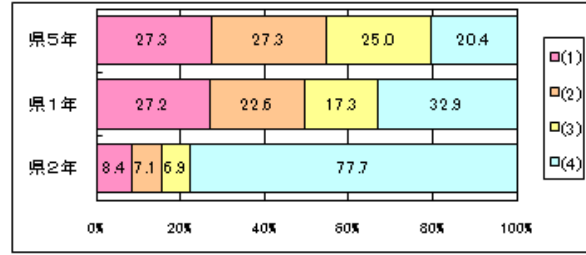
	県5年	県1年	県2年
(1)「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる	44.4	50.8	47.9
(2)「勉強しなさい」とよくいわれる	47.0	49.9	54.7
(3)勉強についていわれることはない	20.3	21.4	20.7
(4)自分にかまうことおほとんどない	6.0	3.9	4.7
(5)よくないことをすると、きびしくしかられる	53.5	65.1	63.5
(6)よいことをすると、ほめられる	61.2	58.5	53.2
(7)「あなたが好きなようにしなさい」とよくいわれる	11.5	17.0	17.4
(8)家族の人の考えを自分に押しつけられる	6.4	7.1	10.4



地域社会における生活

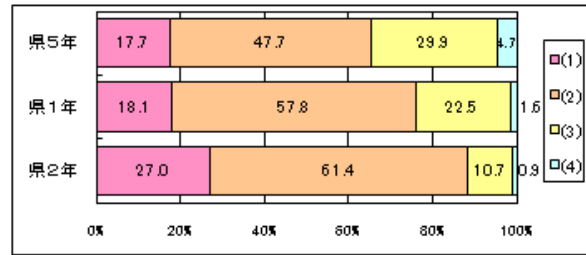
(45)部活動, 社会体育, 習い事などをどのくらいしていますか。じゅくや家庭教師の先生と勉強する回数はこのようになります。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)まったくしてない	27.3	27.2	8.4
(2)週に1~2回	27.3	22.6	7.1
(3)週に3~4回	25.0	17.3	6.9
(4)週に5回以上	20.4	32.9	77.7



(46)地域での行事や祭り, ボランティア活動や体験教室などどのくらい参加しますか。(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)まったく参加しない	17.7	18.1	27.0
(2)年に1回~半年に1回くらい	47.7	57.8	61.4
(3)月に1回~月に2回くらい	29.9	22.5	10.7
(4)週に1回以上	4.7	1.6	0.9



最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

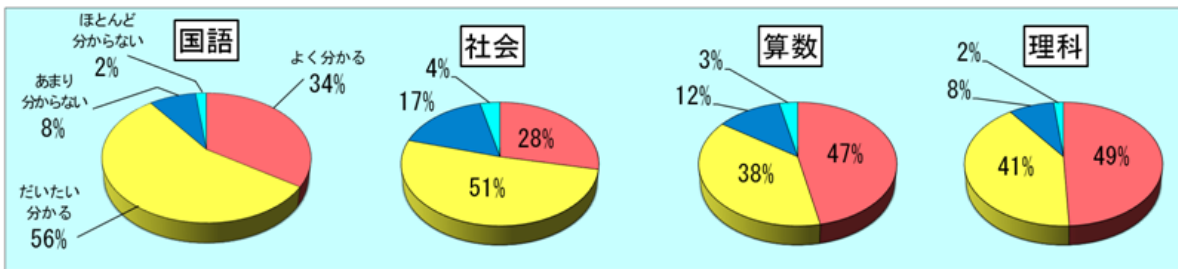
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年) → 中学校第1学年 中学校第2学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

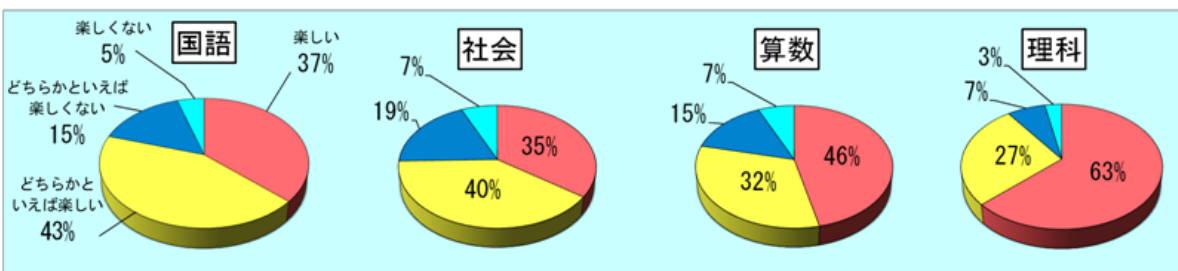
各教科の理解度についての自己評価

※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の楽しさについての自己評価

※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度

国語	社会	算数	理科
自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 67%	自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 63%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 73%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 79%
自分の思いや考えを文章に書こうと努力している 72%	調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい 71%	問題を解くとき、おはじきや模型などを使ったり、図や表を書いたりして調べている 74%	観察や実験をすることは好き 94%
自分から進んで本を読んでいる 80%	新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がある 77%	新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしている 71%	疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている 68%
新しい漢字の読みや書きを身に付けようとして努力している 82%	工場や遺跡の見学、博物館や郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好き 90%		
ふだんの生活の中で、ことばのきまりやことばのマネーに気がつけている 79%	疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている 60%		



※図中の数値は「楽しい」「興味がある」「...している」と回答した割合と「どちらかといえば○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日： 2011-1-31

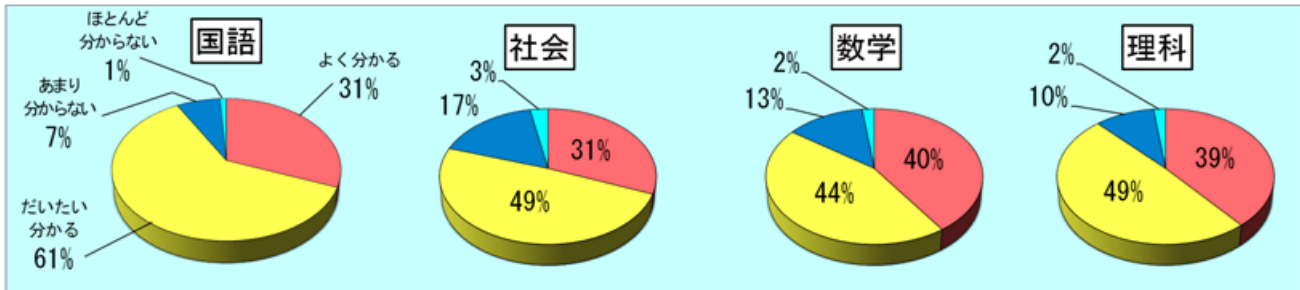
平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

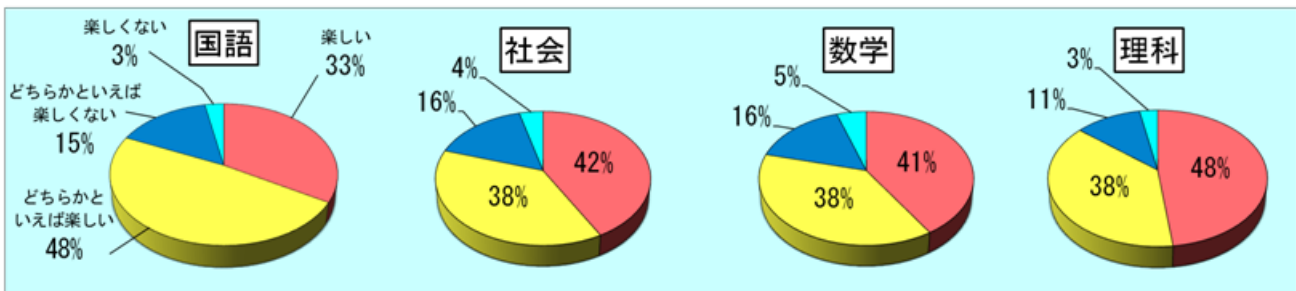
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第1学年) → [小学校第5学年](#) [中学校第2学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。

各教科の理解度についての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の楽しさについての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度

国語	社会	数学	理科
自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 42%	自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 61%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 68%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 72%
自分の思いや考えを文章に書こうと努力している 70%	調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい 67%	問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法で考えている 84%	問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好き 87%
新しい漢字の読み方や書き方を身に付けようとして努力している 86%	新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がある 80%	問題を解くとき、ノートやプリントに図や表をかいたり、模型などの具体物を使ったりして調べている 73%	観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしている 80%
ことばのきまりを意識して、ふだんから生活している 74%	博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好き 77%	新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしている 61%	疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている 58%



※ 図中の数値は「楽しい」「興味がある」「・・・している」と回答した割合と「どちらかといえば○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

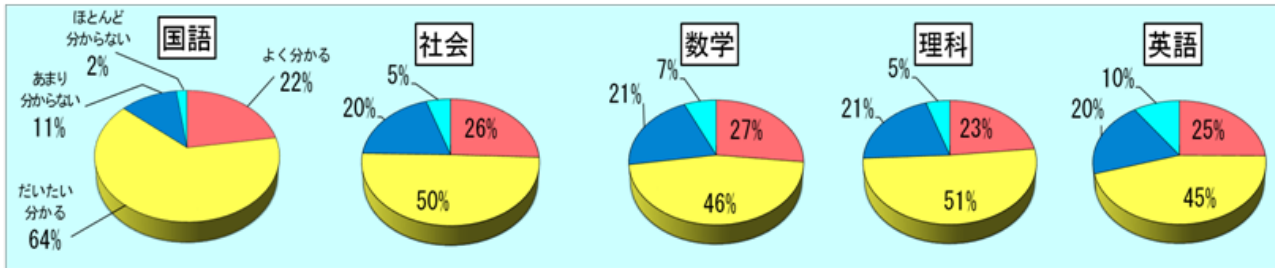
平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

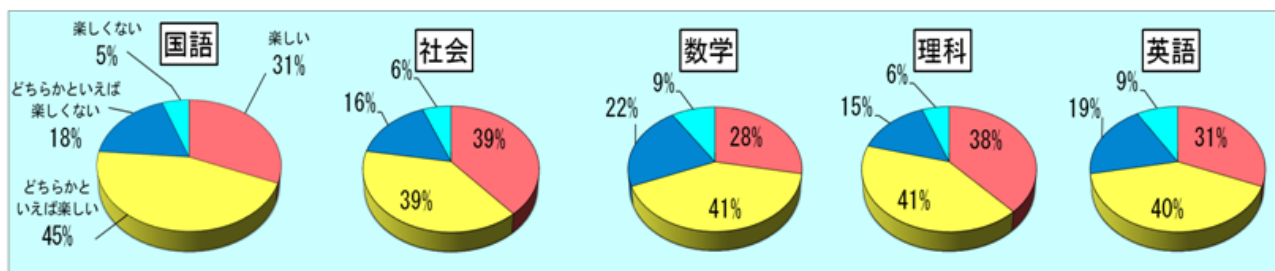
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第2学年) → [小学校第5学年](#) [中学校第1学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。

各教科の理解度についての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の楽しさについての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度

国語	社会	数学	理科	英語
自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 36%	自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 52%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 57%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 65%	英語を聞いたり、話したりするのは楽しい 69%
自分の思いや考えを文章に書こうと努力している 66%	調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい 62%	問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法で考えている 76%	問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好き 86%	英語を使って、手紙や日記、e-mail などを書くことに興味がある 45%
新しい漢字の読み方や書き方を身に付けようとして努力している 79%	新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がある 80%	問題を解くとき、ノートやプリントに図や表をかいたり、模型などの具体物を使ったりして調べている 66%	観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしている 80%	ALTの先生とコミュニケーションをとることは好き 69%
ことばのまわりを意識して、ふだんから生活している 66%	博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好き 75%	新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしている 44%	疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている 49%	

※ 図中の数値は「楽しい」「興味がある」「...している」と回答した割合と「どちらかといえば○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

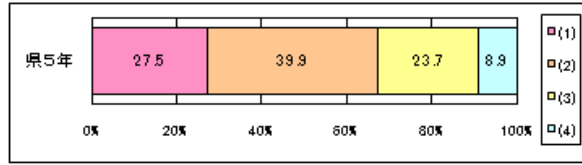
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年)※数値は小数第一位で四捨五入している。

国語

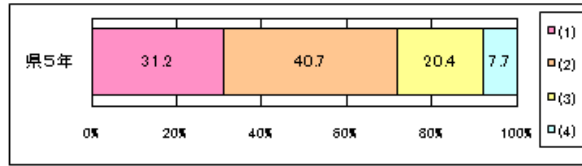
(14)国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しいですか。(%)

	県5年
(1)楽しい	27.5
(2)どちらかといえば楽しい	39.9
(3)どちらかといえば楽しくない	23.7
(4)楽しくない	8.9



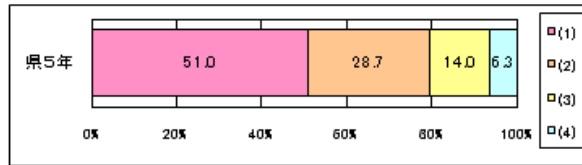
(15)自分が思ったことや考えたことを文章に書こうと努力していますか。(%)

	県5年
(1)そうしている	31.2
(2)どちらかといえばそうしている	40.7
(3)どちらかといえばそうしてない	20.4
(4)そうしてない	7.7



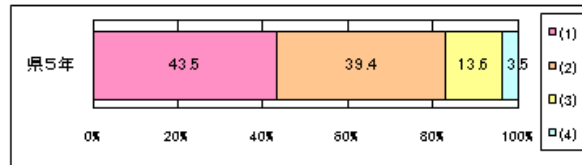
(16)自分から進んで本を読んでいますか。

	県5年
(1)そうしている	51.0
(2)どちらかといえばそうしている	28.7
(3)どちらかといえばそうしてない	14.0
(4)そうしてない	6.3



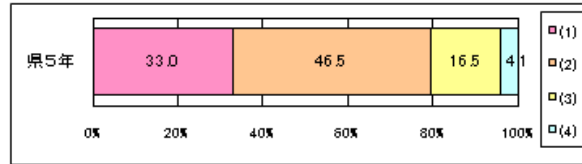
(17)習った漢字を自分で文章を書くときに使うようになっていますか。(%)

	県5年
(1)そうしている	43.5
(2)どちらかといえばそうしている	39.4
(3)どちらかといえばそうしてない	13.6
(4)そうしてない	3.5



(18)ふだんの生活の中で、ことばのきまりやことばのマナーに気を付けていますか。(%)

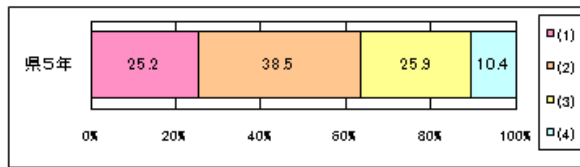
	県5年
(1)そうしている	33.0
(2)どちらかといえばそうしている	46.5
(3)どちらかといえばそうしてない	16.5
(4)そうしてない	4.1



社会

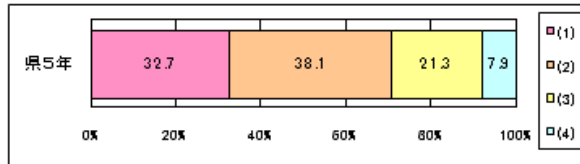
(19)社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。(%)

	県5年
(1)楽しい	25.2
(2)どちらかといえば楽しい	38.5
(3)どちらかといえば楽しくない	25.9
(4)楽しくない	10.4



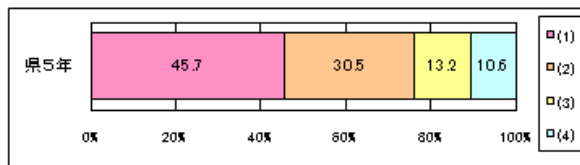
(20)社会の時間に、調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。(%)

	県5年
(1)楽しい	32.7
(2)どちらかといえば楽しい	38.1
(3)どちらかといえば楽しくない	21.3
(4)楽しくない	7.9



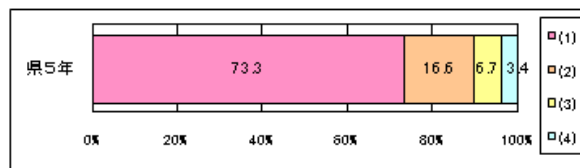
(21)新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がありますか。(%)

	県5年
(1)ある	45.7
(2)どちらかといえばある	30.5
(3)どちらかといえばない	13.2
(4)ない	10.6



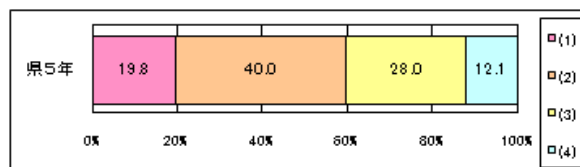
(22)工場や遺跡の見学、博物館や郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好きですか。(%)

	県5年
(1)好き	73.3
(2)どちらかといえば好き	16.6
(3)どちらかといえば好きではない	6.7
(4)好きではない	3.4



(23)社会の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。(%)

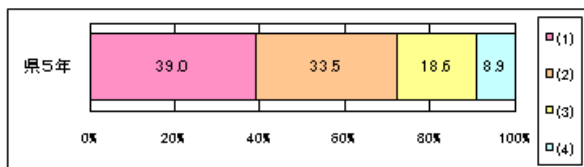
	県5年
(1)そうしている	19.8
(2)どちらかといえばそうしている	40.0
(3)どちらかといえばそうしてない	28.0
(4)そうしてない	12.1



算数

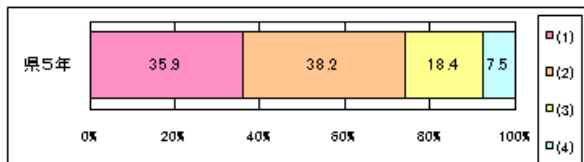
(24)算数の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。(%)

	県5年
(1)楽しい	39.0
(2)どちらかといえば楽しい	33.5
(3)どちらかといえば楽しくない	18.6
(4)楽しくない	8.9



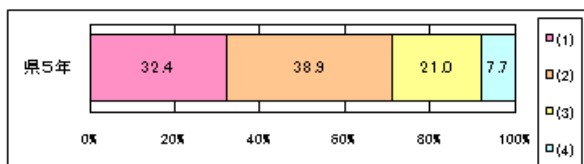
(25)算数の時間に、問題を解くとき、おまじまや模型を使ったり、ノートやプリントに絵や図、表をかいたりして調べていますか。(%)

	県5年
(1)そうしている	35.9
(2)どちらかといえばそうしている	38.2
(3)どちらかといえばそうしていません	18.4
(4)そうしていません	7.5



(26)算数の時間に、新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり使ってみたりしていますか。(%)

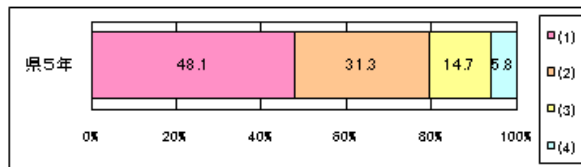
	県5年
(1)そうしている	32.4
(2)どちらかといえばそうしている	38.9
(3)どちらかといえばそうしていません	21.0
(4)そうしていません	7.7



理科

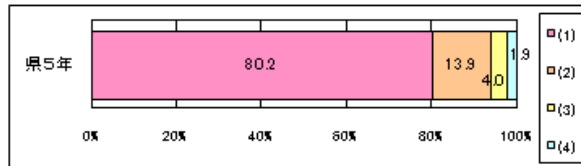
(27)理科の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。(%)

	県5年
(1)楽しい	48.1
(2)どちらかといえば楽しい	31.3
(3)どちらかといえば楽しくない	14.7
(4)楽しくない	5.8



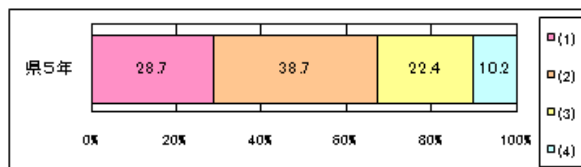
(28)理科の時間に、観察や実験をすることは好きですか。(%)

	県5年
(1)好き	80.2
(2)どちらかといえば好き	13.9
(3)どちらかといえば好きではない	4.0
(4)好きではない	1.9



(29)理科の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

	県5年
(1)そうしている	28.7
(2)どちらかといえばそうしている	38.7
(3)どちらかといえばそうしていない	22.4
(4)そうしていない	10.2



最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

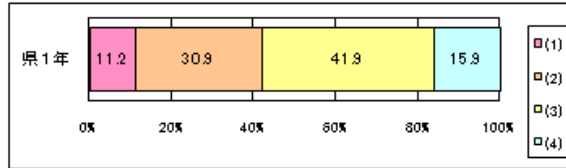
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第1学年)※数値は小数第一位で四捨五入している。

国語

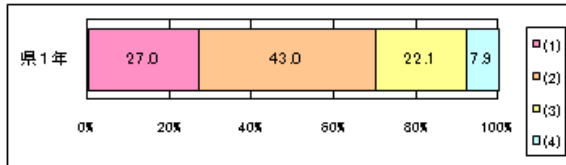
(14)国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを積極的に発表していますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	11.2
(2)どちらかといえばそうしている	30.9
(3)どちらかといえばそうしてはいない	41.9
(4)そうしてはいない	15.9



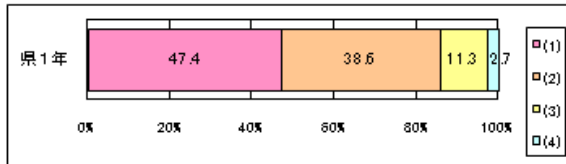
(15)自分の思いや考えを文章に書こうと努力していますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	27.0
(2)どちらかといえばそうしている	43.0
(3)どちらかといえばそうしてはいない	22.1
(4)そうしてはいない	7.9



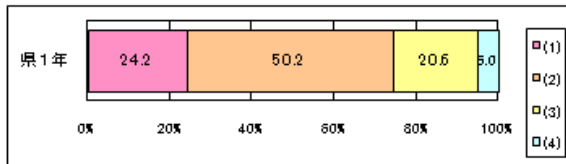
(16)新しい漢字の読み方や書き方を身につけるように努力していますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	47.4
(2)どちらかといえばそうしている	38.6
(3)どちらかといえばそうしてはいない	11.3
(4)そうしてはいない	2.7



(17)ことばのまわりを意識して、ふだんから生活していますか。(%)

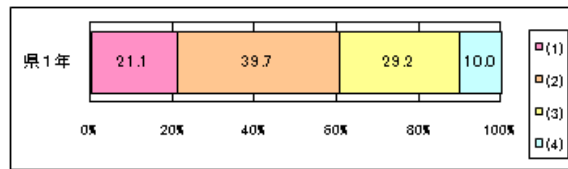
	県1年
(1)そうしている	24.2
(2)どちらかといえばそうしている	50.2
(3)どちらかといえばそうしてはいない	20.6
(4)そうしてはいない	5.0



社会

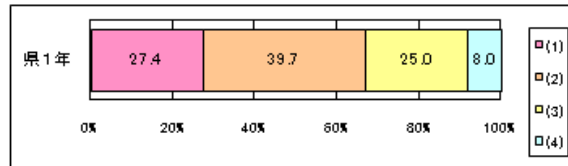
(18)社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。(%)

	県1年
(1)楽しい	21.1
(2)どちらかといえば楽しい	39.7
(3)どちらかといえば楽しくない	29.2
(4)楽しくない	10.0



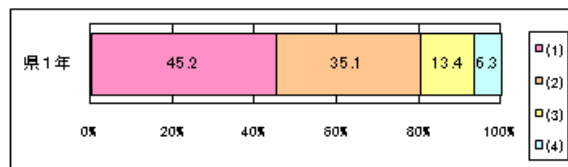
(19)社会の時間に、調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。(%)

	県1年
(1)楽しい	27.4
(2)どちらかといえば楽しい	39.7
(3)どちらかといえば楽しくない	25.0
(4)楽しくない	8.0



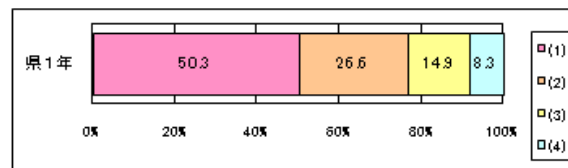
(20)新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がありますか。(%)

	県1年
(1)ある	45.2
(2)どちらかといえばある	35.1
(3)どちらかといえばない	13.4
(4)ない	6.3



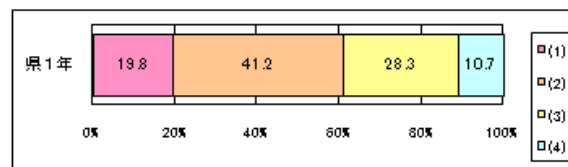
(21)博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好きですか。(%)

	県1年
(1)好き	50.3
(2)どちらかといえば好き	26.6
(3)どちらかといえば好きではない	14.9
(4)好きではない	8.3



(22)社会の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。(%)

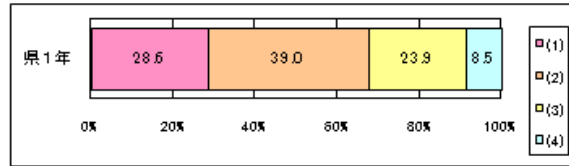
	県1年
(1)そうしている	19.8
(2)どちらかといえばそうしている	41.2
(3)どちらかといえばそうしていません	28.3
(4)そうしていません	10.7



数学

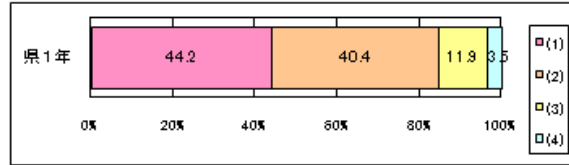
(23)数学の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。(%)

	県1年
(1)楽しい	28.6
(2)どちらかといえば楽しい	39.0
(3)どちらかといえば楽しくない	23.9
(4)楽しくない	8.5



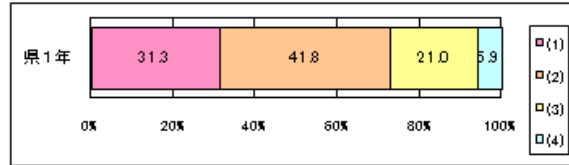
(24)数学の時間に、問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法を考えていますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	44.2
(2)どちらかといえばそうしている	40.4
(3)どちらかといえばそうしてはいない	11.9
(4)そうしてはいない	3.5



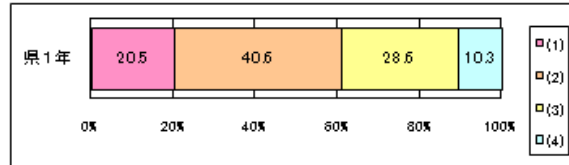
(25)数学の時間に、問題を解くとき、ノートやプリントに図や表を書いたり、模型などの具体物を使ったりして調べていますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	31.3
(2)どちらかといえばそうしている	41.8
(3)どちらかといえばそうしてはいない	21.0
(4)そうしてはいない	5.9



(26)数学の時間に、新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしていますか。(%)

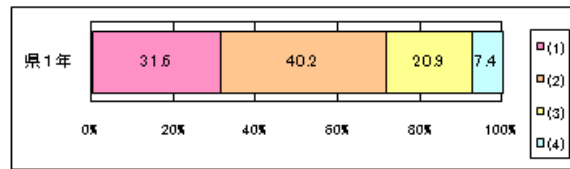
	県1年
(1)そうしている	20.5
(2)どちらかといえばそうしている	40.6
(3)どちらかといえばそうしてはいない	28.6
(4)そうしてはいない	10.3



理科

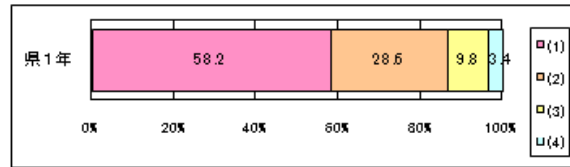
(27)理科の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。(%)

	県1年
(1)楽しい	31.6
(2)どちらかといえば楽しい	40.2
(3)どちらかといえば楽しくない	20.9
(4)楽しくない	7.4



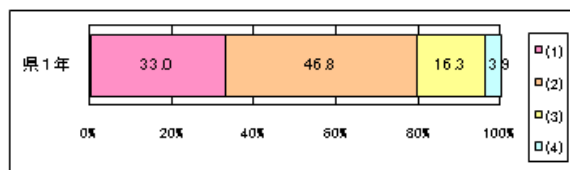
(28)理科の時間に、問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好きですか。(%)

	県1年
(1)好き	58.2
(2)どちらかといえば好き	28.6
(3)どちらかといえば好きではない	9.8
(4)好きではない	3.4



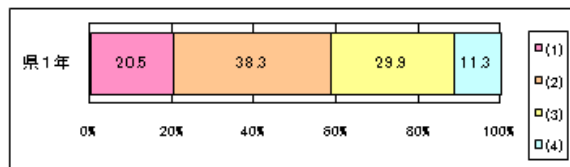
(29)理科の時間に、観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしていますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	33.0
(2)どちらかといえばそうしている	46.8
(3)どちらかといえばそうしてない	16.3
(4)そうしてない	3.9



(30)理科の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。(%)

	県1年
(1)そうしている	20.5
(2)どちらかといえばそうしている	38.3
(3)どちらかといえばそうしてない	29.9
(4)そうしてない	11.3



最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

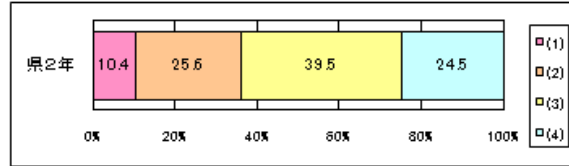
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第2学年)※数値は小数第一位で四捨五入している。

国語

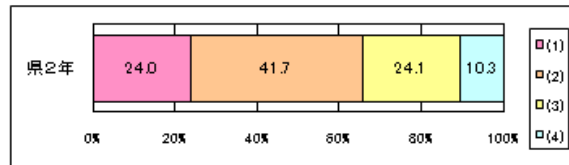
(14)国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを積極的に発表していますか。(%)

	県2年
(1)そうしている	10.4
(2)どちらかといえばそうしている	25.6
(3)どちらかといえばそうしてはいない	39.5
(4)そうしてはいない	24.5



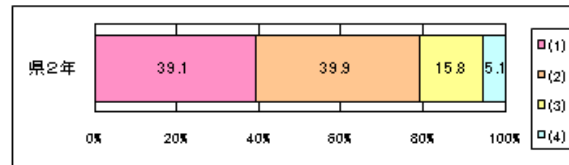
(15)自分の思いや考えを文章に書こうと努力していますか。(%)

	県2年
(1)そうしている	24.0
(2)どちらかといえばそうしている	41.7
(3)どちらかといえばそうしてはいない	24.1
(4)そうしてはいない	10.3



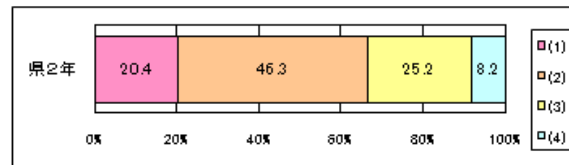
(16)新しい漢字の読み方や書き方を身につけるように努力していますか。(%)

	県2年
(1)そうしている	39.1
(2)どちらかといえばそうしている	39.9
(3)どちらかといえばそうしてはいない	15.8
(4)そうしてはいない	5.1



(17)ことばのきまりを意識して、ふだんから生活していますか。(%)

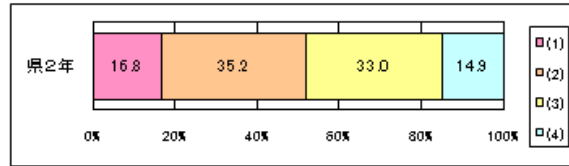
	県2年
(1)そうしている	20.4
(2)どちらかといえばそうしている	46.3
(3)どちらかといえばそうしてはいない	25.2
(4)そうしてはいない	8.2



社会

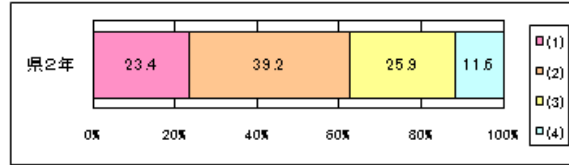
(18)社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。(%)

	県2年
(1)楽しい	16.8
(2)どちらかといえば楽しい	35.2
(3)どちらかといえば楽しくない	33.0
(4)楽しくない	14.9



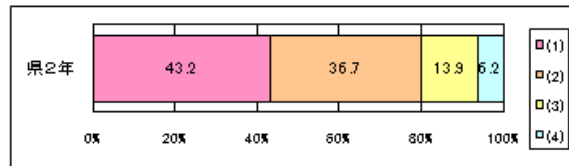
(19)社会の時間に、調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。(%)

	県2年
(1)楽しい	23.4
(2)どちらかといえば楽しい	39.2
(3)どちらかといえば楽しくない	25.9
(4)楽しくない	11.6



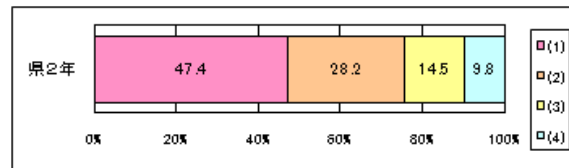
(20)新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がありますか。(%)

	県2年
(1)ある	43.2
(2)どちらかといえばある	36.7
(3)どちらかといえばない	13.9
(4)ない	6.2



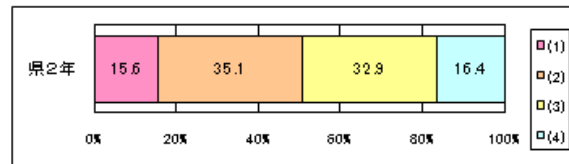
(21)博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好きですか。(%)

	県2年
(1)好き	47.4
(2)どちらかといえば好き	28.2
(3)どちらかといえば好きではない	14.5
(4)好きではない	9.8



(22)社会の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。(%)

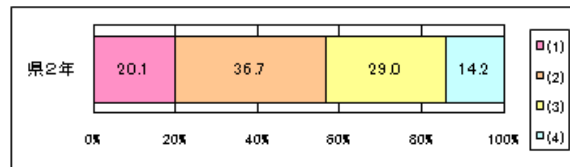
	県2年
(1)そうしている	15.6
(2)どちらかといえばそうしている	35.1
(3)どちらかといえばそうしてない	32.9
(4)そうしてない	16.4



数学

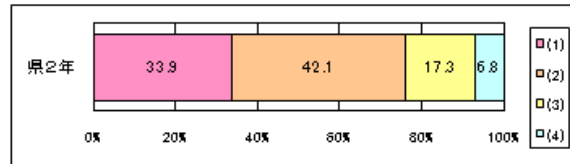
(23)数学の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。(%)

	県2年
(1)楽しい	20.1
(2)どちらかといえば楽しい	36.7
(3)どちらかといえば楽しくない	29.0
(4)楽しくない	14.2



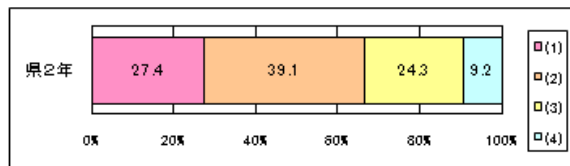
(24)数学の時間に、問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法を考えますか。(%)

	県2年
(1)そうしている	33.9
(2)どちらかといえばそうしている	42.1
(3)どちらかといえばそうしてはいない	17.3
(4)そうしてはいない	6.8



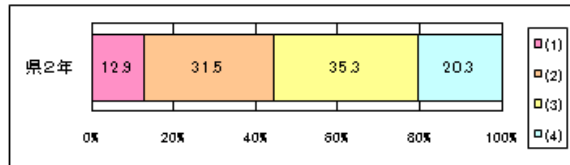
(25)数学の時間に、問題を解くとき、ノートやプリントに図や表を書いたり、模型などの具体物を使ったりして調べていますか。(%)

	県2年
(1)そうしている	27.4
(2)どちらかといえばそうしている	39.1
(3)どちらかといえばそうしてはいない	24.3
(4)そうしてはいない	9.2



(26)数学の時間に、新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしていますか。(%)

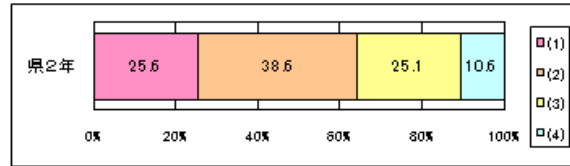
	県2年
(1)そうしている	12.9
(2)どちらかといえばそうしている	31.5
(3)どちらかといえばそうしてはいない	35.3
(4)そうしてはいない	20.3



理科

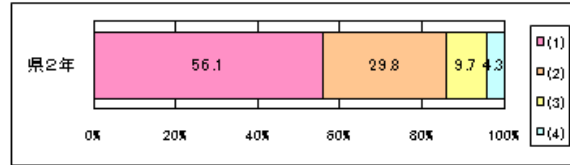
(27)理科の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。(%)

	県2年
(1)楽しい	25.6
(2)どちらかといえば楽しい	38.6
(3)どちらかといえば楽しくない	25.1
(4)楽しくない	10.6



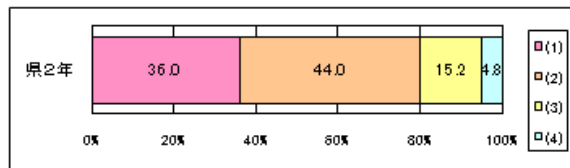
(28)理科の時間に、問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好きですか。(%)

	県2年
(1)好き	56.1
(2)どちらかといえば好き	29.8
(3)どちらかといえば好きではない	9.7
(4)好きではない	4.3



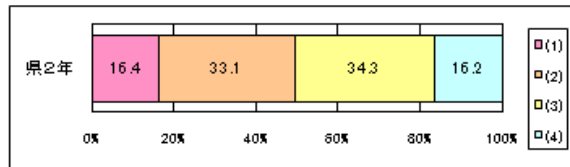
(29)理科の時間に、観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようになっていますか。(%)

	県2年
(1)そうしている	36.0
(2)どちらかといえばそうしている	44.0
(3)どちらかといえばそうしてはいない	15.2
(4)そうしてはいない	4.8



(30)理科の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについて、自分で調べていますか。(%)

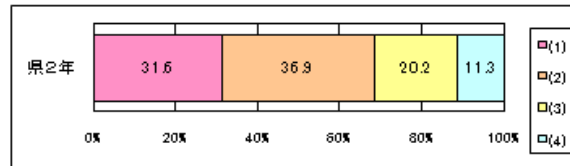
	県2年
(1)そうしている	16.4
(2)どちらかといえばそうしている	33.1
(3)どちらかといえばそうしてはいない	34.3
(4)そうしてはいない	16.2



英語

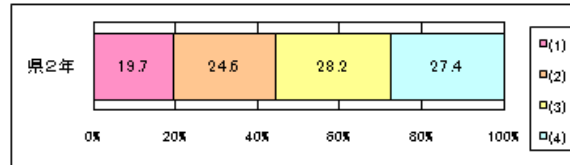
(31)[2年生のみ]英語の時間に、英語を聞いたり、話したりするのは楽しいですか。(%)

	県2年
(1)楽しい	31.6
(2)どちらかといえば楽しい	36.9
(3)どちらかといえば楽しくない	20.2
(4)楽しくない	11.3



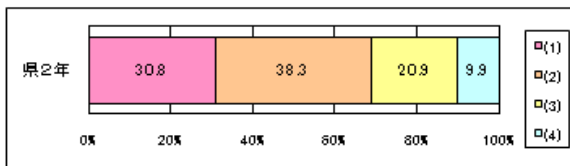
(32)[2年生のみ]英語を使って、手紙や日記、e-mailなどを書くことに興味がありますか。(%)

	県2年
(1)ある	19.7
(2)どちらかといえばある	24.6
(3)どちらかといえばない	28.2
(4)ない	27.4



(33)[2年生のみ]ALTの先生とコミュニケーションをとることは好きですか。(%)

	県2年
(1)好き	30.8
(2)どちらかといえば好き	38.3
(3)どちらかといえばきらい	20.9
(4)きらい	9.9



最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

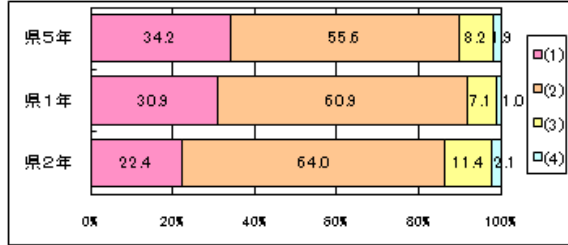
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年・中学校第1学年・第2学年)※数値は小数第一位で四捨五入している。

各教科の理解度についての自己評価

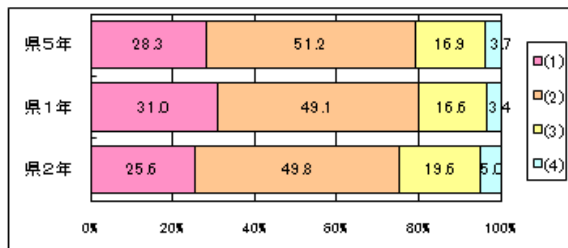
(12)ア各教科の授業はどの程度分かりますか。ア 国語(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	34.2	30.9	22.4
(2)だいたい分かる	55.6	60.9	64.0
(3)あまり分からない	8.2	7.1	11.4
(4)ほとんど分からない	1.9	1.0	2.1



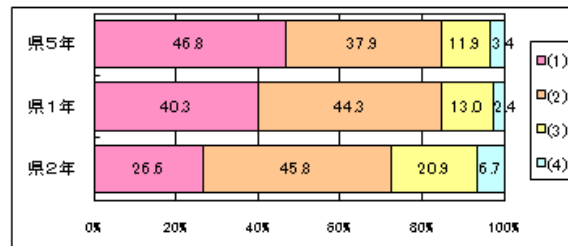
(12)イ各教科の授業はどの程度分かりますか。イ 社会(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	28.3	31.0	25.6
(2)だいたい分かる	51.2	49.1	49.8
(3)あまり分からない	16.9	16.6	19.6
(4)ほとんど分からない	3.7	3.4	5.0



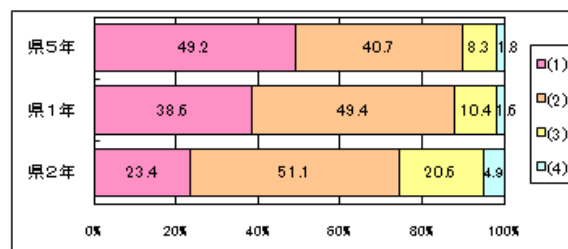
(12)ウ各教科の授業はどの程度分かりますか。ウ 算数・数学(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	46.8	40.3	26.6
(2)だいたい分かる	37.9	44.3	45.8
(3)あまり分からない	11.9	13.0	20.9
(4)ほとんど分からない	3.4	2.4	6.7



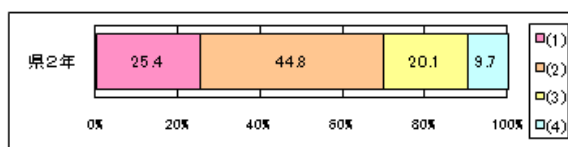
(12)エ各教科の授業はどの程度分かりますか。エ 理科(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	49.2	38.6	23.4
(2)だいたい分かる	40.7	49.4	51.1
(3)あまり分からない	8.3	10.4	20.6
(4)ほとんど分からない	1.8	1.6	4.9



(12)オ[2年生のみ]各教科の授業はどの程度分かりますか。オ 英語(%)

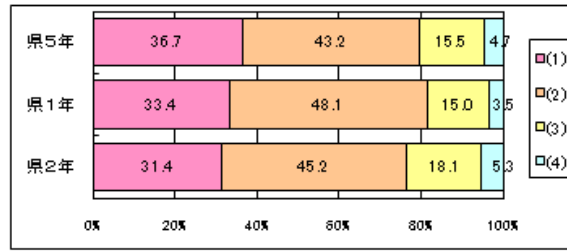
	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる			25.4
(2)だいたい分かる			44.8
(3)あまり分からない			20.1
(4)ほとんど分からない			9.7



各教科に対する楽しみについての自己評価

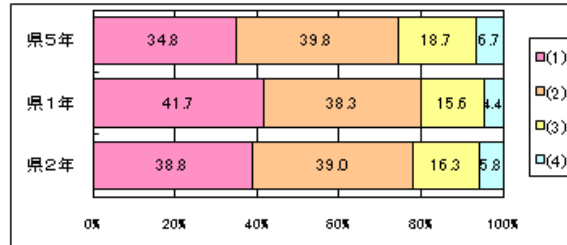
(13)ア各教科の授業は楽しいですか。ア 国語(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	36.7	33.4	31.4
(2)どちらかといえば楽しい	43.2	48.1	45.2
(3)どちらかといえば楽しくない	15.5	15.0	18.1
(4)楽しくない	4.7	3.5	5.3



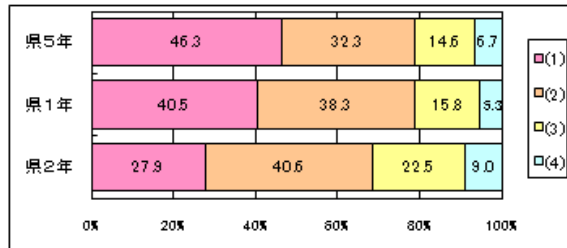
(13)イ各教科の授業は楽しいですか。イ 社会(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	34.8	41.7	38.8
(2)どちらかといえば楽しい	39.8	38.3	39.0
(3)どちらかといえば楽しくない	18.7	15.6	16.3
(4)楽しくない	6.7	4.4	5.8



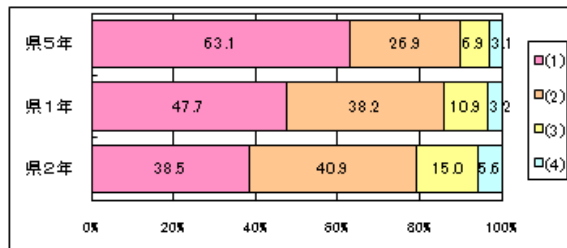
(13)ウ各教科の授業は楽しいですか。ウ 算数・数学(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	46.3	40.5	27.9
(2)どちらかといえば楽しい	32.3	38.3	40.6
(3)どちらかといえば楽しくない	14.6	15.8	22.5
(4)楽しくない	6.7	5.3	9.0



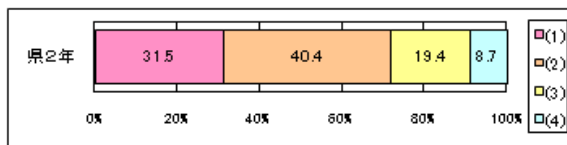
(13)エ各教科の授業は楽しいですか。エ 理科(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	63.1	47.7	38.5
(2)どちらかといえば楽しい	26.9	38.2	40.9
(3)どちらかといえば楽しくない	6.9	10.9	15.0
(4)楽しくない	3.1	3.2	5.6



(13)オ[2年生のみ]各教科の授業は楽しいですか。オ 英語(%)

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい			31.5
(2)どちらかといえば楽しい			40.4
(3)どちらかといえば楽しくない			19.4
(4)楽しくない			8.7



最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

教師意識調査から見た佐賀県の教師像(小学校) ※数値は小数第一位で四捨五入している。→ 中学校はこちら

教科全般における指導法の工夫

- 発展的課題を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……9%
半分程度の単元で行っている……17%
- 理解が十分でない児童への補充的指導**
多くの単元で行っている……34%
半分程度の単元で行っている……19%
- レポートや作文など、表現する活動を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……18%
半分程度の単元で行っている……23%
- 表現し、考えをあげたり深めたりする活動を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……42%
半分程度の単元で行っている……26%
- 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導**
行っている……30%
どちらかといえば行っている……64%
- 学習目標や評価規準を明確化した指導**
行っている……30%
どちらかといえば行っている……64%
- 学習内容や学習方法についてのきめ細やかな指導**
行っている……28%
どちらかといえば行っている……63%
- 学習形態を工夫したメリハリのある授業**
多くの単元で行っている……35%
半分程度の単元で行っている……31%

学習環境の活用

- コンピュータを活用した授業**
年20回以上……18%
年10～19回程度……31%
- 【活用内容】
インターネットを用いた調べ学習……64%
教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など……18%
- 学校図書館を活用した授業**
年20回以上……24%
年10～19回程度……24%
- 【活用内容】
読書指導・読書活動の場……42%
調べ学習の場……49%

家庭学習への関与状況

- 多くの時間で宿題を出している……53%
- どちらかといえば出している方が多い……25%
- 多くの時間でどちらかといえば出しているを合わせた割合
予習的な内容の宿題を出している……9%
- 復習的な内容の宿題を出している……83%

T・T・少人数指導の成果と課題

- 実施状況(管轄)**
チームティーチング……37% 少人数指導……7%
指導内容に応じて両方……37% 実施していない……20%
- チームティーチングにおける役割分担**
状況に応じて役割を交代……22% 小グループに分かれて別々に……7%
T1が一斉指導、T2が机間指導……70%
- 少人数指導における習熟度別指導の頻度**
多くの単元で……11% 半分程度の単元で……9%
1/3程度の単元で……15%
- チームティーチングや少人数指導における打ち合わせや見直しの頻度**
必要に応じてときどき……60% 毎回ではないが定期的……24%
授業前後に毎回……14%

教科の特性に応じた指導法の工夫

小学校実施回答数 1,217人

- 【国語】
- 書く活動を取り入れた指導**
多くの単元……49% 半分程度の単元……30%
- 図書の多読につながるような授業**
多くの単元……11% 半分程度の単元……29%
- 【社会】
- 資料などから読み取ったことをまとめて発表するような授業**
多くの単元……15% 半分程度の単元……27%
- 資料などから読み取ったことをまとめて討論するような授業**
多くの単元……9% 半分程度の単元……8%
- 【算数】
- 算数的活動を通して課題を解決する授業**
多くの単元……51% 半分程度の単元……27%
- 問題解決的な学習を取り入れた授業**
多くの単元……54% 半分程度の単元……26%
- 【理科】
- 児童が見通しをもち、観察や実験をするような授業**
多くの単元……72% 半分程度の単元……18%
- 実験結果やまとめにおいていろいろな考えを出し合う授業**
多くの単元……35% 半分程度の単元……33%

教師の指導観

- 児童が勉強するよう日ごろから指導する**
そう思う……81%
どちらかといえばそう思う……19%
- 児童が規則を守るよう細かく指導する**
そう思う……80%
どちらかといえばそう思う……19%
- 児童が気軽に話しかけられるようにする**
そう思う……91%
どちらかといえばそう思う……9%
- 問題が起こった時、常に児童に意見を求める**
そう思う……35%
どちらかといえばそう思う……56%

学校組織マネジメントに対する意識

- 学力向上や生徒指導など学校の方針を理解している**
理解している……57%
どちらかといえば理解している……42%
- 方針や教育内容についての共通理解が図られている**
そう思う……43%
どちらかといえばそう思う……53%
- 学校内に気軽に話し合える雰囲気がある**
そう思う……58%
どちらかといえばそう思う……37%



【効果的だと思う点】
学習状況が十分でない子どもへの対応ができる
子どもへの声かけが増え、個別指導が十分にできる
子どもの学習内容がよく定着する

【課題だと思う点】
教師間の打ち合わせの時間が十分でない
学習状況が十分な子どもをさらにのぼす手立てが難しい
教師の役割分担が難しい

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

教師意識調査から見た佐賀県の教師像(中学校) ※数値は小数第一位で四捨五入している。→ 小学校はこちら

教科全脳における指導法の工夫

- 発展的課題を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……11%
半分程度の単元で行っている……12%
- 理解が十分でない児童への補足的指導**
多くの単元で行っている……15%
半分程度の単元で行っている……11%
- レポートや作文など、表現する活動を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……13%
半分程度の単元で行っている……11%
- 表現し、考えを応がり深めたりする活動を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……20%
半分程度の単元で行っている……16%
- 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導**
行っている……27%
どちらかといえば行っている……58%
- 学習目標や評価基準を明確化した指導**
行っている……27%
どちらかといえば行っている……64%
- 学習内容や学習方法についてのきめ細やかな指導**
行っている……25%
どちらかといえば行っている……58%
- 学習形態を工夫しためりよりのある授業**
多くの単元で行っている……33%
半分程度の単元で行っている……18%

教科の特性に応じた指導法の工夫

中学校実施回答数 856人

- 国語**
- 自分の考えや意見を表現する言語活動を取り入れた指導**
多くの単元……37% 半分程度の単元……21%
- 図書等多読につながるような授業**
多くの単元……10% 半分程度の単元……14%
- 社会**
- 資料などから読み取ったことをまとめて発表するような授業**
多くの単元……23% 半分程度の単元……16%
- 資料などから読み取ったことをまとめて討論するような授業**
多くの単元……7% 半分程度の単元……4%
- 数学**
- 数学的活動を通して課題を解決する授業**
多くの単元……21% 半分程度の単元……13%
- 問題解決的な学習を取り入れた授業**
多くの単元……19% 半分程度の単元……12%
- 理科**
- 生徒が見通しをもち、観察や実験をするような授業**
多くの単元……56% 半分程度の単元……24%
- 英語**
- 生徒のコミュニケーション能力を高める授業**
多くの単元……57% 半分程度の単元……17%
- 英語を使って日記や作文を書くような活動を取り入れた授業**
多くの単元……17% 半分程度の単元……18%

学習環境の活用

- コンピュータを活用した授業**
年20回以上……4%
年10～19回程度……3%
- 【活用内容】
インターネットを用いた調べ学習……22%
教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など……28%
- 学校図書館を活用した授業**
年20回以上……1%
年10～19回程度……2%
- 【活用内容】
読書指導・読書活動の場……10%
調べ学習の場……43%



教師の指導観

- 児童が勉強するよう日ごろから指導する**
そう思う……73%
どちらかといえばそう思う……25%
- 児童が規則を守るよう細かく指導する**
そう思う……67%
どちらかといえばそう思う……31%
- 児童が気軽に話しかけられるようにする**
そう思う……81%
どちらかといえばそう思う……18%
- 問題が生じた時、常に児童に意見を求める**
そう思う……21%
どちらかといえばそう思う……58%

家庭学習への関与状況

- 多くの時間で宿題を出している……31%
- どちらかといえば出している方が多い……32%
- 多くの時間でどちらかといえば出しているを合わせた割合
予習的な内容の宿題を出している……32%
- 復習的な内容の宿題を出している……71%

学校組織マネジメントに対する意識

- 学力向上や生徒指導など学校の方針を理解している**
理解している……49%
どちらかといえば理解している……49%
- 方針や教育内容についての共通理解が図られている**
そう思う……32%
どちらかといえばそう思う……59%
- 学校内に気軽に話し合える雰囲気がある**
そう思う……44%
どちらかといえばそう思う……47%

T・T・少人数指導の成果と課題

- 実施状況**
- 数学** チームティーチング……52% 少人数指導……26% 指導内容に応じて両方……15%
- 英語** チームティーチング……68% 少人数指導……15% 指導内容に応じて両方……10%
- チームティーチングにおける役割分担**
- 数学** T1が一斉指導、T2が机間指導……87% 状況に応じて役割を交代……10%
- 英語** T1が一斉指導、T2が机間指導……80% 状況に応じて役割を交代……35%
- 少人数指導における習熟度別指導の頻度**
- 数学** 多くの単元で……24% 半分程度の単元で……3% 1/3程度の単元で……5%
- 英語** 多くの単元で……17% 半分程度の単元で……3% 1/3程度の単元で……7%
- チームティーチングや少人数指導における打ち合わせや見直しの頻度**
- 数学** 必要に応じてときどき……63% 毎回ではないが定期的……19% 授業前後に毎回……10%
- 英語** 必要に応じてときどき……54% 毎回ではないが定期的……25% 授業前後に毎回……18%

【効果的だと思う点】

学習状況が十分でない子どもへの対応ができる
子どもへの声かけが増え、個別指導が十分にできる
指導法の工夫・改善ができる

【課題だと思う点】

教師間の打ち合わせの時間が十分でない
学習状況が十分な子どもをさらにのばす手たてが難しい
教師の役割分担が難しい

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

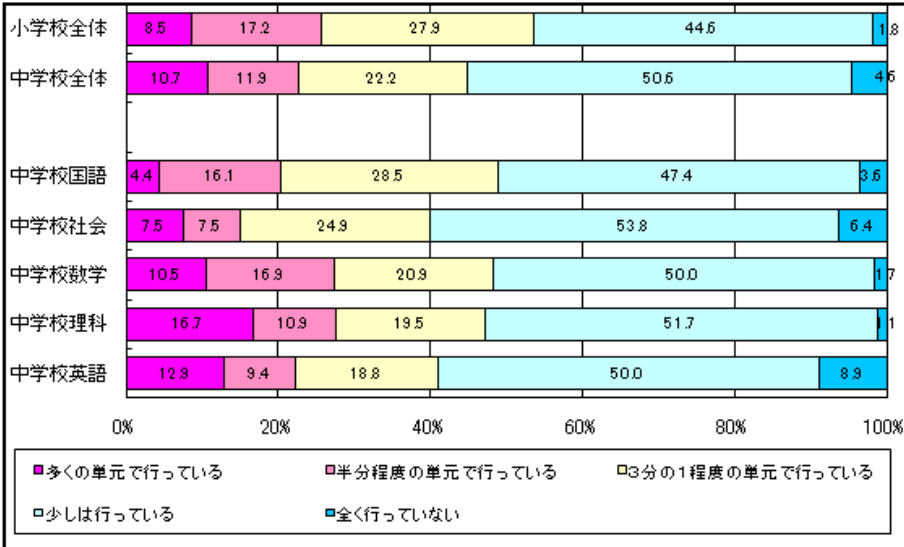
教師意識調査から見た佐賀県の教師像 ※数値は小数第一位で四捨五入している。

小学校実施回答数 1,217人 中学校実施回答数 856人

教科全般における指導法の工夫

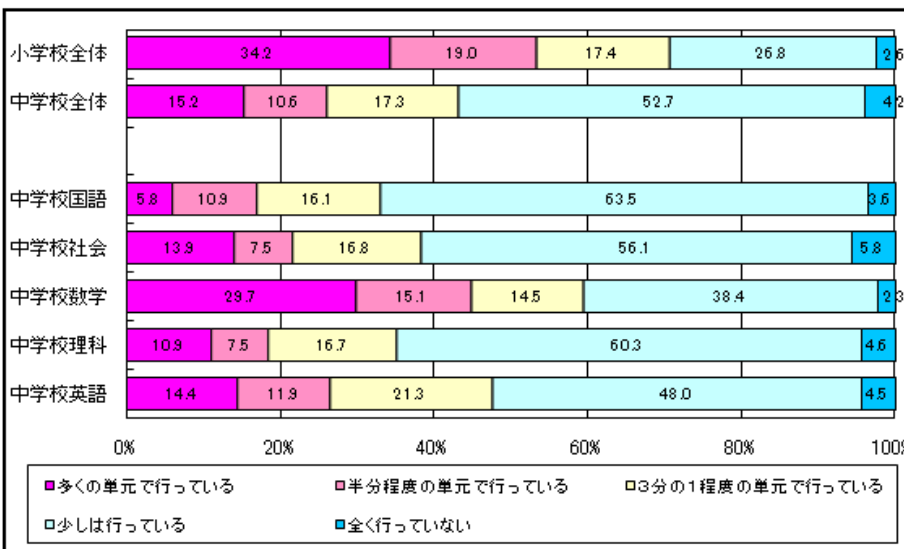
(9) 発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
多くの単元で行っている	8.5	10.7	4.4	7.5	10.5	16.7	12.9
半分程度の単元で行っている	17.2	11.9	16.1	7.5	16.9	10.9	9.4
3分の1程度の単元で行っている	27.9	22.2	28.5	24.9	20.9	19.5	18.8
少しは行っている	44.6	50.6	47.4	53.8	50.0	51.7	50.0
全く行っていない	1.8	4.6	3.6	6.4	1.7	1.1	8.9



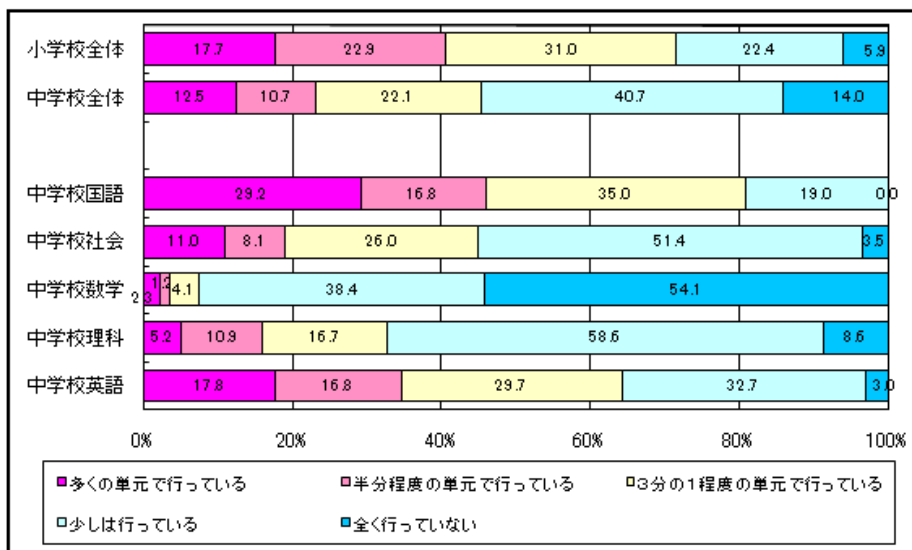
(10) 理解が十分でない児童・生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
多くの単元で行っている	34.2	15.2	5.8	13.9	29.7	10.9	14.4
半分程度の単元で行っている	19.0	10.6	10.9	7.5	15.1	7.5	11.9
3分の1程度の単元で行っている	17.4	17.3	16.1	16.8	14.5	16.7	21.3
少しは行っている	26.8	52.7	63.5	56.1	38.4	60.3	48.0
全く行っていない	2.6	4.2	3.6	5.8	2.3	4.6	4.5



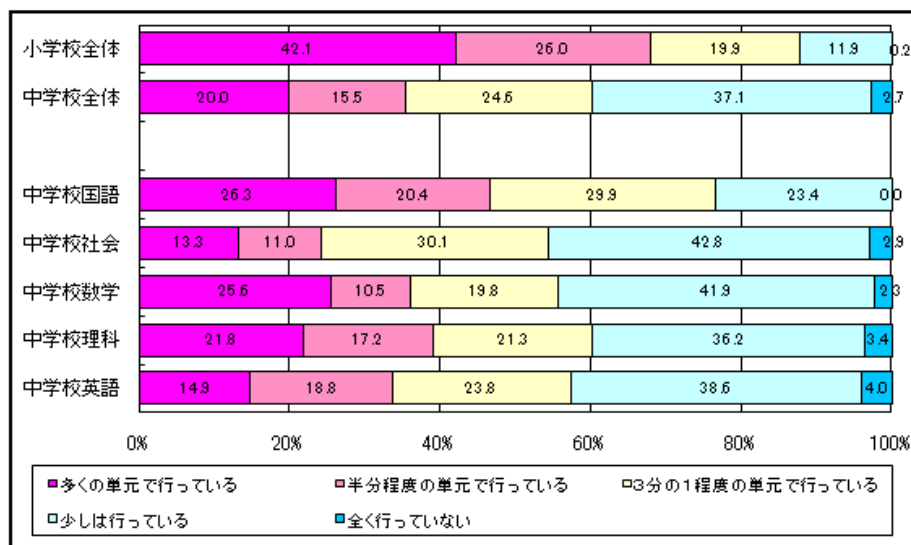
(11) レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの単元で行っている	17.7	12.5	29.2	11.0	2.3	5.2	17.8
半分程度の単元で行っている	22.9	10.7	16.8	8.1	1.2	10.9	16.8
3分の1程度の単元で行っている	31.0	22.1	35.0	26.0	4.1	16.7	29.7
少しは行っている	22.4	40.7	19.0	51.4	38.4	58.6	32.7
全く行っていない	5.9	14.0	0.0	3.5	54.1	8.6	3.0



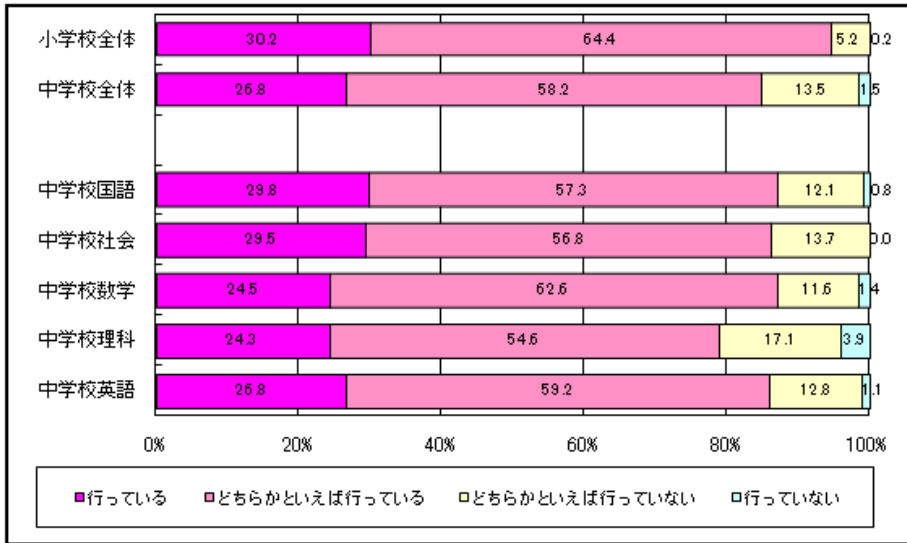
(12) 発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの単元で行っている	42.1	20.0	26.3	13.3	25.6	21.8	14.9
半分程度の単元で行っている	26.0	15.5	20.4	11.0	10.5	17.2	18.8
3分の1程度の単元で行っている	19.9	24.6	29.9	30.1	19.8	21.3	23.8
少しは行っている	11.9	37.1	23.4	42.8	41.9	36.2	38.6
全く行っていない	0.2	2.7	0.0	2.9	2.3	3.4	4.0



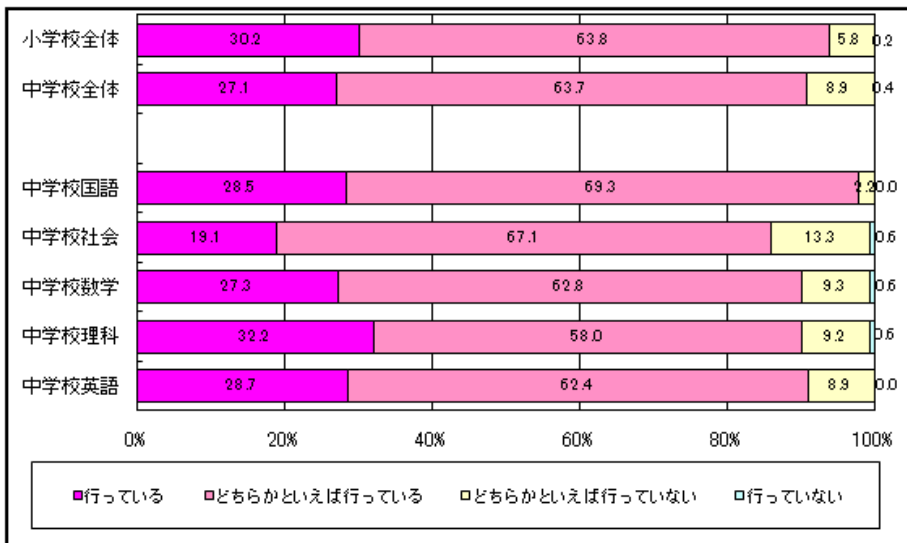
(13)総合的な学習の時間においては、児童・生徒にどのような力を身につけさせるのかを意識した指導を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	30.2	26.8		29.8	29.5	24.5	24.3	26.8
どちらかといえば行っている	64.4	58.2		57.3	56.8	62.6	54.6	59.2
どちらかといえば行っていない	5.2	13.5		12.1	13.7	11.6	17.1	12.8
行っていない	0.2	1.5		0.8	0.0	1.4	3.9	1.1



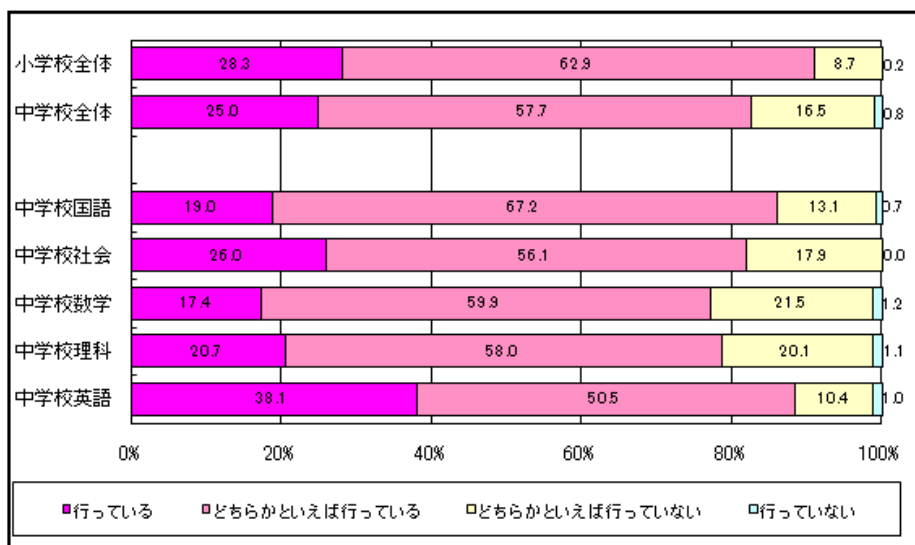
(14)単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	30.2	27.1		28.5	19.1	27.3	32.2	28.7
どちらかといえば行っている	63.8	63.7		69.3	67.1	62.8	58.0	62.4
どちらかといえば行っていない	5.8	8.9		2.2	13.3	9.3	9.2	8.9
行っていない	0.2	0.4		0.0	0.6	0.6	0.6	0.0



(15) ノートのまとめ方や話し合いの進め方など学習内容だけでなく学習方法についてもきめ細やかに指導を行っていますか。

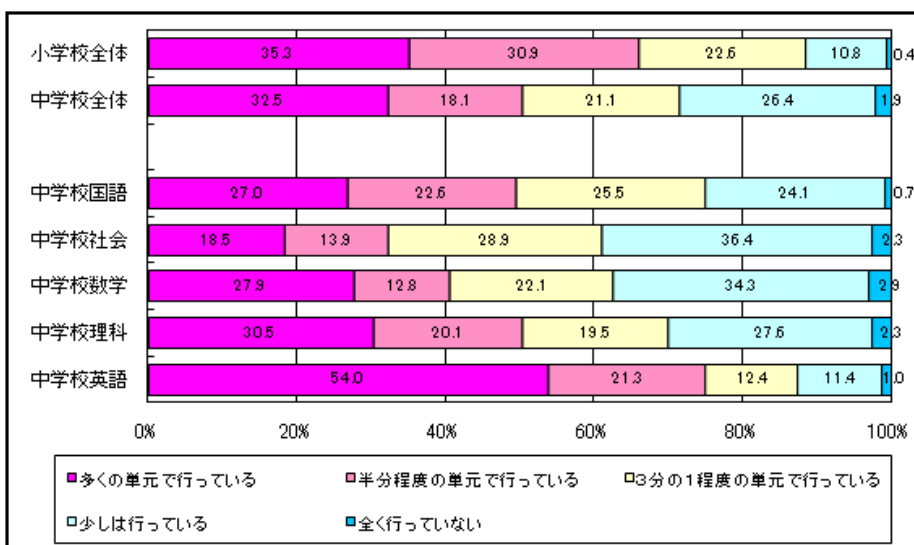
	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	28.3	25.0		19.0	26.0	17.4	20.7	38.1
どちらかといえば行っている	62.9	57.7		67.2	56.1	59.9	58.0	50.5
どちらかといえば行っていない	8.7	16.5		13.1	17.9	21.5	20.1	10.4
行っていない	0.2	0.8		0.7	0.0	1.2	1.1	1.0



(16) 教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、

児童・生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか。

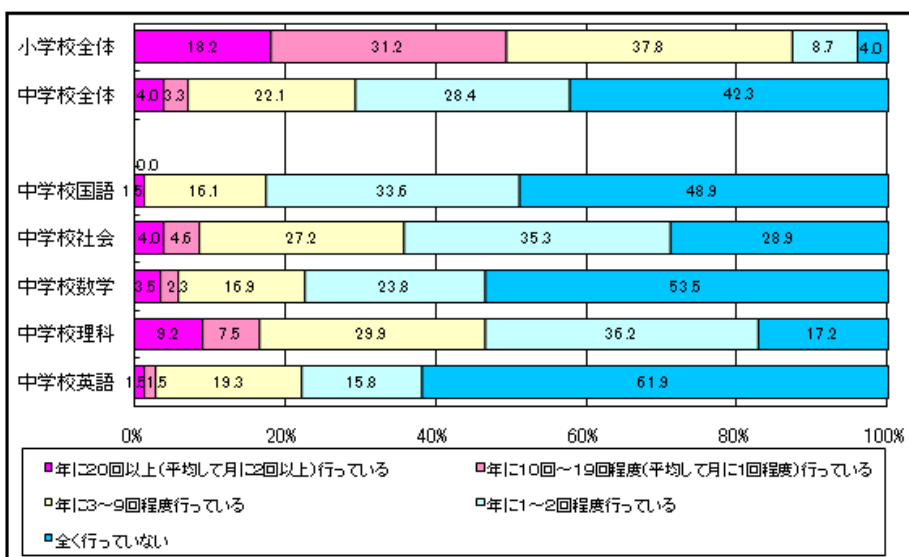
	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの単元で行っている	35.3	32.5		27.0	18.5	27.9	30.5	54.0
半分程度の単元で行っている	30.9	18.1		22.6	13.9	12.8	20.1	21.3
3分の1程度の単元で行っている	22.6	21.1		25.5	28.9	22.1	19.5	12.4
少しは行っている	10.8	26.4		24.1	36.4	34.3	27.6	11.4
全く行っていない	0.4	1.9		0.7	2.3	2.9	2.3	1.0



学習環境の活用

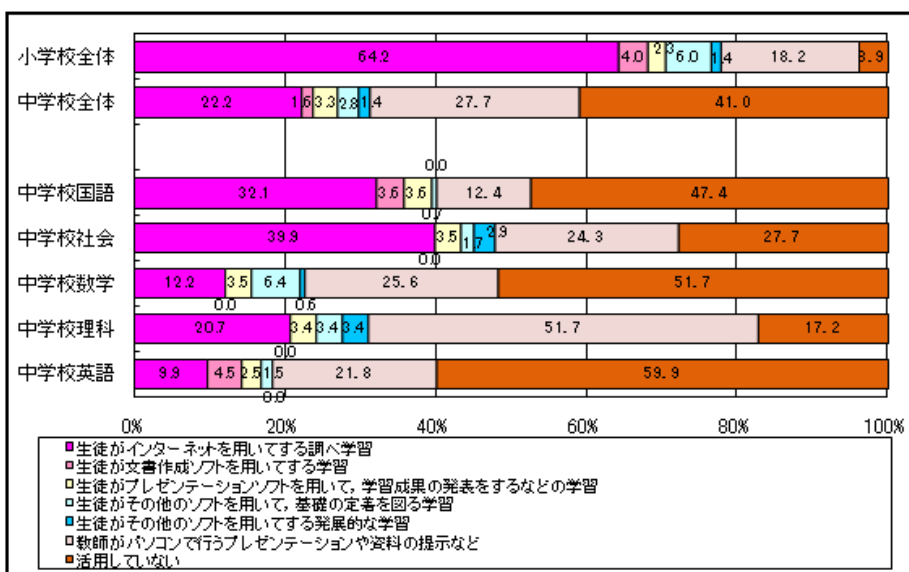
(5) コンピュータを活用した授業を行っていますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている	18.2	4.0	1.5	4.0	3.5	9.2	1.5
年に10回～19回程度(平均して月に1回程度)行っている	31.2	3.3	0.0	4.6	2.3	7.5	1.5
年に3～9回程度行っている	37.8	22.1	16.1	27.2	16.9	29.9	19.3
年に1～2回程度行っている	8.7	28.4	33.6	35.3	23.8	36.2	15.8
全く行っていない	4.0	42.3	48.9	28.9	53.5	17.2	61.9



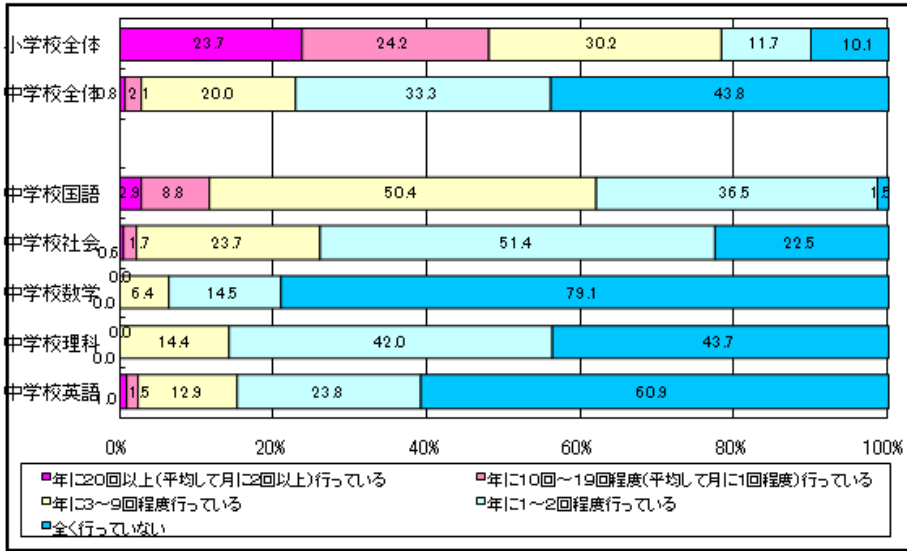
(6) 授業では、コンピュータを主にどのように活用していますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
生徒がインターネットを用いてする調べ学習	64.2	22.2	32.1	39.9	12.2	20.7	9.9
生徒が文書作成ソフトを用いてする学習	4.0	1.6	3.6	0.0	0.0	0.0	4.5
生徒がプレゼンテーションソフトを用いて、学習成果の発表をするなどの学習	2.3	3.3	3.6	3.5	3.5	3.4	2.5
生徒がその他のソフトを用いて、基礎の定着を図る学習	6.0	2.8	0.7	1.7	6.4	3.4	1.5
生徒がその他のソフトを用いてする発展的な学習	1.4	1.4	0.0	2.9	0.6	3.4	0.0
教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など	18.2	27.7	12.4	24.3	25.6	51.7	21.8
活用していない	3.9	41.0	47.4	27.7	51.7	17.2	59.9



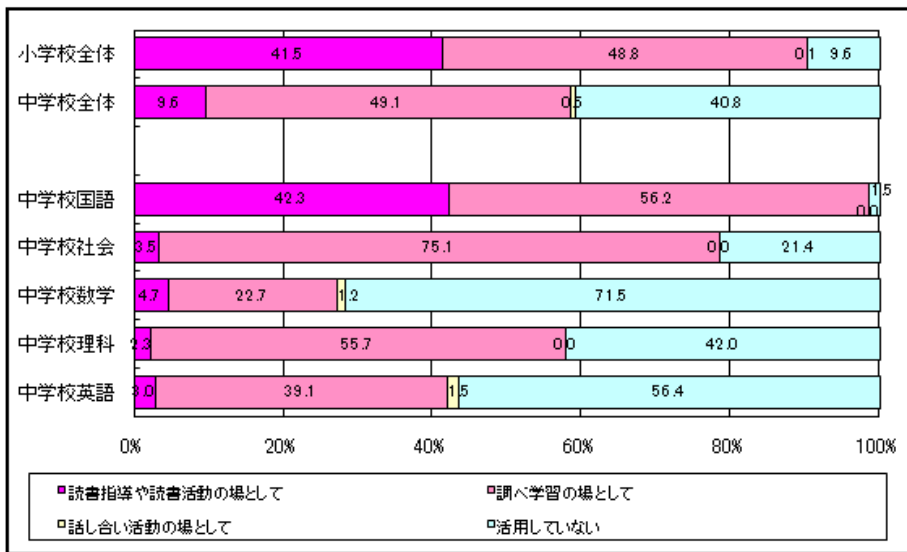
(7) 学校図書館を活用した授業を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
年に20回以上(平均して月に2回以上)行	23.7	0.8	2.9	0.6	0.0	0.0	1.0
年に10回～19回程度(平均して月に1回程	24.2	2.1	8.8	1.7	0.0	0.0	1.5
年に3～9回程度行っている	30.2	20.0	50.4	23.7	6.4	14.4	12.9
年に1～2回程度行っている	11.7	33.3	36.5	51.4	14.5	42.0	23.8
全く行っていない	10.1	43.8	1.5	22.5	79.1	43.7	60.9



(8) 授業では、学校図書館を主にどのように活用していますか。

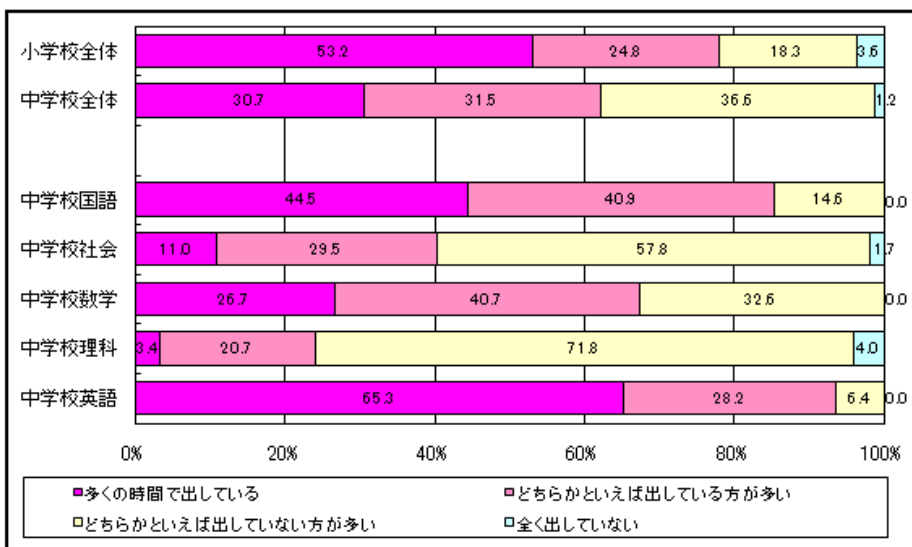
	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
読書指導や読書活動の場として	41.5	9.6	42.3	3.5	4.7	2.3	3.0
調べ学習の場として	48.8	49.1	56.2	75.1	22.7	55.7	39.1
話し合い活動の場として	0.1	0.6	0.0	0.0	1.2	0.0	1.5
活用していない	9.6	40.8	1.5	21.4	71.5	42.0	56.4



家庭学習への関与状況

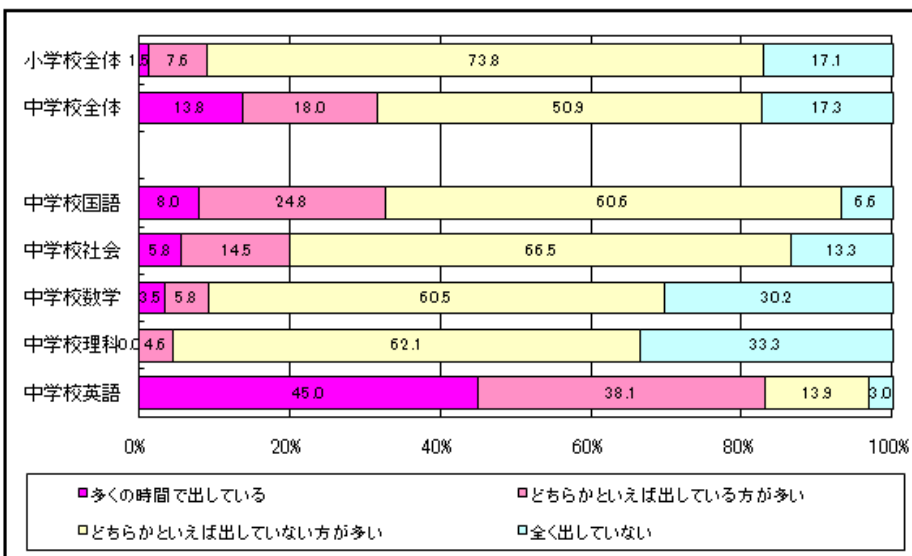
(2) 宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	53.2	30.7	44.5	11.0	26.7	3.4	65.3
どちらかといえば出している方が多い	24.8	31.5	40.9	29.5	40.7	20.7	28.2
どちらかといえば出していない方が多い	18.3	36.6	14.6	57.8	32.6	71.8	6.4
全く出していない	3.6	1.2	0.0	1.7	0.0	4.0	0.0



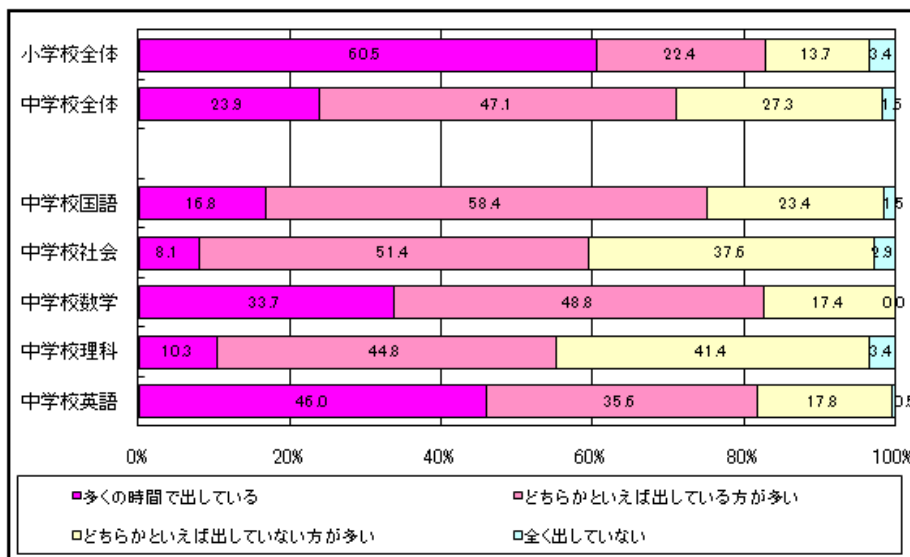
(3) 予習的な宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	1.5	13.8	8.0	5.8	3.5	0.0	45.0
どちらかといえば出している方が多い	7.6	18.0	24.8	14.5	5.8	4.6	38.1
どちらかといえば出していない方が多い	73.8	50.9	60.6	66.5	60.5	62.1	13.9
全く出していない	17.1	17.3	6.6	13.3	30.2	33.3	3.0



(4) 復習的な宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	60.5	23.9		16.8	8.1	33.7	10.3	46.0
どちらかといえば出している方が多い	22.4	47.1		58.4	51.4	48.8	44.8	35.6
どちらかといえば出していない方が多い	13.7	27.3		23.4	37.6	17.4	41.4	17.8
全く出していない	3.4	1.6		1.5	2.9	0.0	3.4	0.5

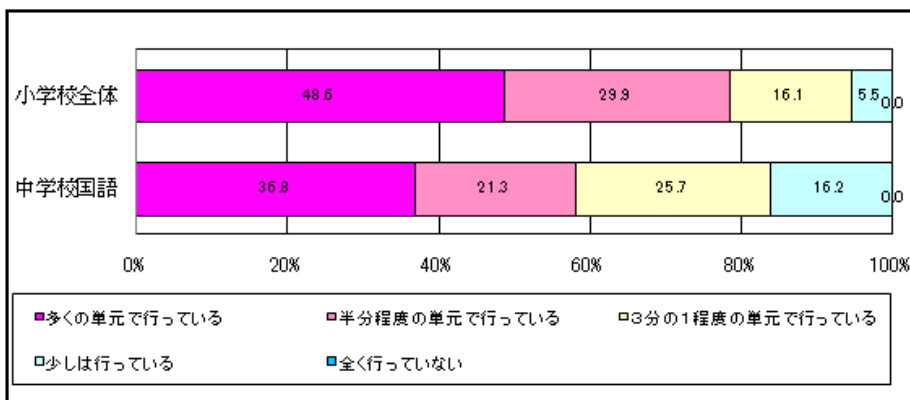


教科の特性に応じた指導法の工夫

(17)国語で、書く活動を取り入れた指導を意識的に行っていますか。(小学校)

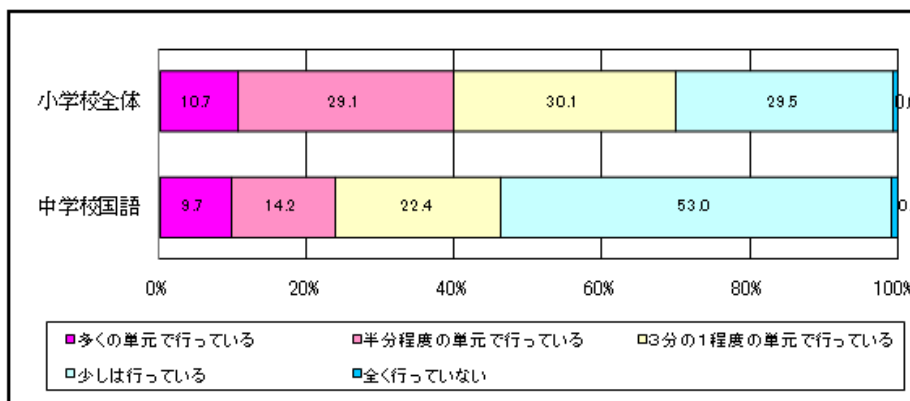
(17)国語で、自分の考えや意見を表現する言語活動を取り入れた指導を意識的に行っていますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 国語
多くの単元で行っている	48.6	36.8
半分程度の単元で行っている	29.9	21.3
3分の1程度の単元で行っている	16.1	25.7
少しは行っている	5.5	16.2
全く行っていない	0.0	0.0



(18)国語で、図書の多読につながるような授業を行っていますか。

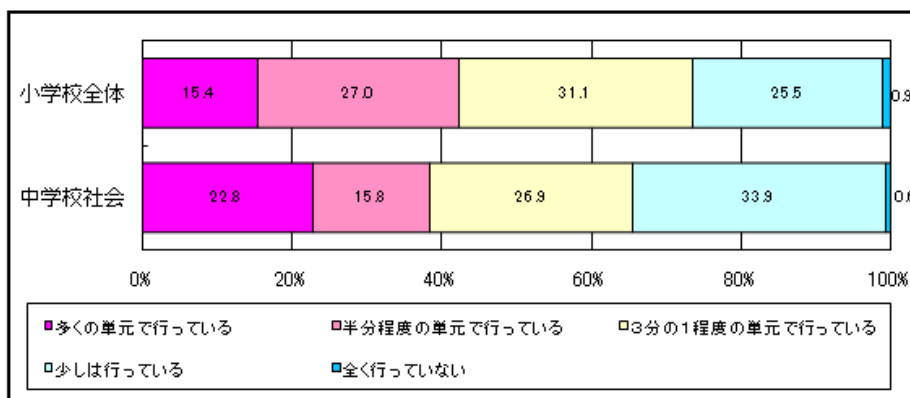
	小学校 全体	中学校 国語
多くの単元で行っている	10.7	9.7
半分程度の単元で行っている	29.1	14.2
3分の1程度の単元で行っている	30.1	22.4
少しは行っている	29.5	53.0
全く行っていない	0.6	0.7



(19)社会で、児童が資料などから読み取ったことをまとめて、発表するような活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(19)社会で、生徒が資料などから読み取ったことをまとめて、発表するような活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

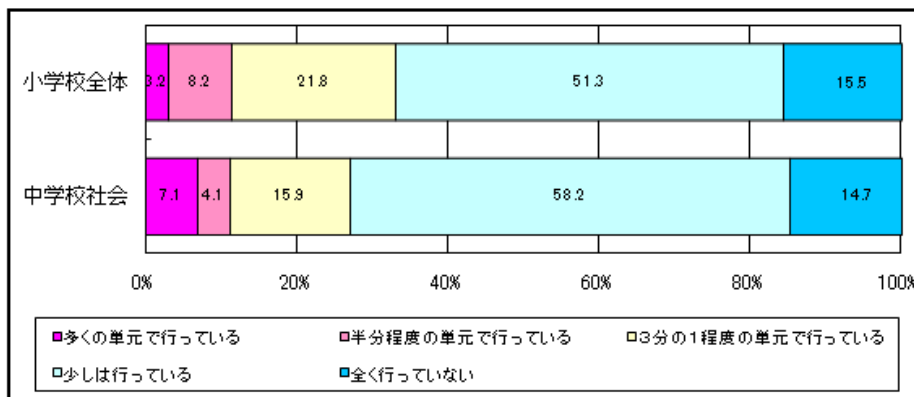
	小学校 全体	中学校 社会
多くの単元で行っている	15.4	22.8
半分程度の単元で行っている	27.0	15.8
3分の1程度の単元で行っている	31.1	26.9
少しは行っている	25.5	33.9
全く行っていない	0.9	0.6



(20) 社会で、児童が資料などから読み取ったことをまとめて、討論するような活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(20) 社会で、生徒が資料などから読み取ったことをまとめて、討論するような活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

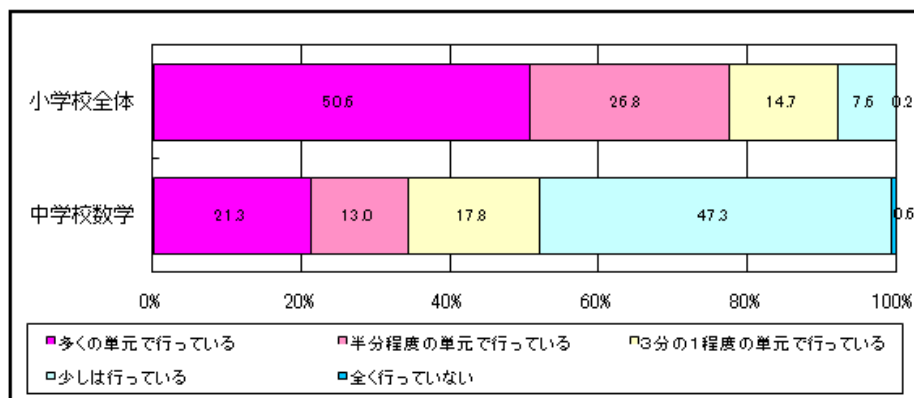
	小学校 全体	中学校 社会
多くの単元で行っている	3.2	7.1
半分程度の単元で行っている	8.2	4.1
3分の1程度の単元で行っている	21.8	15.9
少しは行っている	51.3	58.2
全く行っていない	15.5	14.7



(21) 算数で、算数的活動を通して課題を解決する授業を行っていますか。(小学校)

(21) 数学で、算数的活動を通して課題を解決する授業を行っていますか。(中学校)

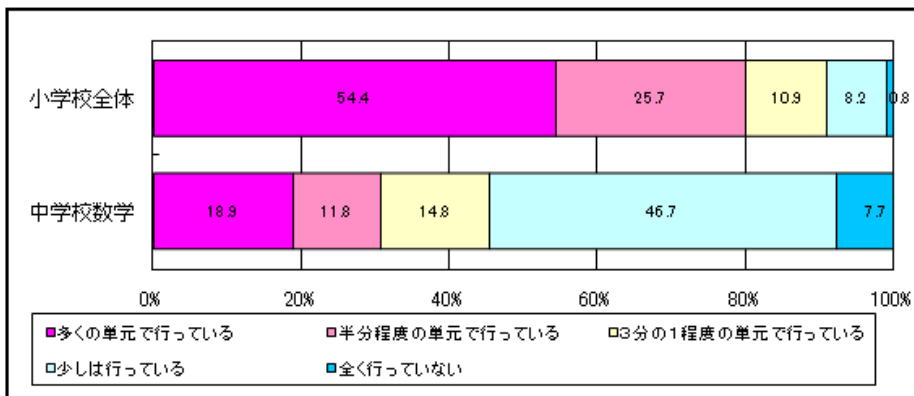
	小学校 全体	中学校 数学
多くの単元で行っている	50.6	21.3
半分程度の単元で行っている	26.8	13.0
3分の1程度の単元で行っている	14.7	17.8
少しは行っている	7.6	47.3
全く行っていない	0.2	0.6



(22) 算数で、算数的活動を通して課題を解決する授業を行っていますか。(小学校)

(22) 数学で、生徒が問題について自分なりに考え、それを出し合って問題を解決していくような活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

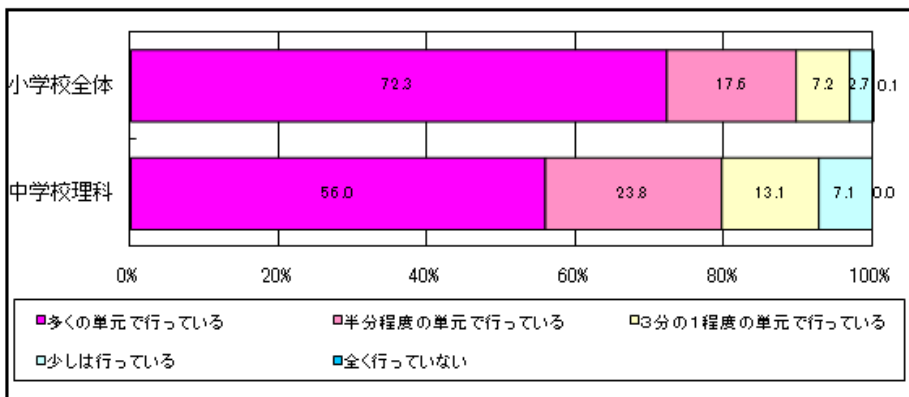
	小学校 全体	中学校 数学
多くの単元で行っている	54.4	18.9
半分程度の単元で行っている	25.7	11.8
3分の1程度の単元で行っている	10.9	14.8
少しは行っている	8.2	46.7
全く行っていない	0.8	7.7



(23)理科で、児童がどのような結果が予想されるかの見直しをもち、観察や実験をするような授業を行っていますか。(小学校)

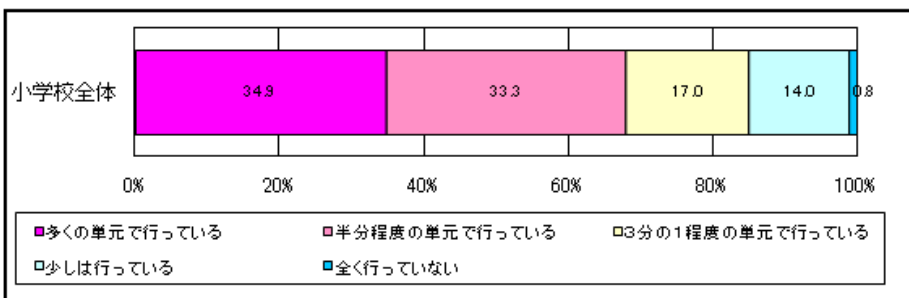
(23)理科で、生徒がどのような結果が予想されるかの見直しをもち、観察や実験をするような授業を行っていますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 理科
多くの単元で行っている	72.3	56.0
半分程度の単元で行っている	17.6	23.8
3分の1程度の単元で行っている	7.2	13.1
少しは行っている	2.7	7.1
全く行っていない	0.1	0.0



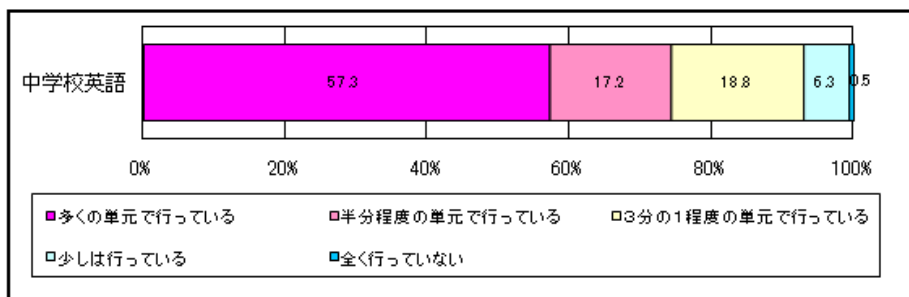
(24)理科で、実験結果やまとめの発表において、児童がお互いにいろいろな考えを話し合い、検討し合うような授業を行っていますか。(小学校)

	小学校 全体
多くの単元で行っている	34.9
半分程度の単元で行っている	33.3
3分の1程度の単元で行っている	17.0
少しは行っている	14.0
全く行っていない	0.8



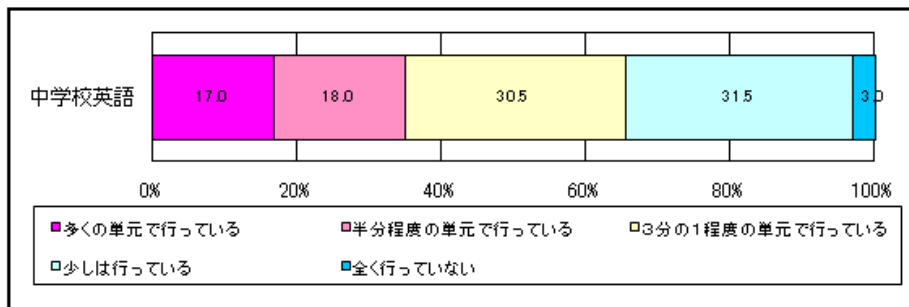
(24)英語で、聞く・話す活動を通して、生徒のコミュニケーション能力を高めるような授業を行っていますか。(中学校)

	中学校 英語
多くの単元で行っている	57.3
半分程度の単元で行っている	17.2
3分の1程度の単元で行っている	18.8
少しは行っている	6.3
全く行っていない	0.5



(25)英語で、生徒が英語を使って日記を書いたり、作文を書いたりするような活動を入れた授業を行っていますか。(中学校)

	中学校 英語
多くの単元で行っている	17.0
半分程度の単元で行っている	18.0
3分の1程度の単元で行っている	30.5
少しは行っている	31.5
全く行っていない	3.0

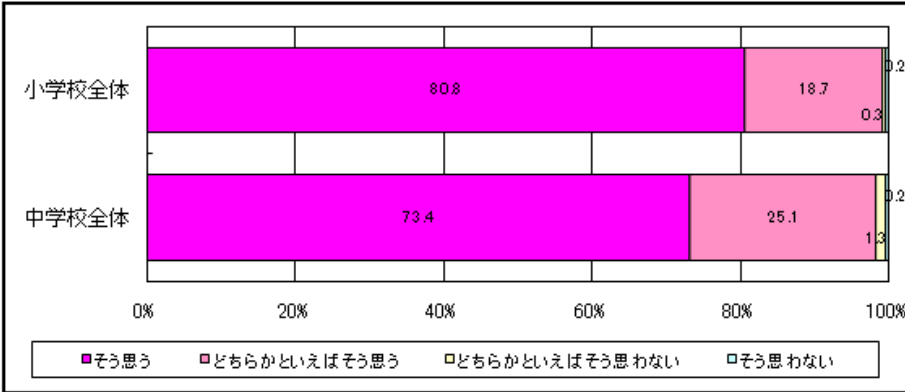


教師の指導観

(25) 教師は、児童ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか。(小学校)

(26) 教師は、生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか。(中学校)

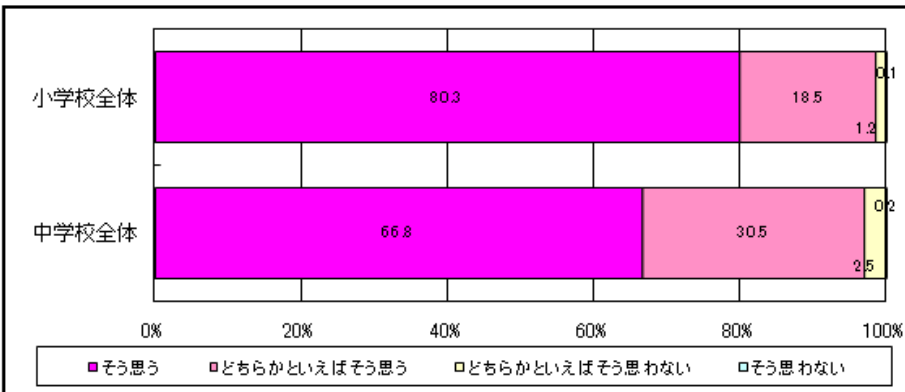
	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	80.8	73.4
どちらかといえばそう思う	18.7	25.1
どちらかといえばそう思わない	0.3	1.3
そう思わない	0.2	0.2



(26) 教師は、児童が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか。(小学校)

(27) 教師は、生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか。(中学校)

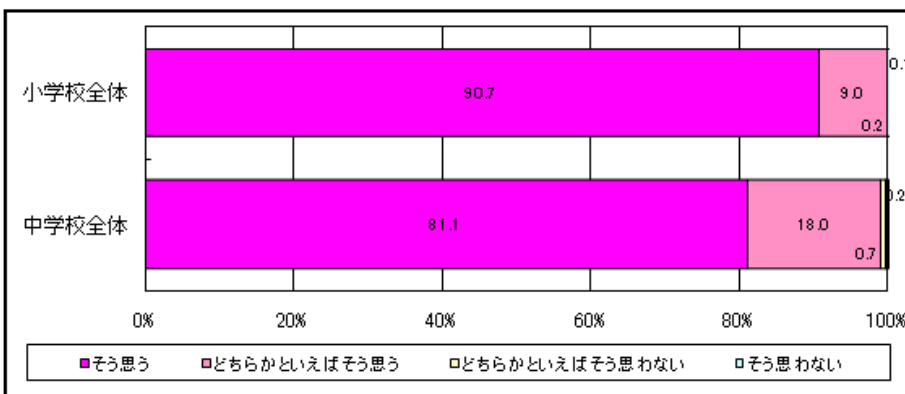
	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	80.3	66.8
どちらかといえばそう思う	18.5	30.5
どちらかといえばそう思わない	1.2	2.5
そう思わない	0.1	0.2



(27) 教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。(小学校)

(28) 教師は、勉強のことで生徒がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。(中学校)

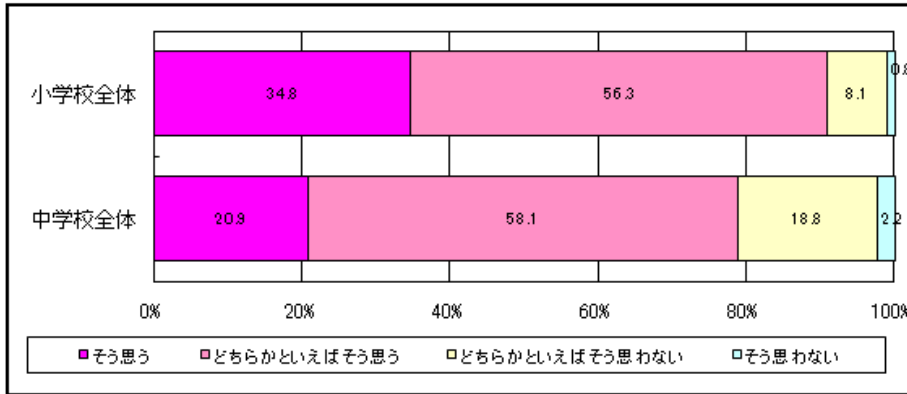
	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	90.7	81.1
どちらかといえばそう思う	9.0	18.0
どちらかといえばそう思わない	0.2	0.7
そう思わない	0.1	0.2



(28) 教師は、学級で何か問題が起こった時、常に児童に意見を求めるべきだと思いますか。(小学校)

(29) 教師は、学級で何か問題が起こった時、常に生徒に意見を求めるべきだと思いますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	34.8	20.9
どちらかといえばそう思う	56.3	58.1
どちらかといえばそう思わない	8.1	18.8
そう思わない	0.8	2.2

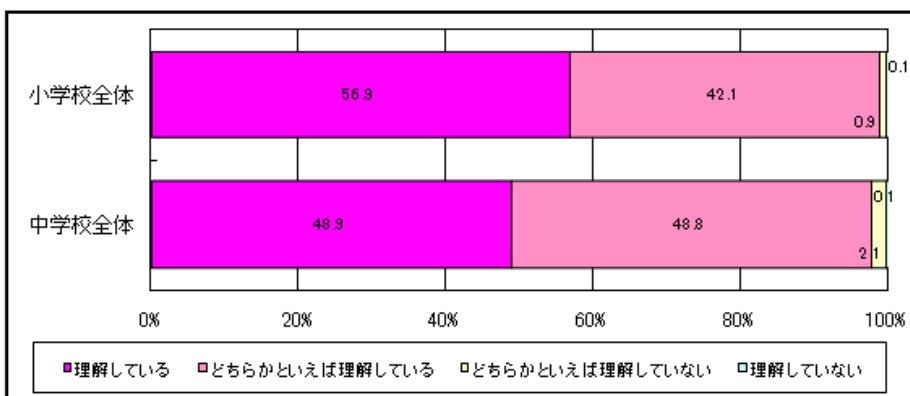


学校組織マネジメントに対する意識

(29)あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか。(小学校)

(30)あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか。(中学校)

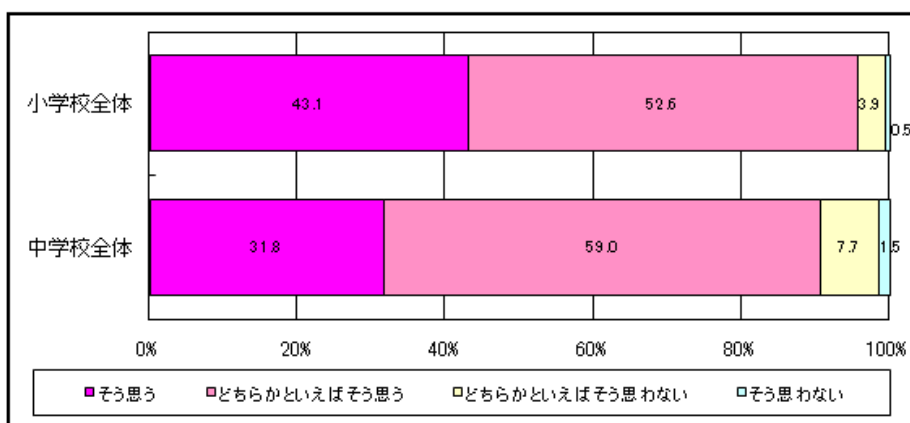
	小学校 全体	中学校 全体
理解している	56.9	48.9
どちらかといえば理解している	42.1	48.8
どちらかといえば理解していない	0.9	2.1
理解していない	0.1	0.1



(30)あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか。(小学校)

(31)あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか。(中学校)

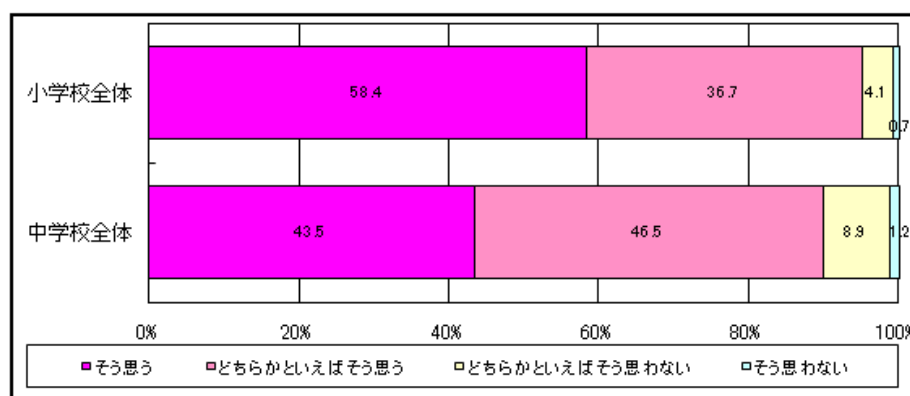
	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	43.1	31.8
どちらかといえばそう思う	52.6	59.0
どちらかといえばそう思わない	3.9	7.7
そう思わない	0.5	1.5



(31)あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか。(小学校)

(32)あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	58.4	43.5
どちらかといえばそう思う	36.7	46.5
どちらかといえばそう思わない	4.1	8.9
そう思わない	0.7	1.2

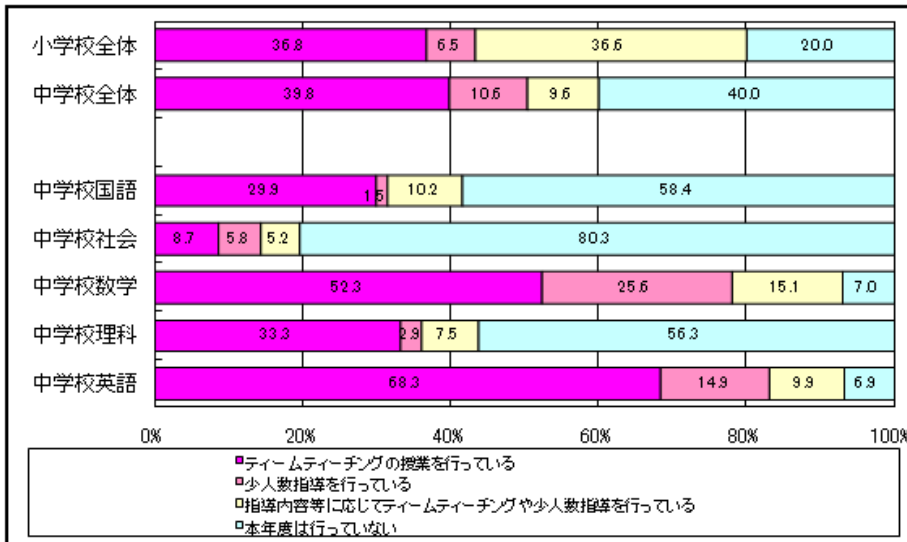


TT・少人数指導の成果と課題

(32)あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか。(小学校)

(33)あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか。(中学校)

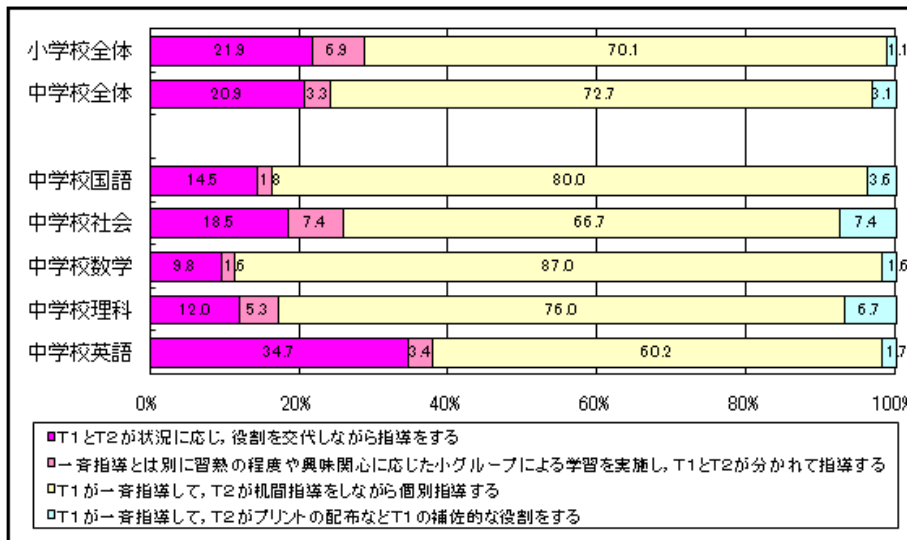
	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
チームティーチングの授業を行っている	36.8	39.8	29.9	8.7	52.3	33.3	68.3
少人数指導を行っている	6.5	10.6	1.5	5.8	25.6	2.9	14.9
指導内容等に応じてチームティーチングや少人数指導を行っている	36.6	9.6	10.2	5.2	15.1	7.5	9.9
本年度は行っていない	20.0	40.0	58.4	80.3	7.0	56.3	6.9



(33)チームティーチングの指導で役割分担をどのようにして指導することが多いですか。(小学校)

(34)チームティーチングの指導で役割分担をどのようにして指導することが多いですか。(中学校)

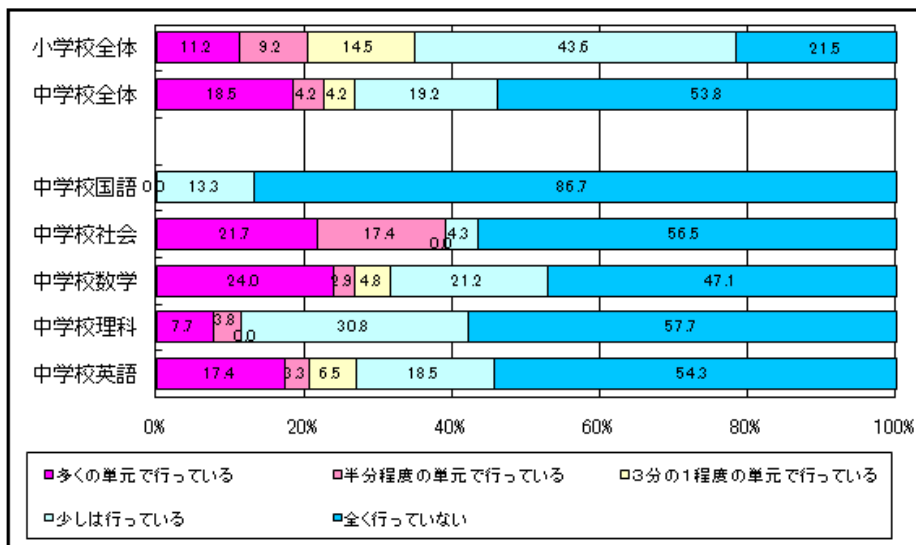
	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
T1とT2が状況に応じ、役割を交代しながら指導をする	21.9	20.9	14.5	18.5	9.8	12.0	34.7
一斉指導とは別に習熟の程度や興味関心に応じた小グループによる学習を実施し、T1とT2が分かれて指導する	6.9	3.3	1.8	7.4	1.6	5.3	3.4
T1が一斉指導して、T2が机間指導をしながら個別指導する	70.1	72.7	80.0	66.7	87.0	76.0	60.2
T1が一斉指導して、T2がプリントの配布などT1の補佐的な役割をする	1.1	3.1	3.6	7.4	1.6	6.7	1.7



(34) 少人数指導の中で、習熟の程度に応じて学習グループを編成した授業を行っていますか。(小学校)

(35) 少人数指導の中で、習熟の程度に応じて学習グループを編成した授業を行っていますか。(中学校)

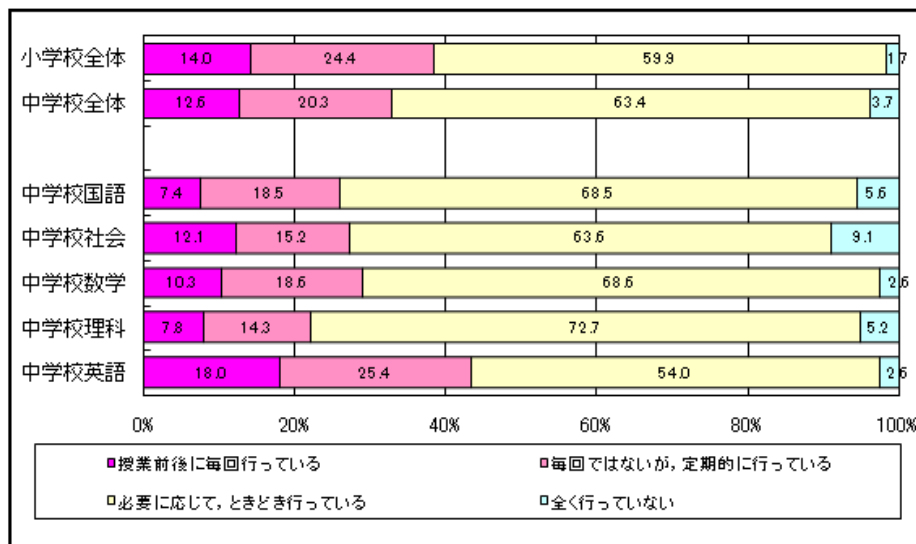
	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの単元で行っている	11.2	18.5	0.0	21.7	24.0	7.7	17.4
半分程度の単元で行っている	9.2	4.2	0.0	17.4	2.9	3.8	3.3
3分の1程度の単元で行っている	14.5	4.2	0.0	0.0	4.8	0.0	6.5
少しは行っている	43.6	19.2	13.3	4.3	21.2	30.8	18.5
全く行っていない	21.5	53.8	86.7	56.5	47.1	57.7	54.3



(35) ティームティーチングや少人数指導の指導方法等については、打ち合わせや見直しを行っていますか。(小学校)

(36) ティームティーチングや少人数指導の指導方法等については、打ち合わせや見直しを行っていますか。(中学校)

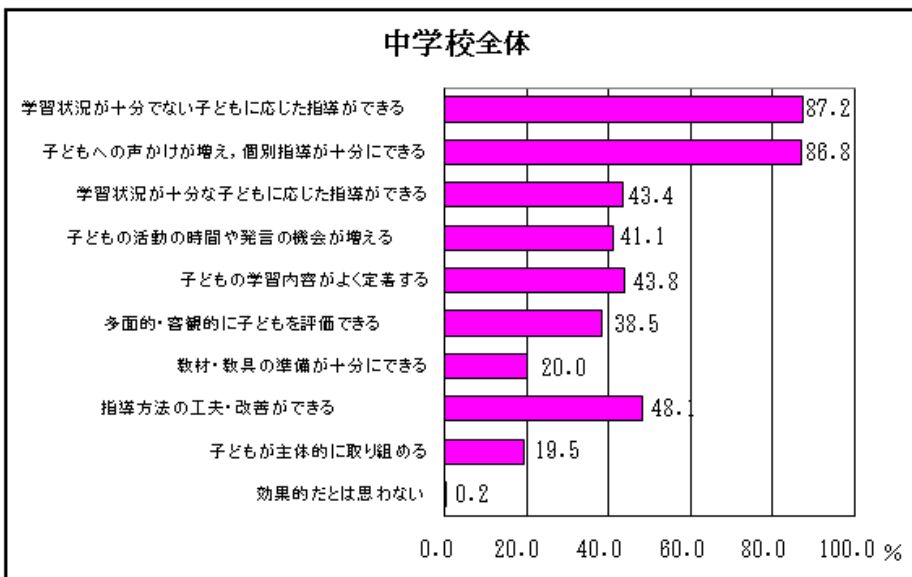
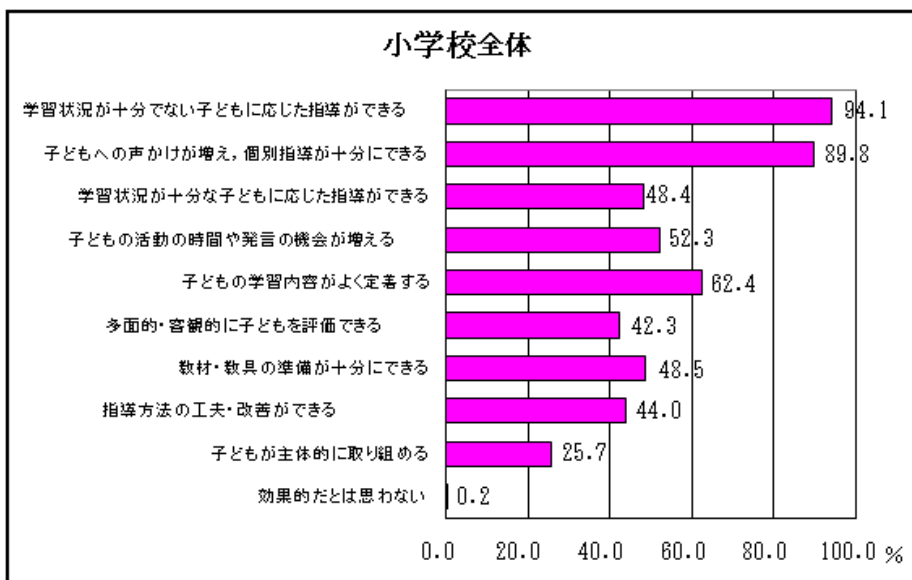
	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
授業前後に毎回行っている	14.0	12.6	7.4	12.1	10.3	7.8	18.0
毎回ではないが、定期的に行っている	24.4	20.3	18.5	15.2	18.6	14.3	25.4
必要に応じて、ときどき行っている	59.9	63.4	68.5	63.6	68.6	72.7	54.0
全く行っていない	1.7	3.7	5.6	9.1	2.6	5.2	2.6

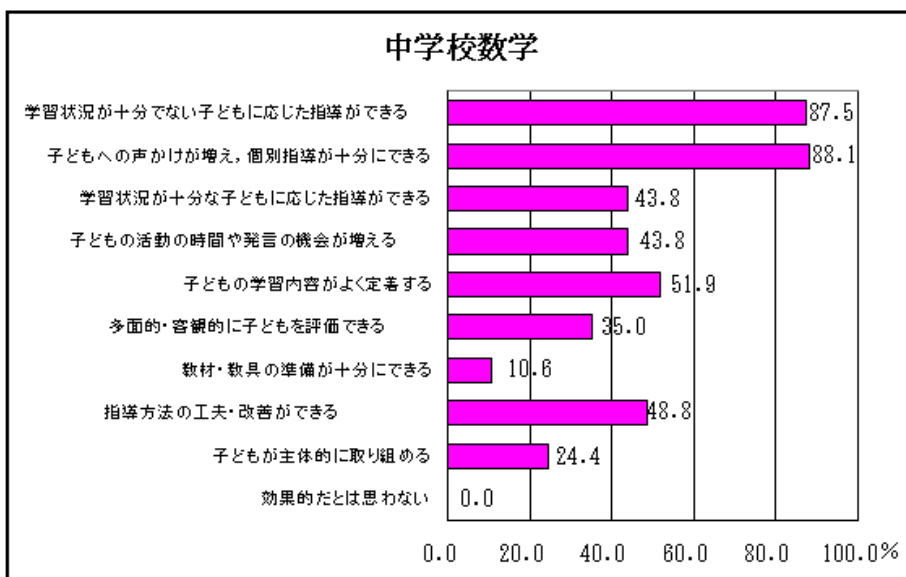
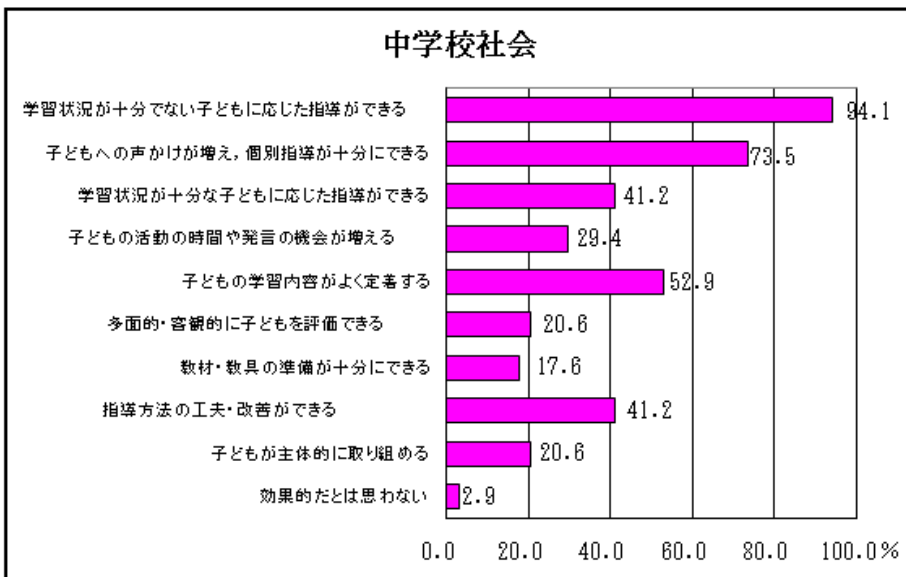
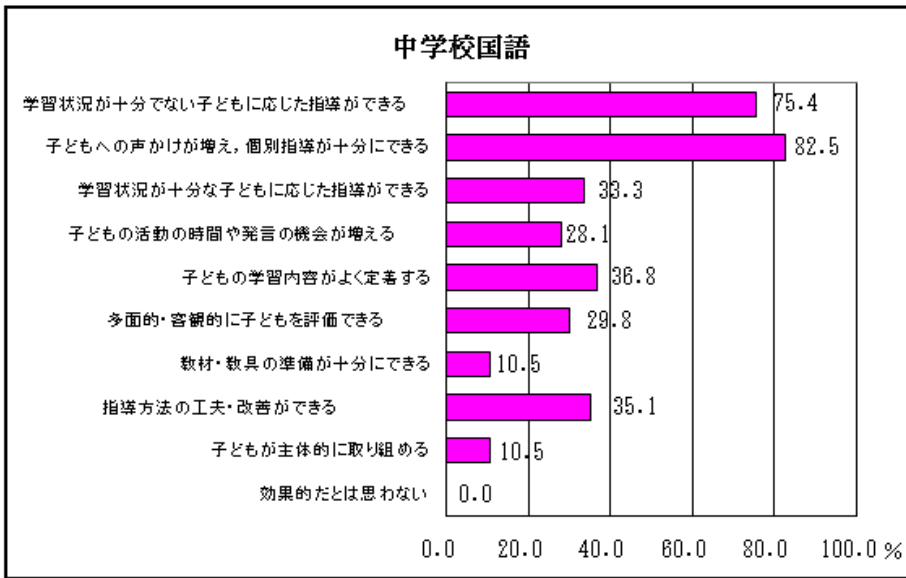


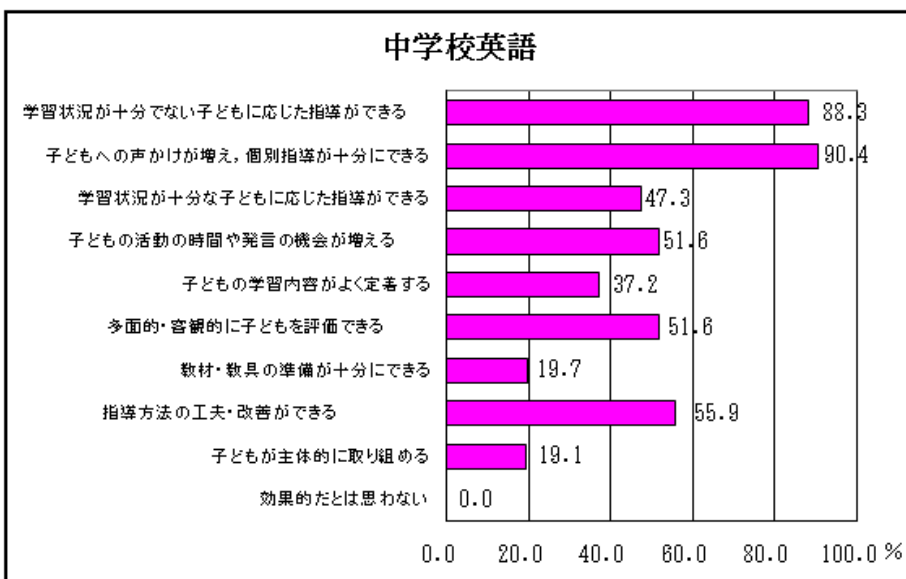
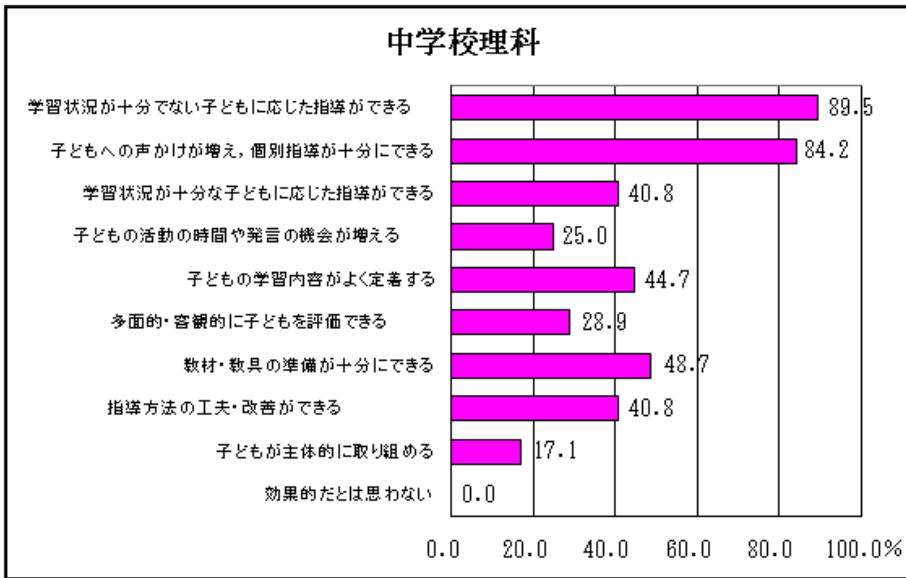
(36)現在、あなたがやっているティームティーチングや少人数指導はどのような点で効果的だと思いますか。(小学校)※複数回答可

(37)現在、あなたがやっているティームティーチングや少人数指導はどのような点で効果的だと思いますか。(中学校)※複数回答可

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる	94.1	87.2	75.4	94.1	87.5	89.5	88.3
子どもへの声かけが増え、個別指導が十分にできる	89.8	86.8	82.5	73.5	88.1	84.2	90.4
学習状況が十分な子どもに応じた指導ができる	48.4	43.4	33.3	41.2	43.8	40.8	47.3
子どもの活動の時間や発言の機会が増える	52.3	41.1	28.1	29.4	43.8	25.0	51.6
子どもの学習内容がよく定着する	62.4	43.8	36.8	52.9	51.9	44.7	37.2
多面的・客観的に子どもを評価できる	42.3	38.5	29.8	20.6	35.0	28.9	51.6
教材・教具の準備が十分にできる	48.5	20.0	10.5	17.6	10.6	48.7	19.7
指導方法の工夫・改善ができる	44.0	48.1	35.1	41.2	48.8	40.8	55.9
子どもが主体的に取り組める	25.7	19.5	10.5	20.6	24.4	17.1	19.1
効果的だとは思わない	0.2	0.2	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0

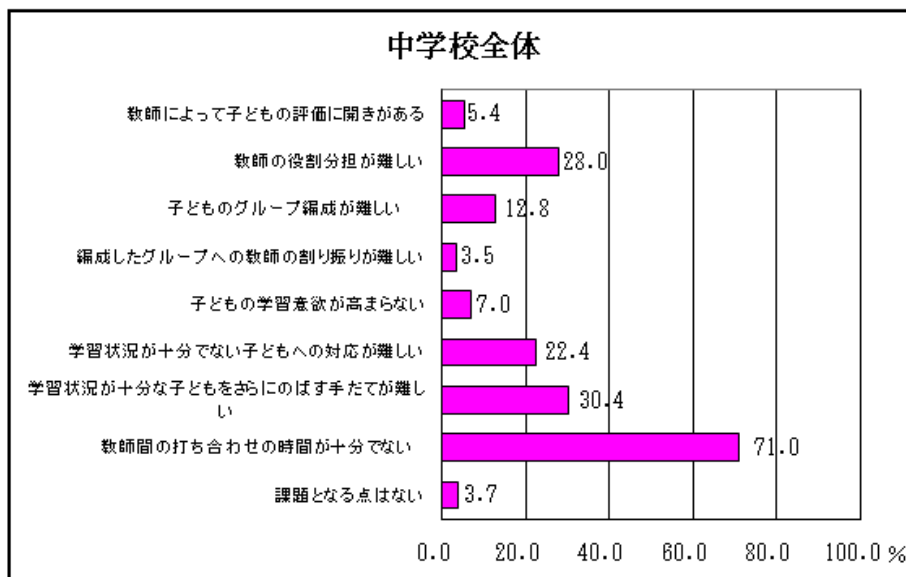
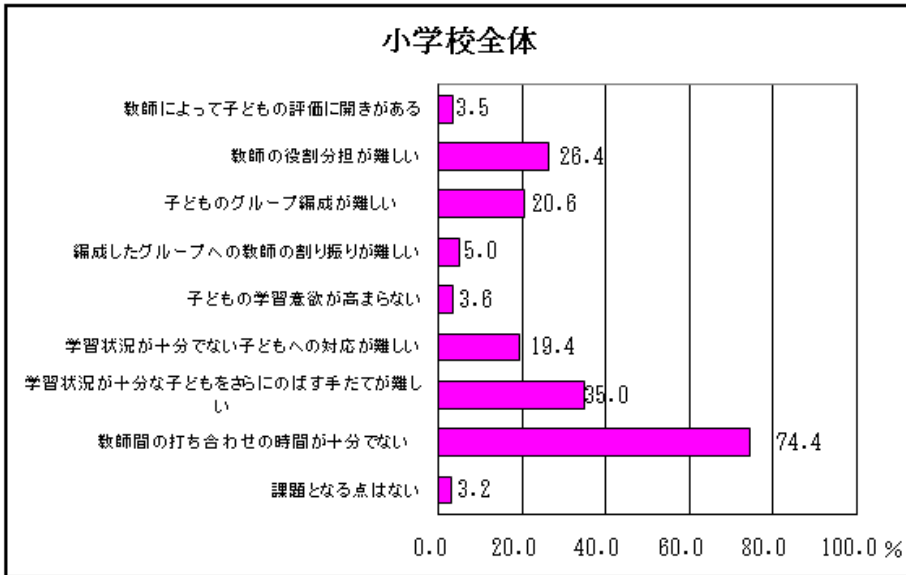


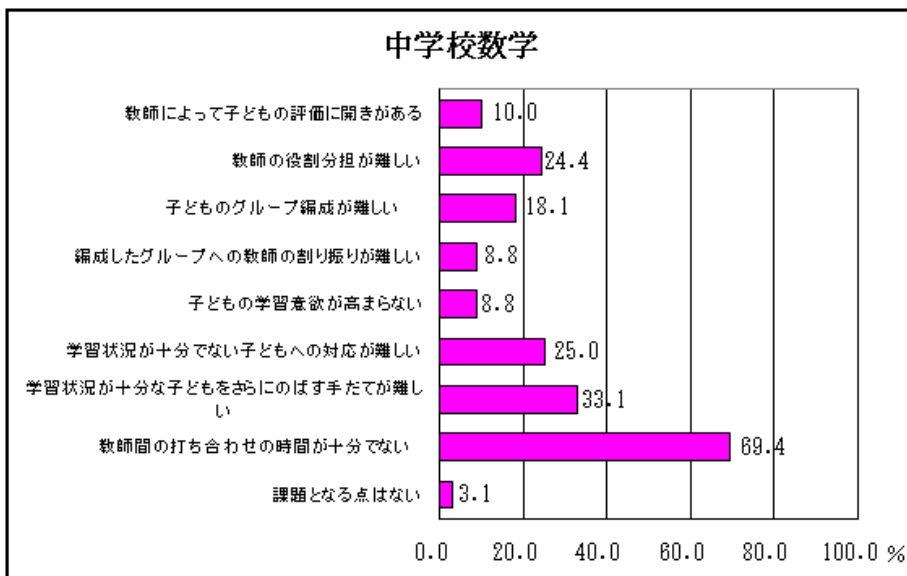
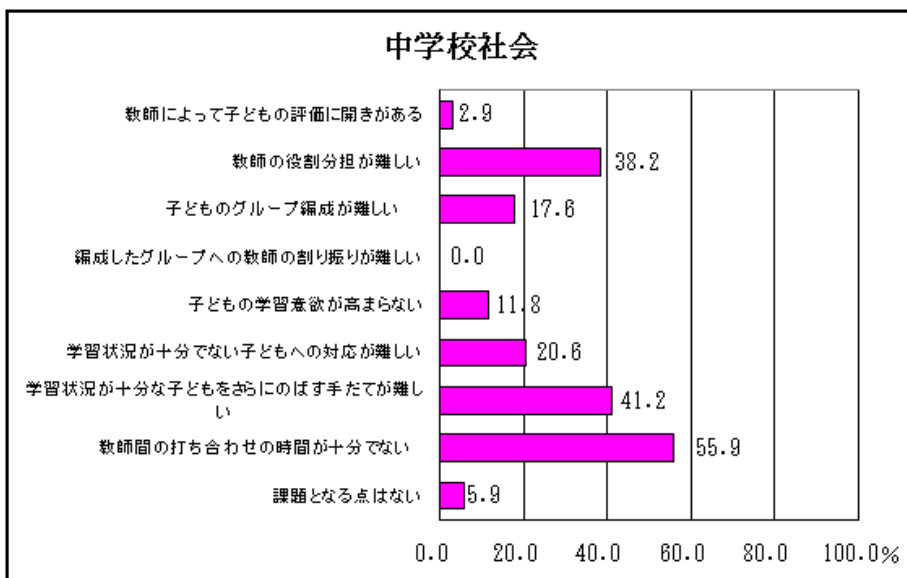
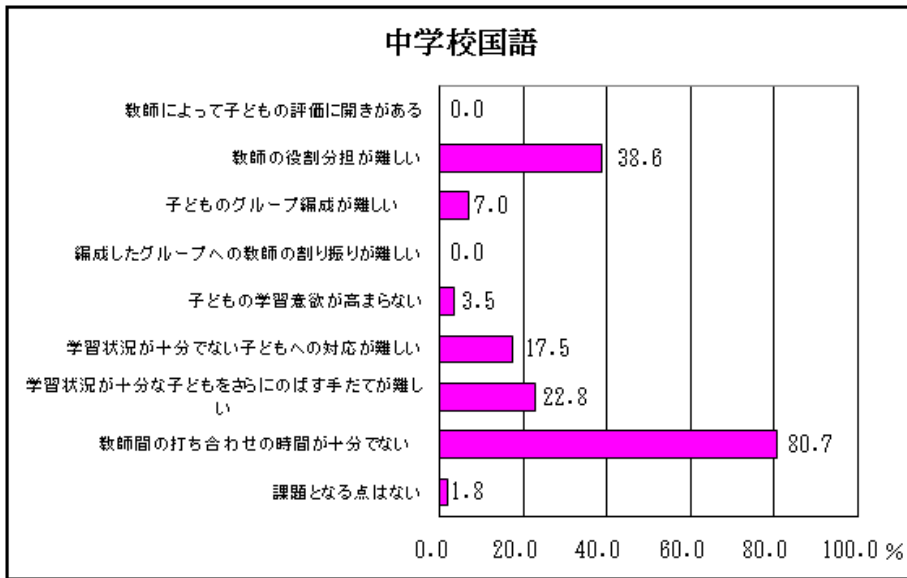


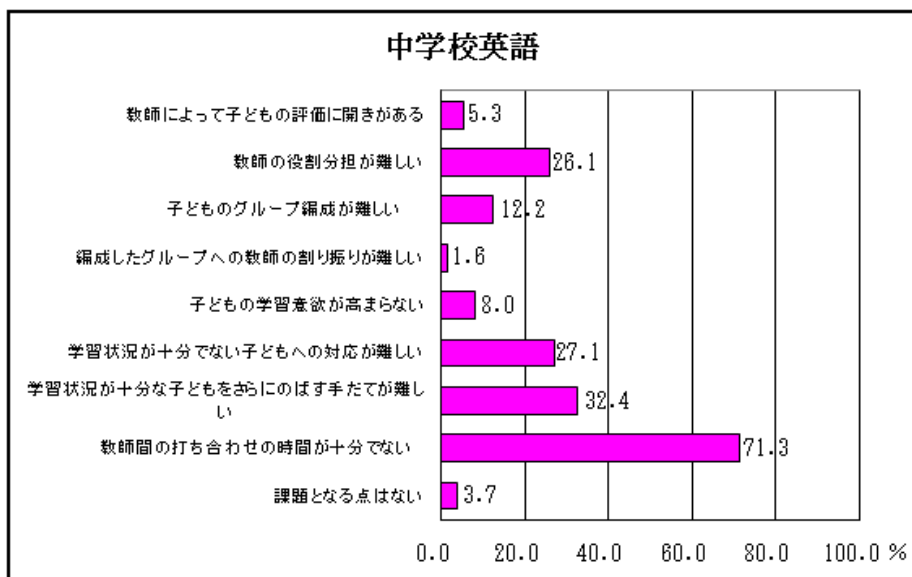
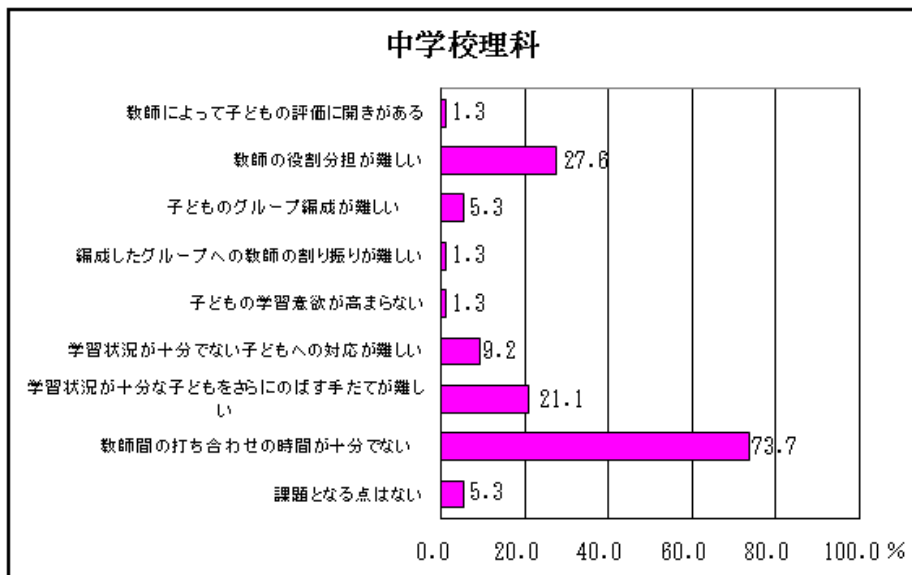


(37) 現在、あなたがやっているチームティーチングや少人数指導はどのような点が課題だと思いますか。(小学校)※複数回答可
 (38) 現在、あなたがやっているチームティーチングや少人数指導はどのような点が課題だと思いますか。(中学校)※複数回答可

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
教師によって子どもの評価に開きがある	3.5	5.4	0.0	2.9	10.0	1.3	5.3
教師の役割分担が難しい	26.4	28.0	38.6	38.2	24.4	27.6	26.1
子どものグループ編成が難しい	20.6	12.8	7.0	17.6	18.1	5.3	12.2
編成したグループへの教師の割り振りが難しい	5.0	3.5	0.0	0.0	8.8	1.3	1.6
子どもの学習意欲が高まらない	3.6	7.0	3.5	11.8	8.8	1.3	8.0
学習状況が十分でない子どもへの対応が難しい	19.4	22.4	17.5	20.6	25.0	9.2	27.1
学習状況が十分な子どもをさらにのばす手だてが難しい	35.0	30.4	22.8	41.2	33.1	21.1	32.4
教師間の打ち合わせの時間が十分でない	74.4	71.0	80.7	55.9	69.4	73.7	71.3
課題となる点はない	3.2	3.7	1.8	5.9	3.1	5.3	3.7







最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>Ⅲ 各教科の調査結果の分析>小学校国語

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

小学校国語

日常生活で生かせる言語活動を意識した指導

ほとんどの評価の観点、内容・領域において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、中学1年生の「言語についての知識・理解・技能」の観点においては、評価の観点、内容・領域ともに「十分達成」の基準を上回る結果となった。しかし、小学5年生の「言語事項」(語句に関する知識)の内容・領域においては、内容・領域別正答率で「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。中学1年生の結果が平成21年度よりもよくなっていることから、小学校において漢字やローマ字、慣用句など知識の定着が図られていると考えられるが、小学5年生では向上が見られていないので、今後も継続した指導が必要である。また、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」についても、「十分達成」を目指し、日常生活で生かせる言語活動を意識した国語科の指導を行っていく必要がある。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

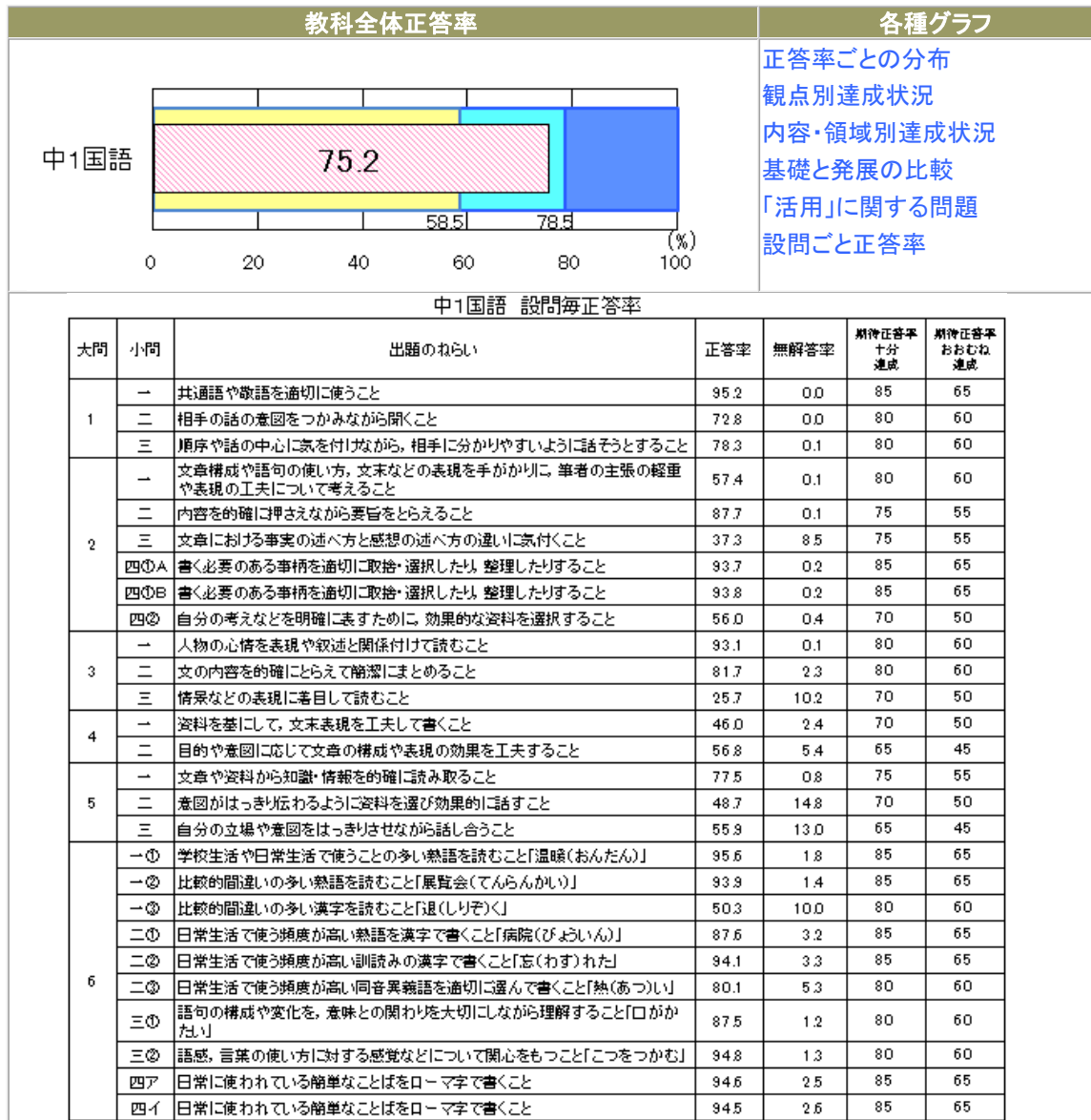
- 国語への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし。
- 話す・聞く能力 → 「話す・聞く」
- 書く能力 → 「書く」
- 読む能力 → 「読む」
- 言語についての知識・理解・技能 → 「知識・理解・技能」

ア 結果の概要

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





小学5年生、中学1年生ともに、「おおむね達成」の基準を上回っている。特に、中学1年生では、「十分達成」の基準とほぼ同程度の正答率で、国語科の指導法の改善が図られていることが分かる。

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

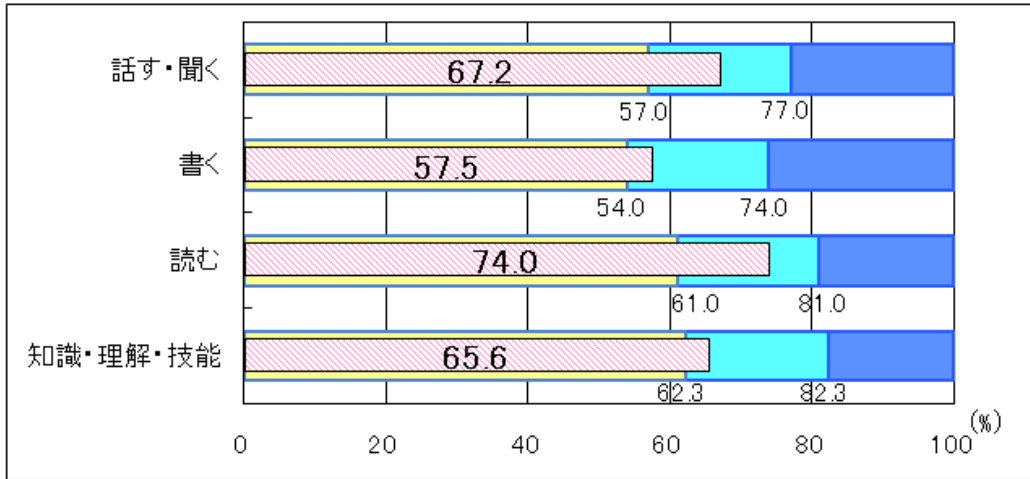


図1 H22年度（小学5年生国語）評価の観点別正答率

「読むこと」に関しては、「おおむね達成」の基準を大きく上回っており、良好な結果であった。叙述に即して的確に読む指導が丁寧に行われている効果が表れていると思われる。また、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「言語についての知識・理解・技能」については、「おおむね達成」の基準を上回っており、中学年までの各観点ごとの指導効果が表れていると考えられる。

しかし、「書くこと」や「言語についての知識・理解・技能」については、「おおむね達成」の基準をわずかに上回るにとどまっている。「書くこと」では、自分の考えが明確になるように書いたり、情報をとらえ目的に応じて書いたりすること、「言語についての知識・理解・技能」では、単語をローマ字で正しく書き表すこと等の定着がまだ十分でないことが考えられる。

②中学1年生

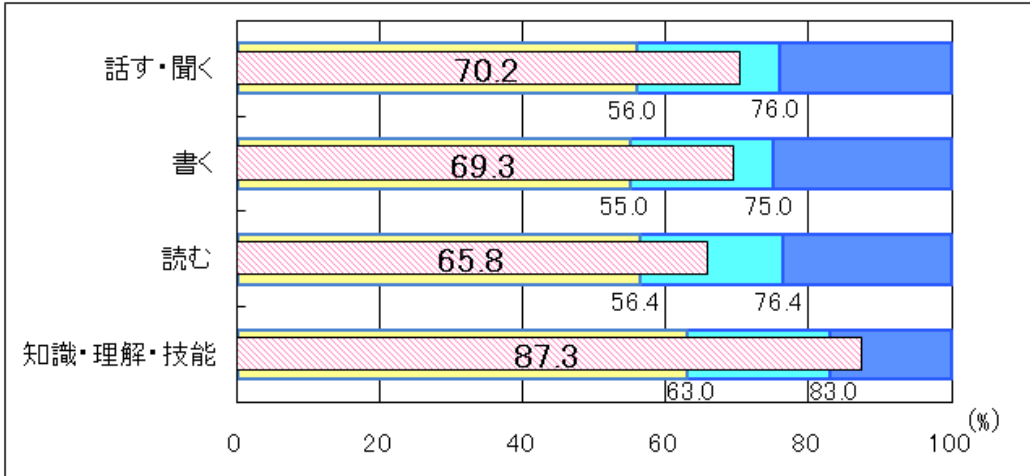


図2 H22年度（中学1年生国語）評価の観点別正答率

「言語についての知識・理解・技能」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。漢字の読み書きの指導や語句のきまりの指導が、小学校の6年間で継続して行われている成果が表れていると思われる。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」については、「おおむね達成」の基準を上回っており、小学校高学年までの各観点ごとの指導の効果が表れていると考えられる。

しかし、「読むこと」においては、説明的な文章における筆者の表現の工夫や文学的な文章における情景描写の読み取りで、特に課題が見られた。

(ウ) 内容・領域別正答率

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」については、評価の観点の項目と同じであるため、言語事項「漢字の読み」「漢字の書き」「語句に関する知識」について、学年ごとに分析する。

小学5年生と中学1年生の言語事項

①小学5年生

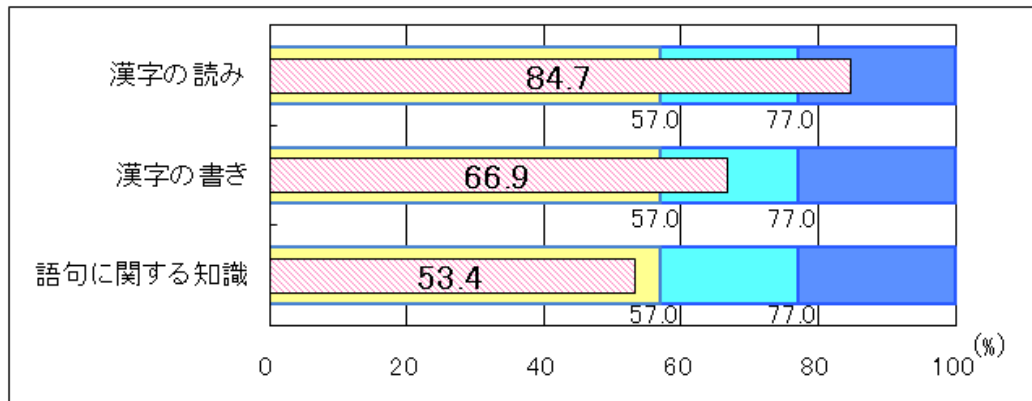


図3 H22年度（小学5年生国語）言語事項の内容・領域別正答率

「漢字の読み」については、「十分達成」の基準を上回り、日常生活でよく使う熟語や送り仮名のある漢字の文字を正しく読むことができていることが分かる。

「漢字の書き」については、「おおむね達成」の基準を上回っており、特に、日常生活でよく使う熟語や送り仮名のある漢字の表記は正答率が高いが、「消費」(しょうひ)の正答率が低かった。

「語句に関する知識」については、「おおむね達成」の基準を下回る結果となった。特に、ローマ字の表記が正しくできていないことから、ローマ字で表記させる場面を意図的に取り入れ使わせるような指導が必要であると思われる。

②中学1年生

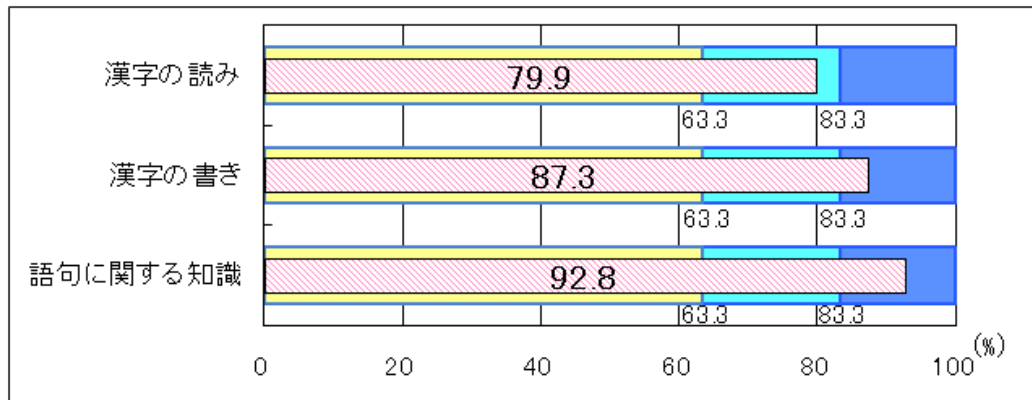


図4 H22年度（中学1年生国語）言語事項の内容・領域別正答率

「漢字の読み」については、「おおむね達成」の基準を上回り、日常生活でよく使う熟語や送り仮名のある漢字の文字を正しく読むことができていることが分かる。

「漢字の書き」については、「十分達成」の基準を上回っており、日常生活でよく使う熟語や送り仮名のある漢字の文字の表記ができていることが分かる。

「語句に関する知識」についても、「十分達成」の基準を上回る結果となった。

(エ) 到達度分布(小学5年生「書くこと」及び「読むこと」)

小学5年生の調査結果を見ると、他の領域に比べて「書くこと」の正答率が低い傾向にある。具体的な設問をみると、テキストに書かれたことを読み、情報を取り出して理解したことやテキストに基づいて自分の意見を書くというような問題での誤答や無解答が多い。テキストの内容を読んで理解した上で書く設問内容の重要性からも、ここでは、「書くこと」と「読むこと」の二つの領域を児童の到達度分布から見て、その関連性から誤答や無解答が多かった要因を分析する。

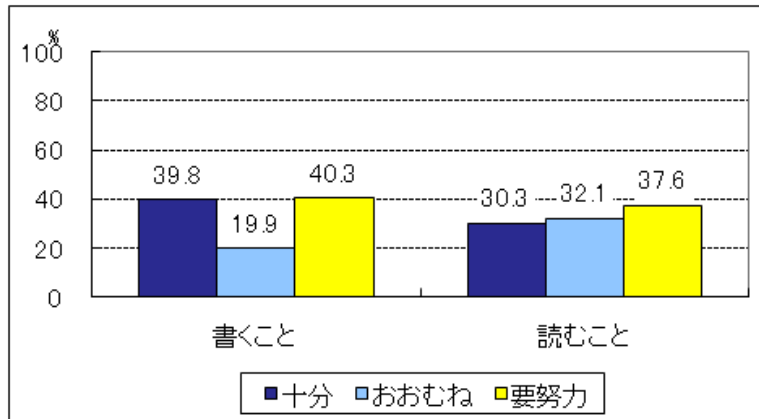


図5 小学5年生「書くこと」「読むこと」の到達度分布

①「書くこと」

正答率では、「おおむね達成」の基準を上回ったものの、「十分達成」と「要努力」の児童がほぼ同程度であることが分かる。自分の考えを書くことができている児童が約4割いる反面、書くことに抵抗を感じている児童も4割いる。また、無解答率も他の領域と比較するとかなり高くなっている。このことから、考えを書ける児童は抵抗なく書けているが、書くことが苦手な児童は全く書けないでいると思われる。

②「読むこと」

正答率では、「おおむね達成」の基準を大きく上回ったものの、「十分達成」の児童よりも「要努力」の児童が多いことが分かる。約4割の児童が「おおむね達成」の基準まで到達していない状況であり、課題である。問題として提示された文章の内容を理解できていない児童がかなり存在することが分かる。また、「十分達成」の基準に到達している児童は3割しかおらず、提示された文章を理解して問題を解いている児童が少ないことが分かる。

③「書くこと」と「読むこと」から見られる課題

共通して言える課題としては、「要努力」の児童の割合が約4割いるということである。文章を正確に理解できていない、情報の取り出しができないなど、読む能力が身に付いていない児童は、それらに基づいて自分の考え等を書くこともできていないと思われる。書くためには、何についてどのように書けばよいか等の内容理解が必要である。

イ 経年比較

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

ここでは、次の2つについての経年比較を行うこととする。

1点目は、同一児童生徒について平成20年度の小学5年生と平成22年度の中学1年生の結果を経年比較する。同じ児童・生徒を追って学習状況を比較することにより、学習内容の定着を見ていく。なお、ここでは「言語事項」と「読むこと」についての分析を行う。

2点目は、同一学年児童生徒について平成21年度と平成22年度の中学1年生と、平成21年度と平成22年度の小学5年生の結果を経年比較する。このことにより、指導法改善の効果や課題を見ていく。ここでは、まず、今回の調査で課題が見られた中学1年生の「読むこと」領域において、指導法改善の効果と課題を分析していく。さらに、小学校での指導法改善の効果を詳しく見ていくために、平成21年度と平成22年度の小学5年生について、ここ数年間の課題である「書くこと」「読むこと」を、到達度分布等を用いて分析を行う。

(ア) 同一児童生徒の経年比較

① 「言語事項」の経年比較 H22中学1年生とH20小学5年生(同一児童・生徒)

図6、図7、図8、は、中学1年生の「言語事項」について平成20年度の同一児童と比較したグラフである。

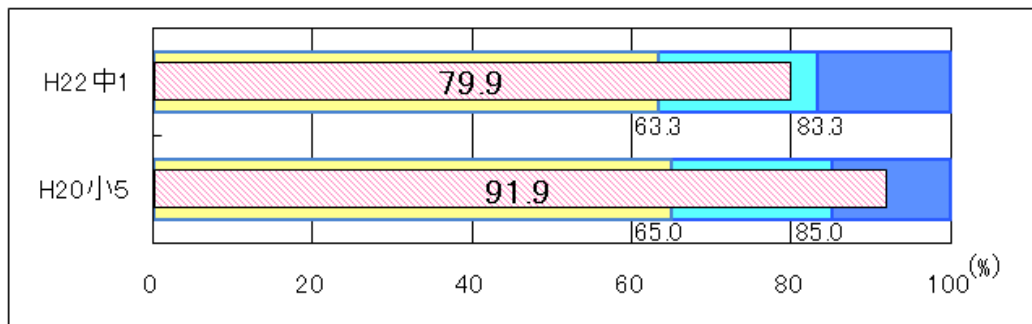


図6 H20年度(小学5年生国語)、H22年度(中学1年生国語)「言語事項(漢字の読み)」正答率の経年比較

「漢字の読み」の正答率は、平成20年度は「十分達成」の到達基準85.0に対して6.9ポイント上回っていた。平成22年度は「おおむね達成」の到達基準63.3に対しては16.6ポイント上回っていたが、平成20年度と比べると12.0ポイント下回っていた。

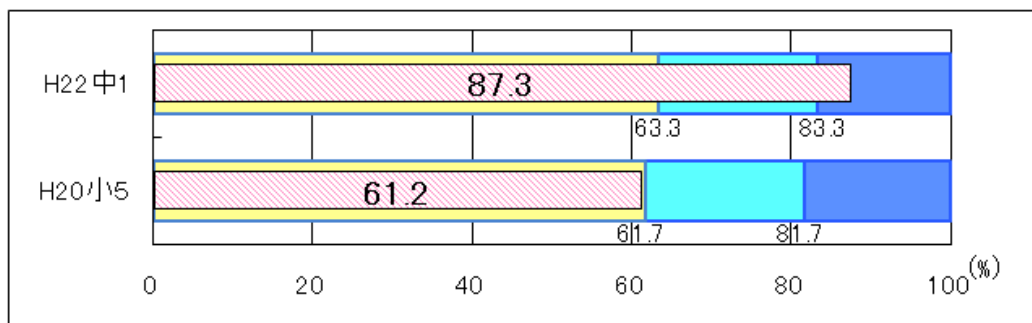


図7 H20年度(小学5年生国語)、H22年度(中学1年生国語)「言語事項(漢字の書き)」正答率の経年比較

「漢字の書き」の正答率は、平成20年度は「おおむね達成」の到達基準61.7に対して0.5ポイント下回っていた。平成22年度は「十分達成」の到達基準83.3に対して4.0ポイント上回っていた。

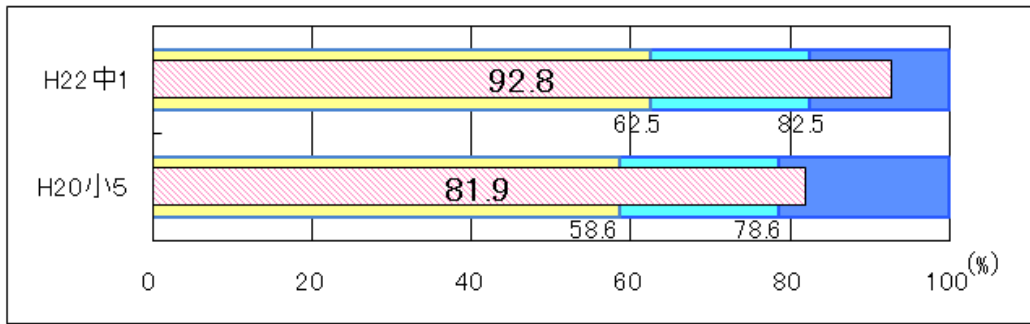


図8 H20年度(小学5年生国語)、H22年度(中学1年生国語)「言語事項(語句に関する知識)」正答率の経年比較

「語句に関する知識」の正答率は、平成20年度は「十分達成」の到達基準78.6に対して3.3ポイント上回っていた。平成22年度は「十分達成」の到達基準82.5に対して10.3ポイント上回っていた。

このように、「言語事項」での同一児童・生徒の経年比較から、全体的に良好な結果を保っており、学習内容の定着ができていると思われる。特に、「漢字の書き」や「語句に関する知識」では正答率が向上しており、小学校で学習した漢字や語句の習得ができていると考えられる。しかし、「漢字の読み」については経年で比較しても「おおむね達成」の基準を上回っているものの正答率は下がっているため、高学年で学習する漢字の読みについても漢字の書きと合わせて継続して指導する必要がある。

②「読むこと」領域の経年比較 H22中学1年生とH20小学5年生(同一児童生徒)

図9は、中学1年生の「読むこと」について平成20年度の同一児童と比較したグラフである。

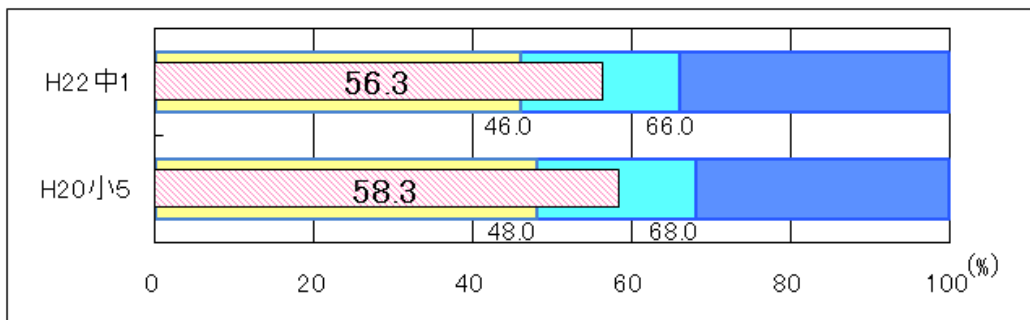


図9 H20年度(小学5年生国語)、H22年度(中学1年生国語)「読むこと」正答率の経年比較

「読むこと」領域については平成20年度は「おおむね達成」を10.3ポイント上回っており、平成22年度も10.3ポイント上回っていた。学年が上がると、正答率は2.0ポイント下がっているものの、「おおむね達成」は10ポイント以上上回ったままであり、良好な状態を保つことができた。このことから、読む文章の分量が増えたり内容が難しくなったりしてきても、しっかりと問題文や提示された文章を読むことができている。しかし、説明的な文章の読解においては、筆者の表現の工夫に着目することに課題が見られた。説明的な文章を読んでいく際、表現方法や構成の仕方に気付かせたり事実と意見との関係をとらえさせたりする活動を取り入れるなどの授業改善をする必要がある。

(イ) 同一学年児童生徒の経年比較

①H21・22年度(中学1年生国語)「読むこと」に関する問題での経年比較

「読むこと」の「情景などの表現に着目すること」を問う問題の結果を平成21年度と22年度の中学1年生(同一学年)で比較することにより、文学的な文章の読み取りの学習での指導法改善が図られているかを見ていく。

表1 H21年度(中学1年生国語)、H22年度(中学1年生国語)「読むこと」に関する問題の比較

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H22 問3三	情景などの表現に着目する。 (短答式)	距離が長いことを表している一文を抜き出す。	25.7	10.2	70.0	50.0
H21 問3四		幸せな気持ちになっていることを表している一文を抜き出す。	17.8	14.4	70.0	50.0

表1からも分かるように、平成21年度、平成22年度ともに正答率がとても低く、無解答率も10%を超えている。平成21年度と比較して正答率や無解答率での向上がやや見られるものの、「おおむね達成」の基準には至っていない。情景などの表現に着目して内容を読み取るという同じねらいの設問において、2年連続して同じ傾向の結果が出ている。このことから、文学的文章を読解する際、人物の心情や置かれている状況を情景などの表現に着目して読んでいくような指導が十分に行われていないことが予想できる。

②H21・22年度(小学5年生国語)「書くこと」及び「読むこと」に関する問題での経年比較

(1)「書くこと」

平成22年度の小学5年生では、「ア結果の概要」で述べたように、「書くこと」で課題が見られた。そこで、「書くこと」についての指導法改善が図られているかの分析のために、到達度分布を経年で比較することにした。

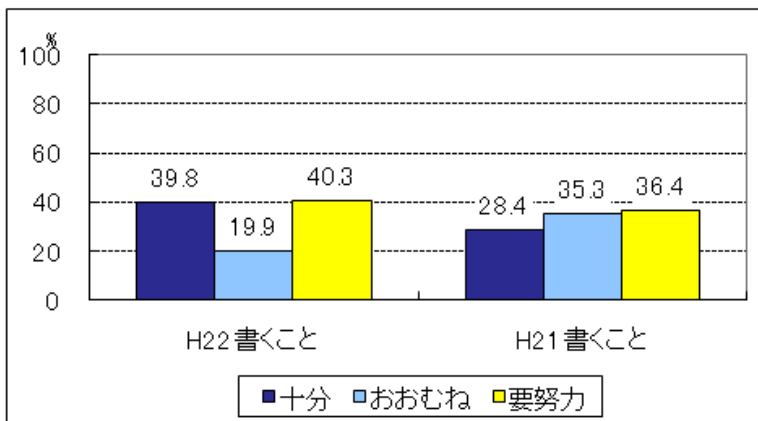


図10 H21・22年度(小学5年生)「書くこと」の到達度分布

平成22年度の小学5年生は、平成21年度の小学5年生と比較すると、「おおむね達成」の児童の割合が10%以上減少し、「十分達成」と「要努力」の児童の割合が増加している。特に「十分達成」の児童は10%以上増加している。「書くこと」の正答率でみると課題は残るものの、指導法改善の成果が徐々に表れている結果だと言える。しかしながら、「要努力」の児童の割合も約4%増加し、40%以上を占めており、「十分達成」の児童との二極化が顕著になった。「書くこと」に対して抵抗を感じている児童が増えているので、個に応じたきめ細やかな対応策が必要である。表現の様式に合った書き方を学ばせ、短い文章を継続して毎日書かせていくなど継続的な指導が効果的である。

(2)「読むこと」

平成22年度の小学5年生では、「ア結果の概要」で述べたように、「読むこと」領域ではおおむね良好な結果が見られたが、「十分達成」の基準に到達している設問は5問中1問のみだった。また、説明的な文章の読解においては「十分達成」を上回る設問はなかった。そこで、「読むこと」についての指導法改善が図られているかの分析のために、到達度分布から経年で比較することにした。

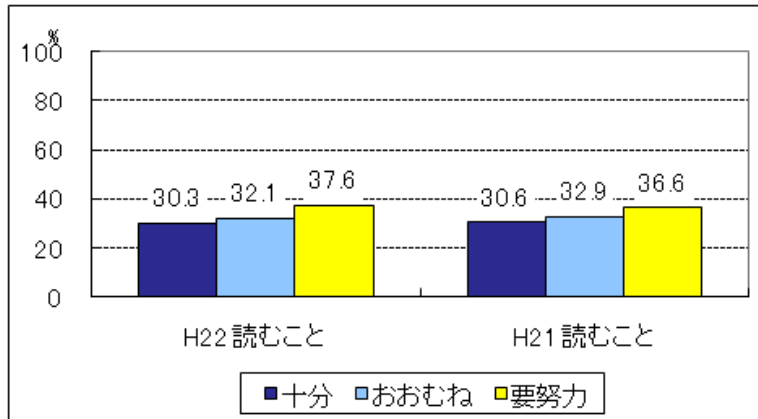


図11 H21・22年度(小学5年生)「読むこと」の到達度分布

平成22年度の小学5年生は、平成21年度の小学5年生と比較すると、「十分達成」の児童の割合が0.3%減少し、「要努力」の児童の割合が1%増加している。到達度の割合の傾向としては大きな変化は見られない。しかし、「要努力」の児童が連続して4割近くいるということが明らかになった。問題文として出されている文章の内容や問題文自体の意味を理解できない児童が2年連続で約4割いるということになる。「読むこと」の学習に対して抵抗を感じている児童への手立てを具体的に考え、個に応じた指導を取り入れていくことが必要である。また、「十分達成」の児童も増えていないことから、読み取った内容を的確に解答し、様々な設問に対応できるような指導も必要であると思われる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成22年度の調査結果を踏まえ、ここでは、「読むこと」「書くこと」領域における「事実と感想の述べ方に気付くこと」「形式や目的に合わせて書き換えること」について分析する。さらに、今年度正答率が低かった問題から「情景などの表現に着目して読むこと」「形式や目的に合わせて二文に分けて書き換えること」「濁音や撥音を含んだローマ字の書き取り」についても分析を行う。

傾向1 **文章の内容を正確に読み取ることに課題がある。**

[中学1年生 大問2の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2三	文章における事実の述べ方と感想の述べ方の違いに気付くこと。 (短答式)	報告文の中から、自分の考えを述べている一文を抜き出す。	37.3	8.5	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し正答率は37.3で、17.7ポイント下回っている。また、無解答率は8.5ポイントで高い数値を示している。本設問は、報告文の中から自分の考えが述べられた一文の最初の7字を書き抜くものだったが、事実と感想との述べ方の違いに気付かず、文章表現に着目した読み取り方ができていなかったと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

説明的文章の読み取りの学習の中で、教材文の内容の読解だけにとどまらず、事実と感想、意見などとの関係を確実に押さえていくような読み方を指導していくようにする。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①筆者が「どのような事実を事例として挙げ理由や根拠としているのか」、「どのような感想や意見を示しているのか」を文末表現から把握させるような学習活動を取り入れていく。
- ②授業の中で、段落相互の関係を接続語やキーワードを基にとらえさせ文章構成を理解させる。文章構成を学ばせた後でそれを生かして自分でも説明や報告の文章を書かせる。その際に、事実と感想や意見とを明確に分けて書かせるように指導する。
- ③授業計画を立てる段階で、児童にはっきりとした見通しをもたせる。例えば意見を述べた文章や解説の文章(意見文、報告文、解説文など)を利用する際には、「何のために読むか」「どう読んでいくとよいか」などの目的意識をもたせた上で、文種の特性に応じた読み方を指導していく。

[中学1年生 大問3の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問3三	情景などの表現に着目して読むこと。 (短答式)	距離が長いことを表している一文を抜き出す。	25.7	10.2	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し正答率は25.7で、24.3ポイント下回っている。また、無解答率は、10.2ポイントと高い数値を示している。「走ったり歩いたりしながら」や「ただひたすら」といった言葉から、「距離が長いこと」を読み取るものだったが、情景に着目することによって登場人物の心情や置かれている状況を読み取ることができなかったと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

文学的文章の読み取りの学習の中で、教材文の内容の読解にとどまらず、様々な作品や文章の中の人物の関係や心情、場面についての描写をとらえることができるような読み方を指導していくようにする。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ① 叙述を基に人物の境遇、状況を把握させる。気持ちを行動、会話文、情景などから関連的にとらえさせる。その際、叙述に線を引かせたり書き抜きをさせたりして児童自身が語句や文章に着目できるようにする。
- ② 児童の経験と照らし合わせたり、それぞれが感じ取ったことを交流し合わせたりする場面を取り入れ、それぞれの児童の読み取り方のよさに気付かせるようにする。
- ③ 高学年では、人物の心情や置かれている状況が行動や会話、情景などを通して暗示的に表現されていることを、児童が実感できるような学習場面を設定していくようにする。

傾向2 **目的や意図に応じて書き換えたり、情報を取り出して自分の考えを書いたりすることに課題がある。**

[小学5年生 大問6の二]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問6二	集めた情報について順序や軽重を考えること (記述式)	ノートの記述を新聞記事の形式に書きかえる。	54.9	10.1	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し正答率は54.9で、0.1ポイント下回っている。また、無解答率は10.1ポイントで高い数値を示している。「活用」に関する問題として出題しており、【ノートの内容】に書かれたことを、【新聞】の形式や目的に書き換えるものであった。このような書き換えの学習に慣れていなかったことと、形式や目的にあった情報の取り出しができなかったことが原因と考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「書くこと」領域の指導では、「記述」だけに重点を置いて指導するのではなく、どうすれば適切な記述をさせることができるか、また、どのような効果的な書き方を身に付けさせて今後の書く活動に生かしていくかを見据えて指導していくことが重要である。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①課題設定や構成の仕方について学ばせる際や書く事柄を収集する際に、相手や目的を明確に意識させる。
- ②記述の前の段階で、取材した事柄を記述に役立つように整理させる。
- ③形式や目的の特性を理解させ、各自が書き表すことの形式や目的に合わせて分かりやすく記述できるようにさせる。
- ④課題設定や取材、構成、記述、推敲、交流の学習過程のそれぞれを丁寧に指導していくようにする。

[中学1年生 大問4の二]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4二	目的や意図に応じて文章の構成や表現の効果を工夫すること。 (記述式)	説明するための発表原稿を条件に合わせて書く。	56.8	5.4	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は56.8で、11.8ポイント上回っているが、「読むこと」の設問の中では一番無解答率が高い。「活用」に関する問題として出題しており、読み取った内容を基にして書き換えをするという、ここ数年続けて課題が見られる問題である。内容としては、【構成メモ】に書かれている「準備運動はしっかりと、その理由の「けが防止のため」という内容を【原稿】の中の指定された部分を二文に分けて書くというものだった。文章の構成や表現の効果を工夫し、形式や目的に沿って書くことができずと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「書くこと」領域の指導では、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて記述する学習を系統的・段階的に積み重ねていくような授業改善が必要になってくる。小学校6年間で、段階的に書く力を確実に高めていきたい。具体的には次のような指導が効果的である。

- ①一文で書かれた文章と二文で書かれた文章とを比較させ、接続語や順番を表す言葉の効果を実感させる。一文を二文に分けて書き換えたり、二文を一文にまとめて書いたりする機会を多く与える。
- ②書き換えた文の文章における効果について考えさせたり、意見を交流させる。

[小学5年生 大問6の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問6三	各材料を収集したり選 択したりして、構成の 工夫をすること。 (記述式)	新聞の記事に書く内容 を自分で考えて書く。	61.5	13.5	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は61.5で、16.5ポイント上回っている。無解答率も「書くこと」の中では最も高い。この問題も「活用」に関する問題として出題しており、【新聞】の空いている欄に、4年生に紹介するための記事を自分で考えて書くという内容だった。この問題のように、「あなたならどう書きますか。」「自分で考えて書きましょう。」という形式だと、無解答率が増加する傾向にある。

○ 指導法改善の手立て

まずは、児童に書く必然性を感じさせ、目的意識や相手意識を明確にもたせたい。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ① 何を、どんな目的でどのように書くとよいのかを書く前の段階で理解させ、書く材料の収集や選択を確実にさせる。
- ② 自分が書きたいことをはっきりと決めさせた上で、形式や目的を意識させたり表現の工夫をさせたりする。
- ③ 書いたことを友達と交流させることにより、記述の工夫に多くふれさせていく。

傾向3 **濁音や撥音を含んだ単語をローマ字で書くことに課題がある。**

[小学5年生 大問7の三②]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問7三②	濁音や撥音を含んだ単語について、ローマ字で書くこと。 (短答式)	でんわ→denwa	24.8	27.8	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し正答率は24.8で、35.2ポイント下回っている。無解答率は27.8ポイントで非常に高い数値を示している。清音で始まる単語の記述の正答率と比較すると20ポイント以上下回っている。ローマ字表を利用した書き取りの練習では濁音で始まる単語の学習が不足しがちになるため、誤答や無解答が多くなったと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

ローマ字の指導は第4学年(平成23年度からは第3学年)で行われている。現在のローマ字指導は、日常使われている簡単な単語などをローマ字表に従って、置き換える活動が中心となっている。しかし、平成22年度の調査結果からは、清音のローマ字記述はできるものの、濁音や撥音、促音が含まれる単語をローマ字に置き換える問題でのつまずきが見られた。このようなことから、次のような指導の工夫が効果的である。

- ① 濁音で始まる単語や撥音、促音が含まれる単語をローマ字に置き換える活動を多く取り入れる。例えば、濁音や撥音で始まる身の回りにあるものを(画用紙、どんぶり、ビー玉、救急車、賞状など)児童に探させて記述させるなどの工夫をする。
- ② ローマ字表記の基本をしっかりと指導する。コンピュータ等のキーボード操作を通して定着を図るのも有効だが、実際に文字として書く作業を意図的に多く取り入れる。例えば、日記の題名だけをローマ字で書かせたり、授業の一言感想をローマ字で書かせたりするなどの活動がある。
- ③ ローマ字表記の指導を小学校中学年だけでなく、高学年においても指導し、確実に定着させていく。例えば、5年生や6年生でも、漢字テスト同様、ローマ字の読み書きのテストを行うなど、児童のローマ字に対する意識が低くならないように継続して指導していく。

エ これからの指導に向けて

平成22年度の調査で明らかになった課題は次の通りである。

- 文章の内容を正確に読み取ること
- 目的や意図に応じて書き換えたり、情報を取り出して自分の考えを書いたりすること
- 濁音や撥音を含んだ単語をローマ字で書くこと

これらの課題を解決するためには、次のア・イ・ウに示す指導改善の工夫を、全学年で年間を通して行うことが大切である。また、児童の定着状況を的確に把握し、指導を継続して行うことも必要である。

ア 日常の生活場面で生かせる言語活動を取り入れた指導

国語科で身に付けた言語能力は、各教科等の学習の基本となり、発揮されていくべきものである。そこで、単元を構成する際に、児童が各教科等でも行う「ポスターに書いて説明する」「調べた事を新聞にまとめる」などの言語活動を設定し、その言語活動を通して、「話す」「聞く」「書く」「読む」力を付けていくことが大切である。児童の実態や学習経験、教材の特性に合った言語活動を設定することで、児童に目的意識が生まれ、活動を行う際には、思考力・判断力・表現力が育成される。そのような学習を繰り返していくことで、上記に挙げた「文章の内容を正確に読み取ること」や「目的や意図に応じて書き換えたり、情報を取り出して自分の考えを書いたりすること」などの課題に対しても改善が期待できる。具体的な言語活動の設定例は次の通りである。

1 文学的文章の読み取りの学習に言語活動を位置付ける。

- (1)取り入れる言語活動→「テーマに沿って物語を読み、紹介する文章を書く」言語活動
- (2)ねらい→構成や表現の工夫、人物の気持ちに着目して文章を読み、紹介する文章を書くことに生かす。
- (3)指導過程
 - ① 物語の内容を十分理解させる。
 - ② 読み取ったことを基に自分の考えをもたせ、紹介する文章を書かせる。

①の段階では、登場人物の行動を表す言葉や情景描写などから、登場人物の心情や置かれている状況を読み取らせることが重要である。②の段階では、その物語のジャンルのもつ特徴、展開や構成、表現の工夫などに必ず着目させるようにする。例えば、読書発表会を設定する場合、教材文から物語の特徴、展開や構成、表現の工夫について読み取らせ、それを生かして自分で選んだ本の内容について紹介し、感想を交流させるようにする。

このような学習活動を児童の実態に応じて単元計画に取り入れていくことで、情景などの表現に着目して読むことができ、自分の考えをもつことができるようになると考えられる。

2 説明的文章の読み取りの学習に言語活動を位置付ける。

- (1)取り入れる言語活動→「説明文を読んで、効果的な資料の使い方を学び、調べたことを報告する」言語活動
- (2)ねらい→効果的な資料提示や例示の仕方を説明文の読み取りを通して学び、調べた事を報告する活動に生かす。
- (3)指導過程
 - ① 説明文から効果的な資料提示や例示の仕方などの表現の方法に気付かせながら読み取らせる。
 - ② 自分の意図が伝わるように表現の仕方を工夫させて、調べた事をまとめさせ、報告会で発表させる。

①の段階では、写真と文章の対応、文章の構成などの表現の方法に着目して読ませる。②の段階では、①の段階で学んだ表現の方法を使って、目的や意図に応じて自分の考えが伝わるように表現を工夫させる。例えば、報告文作りを設定する場合、読み取る段階でキーワードや指示語・接続語、文末表現に着目させながら、構成、写真と文章の対応など筆者の書きぶりから表現の工夫を読み取らせるようにする。そして、学んだ表現の工夫を使って、調べたことについて自分の意図が伝わるように報告文にまとめさせ、発表させる。

このような学習活動を児童の実態に応じて単元計画に取り入れていくことで、筆者の表現の工夫について読み取ることができ、目的や意図に応じて自分の考えを伝えることができるようになると考えられる。

イ 螺旋的・反復的に繰り返すことで知識・技能の定着を図る指導

知識・技能は一度学習したからといってすぐには定着しない。そこで、指導過程において身に付けた知識・技能を繰り返し使うことを意識して学習を仕組んでいく必要がある。年間指導計画を立てる際には、次のようなことが大切である。

- (1) 児童の学習の定着状況や学習経験を把握し、重点を置くべき指導内容を明確にする。
- (2) 前後の学年段階を考慮して弾力的な指導ができるよう配慮する。

年間指導計画の作成に当たっては、形式的に該当する学年に当てはめて指導したり、その学年だけで指導が終わったとしたりするような扱いにならないように注意することが必要である。例えば、「書くこと」の学習では、低学年では文と文をつないで順序を考えながら書くことができるようにさせる。その力を生かして、中学年では段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、段落のつながりを意識しながら書くことができるようにさせる。更に高学年では、低学年から身に付けてきた書く力を生かして、目的や意図に応じて文章全体の構成を考えた効果的な書き方ができるようにさせる。

更に詳しく言うと、5年生で資料を引用した効果的な書き方ができない場合には、前学年までの指導内容に戻り、新聞や報告書、感想文などの書き方を想起させたり段落を意識した書かせ方の指導を再度行ったりするなどの工夫を取り入れることが効果的であろう。

このように、文字の読み書きや、読み方、話し方などの知識・技能についても、当該学年のみの指導にとどまらず、次の学年でも引き続き意識して指導していくことで定着が図られると考えられる。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 小学校社会

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

小学校社会

知識や技能の定着を図るためにも、既習事項や生活との関連をもたせる授業を

小学5年生と小学6年生では、すべての評価の観点、内容・領域において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、小学5年生においては、「観察・資料活用の技能・表現」の評価の観点、「安全を守る」、「県のように」の内容・領域以外は、「十分達成」の基準と同等か上回った。中学1年生では、「社会的事象についての知識・理解」の評価の観点、「我が国の歴史」、「我が国の政治の働き」の内容・領域が「おおむね達成」の基準を下回った。また、3学年を通して、児童の生活との結び付きを感じにくい単元ほど正答率が低いという傾向が見られた。そこで、小学校社会科においては、これから更に、社会的事象に対する児童の興味・関心を高め、知識や技能の確実な定着を図る指導の工夫が必要である。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

- 社会的な事象への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし
- 社会的な思考・判断 → 「思考・判断」
- 観察・資料活用の技能・表現 → 「技能・表現」
- 社会的事象についての知識・理解 → 「知識・理解」

ア 結果の概要

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率







小学5年生の教科全体正答率は、「十分達成」の基準を上回っており、小学6年生で「おおむね達成」の基準を上回っている。しかし、中学1年生では、「おおむね達成」の基準を下回っており、学年が上がるごとに低くなっている。

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

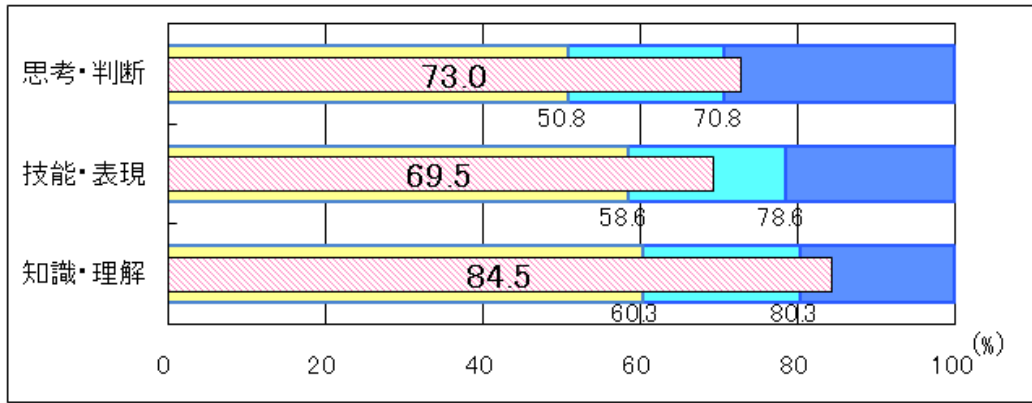


図1 H22年度 (小学5年生社会) 評価の観点別正答率

「思考・判断」と「知識・理解」については、「十分達成」の基準を上回った。また、「技能・表現」については、「十分達成」の基準には達しなかったが、「おおむね達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。中学年は、身近な地域の学習であり、見学や実物に触れるなどの活動を多く取り入れるなど、児童の主体性を大切にされた単元づくり、授業づくりが行われている成果が出ていると考えられる。

②中学1年生

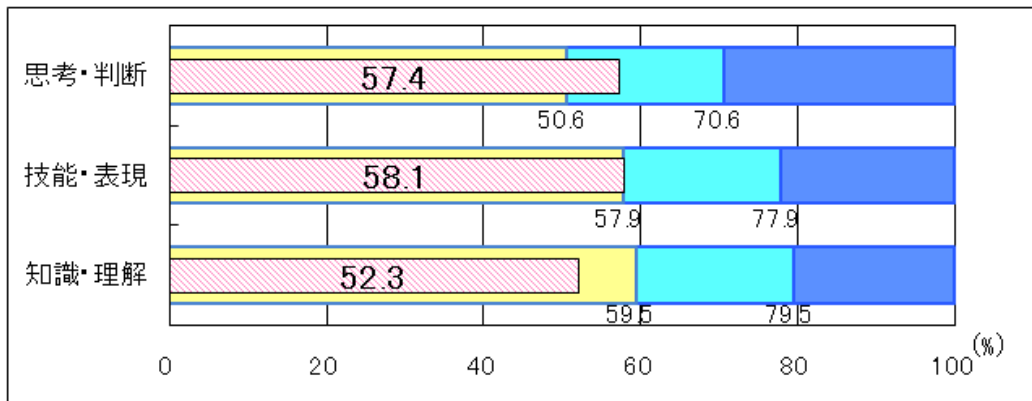


図2 H22年度 (中学1年生社会) 評価の観点別正答率

「思考・判断」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「技能・表現」については、「おおむね達成」の基準をわずかに上回っただけであり、「知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を下回った。「技能・表現」については、特に「年表や政策についてまとめた文章等の資料から読み取ること」に課題が見られた。これは、資料のどこに着目すべきかがわからなかったり、複数の資料を関連付けられなかったりしたためと考えられる。「知識・理解」については「徴兵令」などの用語やそれぞれの時代の特徴の理解に課題が見られた。

③小学5年生・小学6年生・中学1年生の「知識・理解」の観点の比較

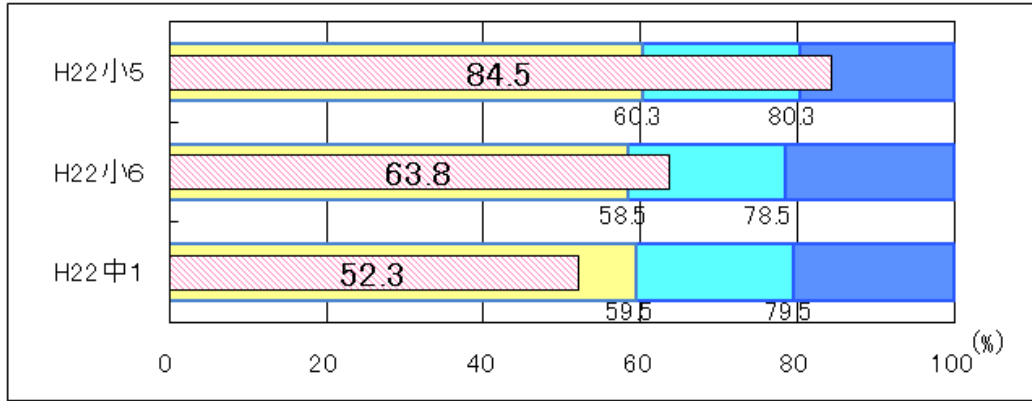


図3 H22年度（小学5、6年中学1年生社会）「知識・理解」正答率

小学5年生の「知識・理解」については、「十分達成」の基準を上回っており、小学6年生では、「おおむね達成」の基準を上回っている。しかし、中学1年生では、「おおむね達成」の基準を下回っており、学年が上がるごとに正答率が低くなっている。これは、高学年の学習内容が、日本の国土や産業、歴史、世界とのつながりなどであり、中学年の学習内容と比べて身近な生活との結び付けることが難しくなるため、授業の中で、児童の興味・関心を高めるような適切な事象が提示できていなかったり、事象の関連や時代の流れの中で知識を習得させられなかったりしていることが考えられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

①小学5年生

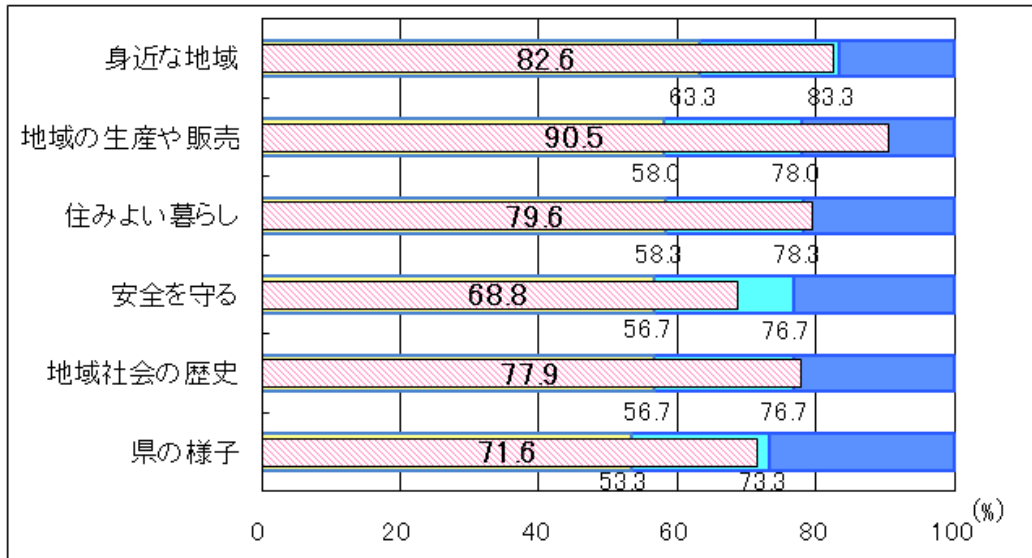


図4 H22年度 (小学5年生社会) 内容・領域別正答率

②小学6年生

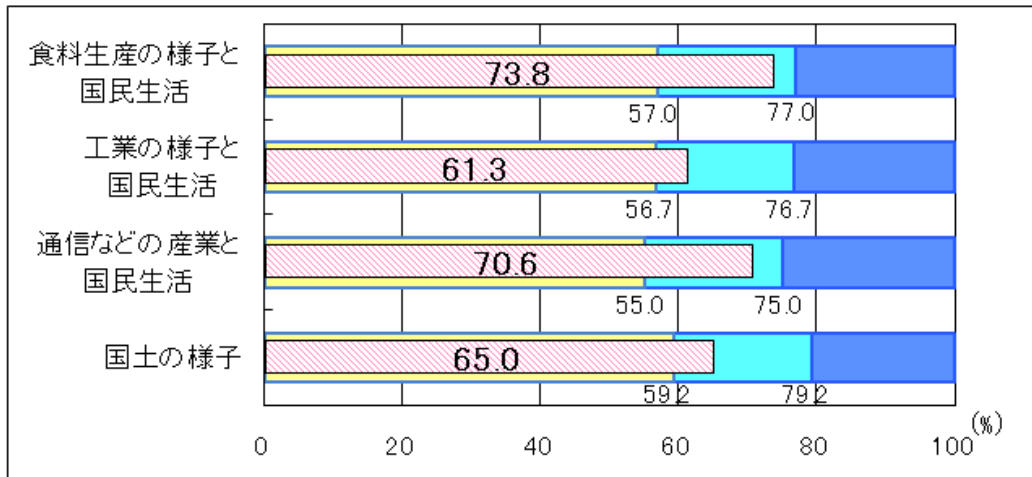


図5 H22年度 (小学6年生社会) 内容・領域別正答率

③中学1年生

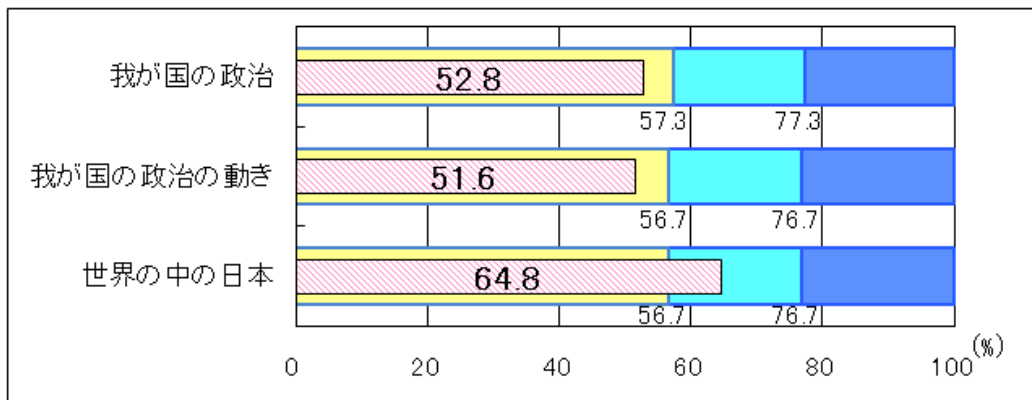


図6 H22年度 (中学1年生社会) 内容・領域別正答率

小学5年生では「地域の生産や販売」、小学6年生では「食料生産の様子と国民生活」、中学1年生では「世界の中の日本」が高い正答率であった。しかし、内容・領域別ごとに正答率の差が見られることが分かる。特に、中学1年生の「我が国の歴史」と「我が国の政治の動き」については、「おおむね達成」の基準を下回った。このことについては、平成21年度も同様に低い傾向が見られた。歴史や政治など児童が自分の生活との結び付きを感じづらい内容・領域については、社会生活や社会的事象の仕組みを理解したり、事象について考えたりす

ることが難しくなるためと考えられる。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

小学5年生と中学1年生に着目し、平成21年度と平成22年度の同一学年の経年比較により分析をする。結果の概要を受け、(ア)では、小学5年生の「技能・表現」の観点について、(イ)では、中学1年生の「知識・理解」の観点と内容・領域別の正答率について分析をする。また、平成21年度の課題を受け、(ウ)では、社会的事象の特色や関連、意義について説明したり、自分の考えを論述したりする設問について分析をする。

(ア) 「小学5年生」の経年比較(同一学年)

① 評価の観点別正答率

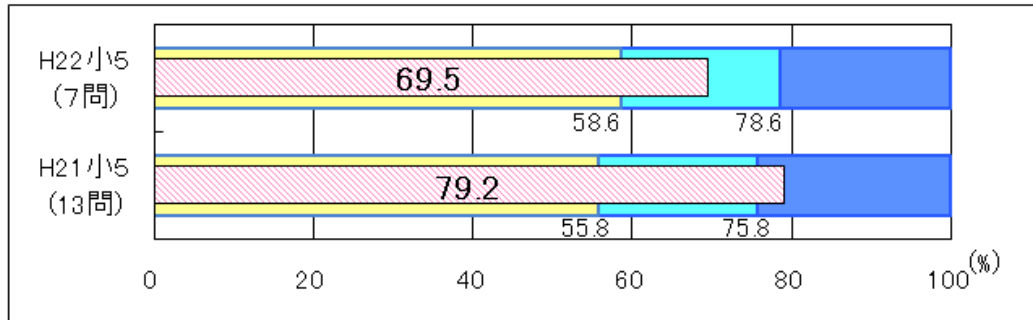


図7 H21・22年度 (小学5年生社会) 「技能・表現」 正答率の経年比較

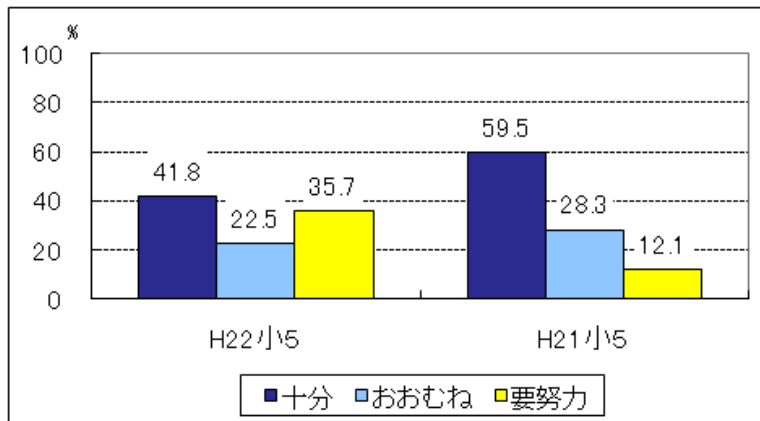


図8 H21・22年度 (小学5年生社会) 「技能・表現」 の到達度分布

平成21年度の「技能・表現」は「十分達成」の基準を上回っていたが、平成22年度の調査では「十分達成」の基準を下回っている。さらに、到達度分布(図8)を見ると、「十分達成」の割合が17.7%低下し、「要努力」の割合が23.6%上昇している。

表1 H21・22年度 (小学5年生社会) 「技能・表現」 の資料の内容別の正答率

	H22	H21	H21→H22 の比較
グラフ	74.7(3問)	79.0(3問)	-4.3
図・写真等	65.7(4問)	79.3(4問)	-13.6

※正答率のあとの()には、出題した設問数を示す。

そこで、「技能・表現」について、資料の内容を「グラフ(統計)」と「図・写真」に分けて、正答率を比較することとした。その結果、表1のようにグラフの読み取りよりも、図や写真等の資料を読み取ってまとめたり、表現に生かしたりするという設問の正答率が13.6ポイントも低下していることが分かった。このことから、グラフを基に、社会的事象の変化や大まかな傾向をとらえることはできているが、図や写真などを基に情報を取り出したり、比較したりすることが十分に身につけていないことがうかがえる。

(イ) 「中学1年生」の経年比較(同一学年)

①評価の観点別正答率

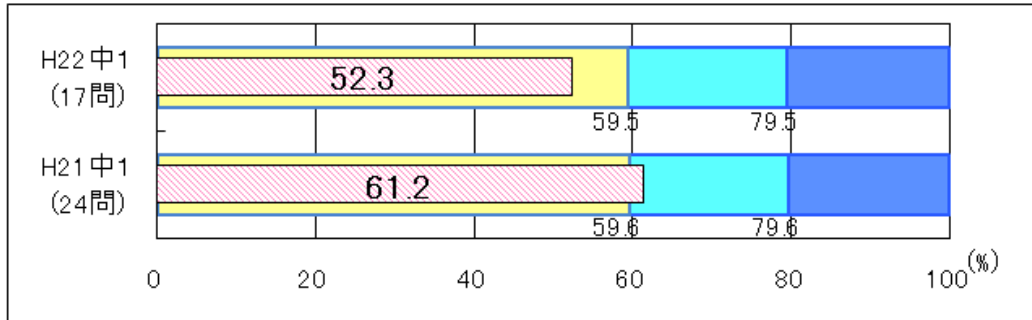


図9 H21・22年度（中学1年生社会）「知識・理解」正答率の経年比較

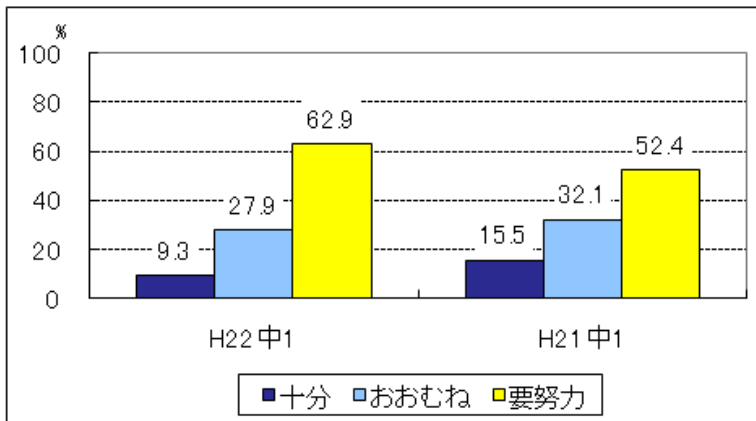


図10 H21・22年度（中学1年生社会）「知識・理解」の到達度分布

平成21年度の「知識・理解」は「おおむね達成」の基準をわずかに上回っていたが、平成22年度の調査では「おおむね達成」の基準を下回っている。さらに、到達度分布(図10)を見ると、「十分達成」の割合が6.2%低下し、「要努力」の割合が10.5%上昇している。

表2 H21・22年度（中学1年生社会）「知識・理解」の到達度分布

	H22	H21	H21→H22 の比較
短答式	49.8(10問)	46.6(2問)	3.2
選択式(語句)	52.0(3問)	59.6(8問)	-7.6
選択式(文章)	56.7(6問)	73.4(2問)	-16.7

※正答率のあとの()には、出題した設問数を示す。

そこで、「社会的事象についての知識・理解」について、選択式と短答式に分けて、正答率を比較することとした。その結果、表2のように文章による選択式の問題の正答率が16.7ポイントも低下していることが分かった。このことから、児童が獲得した知識は断片的なものとなっており、事象同士や時代の流れの中で関連付けて理解できていないことがうかがえる。

②内容・領域別正答率

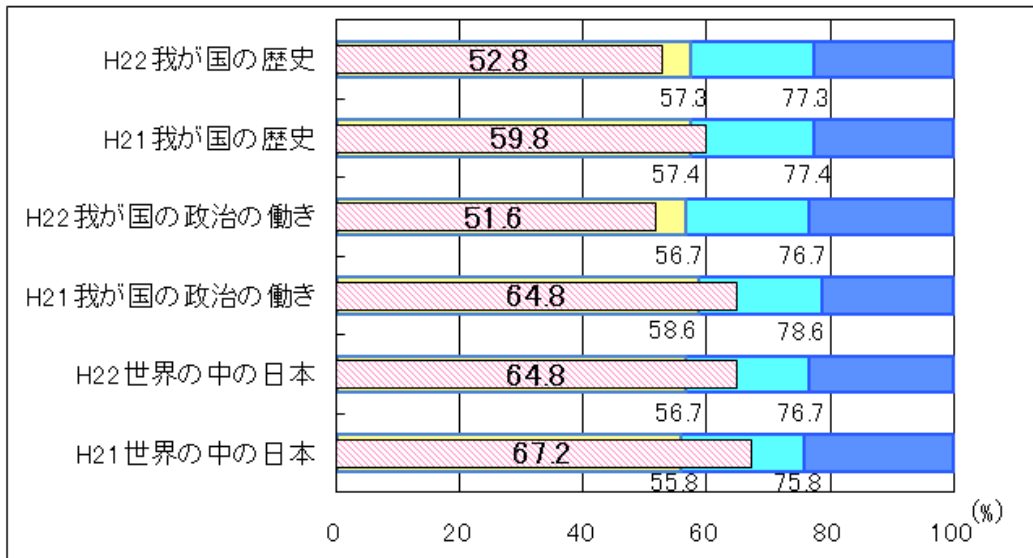


図11 H22・H21年度（中学1年生社会）内容・領域別正答率

「我が国の歴史」と「我が国の政治の働き」については、平成21年度は「おおむね達成」の基準をわずかに上回っていたが、平成22年度は「おおむね達成」の基準を下回った。特に、「我が国の歴史」については、これまでも課題とされており、最も指導改善を図っていく必要のある内容・領域である。

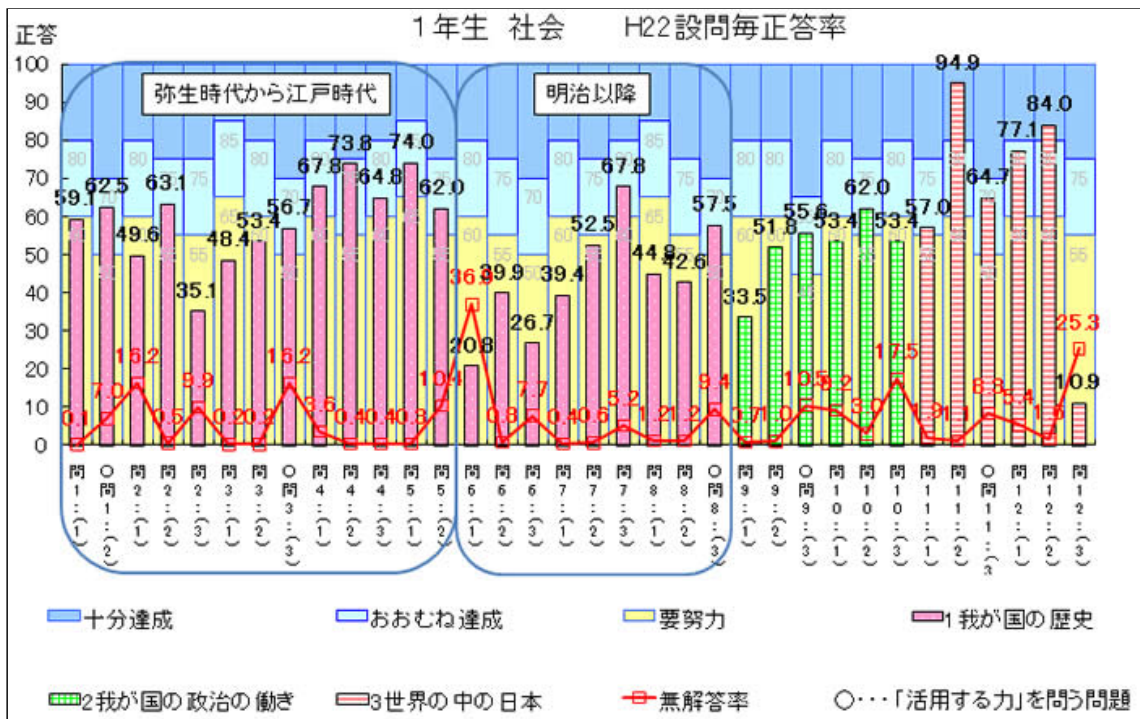


図12 H22年度（中学1年生社会）設問ごとの正答率

さらに、中学1年生の設問毎正答率を見ると、「我が国の歴史」の中では、特に、明治時代以降の学習内容について正答率が低いことが分かる。現代に近付いていくことで現在の生活との関連が分かりやすくなるというよさはあるものの、登場する歴史上の人物や取り扱う出来事が多く、時代背景も複雑になるために理解しづらくなるということが考えられる。

(ウ) 「活用」に関する問題についての経年比較

(「小学5年生」と「中学1年生」同一学年)

「活用」に関する問題を、大きく次の2つに分けて比較することとする。

A: 社会的な問題や社会の中で直面しそうな問題に対して自分の考えや解決策を論述させる設問

B: 社会的な事象の特色や関連を考えたり、意味・意義を解釈したりしたことを説明させる設問

表3 H21・22年度（小学5年生社会）「活用」に関する問題の比較

	正答率		無解答率		十分達成	おおむね達成
	H22	H21	H22	H21		
A: 社会的な問題等についての自分の考えの論述	76.3(3問)	75.7(1問)	4.7	11.2	70.0	50.0
B: 社会的な事象についての説明・解釈	60.5(2問)	77.2(1問)	6.3	3.4	70.0	50.0

表4 H21・22年度（中学1年生社会）「活用」に関する問題の比較

	正答率		無解答率		十分達成	おおむね達成
	H22	H21	H22	H21		
A: 社会的な問題等についての自分の考えの論述	60.2(2問)	57.3(3問)	9.4	11.2	70.0	50.0
B: 社会的な事象についての説明・解釈	58.9(3問)	48.2(3問)	10.9	15.6	70.0	50.0

小学5年生は「社会的な問題等についての自分の考えの論述」については、正答率が高くなり、無解答率は低くなっている。また、「社会的な事象についての説明・解釈」については、正答率が低くなり、無解答率は高くなっている(表3)。中学1年生は「社会的な問題等についての自分の考えの論述」については、正答率が高くなり、無解答率は低くなっている。また、「社会的な事象についての説明・解釈」については、正答率は高くなり、無解答率は低くなっている(表4)。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成22年度の結果の概要を踏まえ、傾向1では「知識・理解」について、傾向2では「表現・技能」の中でも、特に、図や年表などの資料を活用したり必要な情報を読み取ることについて設問レベルで分析する。また、経年比較を踏まえ、傾向3では、自分の考えを論述したり、事象の関連や意味などを説明することについても設問レベルで分析する。

傾向1 **自分たちの生活との関連が分かりづらい単元の「社会的事象についての知識・理解」に課題がある。**

【第6学年 大問5の(2)】

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問5(2)	自動車生産に従事する人々の努力や工夫を理解している。 (短答式)	大量生産をするためと いうこと以外に自動車 工場でロボットを使う 理由を書く。	37.0	4.3	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は、37.0であり、18.0ポイント下回っている。自動車工場では、大量生産を可能とするためにロボットが使われていることは理解している。しかし、もう一つの理由として、働く人の安全を守るためにロボットが使われていることには、なかなか目が向きにくかったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

自動車工場における努力や工夫を考えさせる際には、実際に見学して、工場で働いている人々の「安全を確保してほしい」、「良い品質の商品をつくりたい」などの仕事への思いや願いに迫らせることが大切である。また、実際に見学ができなかった場合は、溶接や塗装などの行程において、ロボットを使っている写真やVTRなどを見せるなどして、ロボットがなかったらどうになってしまうのかということを考えさせる指導が効果的である。

【第1学年 大問7の(1)】

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問7(1)	不平等な条約を結んだ時期を理解している。 (選択式)	不平等な条約を結んだ時期を4つの選択肢から選ぶ。	39.4	0.4	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し、正答率は、39.4であり、20.6ポイント下回っている。ノルマントン号事件の説明の中にある「不平等な条約」という言葉から条約を結んだ時期を問うたため、時代の流れが混乱し、「明治時代のはじめ」または「明治時代の終わり」と解答したことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

条約改正の学習を行う際には、「いつごろ条約を結んだのか」、「どんな条約だったのか」など前時までの学習を想起させて、どのような点を改善するために条約の改正を行おうとしたのかを考えさせることが必要である。その際、流れや関係を図や年表にまとめさせたり、当時の人々の思いを想像させたりしながら、時代の流れの中で歴史上の人物や出来事などを理解させていくことが大切である。

傾向2 図や年表などの資料を活用したり必要な情報を読み取ったりすることに課題がある。

[第5学年 大問1の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問1(2)	地図上の位置関係を、 四方位を基に表すこと ができる。 (短答式)	地図上の2つの建物の 位置関係を、四方位を 使って表す。	52.7	0.6	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し、正答率は、52.7であり、7.3ポイント下回っている。しかし、大問1の(1)の地図の上が「北」となっていることを理解しているかを見る設問は、「おおむね達成」の期待正答率65.0に対し、正答率は、82.2であり、17.2ポイント上回っていた。つまり、地図が北を上にして表してあることは理解できている、四方位を活用して表現する経験が不足していることが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

類似問題である第6学年の[大問7の(1)②]で、日本の東の端の島を地図上から答える設問についても「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し、正答率は、55.2であり、4.8ポイント下回っていた。社会科の授業にかかわらず様々な場面で、地図などを取り扱う際には、「上下」「左右」ではなく意図的に四方位を使わせるようにしていくことが大切である。

[第6学年 大問10の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問10(3)	森林の働きを資料から 読み取ることができ る。 (記述式)	森林がある場合と森林 がない場合の2枚の絵 を比べながら読み取 り、森林の働きを記述 する。	57.6	6.0	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は、57.6であり、2.6ポイント上回るにとどまった。森林がある場合と、森林がない場合の2枚の絵から、森林のはたらきを説明するための違いを見いだすことができなかつたためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

複数の資料から必要となる情報を読み取らせる際には、共通点や相違点に目を向けさせることが大切である。そして、それが森林のはたらきと関係があるのかどうかを考えさせていくようにするといったステップを踏むことで、何を読み取るのかを明確にしていくことが資料活用能力を高めることにもつながっていくと考える。

[第1学年 大問6の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問6(2)	資料から明治政府が行った地租改正の目的を読み取ることができる。 (選択式)	明治政府が地租改正を行った理由を(太郎さんのノート)の記述から読み取り、正しいものについて、4つの選択肢から選ぶ。	39.9	0.8	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は、39.9であり、15.1ポイント下回っている。収入を安定させるために、年貢ではなく現金で納めさせるようにした理由を、明治政府が進めた主な政策についてまとめられた資料から読み取れなかったことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

明治時代の学習の初めには、政府が徴兵令や地租改正、官営工場の設立など様々な政策を行っていることについて学習する。その際、それぞれの政策について「なぜこのような政策を行ったのか」を調べさせたり、それらを基にして「明治政府はどんな国づくりを目指したのか」などについて、政策と関連付けながらまとめさせたりしていくことが大切である。さらに、児童の視野を広げさせたり、時代背景に気付かせたりするために、それらのことを政府の立場からだけでなく、国民の立場からも見ていくような指導が必要である。

傾向3 **社会的事象の関連や意味などを説明したり解釈したりする力に課題がある。**

[第5学年 大問7の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問7(2)	昔と今の道具の変化から、人々の暮らしに与えた影響を説明することができる。 (記述式)	「照明の移り変わりをまとめた年表」を基にして、暮らしに与えた影響を考え、記述する。	53.5	8.2	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し、正答率は、53.5であり、3.5ポイント上回るにとどまった。また、無解答率は8.2であった。「電とう」の前に使われていた「あんどん」や「ランプ」の絵や気付きの欄から、火事の心配や火がないとつけられない不便さについて考え、「電とう」になったことのよさについてまとめる力が不足しているためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

昔の道具の学習では、体験学習をしたり、調べたことを年表にまとめたりする活動がよく行われている。そこで、体験や調査をした感想をまとめさせたり、交流させたりすることで、当時の人々の思いや願いを想像させ、道具の変化だけでなく人々のくらしがどのように変化したかまでを考えさせることが必要である。

[第6学年 大問7の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問7(3)	資料を活用して、日本の気候の特色を説明することができる。 (記述式)	季節風と地形の関係に着目し、日本海側が冬に降水量が多い理由を、記述する。	24.8	13.3	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し、正答率は24.8であり、25.2ポイント下回っている。「しめった風」ということばを使うことはできても、資料を基に、山地との関係に着目して説明することができなかつたためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「季節風の影響で、日本海側が冬に降水量が多い」という事実について理解することはできているが、その理由を説明できない児童が多いことが考えられる。社会的事象の意味や関連などを説明したり解釈したりする力を育てるためには、授業の中で、教師が「なぜ?」、「どうして?」という発問を意図的に行い、事象の意味や関連について考えたり話し合ったりする場を設定することが大切である。また、実際に図を書かせたり、ICT機器をもとにして立体的にとらえさせたりしていくように工夫することも効果的である。

[第1学年 大問3の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問3(3)	元寇によって封建制度が揺らいでいった理由を説明することができる。 (記述式)	元寇の後、鎌倉幕府に対して御家人が不満を持った理由を考えて記述する。	56.7	16.2	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し、正答率は、56.7であり、6.7ポイント上回るにとどまった。また、無解答率は16.2であった。元が2度にわたって攻めてきたことと、鎌倉幕府が減びていったことの1つ1つは理解していても、それらを結び付けて考えることができなかったためと考える。そのため、「『元軍』ということばを使って」という条件を設定したことで、自分の考えを表現することが難しくなったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

それぞれの時代を代表する歴史上の人物の業績やかかわる出来事について学習する際には、言葉だけの暗記とならないように、時代の流れの中で内容やねらいに至るまでを理解させなければならない。具体的には、「なぜ?」、「どうして?」という発問を行うことで、時代背景を基に、人物や当時の人々の願いや意図に迫らせることが必要である。また、授業の終末に、今日の学習をまとめさせたり、感想を書かせたりする際に、キーワードとなる言葉や習得させたい内容を盛り込ませるように工夫することも効果的である。

エ これからの指導に向けて

本調査では、児童の生活との結び付きが薄い内容・領域の正答率が低いこと、また、「社会的な事象の特色や関連を説明すること」や「社会的な事象の意味・意義を解釈すること」に課題があることが分かった。新学習指導要領においては、社会的な見方や考え方を養い、そこで身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力につないでいくことが求められている。そのためにも、思考力・判断力・表現力の基盤となる知識や技能の定着と、言語活動の充実に継続して取り組んでいくことが必要と考える。

ア 当事者意識を高めるために

本調査から、小学校社会科の教科全体正答率が学年が上がるごとに低下していることが分かった。身近な地域や県などについて学ぶ中学年と比べて、高学年は日本の国土や産業、歴史、世界とのつながりなどについて学ぶために、自分の生活との結び付きを感じづらく、切実感をもちにくいことと関係があると思われる。また、学年ごとに見ても自分の生活との結び付きを感じづらく単元ほど正答率は低くなる傾向が見られた。そこで、学年を問わず、児童がどうしても考え、判断し、表現したくなるような教材を取り上げたり、学習問題を児童とともに作り上げたりする必要がある。

イ 観察・資料活用の技能・表現を高めるために

体験したことや調査したことをまとめたり、それを基にして自分の考えを表現したりする力を高めるためには、新学習指導要領にもあるように、発達の段階に応じた指導が大切である。資料を提示する際にも、この資料から気付かせたいことが何なのか、この資料の読み取りを通して身に付けさせたい力は何なのかということ、教師自身が明確にして資料を選択したり、発問を考えたりすることが大切となってくる。また、見学や資料から分かったことをまとめたり、話し合ったりするような場を意図的・計画的に設定する必要がある。

ウ 学習内容を関連付ける工夫

1時間1時間の授業や小テストなどを通して知識や技能の習得ができていても、児童がそれらをいつでも使えるような知識として定着できていなかったり、それらを活用して問題を解決したりするまでには至っていないことが考えられる。これまでに学んだ知識や技能を想起させたり、比べさせたり、活用させたりするなどしながら、前時までの学習と本時の学習、これまでの単元と本単元とを意図的に関連付けていくような工夫が必要である。

エ 「思考力・判断力・表現力」の評価

新しい評価の観点として「社会的な思考・判断」が「社会的な思考・判断・表現」となることが示された。このことにより、児童が考えたり判断したりしたことを表現したものについて、「何を根拠としているか」、「どのように表現しているか」などを具体的に評価していくことが大切となってくる。児童の知識・理解の習得に比べ、「社会的な見方や考え方」の変容や伸びは、測ることが難しいという問題があるが、ぜひ育成したい大切な力である。だからこそ、的確に評価を行い、その評価情報に基づいて、適切な指導をしていくことが重要となる。具体的には、「かかわる立場」や「社会的な価値」の内容、論理性などを基に、できるだけ具体的に「何について評価するか」、「どの程度の内容を基準として評価していくのか」を十分考えて、評価の基準を設定していくことが必要である。また、理解できていたり、自分の考えはもつことができていたりするのに、うまく表現できない児童への指導にも力を入れていかなければならない。これらのことについては、佐賀県教育センターの[プロジェクト研究（小・中学校社会科）](#)の中で具体例を示しているので参考にしていきたい。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> Ⅲ 各教科の調査結果の分析> 小学校算数

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

小学校算数

算数的活動を効果的に取り入れて、数学的な考え方を育てる授業づくり

「数量や図形についての表現・処理」、「数量や図形についての知識・理解」の評価の観点別正答率及びほとんどの内容・領域別正答率において、「おおむね達成」の基準と同等か上回った。特に、中学1年生の「数量や図形についての表現・処理」の観点においては「十分達成」の基準を上回った。しかし、小学5年生、中学1年生ともに「数学的な考え方」の観点別正答率で「おおむね達成」の基準を下回り、「『活用』に関する問題」や「発展的・応用的問題」の正答率でも、小学5年生、中学1年生ともに「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。授業において算数的活動を充実させ、数量や図形について豊かな感覚を育てながら、基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させるとともに、思考力・判断力・表現力を高めることが必要である。

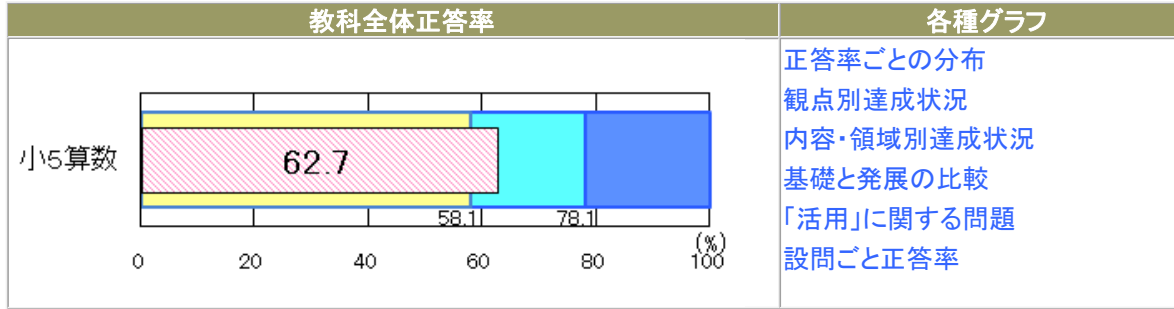
この後、評価の観点については、次のように記す。

- 算数への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし。
- 数学的な考え方 → 「考え方」
- 数量や図形についての表現・処理 → 「表現・処理」
- 数量や図形についての知識・理解 → 「知識・理解」

ア 結果の概要

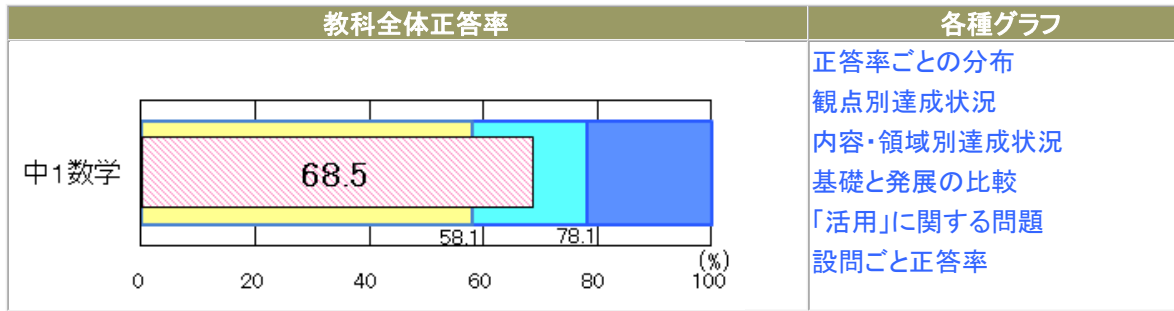
(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率



小5算数 設問毎正答率

大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	2位数×2位数の乗法の計算をすることができる	79.0	0.5	85	65
	(2)	3位数÷1位数の除法の計算をすることができる	90.8	1.0	85	65
	(3)	1位数÷1位数でわり残りの計算をすることができる	38.8	3.4	85	65
	(4)	1/10の位の小数に2位数をかける計算をすることができる	63.5	1.9	85	65
2		四則の混合した式や()を用いた式について理解し、正しく計算することができる	67.3	1.0	75	55
3		数直線から数を読み取ることができる	77.0	0.8	80	60
4	(1)	1より小さい分数の表し方を理解している	88.1	0.4	85	65
	(2)	1より大きい分数の表し方を理解している	30.6	0.6	75	55
5		3位数÷1位数の除法のしくみを理解し、それを生かして考えることができる	74.6	3.2	75	55
6		数を四捨五入して、概数で表すことができる	73.6	0.5	80	60
7	(1)	角の大きさを測定する場面では、分度器の目盛りを読むことができる	84.6	0.2	85	65
	(2)	三角定規の角を合わせた角の大きさを求めることができる	64.9	1.9	80	60
8	(1)	長方形の縦と横の長さから面積を求めることができる	91.3	1.6	85	65
	(2)	長方形の面積の求め方を用いて、必要な辺の長さを求めることができる	64.0	3.9	80	60
	(3)	haとm ² の単位の関係を理解している	41.3	5.4	75	55
9		図形の特徴をとらえ、分類整理することができる	36.2	2.5	65	45
10		展開図からできあがる立体図形を想像することができる	47.6	0.9	75	55
11		平行四辺形の性質を理解し、それを生かして頂点の位置を考えることができる	33.6	4.6	70	50
12	(1)	直方体の面と面の垂直の関係を理解している	81.7	0.9	80	60
	(2)	直方体の辺と辺の平行の関係を理解している	54.4	0.9	80	60
13	(1)	折れ線グラフの傾きを読み取ることができる	47.3	4.5	75	55
	(2)	変化がないときの折れ線グラフの様子を読み取り、説明することができる	20.0	13.3	65	45
14	(1)	伴って変わる2つの数量の関係から一方の値を求めることができる	88.5	2.5	85	65
	(2)	伴って変わる2つの数量の関係を言葉の式に表すことができる	72.4	6.1	75	55
	(3)	伴って変わる2つの数量の関係から一方の値を求めることができる	72.2	5.1	75	55
15		条件過多の問題から伴って変わる二つの数量の関係を見つけることができる	46.1	3.0	70	50



中1数学 設問毎正答率						
大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	異分母分数の加法の計算方法を考え、正しく計算することができる	86.6	1.4	85	65
	(2)	異分母分数の乗法の計算方法を考え、正しく計算することができる	88.3	0.9	85	65
	(3)	異分母分数の除法の計算方法を考え、正しく計算することができる	84.7	1.6	85	65
	(4)	小数の除法の計算方法を考え、正しく計算することができる	83.0	3.6	85	65
2		乗数や除数が小数である場合の乗法や除法の意味について理解している	49.8	0.8	80	60
3		比の性質について理解し、それを適切に用いることができる	19.2	12.1	70	50
4	(1)㉑	面積についての単位を理解している	94.1	0.2	80	60
	(1)㉒	重さについての単位を理解している	95.0	0.2	80	60
	(2)	haとm ² の単位の関係を理解している	50.1	2.8	80	60
5	(1)	速さと道のりから時間を求めることができる	91.8	2.2	85	65
	(2)	縦、横、高さの辺の長さから直方体の体積を求めることができる	94.6	0.9	85	65
	(3)	一辺の長さから立方体の体積を求めることができる	86.6	1.4	80	60
6		平均の考えを理解し、それを適切に用いて数値を求めることを説明することができる	28.5	36.0	65	45
7	(1)	直方体の辺と辺の関係や展開図でのその位置関係を理解している	79.6	0.5	80	60
	(2)	直方体の面と面の関係や展開図でのその位置関係を理解している	97.0	0.3	80	60
8	ア	円柱の特徴と名前を理解している	85.6	2.6	85	65
	イ	三角柱の特徴と名前を理解している	80.6	3.7	85	65
9		直径と円周の関係を理解し、それを適切に用いることができる	36.5	16.0	65	45
10	㉓の拡大図	拡大図を見つけることができる	82.4	0.4	80	60
	$\frac{1}{2}$ の縮図	縮図を見つけることができる	94.1	0.3	80	60
11	(1)	比の性質を用いて、比の一方の量を求めることができる	91.4	0.7	85	65
	(2)	比の性質を用いて、比の一方の量を求めることができる	60.6	6.4	75	55
12	(1)	グラフから、伴って変わる2つの量(時間と道のり)の関係を理解している	45.0	3.8	75	55
	(2)	時間と道のりの関係を比例と判断し、その性質を用いて値を求めることができる	56.4	9.1	80	60
13		具体的な数量の関係を文字の式で表すことができる	87.4	0.9	75	55
14	(1)	複数の資料から必要な情報を抽出し、割合の考えを用いて問題を解決することができる	9.1	1.0	70	50
	(2)	複数の資料から必要な情報を抽出し、割合の考えを用いて問題を解決することができる	8.7	6.7	65	45
15	(1)	伴って変わる2つの量の規則性から数値を求めることができる	90.2	1.7	75	55
	(2)	伴って変わる2つの量の規則性から数値を求める方法を説明することができる	29.8	21.1	65	45

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

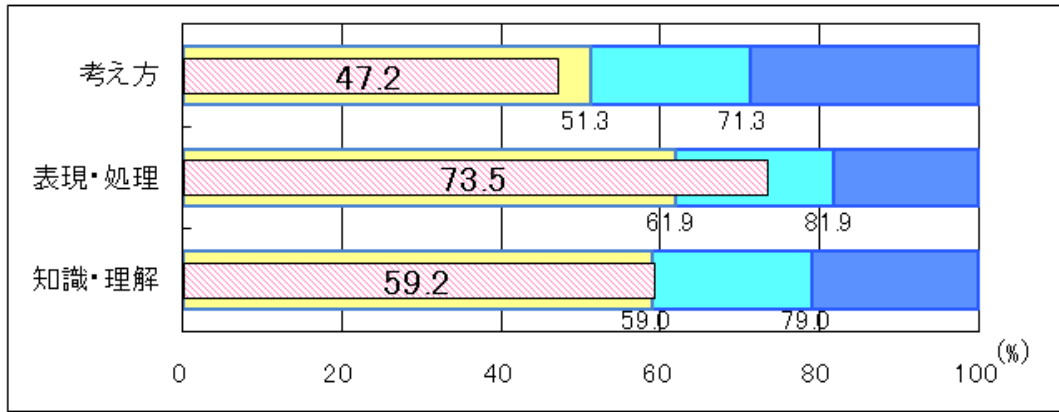


図1 H22年度（小学5年生算数）評価の観点別正答率

「表現・処理」の観点においては「おおむね達成」の基準を大きく上回った。「知識・理解」の観点においては「おおむね達成」の基準を若干上回っているが、これからの指導においても注意が必要である。また、「数学的な考え方」の観点においては「おおむね達成」の基準を下回っており、特に課題としては、「D数量関係」の領域で折れ線グラフの様子を読み取って説明する力が十分ではないことなどが挙げられる。

さらに、「知識・理解」の観点においても、課題として次の2点が挙げられる。

- ・「A数と計算」の領域で1より大きい分数の表し方の理解が十分ではない。
- ・「B量と測定」の領域でhaとm²の関係の理解が十分ではない。

②中学1年生

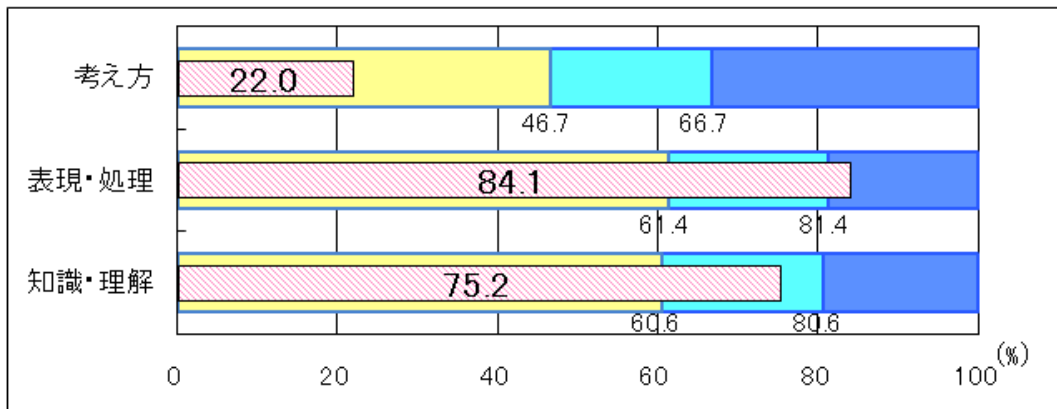


図2 H22年度（中学1年生数学）評価の観点別正答率

「表現・処理」の観点では、「十分達成」の基準を上回り、「知識・理解」の観点でも「おおむね達成」の基準を大きく上回った。一方、「数学的な考え方」の観点においては、「おおむね達成」の基準を大きく下回っており、特に課題としては、次の3点が挙げられる。

- ・「D数量関係」の領域において、平均の考え方をを用いて解決過程を説明する力が十分ではない。
- ・「D数量関係」の領域において、伴って変わる2つの量の規則性から数値を求める方法を説明する力が十分ではない。
- ・「C図形」の領域において、直径と円周の関係を理解し、適切に用いる力が十分ではない。

(ウ) 内容・領域別正答率

①小学5年生

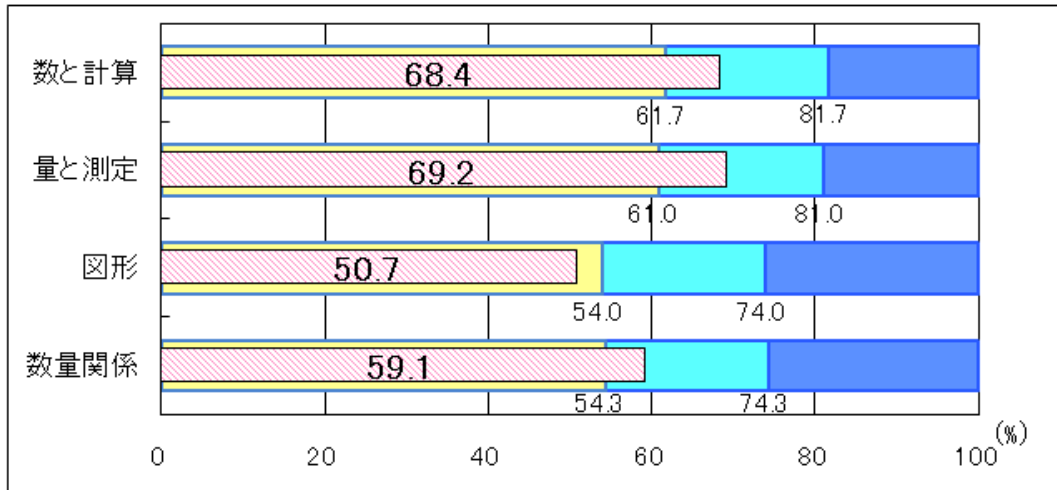


図3 H22年度（小学5年生算数）内容・領域別正答率

「数と計算」、「量と測定」、「数量関係」領域は、「おおむね達成」の基準を上回る結果であったが、「図形」領域においては「おおむね達成」の基準を下回っており、課題としては、次の3点が挙げられる。

- ・敷き詰め模様から台形などの四角形を見つける力が十分ではない。
- ・直方体の立体からその展開図を考える力が十分ではない。
- ・平行四辺形の性質を生かして頂点の位置を考える力が十分ではない。

②中学1年生

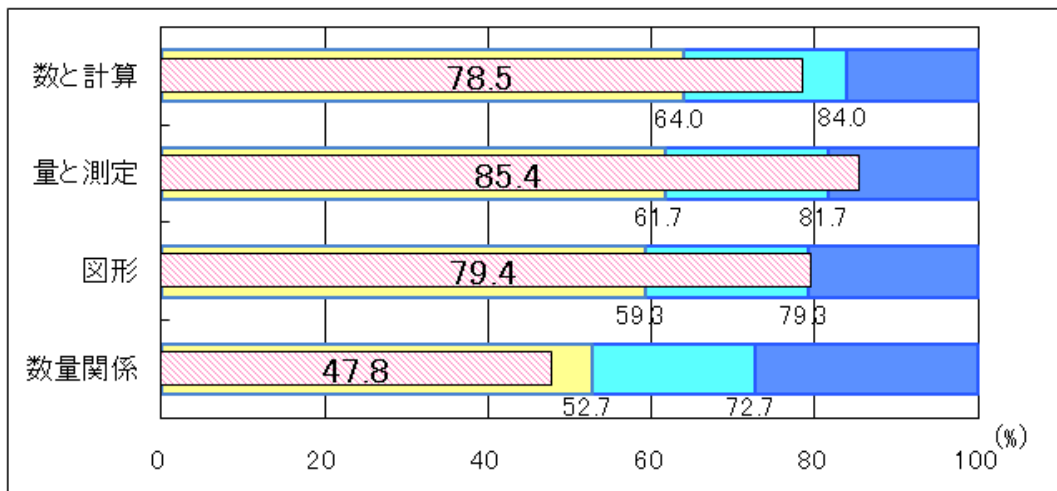


図4 H22年度（中学1年生数学）内容・領域別正答率

「数と計算」、「量と測定」、「図形」領域は、「おおむね達成」の基準を上回る結果であったが、「数量関係」領域においては、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題としては次の2点が挙げられる。

- ・複数の資料から必要な情報を抽出し、割合の考え用いて解決する力が十分ではない。
- ・比の性質を活用して問題解決を図る力が十分ではない。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

小学校6年間の学習の成果を考察するために、平成21年度と平成22年度の中学1年生に着目し、同一学年の経年比較を行った。

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較

中学1年生(同一学年)

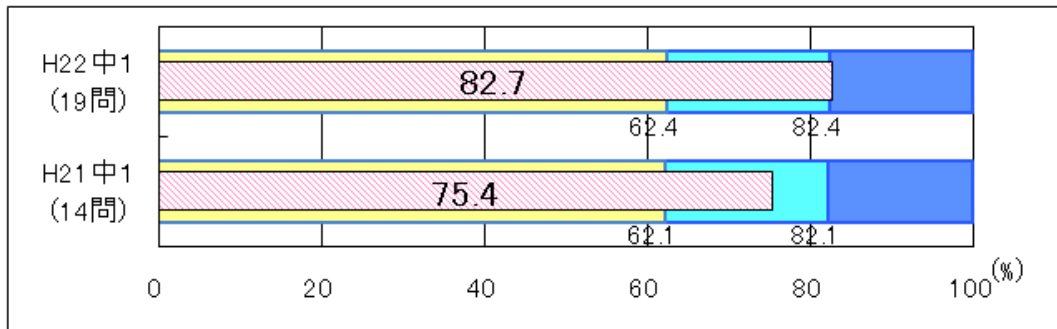


図5 H21・22年度(中学1年生数学)「基礎的・基本的問題」正答率の経年比較

「基礎的・基本的問題」は、平成21年度は、「おおむね達成」の到達基準62.1に対して75.4であり、13.3ポイント上回っていた。今年度の定着状況を見ると、82.7で「十分達成」を上回っていた。経年的な定着状況は、良好で、昨年よりも改善傾向にあるといえる。

(イ) 「活用」に関する問題の経年比較

中学1年生(同一学年)

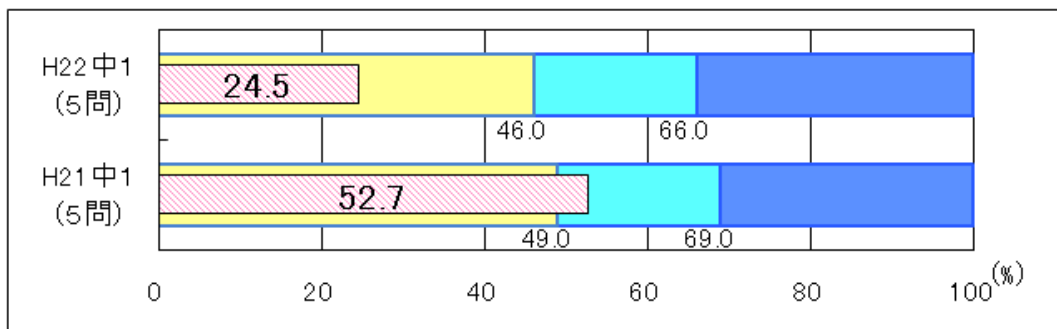


図6 H21・22年度「活用」に関する問題正答率の経年比較

「活用」に関する問題は、平成21年度は「おおむね達成」の到達基準49.0に対して、正答率は52.7であり、3.7ポイント上回っていた。しかし、平成22年度では、「おおむね達成」の到達基準46.0に対して、正答率は24.5で、21.5ポイント下回り、下降傾向である。経年比較を通して見えてきた課題は、グラフの特徴や比の性質を活用しながら解決過程等を言葉や式で記述することなど、生徒の数学的な思考力・判断力・表現力を育成していくことである。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

今年度の調査で、正答率が低かった問題と無解答率が高かった問題について、「基礎的・基本的な知識・技能の定着」と「数学的な思考力・判断力・表現力の育成」の2つの視点で、分析を行った。

傾向1 **図形や数量などについての基礎的・基本的な知識・技能は、ある程度身に付いているが、一部の設問において定着に課題が見られる。**

[小学5年生 大問1の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問1(3)	1位数÷1位数で割り進みの計算をすることができる。 (短答式)	6÷4を割り切れるまで計算する。	38.8	3.4	85.0	65.0

○ 解答状況

1位数÷1位数を行い、割り切れるまで割り進んでいくという問題で、正答率は38.8と「おおむね達成」の期待正答率65.0を下回っている。無解答率は3.4である。割り進めて商を小数第一位に立てることができなかつたり、小数点を打ち忘れたりしたことが要因であると考ええる。

○ 指導法改善の手立て

計算を行う際には、商の見積もりをすることが必要となってくる。また、問題の意味に合うように割り進めて、小数点を打つことも忘れないように指導することが必要である。小数点を打ち忘れたときに商の見積もりとの違いに気付かせるような指導も大切である。また、筆算を行う際には6を6.0とみて計算する工夫にも児童に気付かせて、計算練習等に取り組ませる必要がある。

[小学5年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(2)	1より大きい分数の表し方を理解している。 (選択式)	水かさが何リットルかを選択肢から選ぶ。	30.6	0.6	75.0	55.0

○ 解答状況

1リットルを超える水のかさを分数で求める問題で、30.6と「おおむね達成」の期待正答率55.0を大きく下回っている。誤答としては、「オ 7/10リットル」を選択する児童が多かったと思われる。これは、分数は単位分数のいくつかで表すことができることを十分に理解できていないためだと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

児童は、「分数は、いくつかに分けたうちのいくつか」というイメージはもっている。しかし、本問題の正答率から考えると、「何をいくつに分けたうちのいくつ分」の「何を」に当たる「基準」に目を向けていないことが予想される。分数の大きさを求める場合、「単位分数」のもととなる「基準」をいつも意識させるような指導をする必要がある。例えば、「5/3は1/3の5こ分」というように、児童が図と言葉を結び付けて説明できるようにする指導が必要となってくる。

傾向2 **基礎的・基本的な知識・技能を活用することに課題がある。**

[小学5年生 大問9]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問9	図形の特徴をとらえ、 分類整理することができる。 (選択式)	合同な正三角形を敷き 詰めた模様の中にでき る四角形を選択肢から すべて選ぶ。	36.2	2.5	65.0	45.0

○ 解答状況

合同な正三角形を敷き詰め、その中にできる四角形(正三角形を2枚以上組み合わせた四角形)を選択肢の中からすべて選ばせる問題であった。正答率は36.2と「おおむね達成」の期待正答率45.0を下回る結果となった。原因としては、ひし形や平行四辺形を選択したものの、台形を選択しなかったことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

本問題では、合同な正三角形を敷き詰めた模様であることをしっかりと理解することが大切である。また、辺の長さや辺の並び方に着目させるとともに、いろいろな四角形の性質を基にして判断する力が必要である。そこで、「C図形」の領域の指導に当たっては、図形の構成要素に着目させて性質を見いださせたり、その理由を説明させたりすることが大切である。

[小学5年生 大問13]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問13(1)	折れ線グラフの傾きを 読み取ることができる。 (選択式)	伴って変わる2つの数 量(時間と道のり)を表 した、正しい折れ線グ ラフを選び、選んだ理 由を記述する。	47.3	4.5	75.0	55.0
問13(2)	折れ線グラフの様子を 読み取り、説明するこ とができる。 (記述式)		20.0	13.3	65.0	45.0

○ 解答状況

太郎さんの家を出発してコンビニエンスストアに途中寄り、郵便局に行くまでの時間と進んだ道のりとの関係を表すグラフを選び、選択した理由を記述させる問題であった。グラフを選択する問題の正答率は47.3と、「おおむね達成」の期待正答率55.0を下回り、さらに選択理由を記述する問題の正答率は20.0と、「おおむね達成」の期待正答率45.0を大きく下回った。また、選択理由を記述する問題での無解答率は13.3と高かった。自分の考えを筋道を立てて論理的に説明することに課題がある。

○ 指導法改善の手立て

本問題は、時間と道のりの関係をグラフに表現したものである。自転車で進んでいるときは、時間がたつにつれて道のりが長くなることや、コンビニエンスストアに立ち寄ったことに着目してグラフを読み取ることが大切である。また、そのグラフの特徴をとらえて記述するなど、日ごろの授業の中で身に付けさせていく必要があると考える。児童は、理解していることでも、それを相手に伝えるためには「何を」「どのように」記述すればよいのかを考え、論理的に表現する力を付けさせなければならない。さらに、児童には授業中に考えを述べるときは、問われていることに対して適切に答えられているかということを常に意識させることが大切であり、発表する前に自分の考えをノートに記述するなどの活動を取り入れることも効果的である。

[中学1年生 大問3]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問3	比の性質について理解し、それを適切に用いることができる。 (短答式)	縦と横の比が3:5の旗をつくるとき、縦45cm、横65cmの長方形の布からできるだけ大きな旗をつくるには縦、横の長さをそれぞれ何cmにするかを考える。	19.2	12.1	70.0	50.0

○ 解答状況

縦と横の長さの比が3:5の長方形の旗を作るために縦45センチメートル、横65センチメートルの長方形の布からできるだけ大きな旗を作るために長さをどのように設定すればよいかという問題であった。正答率は19.2と「おおむね達成」の期待正答率50.0を大きく下回っている。また、無解答率も12.1であった。問題の意味が理解できなかつたり、比の性質を理解できていなかつたりしたことが要因だと思われる。

○ 指導法改善の手立て

この問題では、問題の意味をきちんと理解できるように問題をよく読んで条件を理解することが重要となってくる。また、比の基本的な理解ができるように「たてと横の長さの比が3:5でたての長さが30cmのときの横の長さを求めましょう。」といった基本的な問題が解けるように、比の性質を理解させる必要がある。そのようなことを踏まえて、縦を最大限に取った場合と横を最大限に取った場合で旗の面積を比べるといった、自分の解決過程を振り返る活動を、日ごろの授業においても取り組ませることが重要となってくる。さらに、計算をして解決することも大切な要素となってくるので、計算力を培っていく手立ても必要である。

[中学1年生 大問6]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問6	平均の考えを理解し、それを適切に用いて数値を求めることを説明することができる。 (記述式)	5回のソフトボール投げで、投げた距離の平均を28m以上にしたい。4回目までの投げた距離の平均が26mであるならば、5回目36m以上投げればよいことを説明する。	28.5	36.0	65.0	45.0

○ 解答状況

ソフトボール投げの場面で、4回投げた距離の平均を踏まえて条件に合うように5回目の距離を考え、式や言葉で説明させる問題であった。正答率は28.5と「おおむね達成」の期待正答率45.0を下回っている。また、無解答率が36.0と非常に高かった。平均の考えが十分に理解できていなかつたり、考えを論理的に説明することがうまくできていなかつたりしたためと思われる。

○ 指導法改善の手立て

まずは、平均の考え方を身近な題材を使って、理解させることが重要である。また、この問題は平均値を求めるような問題とは異なり、なぜこのような答えになるのかという理由を踏まえ、これをどのように論理的に説明するかということを考えてさせる問題である。日々の授業の中で、自分の考えを図や式、言葉を使って適切に説明するなどの活動を取り入れ、友達に説明させることを積み重ねていくことが大切である。その際、自己評価や相互評価等を取り入れて自分の表現を見直させたり、説明を工夫させたりして、論理的に説明する力を付けていくことが必要である。

[中学1年生 大問14]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問14(1)	複数の資料から必要な情報を取り出し、割合の考えを用いて問題を解決することができる。 (選択式、短答式)	棒グラフ、円グラフの2つを関連づけて売上高を求める。	9.1	1.0	70.0	50.0
問14(2)		棒グラフ、円グラフ、値段表の3つを関連づけてケーキの個数を求める。	8.7	6.7	65.0	45.0

○ 解答状況

あるケーキ店の月別売り上げに関する資料で棒グラフ、円グラフ、値段表の3つを関連付けて解決する問題であった。小問(1)の8月の売り上げが一番多かったケーキを選択する問題の正答率は9.1と「おおむね達成」の期待正答率50.0を大きく下回る結果となった。また、小問(2)の8月に売れたイチゴショート個数を考える問題の正答率は8.7であった。条件に合うグラフを読み取り、複数の資料を関連付けて解決することに課題が見られる。

○ 指導法改善の手立て

この問題では、棒グラフや円グラフなどの複数の資料を関連付けて読み取らせることが大切な課題である。算数科だけでなく、社会科などでもこれらの内容を意識した指導が必要となってくる。また、割合の考え方も重要となり、「～の～%は～」という関係を確実に理解するとともに、実際の数値を求めることができるように指導することも大切である。さらに、計算する際、桁数が大きい場合も計算の工夫を行うなどの力が必要となってくるので、日ごろの計算練習などにおいても、意図的に桁数が大きい問題に取り組ませることが必要となってくる。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった課題は、算数的活動を一層充実させ、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付け、それらを基にして解決していくような思考力・判断力・表現力を育てていくことである。そのためには、基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせ、それらを基に発展的・応用的に考えたりする活動や、考えたことを適切に表現したり、説明したりするような算数科における言語活動を充実させることが大切だと考える。

ア 基礎的・基本的な知識・技能の定着

算数科の内容は、系統性や学習の連続性が明確な教科である。日々の授業の中で、児童は基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、それらを基にして新たな知識・技能を積み上げていくことになる。そのような観点から教師は、1時間1時間の授業を大切に、児童に確実に基礎的・基本的な知識を定着させなければならない。

そこで、

- ・単に知識として覚えさせるのではなく、児童が思考活動を繰り返しながら新しい知識を生み出すような授業を目指していくこと。

- ・獲得した基礎的・基本的な知識・技能を定着させるために、練習問題(適用問題や応用問題)やドリルなどに取り組みさせていくこと。

- ・学習したことを日常生活に活用させるような問題にも取り組み、基礎的・基本的な知識・技能をより一層定着させること。

以上のようなことを配慮する必要がある。

イ 考えを表現し、説明する活動を通じた思考力・判断力・表現力の育成

算数科において、考えを表現したり、説明したりする力を児童に身に付けさせることは日々の授業の積み重ねがあつて初めてできることである。そこで、

- ・課題に対して考えたことをブロックやおはじきなどの具体物を実際に動かしたり、絵や図、グラフ、表などを使ったりしながら、自分の考えを表現する活動。

- ・課題に沿うように、式や言葉などを使って適切に表現する活動。

- ・隣の友達などに、ブロックなどの具体物を操作したり、ノートやワークシートに書いたりしたものを基にわかりやすく説明する活動。

- ・相手からの説明を聞いて、よく分からなかったことをもう一度聞き直したり、説明のよかったところを知らせたりする活動。

- ・話し合いを通して、友達の考えのよさをクラス全員で検討し、深めていく活動。

- ・友達の考えのよさをを使って適用題や応用題、生活とつなげるような問題に取り組む活動。

このような活動を繰り返すことによって、児童の思考力・判断力・表現力がはぐくむことが重要である。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> Ⅲ 各教科の調査結果の分析> 小学校理科

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

小学校理科

児童の体験の充実の保証と考えを交流しあえる授業づくり

小学5年生、小学6年生、中学1年生のすべての評価の観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、中学1年生では、「観察・実験の技能・表現」については、「おおむね達成」の到達基準60.0に対して、79.5と大きく上回っている。「自然事象についての知識・理解」については、小学5年生、小学6年生、中学1年生ともに、「十分達成」の基準に近くなっており、良好な定着状況が見られた。実験などを通して、児童が体験的に実感しやすい内容については、理解はおおむね良好である。しかし、実験器具の正しい使い方や具体的な数値の読み取りなどの技能に関して、課題が見られた。また、「科学的な思考」については、小学5年生、小学6年生、中学1年生ともに、「観察・実験の技能・表現」「自然事象についての知識・理解」に比べ、低い結果となり、今後の指導への課題が残る。特に「科学的な思考」を要するものについては、指導者が常に「発展・応用及び活用とは何か」ということを意識しながら、学んだ知識や技能を積極的に使うような学習場面を設けることが必要である。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

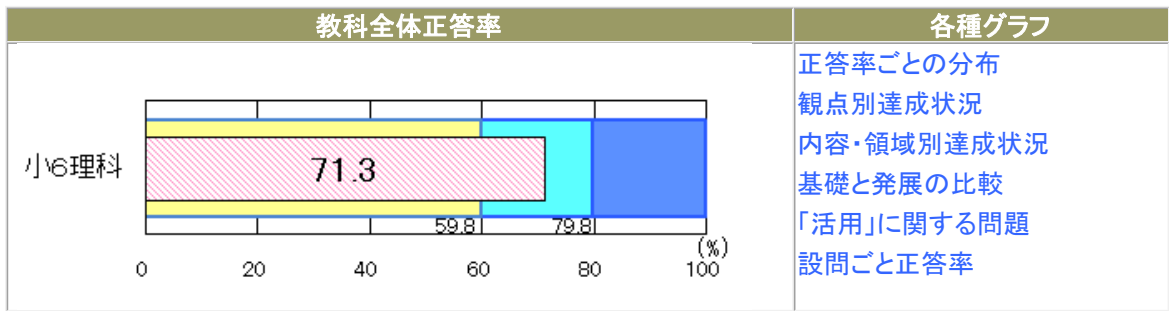
- 自然事象への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし
- 科学的な思考 → 「思考」ただし本文中では「科学的な思考」
- 観察・実験の技能・表現 → 「技能・表現」
- 自然事象についての知識・理解 → 「知識・理解」

ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

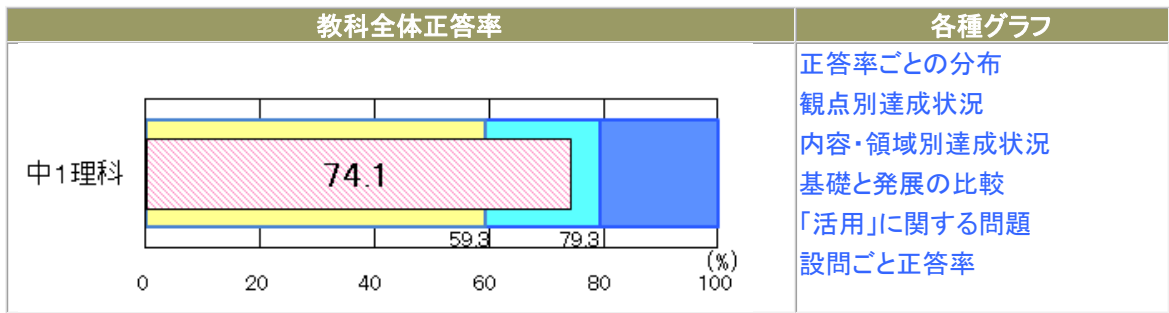
(ア) 教科全体及び設問毎正答率





小6理科 設問毎正答率

大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	振り子の長さやおもりの重さなどの条件を整えながら、実験することができる	87.7	0.1	85	65
	(2)	振り子の長さやおもりの重さなどの条件を整えながら、実験することができる	76.3	0.1	85	65
	(3)	振り子の実験結果から、振れ幅、おもりの重さ、振り子の長さの関係づけて考えることができる	67.1	0.7	75	55
2	(1)	導線の巻き数や乾電池の数などの条件を整えながら、実験することができる	71.9	0.2	85	65
	(2)	導線の巻き数や乾電池の数などの条件を整えながら、実験することができる	63.2	0.2	85	65
3	(1)	電磁石に電流が流れているときの極について理解している	52.5	0.2	80	60
	(2)	棒磁石と電磁石の違いを、比較して考えることができる	32.9	4.0	70	50
4	(1)	物が水に溶けて見えなくなっても、溶かした物の重さはなくなることを理解している	92.6	0.2	80	60
	(2)	物が一定量の水に溶ける量には限りがあり、水の量と溶ける量の規則性を考えることができる	65.8	3.5	75	55
5	(1)	発芽の条件を調べる際、空気などの条件を整えながら、実験することができる	65.0	0.2	80	60
	(2)	発芽の条件を調べる際、明るさなどの条件を整えながら、実験することができる	62.8	3.9	80	60
	(3)	水、空気及び温度の条件を整えば発芽することから、日光が関係していないことを推論することができる	77.6	2.0	75	55
6	(1)	成長の条件を調べる際、自分なりの予想を立てて条件を統一した実験方法を考えることができる	72.6	3.1	80	60
	(2)	植物の成長について条件を統一して実験をすることができる	53.9	5.3	80	60
	(3)	植物の成長には、肥料や日光が関係していることを理解している	92.0	1.1	80	60
	(4)	植物の成長には、肥料が関係していることを、葉の数の違いを比較して考えることができる	67.0	3.0	75	55
7	(1)	開いている花の雌しべの状態を理解している	62.2	0.8	80	60
	(2)	雌しべの先に花粉がつくことを受粉ということを理解している	91.4	2.7	85	65
	(3)	温室などで放されるミツバチが受粉に利用されていることを推論することができる	60.4	5.9	75	55
8	(1)	メダカの卵が子メダカになるまでのようすを理解している	92.0	0.5	85	65
	(2)	メダカの卵は、日がたつにつれて中のようなすが変化することを理解している	38.4	0.8	80	60
	(3)	生まれたてのメダカは養分を腹に蓄えていてえさを食べなくても生きていけることを理解している	88.4	2.1	80	60
	(4)	インゲン豆の子葉とメダカの腹に蓄えられている養分が同じような役割りであると考えることができる	81.8	0.9	75	55
9	(1)	魚が水中の小さな生き物を食べ物にして生きていることを理解している	94.7	0.8	85	65
	(2)	水中の微生物を観察するために、適切な実験器具を選ぶことができる	43.3	0.9	80	60
	(3)	水中の微生物をプレパラートにして観察することを理解している	62.6	1.4	80	60
10	(1)	川原の様子をもとに、上流・中流・下流を区別することができる	84.1	1.2	80	60
	(2)	流れる水の速さが変化すると、割ったり押し流したりする力も変化することを理解している	85.1	1.5	80	60
	(3)	川が曲がって流れているところでは、流れの働きが違うため、内側に川原ができることを理解している	77.8	1.7	80	60
11	(1)	測定した1日の気温の記録を表に表すことができる	71.3	2.7	85	65
	(2)	測定した1日の気温の変化を、記録から読み取り、他の日と比較することができる	80.9	3.9	80	60
	㊸晴れ	1日の気温の変化は、天気によって違いがあることを理解している	86.9	3.8	80	60
	㊹理由	1日の気温の変化と天気を関係づけて考えることができる	50.7	5.3	75	55



中1理科 設問毎正答率

大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	乾電池のつなぎ方と電流の量を関係づけて考え、電流の量によって電磁石の引き付ける強さが変わることを理解している	97.3	0.0	85	65
	(2)	乾電池2個を直列につなぐことで、乾電池1個のときより大きな電流が流れることを豆電球の明るさの変化から考えることができる	91.3	0.0	80	60
	(3)	電流計の使い方を理解し、正しく測定することができる	51.5	0.9	75	55
	(4)	電磁石の引き付ける強さを強くする方法を考えることができる	98.6	0.0	85	65
	(5)	電磁石の極を調べるための有効な方法を考えることができる	94.0	0.1	85	65
	(6)	棒磁石と電磁石の違いを、比較して考えることができる	26.6	3.8	70	50
2	(1)	線香の煙を使って、ろうそくが燃えているときの空気の動きを調べることができることを理解している	80.4	3.1	80	60
	(2)	物の燃え方と空気の動きを関係づけたら、物の燃焼のしくみについて考えることができる	82.5	1.7	75	55
	(3)①②	石灰水を使ってものが燃えたあとの空気の変化を調べることができること、石灰水は二酸化炭素があると白く濁ることを理解している	76.6	0.9	75	55
	(4)	二酸化マンガンにろすい過酸化水素水を加えると酸素が発生すること、酸素にはものを燃やす働きがあることを理解している	81.4	0.2	80	60
	(5)	物の燃え方と空気の動きを関係づけたら、物の燃焼のしくみについて考えることができる	75.9	2.2	75	55
3	(1)	水溶液の性質を理解し、実験の結果から水溶液を見分けることができる	61.1	2.8	75	55
	(2)	炭酸水は二酸化炭素が溶けていることを理解している	50.1	5.2	80	60
	(3)①	アンモニア水の性質とトマゾ紙の変化を理解している	58.5	0.8	75	55
	(3)②	塩酸は、金属を溶かして別のものに変えるはたらきがあることを理解している	65.7	0.4	80	60
4	(1)	実験の結果から、呼吸の働きを考えることができる	59.2	0.3	75	55
	(2)	人の呼吸の働きが肺で行われることを理解している	82.5	2.1	85	65
	(3)	水槽の魚を長時間生かす方法を考えることができる	54.1	5.4	75	55
5	太郎	小腸の位置や働きを理解している	71.5	1.0	80	60
	三郎	口の位置や働きを理解している	80.5	0.7	80	60
6	(1)	デンプンがあるかを調べる方法を知っている	86.7	3.9	85	65
	(2)	ヨウ素液はデンプンがあると青むらさき色に変わることを理解している	88.4	0.8	85	65
	(3)	実験結果から、葉への日光のあたり方とデンプンのでき方を関係づけて考えることができる	83.9	4.0	75	55
7	(1)	根から取り入れられた水は主に葉から蒸散していることを理解している	83.4	0.8	85	65
	(2)①	植物の水の通り道と蒸散との関係を正しく理解している	81.4	2.4	80	60
	(2)②	植物の水の通り道と蒸散との関係を正しく理解している	85.5	3.0	80	60
	(2)③	根から取り入れられた水が植物のからだから外へ出ることを蒸散ということを理解している	27.2	14.3	80	60
8	(1)	学習や経験をもとに、生き物は水が必要であることを考えることができる	59.5	0.8	85	65
	(2)	生き物は互いにかかわり合って生きており、生き物が生きていくためには、動物や植物、自然の環境を大切にしなければならないことを理解している	92.9	0.8	75	55
9	(1)	礫、砂、粘土などが層となって重なり合って広がったものを地層ということを理解している	90.9	2.6	85	65
	(2)	地層には化石が含まれていることを理解している	91.9	3.1	85	65
10	(1)①	月の形が変化して見えることを、太陽と地球と月の位置から推論することができる	76.4	1.3	75	55
	(1)②	月の形が変化して見えることを、太陽と地球と月の位置から推論することができる	54.1	1.5	70	50
	(2)	太陽と月の特徴を理解している	78.0	1.3	80	60

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

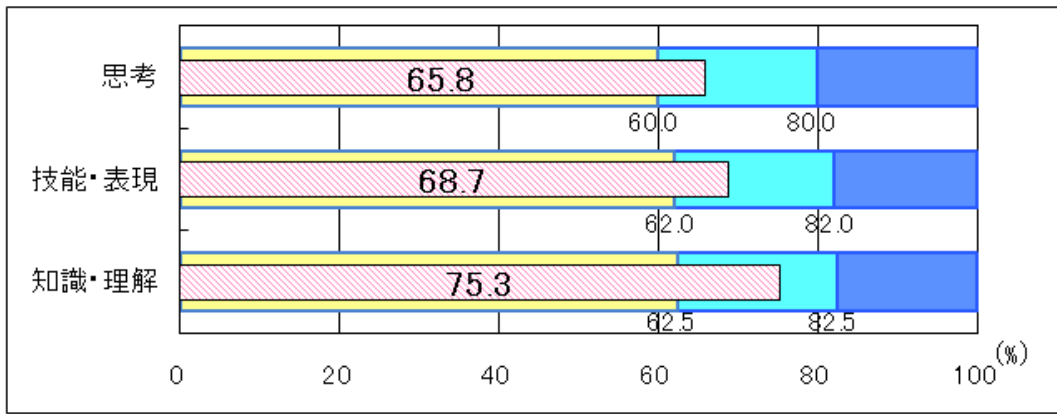


図1 H22年度（小学5年生理科）評価の観点別正答率

すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回った。ただし、「科学的な思考」については、他の観点と比べて、やや正答率が低くなっている。この観点にかかわる問題として、小学4年生の学習内容である「電池のはたらき」の回路などが挙げられる。これは児童が日常生活で経験する機会が少ない事象であるが、科学的な思考を要するものである。目に見えない電気に対して、導線につなぐ乾電池の極の向きを変えると電流の流れる向きが変わるという事象から、電流についての考えをもたせることが求められる。実験の結果を整理させ、そこからどのようなことが言えるのかを丁寧に指導していく必要がある。

②小学6年生

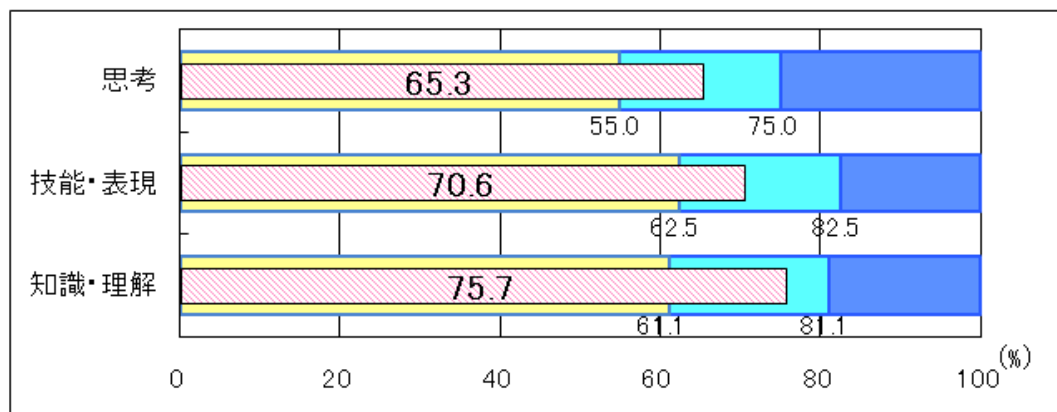


図2 H22年度（小学6年生理科）評価の観点別正答率

すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っている。ただし、「技能・表現」については、他の観点と比べて、やや正答率が低くなっている。この観点については、例えば小学5年生で取り扱う水中の小さな生き物の観察で顕微鏡を使う場面のような、高度な実験器具の操作に関する指導と学習がどのようになされているか、ということにかかわってくる。顕微鏡を用いて観察する際にはできるだけ児童が自らの手で対象となる生き物を最もよく見える位置に動かしたり、ピントを合わせたりするなど、体験を通して、実験器具の扱い方を理解をさせていく必要がある。

③ 中学1年生

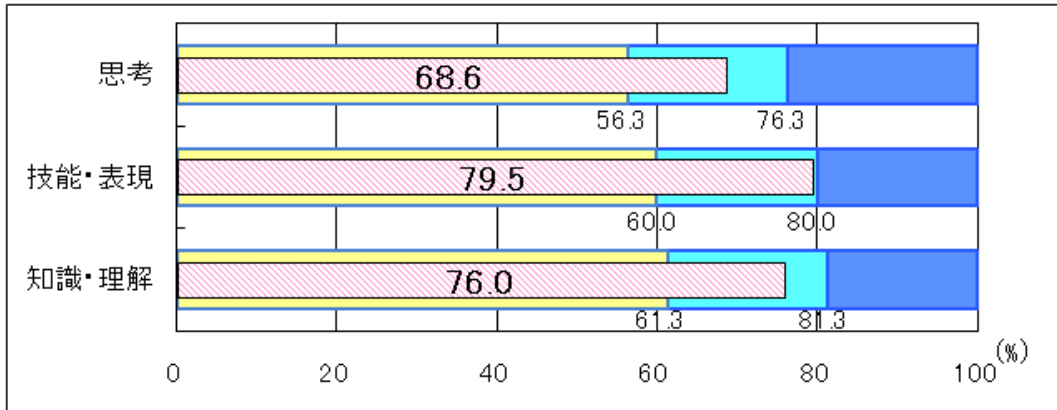


図3 H22年度（中学1年生理科）評価の観点別正答率

すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「技能・表現」の観点では、「十分達成」の基準に迫っていた。小学6年生の学習内容では、塩酸などの薬品やガスバーナーなど理科の学習特有の素材や器具を扱っていくことが多い。この結果からは、それら適切に使用しながら学習が進められた様子がうがえる。「科学的な思考」に関しては、今後も言語活動の充実を図り、高めていく必要があると考える。

(ウ) 内容・領域別正答率

①小学5年生

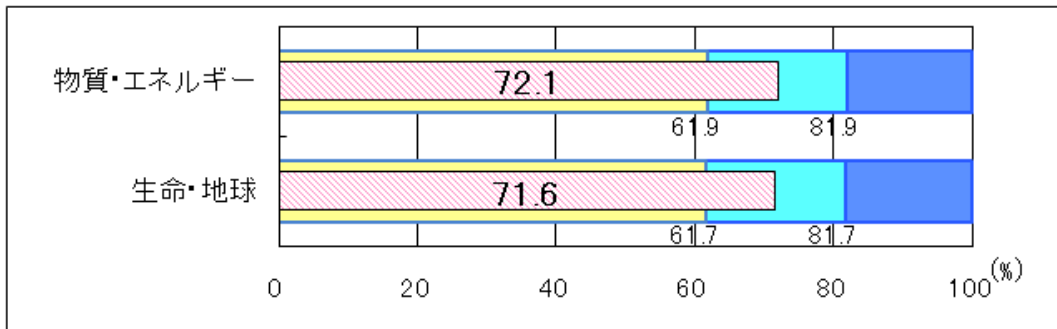


図4 H22年度（小学5年生理科）内容・領域別正答率

②小学6年生

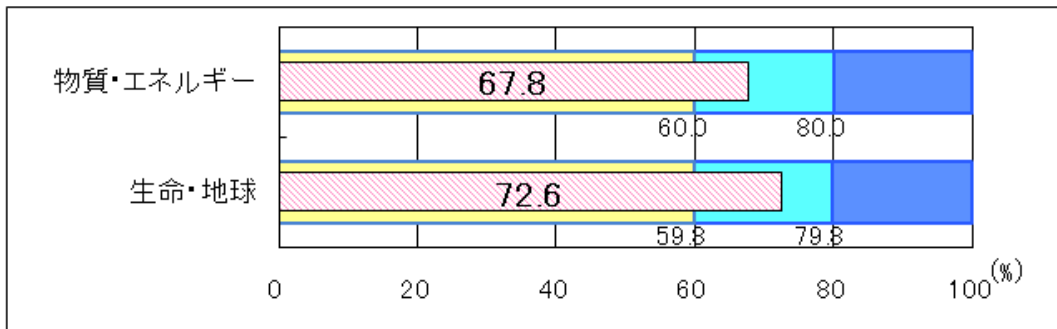


図5 H22年度（小学6年生理科）内容・領域別正答率

③中学1年生

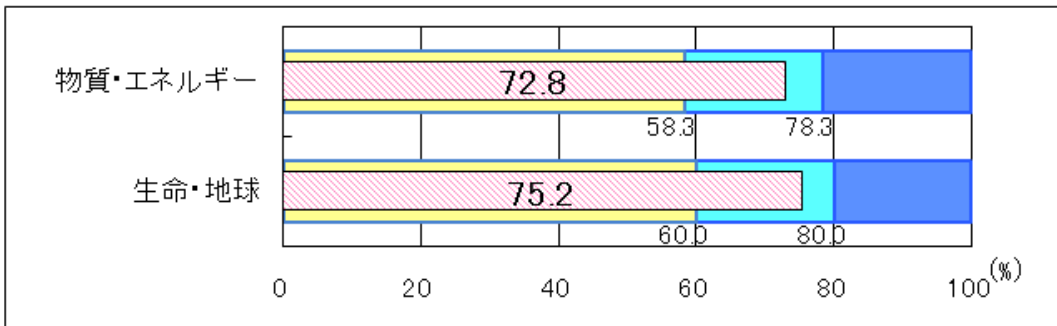


図6 H22年度（中学1年生理科）内容・領域別正答率

新学習指導要領の内容は、「A物質・エネルギー」、「B生命・地球」の2つの領域に整理されている。小学5年生では、領域別の結果に大きな差は見受けられないが、小学6年生と中学1年生では、やや「B生命・地球」に比べて「A物質・エネルギー」の方が低い傾向が見られる。「B生命・地球」の主に自然事象について、明確な視点や観点をもった観察を中心に学習していくのに対して、「A物質・エネルギー」は、様々な素材、器具を使用しながら実験を中心に学習を進めていくこと、更に問題解決の目的と実験を関係付けて活動を行っていくことに児童が難しさを感じていることも一因として考えられる。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

「基礎的・基本的問題」と、評価の観点から「科学的な思考」を取り上げ、平成21年度の小学5年生と平成22年度の小学6年生による同一児童についての経年比較を行う。また平成21年度に課題として挙げられていた観察・実験の技能の確実な習得の点について、平成21年度の中学1年生と平成22年度の中学1年生の同一学年の経年比較を行う。

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較

H22小学6年生とH21小学5年生(同一児童)

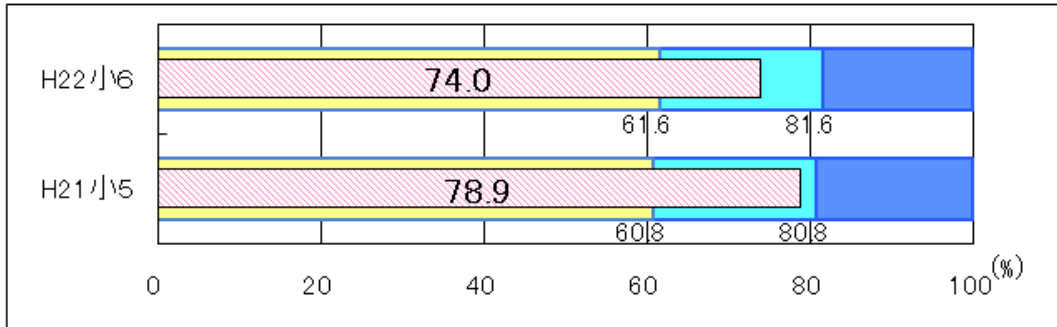


図7 H22年度(小学6年生理科)、H21年度(小学5年生理科)「基礎的・基本的問題」正答率の経年比較

平成21年度の小学5年生では、「おおむね達成」の到達基準60.8に対して、それを18.1ポイント上回る正答率78.9であった。平成22年度の小学6年生では、「おおむね達成」の到達基準61.6に対して、それを12.4ポイント上回る正答率74.0であった。正答率度数分布を比較すると、平成21年度に比べ、平成22年度は、やや下回る結果となった。平成22年度の小学6年生の「基礎的・基本的問題」を各設問ごとに見ていくと、児童が生活の中で実体験として豊富な「自然の事象についてのきまり」などは、よく理解できている。しかし、「電磁石」や「メダカの成長の様子」など、目に触れる機会が少ない事象や意識して長期にわたって観察していかなければならないようなものについて課題が見られた。

(イ) 「科学的な思考」の経年比較

H22小学6年生とH21小学5年生(同一児童)

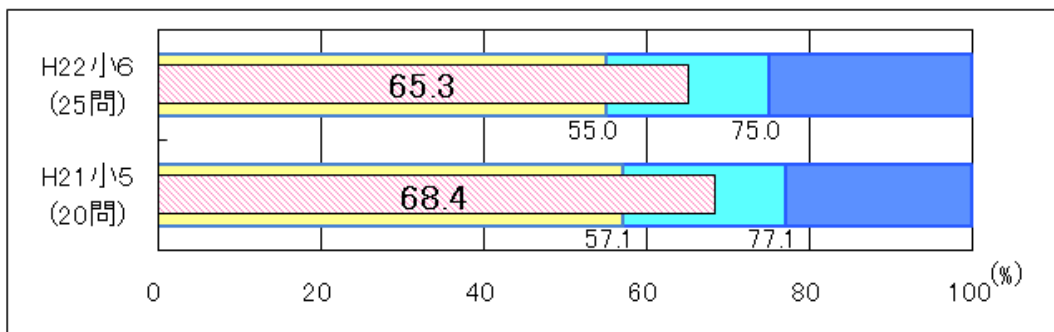


図8 H22年度(小学6年生理科)、H21年度(小学5年生理科)「科学的な思考」正答率の経年比較

平成21年度の小学5年生では、「おおむね達成」の到達基準57.1に対して、それを11.3ポイント上回る正答率68.4であった。平成22年度の小学6年生では、「おおむね達成」の到達基準55.0に対して、それを10.3ポイント上回る65.3であった。正答率度数分布を比較すると、平成21年度に比べ、平成22年度はやや下回る結果となった。しかし、これを科学的な思考の正答率の度数分布を見ると次のようになる。

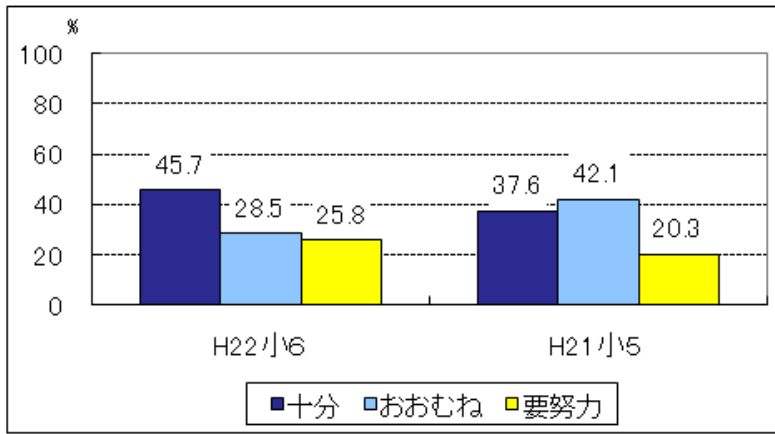


図9 H22年度(小学6年生理科)、H21年度(小学5年生理科)「科学的な思考」正答率の度数分布比較
 平成21年度は、「十分達成」が37.6%だったのに対し、平成22年度は「十分達成」が45.7%と、「十分達成」の基準に到達している児童が増えていることが分かる。ただし、「要努力」の割合を見ると、平成21年度では、20.3%であったのが、平成22年度では25.8%と、「要努力」の児童の割合が増えている。このことから、「科学的な思考」に関して、二極化に向かう傾向が懸念される。平成22年度の調査問題では、月と太陽の関係を推論しながらとらえていくことに課題が見られた。児童に月や太陽の関係を推論して考させる際、その考えをことばとして表現させて、児童自身が何を根拠に推論しているのか、考えを明確にさせていくような指導が求められる。

(ウ) 「観察・実験の技能・表現」の経年比較
H21・22年度中学1年生理科(同一学年)

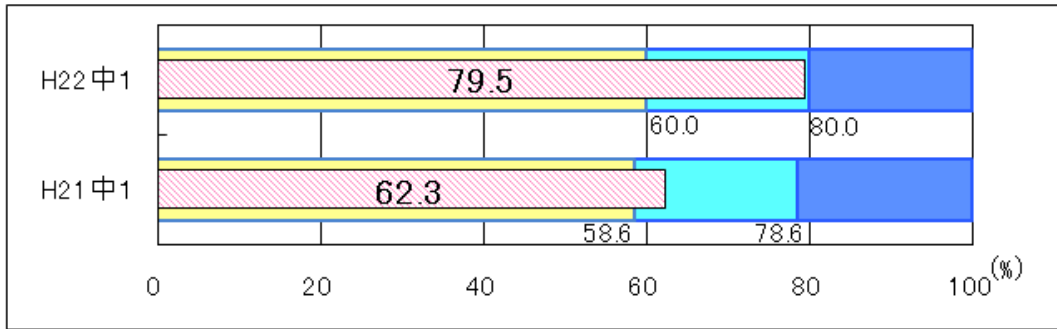


図10 H21・22年度 (中学1年生理科)「観察・実験の技能・表現」正答率の経年比較

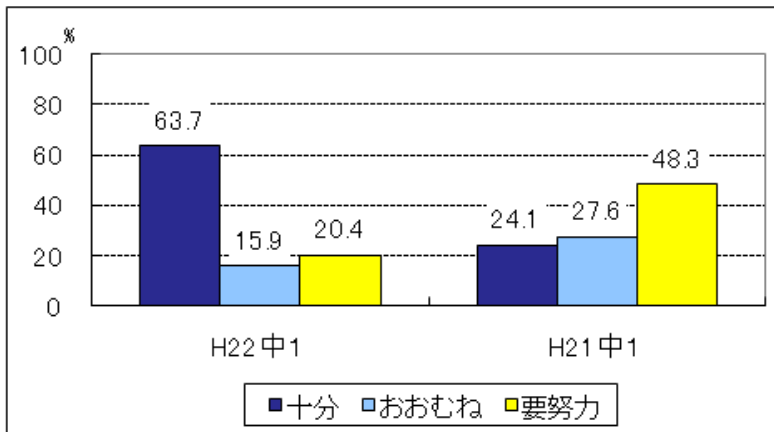


図11 H21・22年度 (中学1年生理科)「観察・実験の技能・表現」正答率の度数分布比較

平成21年度の中学1年生の調査で、正答率が低く、課題とされたところである。平成21年度の中学1年生では、正答率62.3だったのに対し、平成22年度の中学1年生では、正答率79.5と大きく向上している。また、その正答率の度数分布を見ると、平成21年度「十分達成」が、24.1%だったのに対し、平成22年度では「十分達成」が63.7%と大きく向上している。「要努力」に関しても、平成21年度は、48.3%だったのに対し、平成21年度は、20.4%と「要努力」の児童が減少している。実感を伴う理解として、観察や実験の指導の改善が図られたと考えられる。また平成20年度からの理科支援員の配置も観察や実験の指導の改善に向けて、成果が見られると考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成22年度の調査結果を受け、学習内容の理解、定着の面から、「自然事象についての知識・理解」について、技能習得の面から「観察・実験の技能・表現」の内容について、総合的に分析する。また、新学習指導要領を受け、新しく加わった内容や学年の移行学習内容についても分析する。

傾向 1 **経験的に実感しやすい事象内容の理解は良好だが、経験が少なく、実感にくい事象内容の理解に課題がある。**

[小学5年生 大問5の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問5(2)	水の温まり方を理解している。 (選択式)	温められた水の動きを4つの選択肢から選ぶ。	88.5	0.4	85.0	65.0

○ 解答状況

温められた水が、どのように移動しているのかを問う選択式の問題である。「十分達成」の期待正答率85.0を上回る正答率88.5と良好の結果となった。

○ 指導法改善の手立て

温められた水の動きについては、視覚的に分かりづらいものである。温められた水が上に移動するであろうことは、児童は感覚的にはイメージもっているが、どのように動いているのかを確かめるには、実際に味噌や茶殻などを使って、温められた水の動きを視覚化していく必要がある。本調査の結果からは、児童が実際の実験を基に、具体的な水の動きを理解していることがうかがえる。

[小学5年生 大問10の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問10(3)	時刻によって月の位置が変化していることから、月は絶えず東の方から西の方へ動くことを推論できる。 (選択式)	午後2時頃見える月が、午後6時頃どの方向に見えるか文に当てはまることばを書き入れる。	51.2	3.5	75.0	55.0

○ 解答状況

昼間に見える月の動きを問う選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率55.0を下回る正答率51.2であった。

○ 指導法改善の手立て

月については、児童は日常生活でよく目にするものである。しかし、太陽が、影の動きなどから、動いていることが実感できることに比べて、「月の動き」を実感するような体験をしている児童は少なく、意識することも少ない。小学4年生では、実際に昼間に見える月を観察し月の動きについて学習する。月も太陽と同じように、動いていることは理解できている。しかし小学3年生の太陽の動きのように時間を追って終日を通して動きを調べることに比べて、月の動きに関しては、昼間に見える月の特性上、観察できる時間が短かったり、太陽のときのように時間を追って連続的に観察したりする回数も少ないことなどから、月の動きに、実感を伴っていない様子がうかがえる。また観察者の位置から「東西南北」の位置関係を明らかにして月の動きと方角とを関係付けて観察させる指導が必要である。

[小学6年生 大問4の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4(1)	ものが水に溶けて見えなくなっても、溶かしたものの重さは変わらないことを理解している。 (選択式)	水50gに食塩10gを溶かした全体の重さが何gになるか、会話文から正しいものを選ぶ。	92.6	0.2	80.0	60.0

○ 解答状況

水に食塩を溶かしたときの全体の重さについて問う選択式の問題である。「十分達成」の期待正答率80.0を上回る正答率92.6と、良好な結果であった。

○ 指導法改善の手立て

ものを水に溶かす行為は、児童が日常生活でよく経験している事象である。ものを水に溶かすと、溶かしたものは見えなくなるが、ものは、重さとして水の中に存在していることが確かめられる。児童は、溶かしたものは消えてなくなるわけではないことは、食塩水など塩味が残ることなどから、感覚的には理解していると考えられる。溶かしたものの重さが全体の質量として現れることは、児童にとって驚くべき事象であり、実験を通して理解していく。本問題では、水に食塩を溶かしたときの全体の重さについて具体的な数値について問うており、非常に正答率が高い。このことは、児童が実際に実験を行った結果、実感を伴って理解しているものと考えられる。

[小学6年生 大問3の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問3(1)	電磁石に電流が流れているときの極について理解している。 (選択式)	電磁石の極について、電磁石になっている釘の端に方位磁針を近付けたときの正しい磁針の向きを選ぶ。	52.5	0.2	80.0	60.0

○ 解答状況

電磁石の極について、電磁石の釘の端に方位磁針を近付けたときの様子について問う選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率60.0を下回る正答率52.5であった。

○ 指導法改善の手立て

新学習指導要領において、第6学年から第5学年に移行された内容である。電磁石については、モーターやスピーカーなどに利用されているが、日常生活の中で、そのものを目にする機会は少ない。電磁石という言葉については、比較的児童は知っている。ただし、電磁石がどのような性質をもっているのかについては、児童にとっては未知の部分が多いと考えられる。小学3年生で学習する永久磁石の性質と電磁石の性質の比較を通して、その性質の違いを明らかにさせ、丁寧に整理する指導が必要であると考えられる。また、技能の活用として、磁石の極を調べるために方位磁針を利用することについて、3年生での学習経験を生かして、児童自ら電磁石の学習でも使えるように指導する必要がある。

[中学1年生 大問2の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問2(4)	二酸化マンガンを薄い過酸化水素水を加えると酸素が発生すること、酸素にはものを燃やす働きがあることを理解している。 (選択式)	びんの中でろうそくが燃え続けられるようにするために、二酸化マンガンを、過酸化水素水を加えたときの、びんの燃える様子について選択する。	81.4	0.2	80.0	60.0

○ 解答状況

二酸化マンガンを薄い過酸化水素水を加えると酸素が発生することについて問う選択式の問題である。「十分達成」の期待正答率80.0をこえる正答率81.4であった。

○ 指導法改善の手立て

普段の生活の中で、ものを燃やすには空気が必要であることは、児童は経験的に感じている。「酸素」という物質の名称についても、日常よく耳にするものである。したがって、児童は「ものの燃え方」の単元において、ものが燃えるということと酸素との関係については、知識として獲得しやすいと考える。二酸化マンガンを過酸化水素水などは、児童にとって日常生活でなじみ深いものではなく、初めて聞く物質と現象とを結びつけて考える難しさがあると考えられる。しかし、これらの物質を混合すると酸素が発生することについては、よく理解できている。やはり学習では、単に2つの物質を混合すると酸素が発生するという知識を与えるだけでなく、実際に実験を通して酸素を発生させ、その中でもものを燃やす活動を行い、実感を伴って理解させていくことが大切である。

[中学1年生 大問7の(2)③]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問7(2)③	根から取り入れられた水が植物の体から外へ出ることを蒸散と言うことを理解している。 (短答式)	植物のからだから水が水蒸気となって出ていくことを何というか、文章中にことばを入れる。	27.2	14.3	80.0	60.0

○ 解答状況

根から取り入れた水が植物の体から放出される現象について問う短答式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率27.2と非常に低い結果となった。

○ 指導法改善の手立て

新学習指導要領に伴い、第6学年に追加された内容である。植物が根から水を取り入れて成長することは、経験的に理解していると考えられる。しかし、その水が、植物の葉から空気中に放出されるという事実については、日常生活で意識することがほとんどない。植物の葉の気孔の観察や、植物から水分が放出されることについては、実験を通して理解できると考えられるが、「蒸散」という日ごろの生活で、聞き慣れない用語の定着が不十分である。新学習指導要領においても、積極的に科学的な用語を使いながら、言語活動をはぐくむことが求められている。このとき、単に用語を覚えるということではなく、科学的な概念と結び付いた用語の定着の指導が必要である。

傾向2 **実験器具の正しい使い方や測定器具の数値の読み取りに関する実験技能に課題がある。**

[小学5年生 大問1の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問1(1)	検流計を使って、回路に流れる電流の大きさを正しく測ることができる。 (選択式)	検流計の使い方について、手順を示したもののの中から間違っているものを選ぶ。	53.4	0.4	85.0	65.0

○ 解答状況

検流計の使い方間違えたものを選択する問題である。「おおむね達成」の期待正答率65.0を下回る正答率53.4であった。

○ 指導法改善の手立て

検流計は、電流の大きさや電流の流れる向きについて、その針の振れ方で、児童に電流を視覚的にとらえさせる器具として用いられる。検流計を使った実験については、実際に児童が自らの手で回路に挿入して、数値を読み取ることが大切である。そして、個々の実験の結果を記録していくことが求められる。しかし、実際の学習場面では、グループに1台、もしくは、2人で1台という使われ方が少なくないようである。実感を伴った理解のためには、児童一人一人が確実に機器に触れるようにしていく工夫が必要である。

[小学6年生 大問9の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問9(2)	水中の微生物を観察するために、適切な実験器具を選ぶことができる。 (選択式)	水中の微生物観察のための実験器具について、4つ示されたものの中から選ぶ。	43.3	0.9	80.0	60.0

○ 解答状況

新学習指導要領において、小学5年生に追加された内容である。水中の微生物観察の器具を選択する問題である。「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して正答率43.3と低い結果となった。

○ 指導法改善の手立て

自然に生息するメダカなどが、何を食べて生きているのかを調べる学習である。水中の微生物の観察には、顕微鏡を用いることが求められる。この学習の同単元においては、メダカの卵の観察で、解剖顕微鏡を使用する。メダカの卵のような、比較的大きな物体の観察には、解剖顕微鏡を使用し、さらに小さな微生物などでは、顕微鏡を使用する。児童は微生物観察の実体験としては、顕微鏡を使用していると考えられるが、実際に使用した機器と、機器の名称とが一致していないことが考えられる。実験機器の使用に関しては、児童にその機器の利用の目的や名称及びその具体的な使い方の指導を併せて行っていくことが大切である。

[中学1年生 大問1の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問1(3)	電流計の使い方を理解し、正しく測定することができる。 (短答式)	電流計の針が示す数値について、つないだマイナス端子の単位に留意して読み取る。	51.5	0.9	75.0	55.0

○ 解答状況

電流計の針が指し示す数値を読み取る短答式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率55.0を下回る正答率51.5であった。

○ 指導法改善の手立て

電磁石の性質の学習において、電流の大きさと電磁石の磁力を関係付けて考えさせる内容である。電流計の使い方では、児童一人一人が、実際に電磁石の回路に電流計を挿入し、自ら数値を読み取る活動が大切である。しかし、実際の学習場面では、検流計の備品台数などの関係で、グループで1台という使われ方が少ないようである。この場合も、児童の実感を伴った理解をさせるためにも、時間を確保し、一人一人が確実に機器に触れ、自らの手で、結果を導き出す活動が大切である。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった課題は、新学習指導要領で求められている実感を伴った理解のための学習指導や観察・実験の技能・表現を確実に身に付けさせることである。また、児童が、事物・現象に対して、疑問や問題意識をもち、目的意識をもって観察・実験に向かうようにすることが大切である。

実感を伴った理解を図るためには、より一層体験を充実させていく必要がある。児童一人一人が、自らの手によって、問題解決が図れるような時間や場、実験素材や器具を提供していくことが求められる。また、理科における言語活動の充実として、児童自らが、何のために、何を、どのようにして解決し、その結果どうということがいえるのかということ、丁寧に書き出させるような指導が必要である。

ア 生活事象との関連を図った指導

「電磁石」など、一見、日常生活で直接目に触れる機会が少ないように思われるものも、生活の中であらゆるところにその原理・原則が利用されている。単に、電磁石の性質を学習しても、それが自分たちの生活にどのように関係しているのか、児童が実感できなければ、学習の定着はもちろん、実生活で使える知識とはならない。学習においては、単元の終末はもちろんであるが、導入時においても、自分たちの生活とつながりが深い事物・現象であることに気付かせ、興味・関心をもって学習に向かわせることが大切である。

イ 実感を伴った理解のための一人一人の活動の保証

電流計の使い方や電流の測り方、また顕微鏡の使い方や微生物の観察など、児童が機器を自分の力で実際に扱っていくことが、実感を伴った理解につながる。機器の台数の制約などから、グループ実験を行う場合も、観察や実験の時間を保証し、一人一人が確実に、その技能を習得して行くようにする必要がある。そのためには、実験の結果だけを重視するのではなく、使用する機器などについて、個々の児童の気付きや感想なども大切にしていこうとする。また、学んだ事を生かして表現していくことが大切である。そこで、単元の終末にものづくりなどを位置付けることで、一人一人の学びを、より充実させていくことが大切である。

ウ 目的意識をもった観察・実験のための言語活動の充実

多くの児童は、理科の実験活動が好きであると思っている。しかし、目の前の実験は何を解決するために行っているのか曖昧なまま、活動を行っている児童が少なくない。何を明らかにするために観察や実験を行うのか、児童一人一人が目的意識をもって活動を行うことが大切である。そのためには、事象をどのように読み取っているのか、事象に対してどのような考えをもっているのか、児童に自分の考えを丁寧に書き出させることである。頭の中でわかっているつもりでも、それを声に出したり、書き出したりするなど表現していくことによって、自分自身の考えの曖昧な部分が見えてくると考えられる。児童が自分の考えを書き記す活動や考えを話し合う活動の場を設けて、児童に活発な言語活動を促すことが求められる。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> Ⅲ 各教科の調査結果の分析> 中学校国語

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

中学校国語

「自分の考えの形成」に導く言語活動の充実を

中学2年生全体としては、「十分達成」の到達基準68.8に対して、71.0であり、2.2ポイント上回っており、良好な定着状況が見られた。これは、日ごろ行われている教科全般における指導法の工夫が成果となって表れていると言える。そして、「授業がわかる」、「楽しい」という生徒の意識と教師の指導との相乗効果があったと考えられる。ただ、内容・領域では「読むこと」に課題が多い。また、設問毎に見ていくと、内容・領域のすべてにおいて、自分の考えの形成に課題があるという実態が見られる。今後は、授業における言語活動の充実の核として、自分の考えをまとめる活動を位置付ける必要がある。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

- 国語への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし。
- 話す・聞く能力 → 「話す・聞く」
- 書く能力 → 「書く」
- 読む能力 → 「読む」
- 言語についての知識・理解・技能 → 「知識・理解・技能」

ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率



評価の観点と内容・領域が重なるという教科の特質上、以後は「話す・聞く」＝「話すこと・聞くこと」、「書く」＝「書くこと」、「読む」＝「読むこと」、「知識・理解・技能」＝「言語事項」として分析する。なお「言語事項」については、必要に応じてさらに「漢字の読み」、「漢字の書き」、「語句に関する知識」に分けて見ていくこととする。

(イ) 評価の観点別正答率

中学2年生

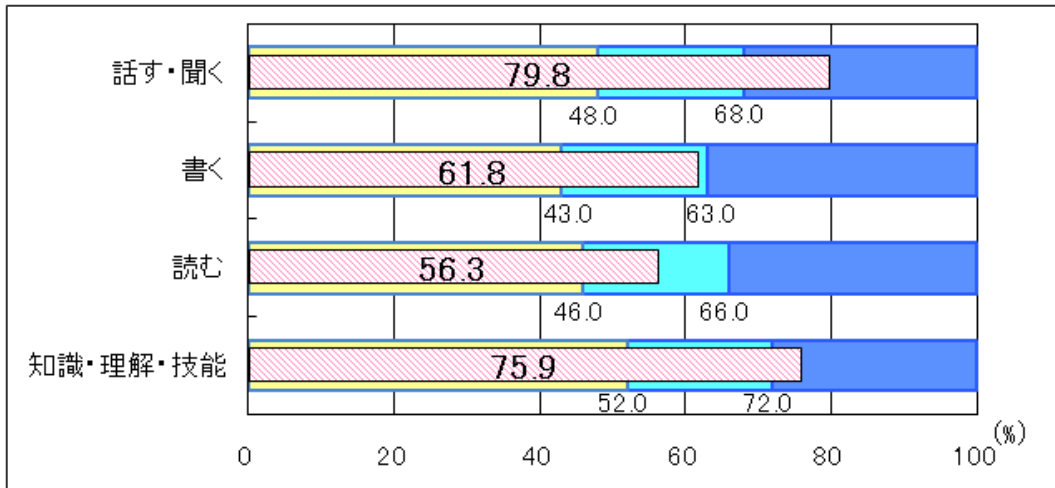


図1 H22年度（中学2年生国語）評価の観点別正答率

(ウ) 内容・領域別正答率

中学2年生

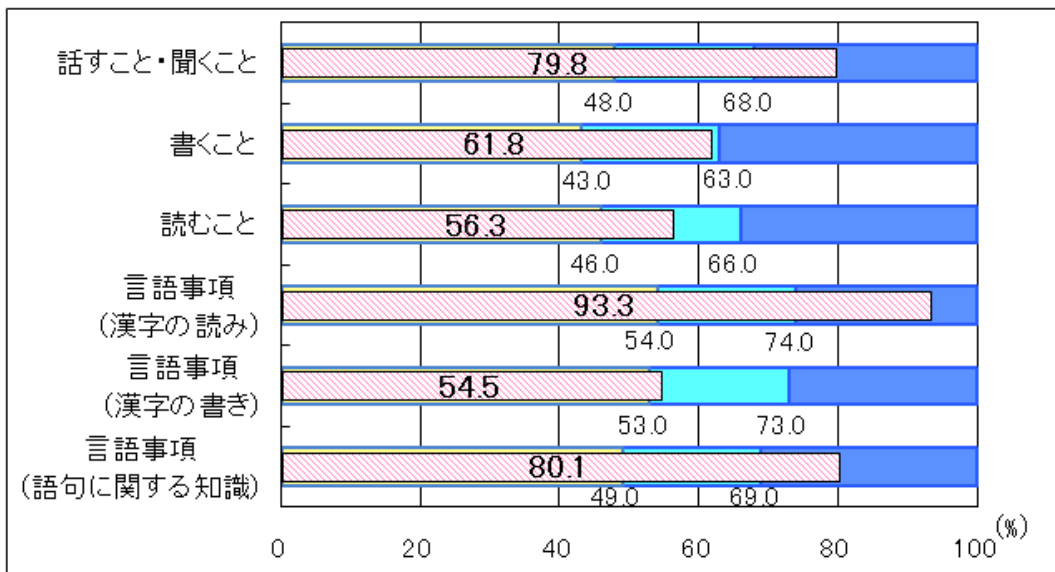


図2 H22年度（中学2年生国語）内容・領域別正答率

「話す・聞く」と「知識・理解・技能」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。「書く」は「おおむね達成」の基準を十分に上回った。これは、教師意識調査の設問「レポートや作文などを書いて表現する活動を取り入れた授業を行っているか」という問いに対して、行っているという回答が多かったことから、書く表現活動の効果が表れていると言える。このことは、生徒意識調査の設問「自分の思いや考えを文章に書こうと努力しているか」の回答において、努力していると答えた生徒が多かったことから裏付けられる。ただ今回の調査からは、書く材料がそろう、書き方が明示されたものは書けるということであるが、相手や目的に応じた表現様式についての知識が不足していることも実態として浮かんできた。「読む」については、「おおむね達成」の基準を上回ったが、今後も指導に工夫を要する。文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解することや、文章に書かれている内容や要旨を的確にとらえることに課題があった。更に、読み取ったことを基に自分の考えを形成することは困難であったことが推察される。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

中学2年生に着目し、平成22年度と平成21年度の同一学年の経年比較により分析をする。

昨年度からの課題となっている内容・領域の「書くこと」、「読むこと」、「言語事項(漢字の書き)」について分析する。

(ア) 中学2年生の「書くこと」の経年比較(同一学年)

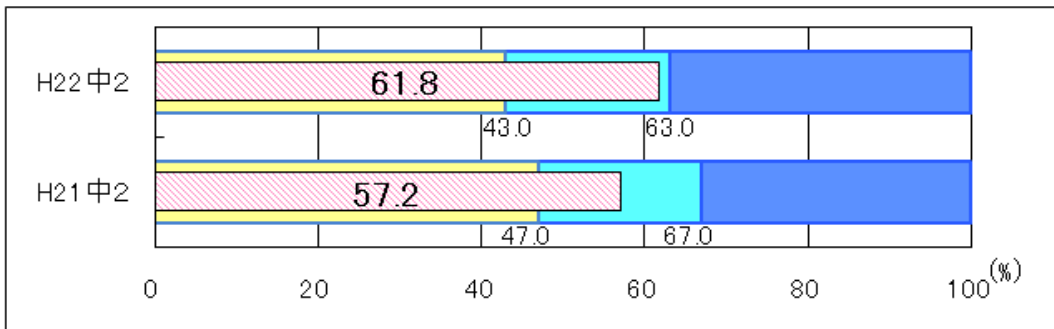


図3 H22・21年度 (中学2年生国語) 「書くこと」正答率の経年比較

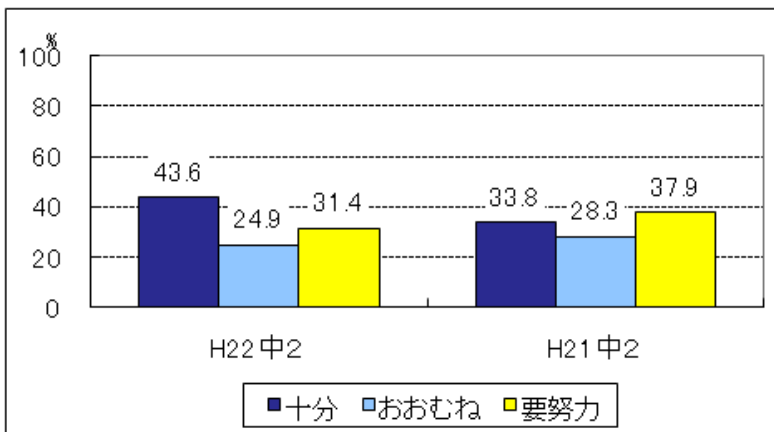


図4 H22・21年度(中学2年生国語)「書くこと」到達度分布の経年比較

表1(生徒意識調査)「自分の思いや考えを文章に書こうと努力しているか」(%)

	H22 中2	H21 中2
(1)そうしている	24.0	20.2
(2)どちらかといえばそうしている	41.7	40.1
(3)どちらかといえばそうしていない	24.1	28.0
(4)そうしていない	10.3	11.7

表2(中学校教師意識調査)「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っているか」(%)※中学校国語科教師を対象

	H22	H21
多くの単元で行っている	29.2	20.0
半分程度の単元で行っている	16.8	21.5
3分の1程度の単元で行っている	35.0	41.5
少しは行っている	19.0	17.0
全く行っていない	0.0	0.0

H22・21年度(中学2年生国語)「書くこと」正答率の経年比較と到達度分布の経年比較をみると明らかなように、平成22年度の中学2年生は良好な定着状況であるといえる。これは、レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業が、自分の思いや考えを文章に書こうと努力している生徒を育てていることに深く結び付いていると考えられる。しかし、だれに、何のために、何を、どのように書けば効果的なのかという書き方についての知識が定着していないことがうかがえた。(詳しくは設問ごとに見た傾向で述べる。)

(イ) 中学2年生の「読むこと」の経年比較(同一学年)

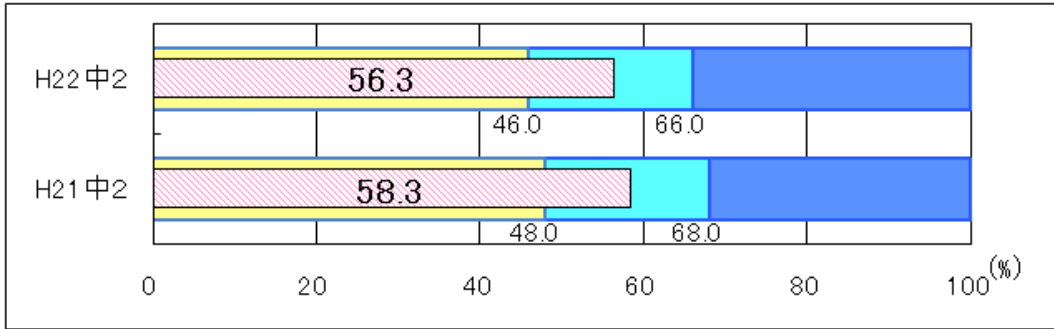


図5 H22・21年度(中学2年生国語)「読むこと」正答率の経年比較

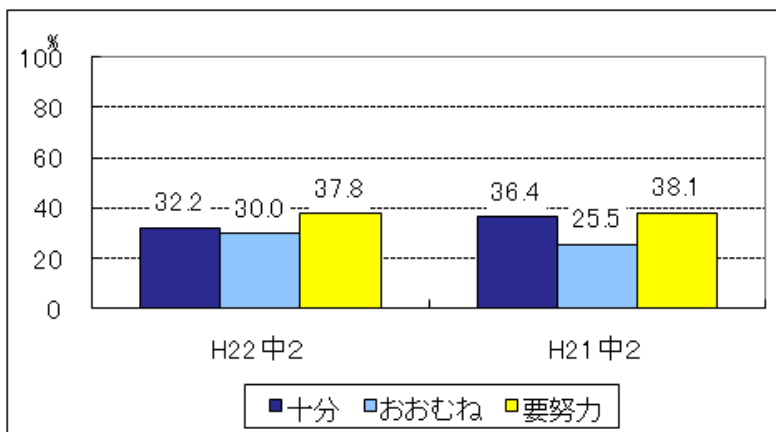


図6 H22・21年度(中学2年生国語)「読むこと」到達度分布の経年比較

「読むこと」についての定着状況には今年度も課題があると言える。内容読解のための第一歩である語句の意味についての知識が不足しており、文章の額縁構造も重なったため、要旨をとらえることが難しかったと考えられる。また、読み取ったことを基に自分の考えを形成することは、生徒にとってさらに難しかったようである。

(ウ) 中学2年生の「言語事項(漢字の書き)」の経年比較(同一学年)

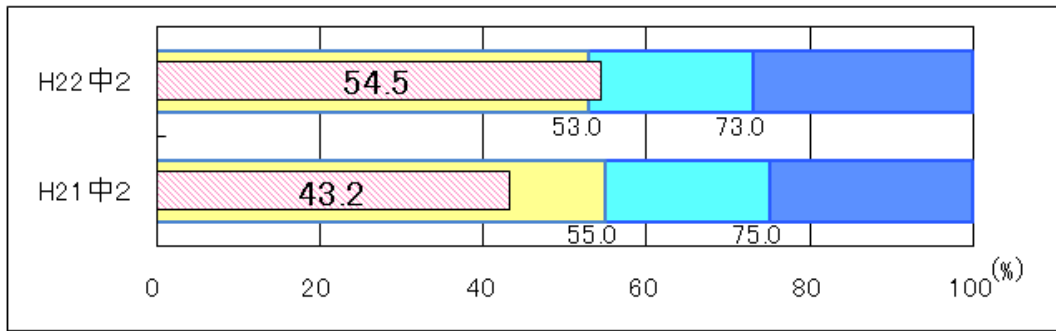


図7 H22・21年度(中学2年生国語)「言語事項(漢字の書き)」正答率の経年比較

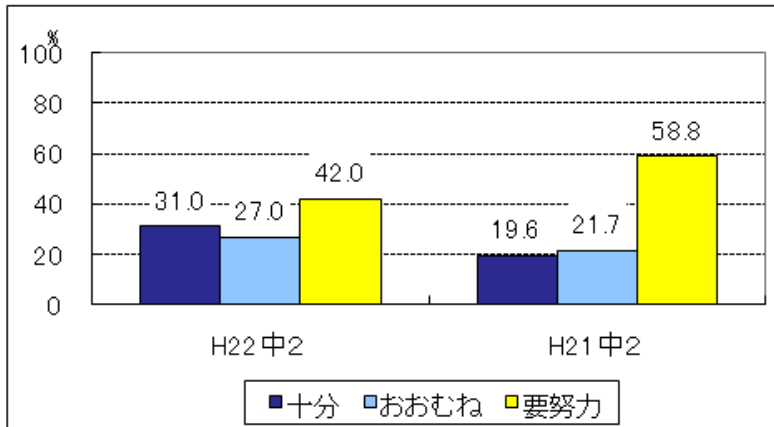


図8 H22・21年度(中学2年生国語)「言語事項(漢字の書き)」到達度分布の経年比較

表3(生徒意識調査)「新しい漢字の読み方や書き方を身に付けるように努力しているか」(%)

	H22 中2	H21 中2
(1)そうしている	39.1	36.3
(2)どちらかといえばそうしている	39.9	40.7
(3)どちらかといえばそうしていない	15.8	11.7
(4)そうしていない	5.1	5.4

H22・21年度(中学2年生国語)「言語事項(漢字の書き)」到達度分布を比較すると、平成22年度は要努力の生徒が減少していることが分かる。これは、新しい漢字の読み方や書き方を身に付けるように努力している生徒(「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」)がほぼ8割おり、努力が結果となって表れたと考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

上記の「ア結果の概要」と「イ経年比較」から、「書くこと」、「読むこと」、「言語事項」において課題が見えてきた。そこで、この3つの内容・領域を取り上げ、正答率が低かった設問と無解答率が高かった問題について、設問ごとに分析を行うことで、より詳細に課題を把握し、具体的な改善の手立てについて探ることとした。

傾向1 **書こうとする意欲は良好だが、相手や目的、場面に応じて伝えるべき内容を整理したり、分かりやすく書いたりすることに課題がある。**

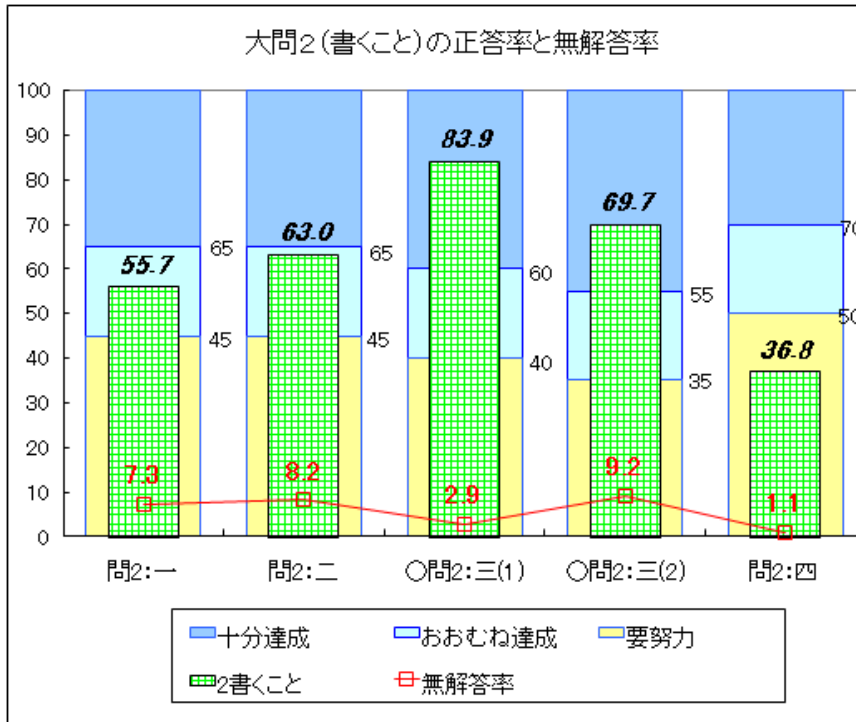


図9 H22年度 中学2年生国語

[中学2年生 大問2の一]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2一	相手や目的、場面に 応じて伝えるべき内容を 整理する。 (記述式)	話し合いの記録に書か れている美化コンク ールの目的(与えられ た情報)を、条件に合 わせてポスターにふさ わしいように書き換 える。	55.7	7.3	65.0	45.0

○ 解答状況

正答率は55.7であり、「おおむね達成」の期待正答率は上回ったが、「十分達成」の期待正答率には届かなかった。「書くこと」到達度分布に見られるような二極化の傾向がうかがえる(図4参照)。できていない生徒は、答えとして求められていることについて内容と答え方の2段階に分けて思考を整理することや、必要なことがどこに書かれているかという情報の絞り込みをすることに、課題がある生徒が多いためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

与えられた条件を踏まえた思考の道筋を示すことが大切である。この問題では次の3ステップが考えられる。

1. 何を書くのか

美化コンクールの目的 → どこに書かれているか(情報の絞り込み) → 話し合いの記録

2. 入れなければならない2つの事柄とは何か

①校内美化の意識をもつ

②掃除の取り組みの向上

3. 指定された文末(に適する形で書く)に合わせる

ために美化コンクールを行います。

[中学2年生 大問2の四]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問2四	相手や目的に応じて、 伝えたい事柄を明確に わかりやすく書く。 (選択式)	ポスターを作成する ときの留意点として当 てはまらないもの選 択肢から選ぶ。	36.8	1.1	70.0	50.0

○ 解答状況

正答率は36.8であり、「おおむね達成」の期待正答率50.0をかなり下回る結果となった。これは「ポスター」という表現の特徴と、作成するときの留意点について知識がない、または知識の整理がされていないためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「ポスター」「パンフレット」「リーフレット」など多様な表現の特徴と、そこにかかれる図表やイラストなどの効果について、知識の習得と整理をさせる機会を設けることが必要である。併せて、相手や目的に応じた効果的な表現様式を選ぶこと、かく際の注意事項など知識・技能に視点を当てた授業を組み込むことも重要である。

傾向2 文章から必要な情報を読み取り、整理することはできているが、読み取ったことを基に自分のものの見方や考え方へと発想を広げること(自分の意見の形成)に課題が見られる。

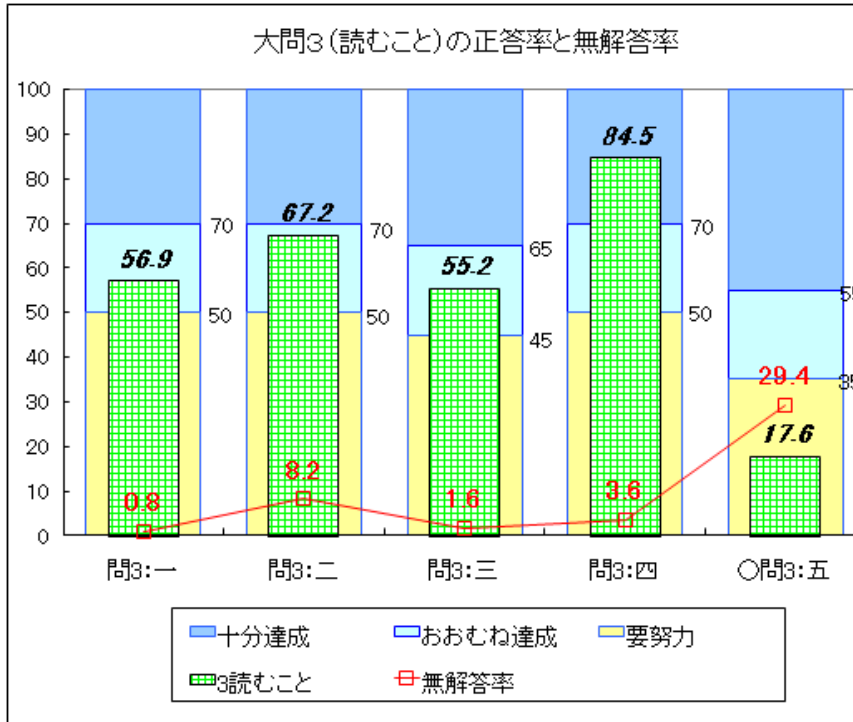


図10 H22年度 中学2年生国語

[中学2年生 大問3の一]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3一	文脈の中における語句の意味を正確にとらえ、理解する。 (選択式)	文章中に使われている「一見」の意味を選択肢から選ぶ。	56.9	0.8	70.0	50.0

○ 解答状況

正答率は56.9であり、「おおむね達成」の期待正答率を6.9ポイント上回った。しかし、語句の理解が内容読解の基礎・基本であることと選択式の問題であることを考えると、この結果は課題であると考えられる。「一見」は中学生が日常使う言葉ではないことが結果の一因と考える。また、文脈から語句の意味を推量できない背景には読書量の差があるのではないかと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

日ごろの授業の中で、「初読」を大切にすることが効果的である。生徒が各自で「初読」の際に、読めない言葉、意味の分からない言葉を取り上げて、調べたり人に尋ねたりして地道に語彙を増やしていくように、指導することが大切である。指導者が意識的にいくつかの言葉を取り上げて学級全体に語彙拡充の意識を持たせることと、それを継続させるために発表の機会を設けるなど個人の学習を全体に広げることが効果的である。

[中学2年生 大問3の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問3三	文章の展開を確かめながら要旨をとらえる。 (選択式)	文章の展開を確かめながら要旨をとらえ、選択肢から選ぶ。	55.2	1.6	65.0	45.0

○ 解答状況

正答率は55.2であり、「おおむね達成」の期待正答率を10.2ポイント上回った。しかし、選択式の問題であることを考えると、この結果は課題であると考えられる。この説明的文章のタヌキとアナグマの部分は筆者の意見を際立たせるための具体例だが、内容の面白さに引きずられて額縁構造を忘れ、要旨をとらえ損ねたことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

説明的文章を読むときは、文章の中心的な部分と付加的な部分や事実と意見を読み分け、文章に印を入れることによって、構成や論の展開を視覚的にとらえさせる効果もねらう。そして、要点をとらえ、要旨をとらえるというような「読み方」に重点を置いた学習が時には必要である。

[中学2年生 大問3の五]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問3五	目的に応じて必要な情報を読み取り、自分のものの見方や考え方に生かす。 (記述式)	物語に出てくる狸のイメージについて、関連させて考えをまとめる。	17.6	29.4	55.0	35.0

○ 解答状況

正答率は17.6であり、「おおむね達成」の期待正答率35.0に対して17.4ポイント下回った。無解答率も29.4であり、全問題中2番目に高かった。要因として、次のことが考えられる。

1. 思考の道筋が認識できない。
2. 文章に書かれたタヌキの習性が読み取れない。
3. 物語に出てくるタヌキのイメージがわからない。
4. 自分の考えをまとめることができない。

○ 指導法改善の手立て

文章に書かれていることを読み取るだけでなく、関連することへと視野を広げることも大切である。ここでは、次の3ステップで解答に導くとよい。

- ①文章に書かれたタヌキの習性のうち、自分が着目したものを明らかにする。
- ②着目したタヌキの習性から導かれる、物語に出てくるタヌキのイメージをもつ。
- ③自分の考えをまとめる。

傾向3 言語事項の漢字の読みと語句に関する知識の定着は良好であるが、漢字の書きに関する知識と語句に関する知識の活用については課題がみられる。

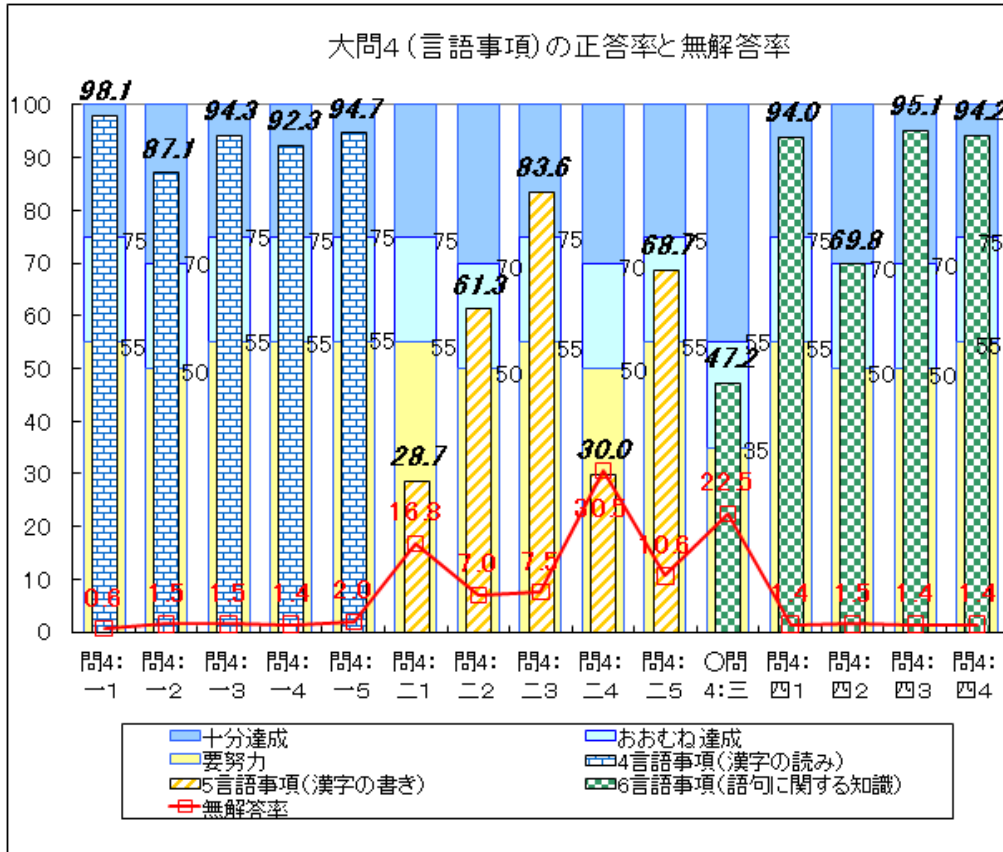


図11 H22年度 中学2年生国語「言語事項」

[中学2年生 大問4の二の1]

○ 問題の概要

問	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4二1	文脈に即して漢字を正しく書く(音読みの熟語)「展望」点画の間違いやすい漢字。 (短答式)	「テンボウ台」の「展望」を書く。	28.7	16.8	75.0	55.0

○ 解答状況

正答率は28.7であり、「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して26.3ポイントも下回る結果であった。無解答率も16.8と高かった。これは画数を一つ多く書くなど、正確に漢字が習得されていなかったり、イメージ画像的に認識していたりして、書くまでに到らなかったためと考えられる。

○ 指導法改善の視点

筆順と画数の確認も兼ねて指文字で空書きさせて、各自に再確認させるとよい。ちなみに「展」は、今年度の中学1年の漢字の読みで出題され、正答率93.9であることと照らし合わせると、読めるが書けない漢字のようである。このことを踏まえて、「展」の含まれる熟語を数多く書かせ定着を図ることも考えられる。

[中学2年生 大問4の二の4]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4二4	文脈に即して漢字を正しく書く(同訓異字の書き分け)「臨む」(短答式)	「海にノゾむ都市」の「臨む」を書く。	30.0	30.5	70.0	50.0

○ 解答状況

正答率は30.0であり、「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して20.0ポイントも下回る結果であった。無解答率も30.5と最も高かった。「のぞむ」=「望む」であり、「臨む」という訓読みの漢字と用例が定着していないことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

漢字を指導する際には、その漢字を用いた語句の例を併せて学習させることが大切である。「海に臨む」は「臨海工業都市」などの学習用語と関連させてもよいだろう。また、日常の様々な機会をとらえて漢和辞典などを活用し、漢字を用いた語彙を広げていくことも大切である。

[中学2年生 大問4の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4三	文脈の中で語句や語彙を正しく使う(ことわざ)「井の中の蛙、大海を知らず」(記述式)	「井の中の蛙、大海を知らず」を使って、このことわざの意味が相手に伝わるように友達として忠告する。	47.2	22.5	55.0	35.0

○ 解答状況

正答率は47.2であり、「おおむね達成」の基準は上回ったが、「十分達成」の期待正答率55.0に対して7.8ポイント下回った。無解答率は22.5だった。要因として、次のことが考えられる。

1. このことわざそのものを知らない。
2. このことわざの意味を知らない。
3. どんなふうにするのか使い方がわからない。

○ 指導法改善の手立て

日常生活の中で使用頻度を高めるために、教室や廊下などにことわざカレンダーを掲示することも言語環境の面では有効と言える。ことわざと意味は一对で知識として覚えさせることはもちろん、用例を考えさせることで本当に使える語彙になると考えられる。例えば、ことわざを読み札、意味を取り札としたことわざカルタを作り、札を取った人は用例を考えて言うような活動を取り入れることも、指導の一方法である。そうすれば、楽しみながら知識の習得と定着が図れるだろう。

エ これからの指導に向けて

本調査で明らかになったことは、「書くこと」については指導法が工夫され、生徒の学習意欲も高まり、学習内容の定着状況もよくなってきているということである。このように成果が見える一方で、「書き方」、「読み方」などの学習方法の知識に関する指導にもう少し力を入れなければならないという実態が見られる。また、内容・領域すべてにおいて「自分の考えの形成」に導く指導の必要性もはっきりしてきた。単元の指導計画、授業計画を立てる際に、以下の点を意識しながら改善を図っていくことが大切である。

ア 「話すこと・聞くこと」

自分の経験に照らし合わせて、内容を整理して聞き取る指導は充実してきたので、これに加えて、話し手の意図を考えながら聞くことにも配慮して指導する。さらに授業では、聞き取ったことを基に自分の考えをもち、根拠を明らかにして話す活動に取り組ませることにより話す力の向上にもつなげることができる。また、話し方、聞き方、話し合い方などの指導も必要である。

イ 「書くこと」

目的・相手・内容・分量などの条件を踏まえて書くように日ごろの授業の中でも指導する。ポイント(条件)をしぼって書かせると、書く方も評価をする方も抵抗感が少ないのではないか。その際の条件は、一つから徐々に増やしていくことが望ましい。また、授業で学んだ知識・技能が生活の中で活用できると生徒に認識させるためにも、文章以外の表現の仕方(ポスター、パンフレット、リーフレット、広告チラシなど)を知ること、相手や目的に応じた効果的な表現の仕方を選ぶこと、書く際の注意事項など知識・技能に視点を当てた授業も必要である。

ウ 「読むこと」(内容と表現の仕方)

小説の読み方、説明的文章の読み方など、作品(教材)が変わっても変わらない一般的な読み方と、その作品(教材)に何が書かれているかという作品の内容価値の双方を意識して指導する。また、文章に書かれていることの読解に加え、それに対する自分の意見をもたせ、まとめさせることが大切である。その際に、視点や観点を示すことが指導の一方法となる。そうすることによって、生徒は文章に書かれていることの理解とそれに対する自分の意見・感想をもつだけでなく、自分の読書体験と照らし合わせて読むことができるようになるだろう。つまり、読むべきは書かれている内容と書かれ方(表現の仕方)であり、そのことについて自分の意見をもつことが求められているのである。このことを踏まえて指導することが重要である。

エ 「言語事項」

漢字の読み書きについては、日常的にあらゆる機会をとらえて地道に行うことが大切である。新出の漢字だけでなく、既習漢字についても、音訓、熟語の基本を押さえた後は、文脈に即して漢字を使えるかどうかを確認することが大切である。語句に関する知識についても、覚えた後は、使う機会を増やして定着を図るしかない。たとえば熟語書きしりとりをチーム対抗で行ったり、ことわざカルタ、四字熟語カルタなどを行ったりすることが考えられる。毎時間1問ずつ積み重ね、カルタ大会など、その知識を楽しみながら活用する場の設定と指導の工夫が大切である。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> Ⅲ 各教科の調査結果の分析> 中学校社会

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

中学校社会

「思考力・判断力・表現力」を育てる言語活動の充実を

中学2年生ではすべての評価の観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、内容・領域別に見ると「地域の規模に応じて」は「十分達成」の基準を上回ったものの、「世界の地域構成」で「おおむね達成」の基準を下回り、「古代までの日本」「中世の日本」は「おおむね達成」の基準に対して+1.3ポイントとほぼ「おおむね達成」の基準と同等の結果であった。

中学3年生では「資料活用の技能・表現」で「おおむね達成」の基準を上回ったものの、「社会的な思考・判断」「社会的な事象についての知識・理解」で「おおむね達成」の基準を下回った。内容・領域別に見ると、「さまざまな地域の調査」「さまざまな特色を関連付けてみた日本」で「おおむね達成」の基準を上回ったが、「資源や産業から見た日本の地域的特色」「開国と近代日本の歩み」「近現代の日本と世界」で「おおむね達成」の基準を下回った。

全体的には学年が上がるにつれて、「社会的な思考・判断」の正答率が低くなり、また、歴史的分野の正答率も低くなるという傾向が見られた。歴史的分野についての知識・理解の確実な定着を図り、生徒の思考力・判断力・表現力を育てる言語活動の充実が必要である。

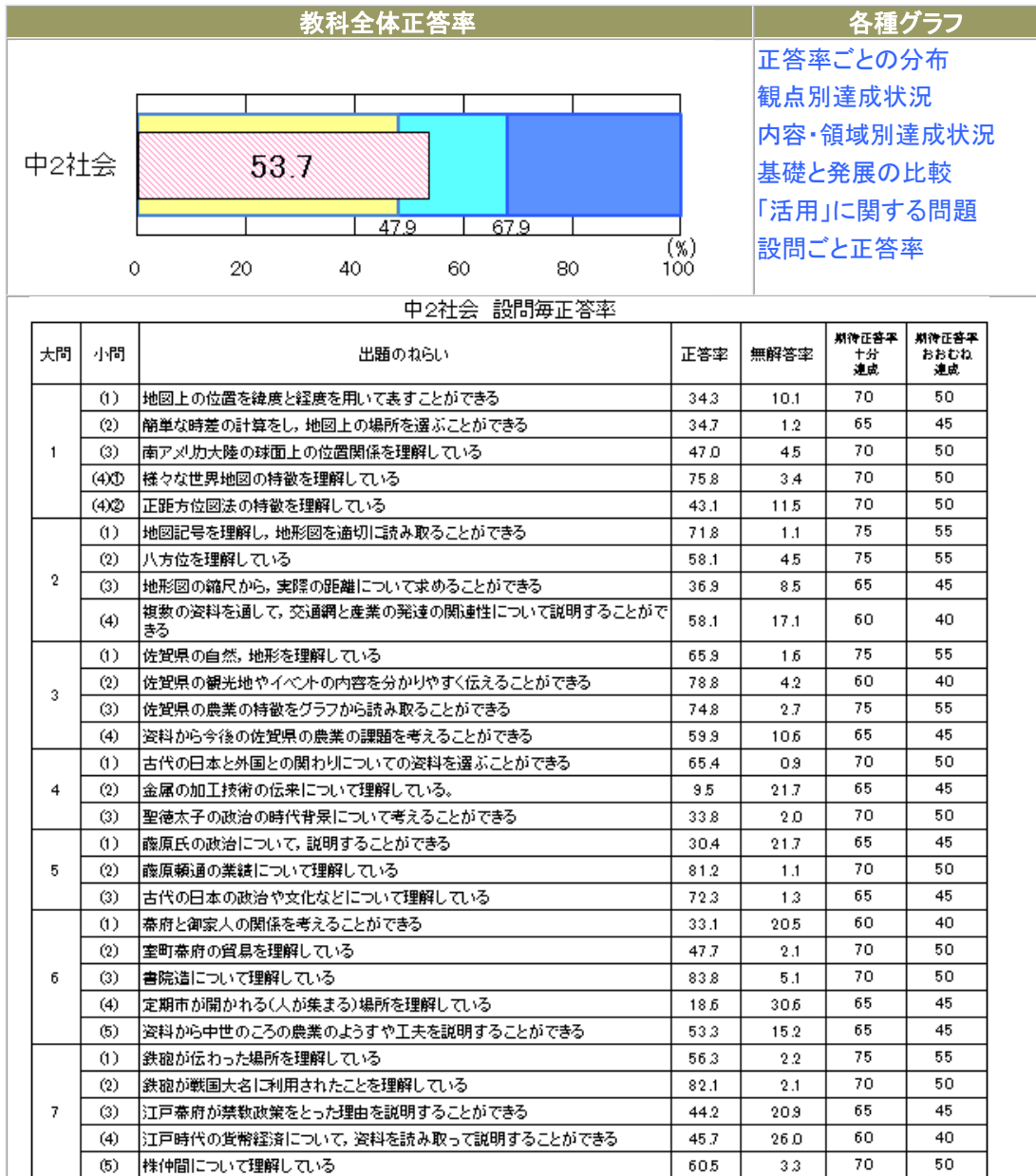
この後、評価の観点については、以下のように記す。

- 社会的な事象への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし
- 社会的な思考・判断 → 「思考・判断」
- 資料活用の技能・表現 → 「技能・表現」
- 社会的な事象についての知識・理解 → 「知識・理解」

ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





(イ) 評価の観点別正答率

① 中学2年生

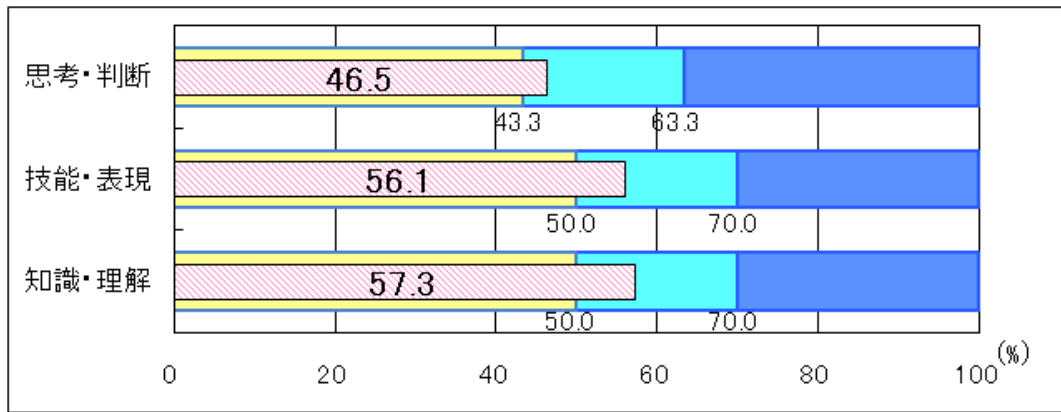


図1 H22年度（中学2年生社会）評価の観点別正答率

すべての評価の観点で「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「思考・判断」は「おおむね達成」の到達基準を3.2ポイント上回るにとどまり、特に、歴史的分野において「知識を基に、複数の資料を関連付けて時代背景を踏まえた説明をすること」に課題が見られた。これは各時代を大観したり、資料のどこに着目すべきか分からなかったり、複数の資料を関連付けられなかったりしたためと考えられる。

② 中学3年生

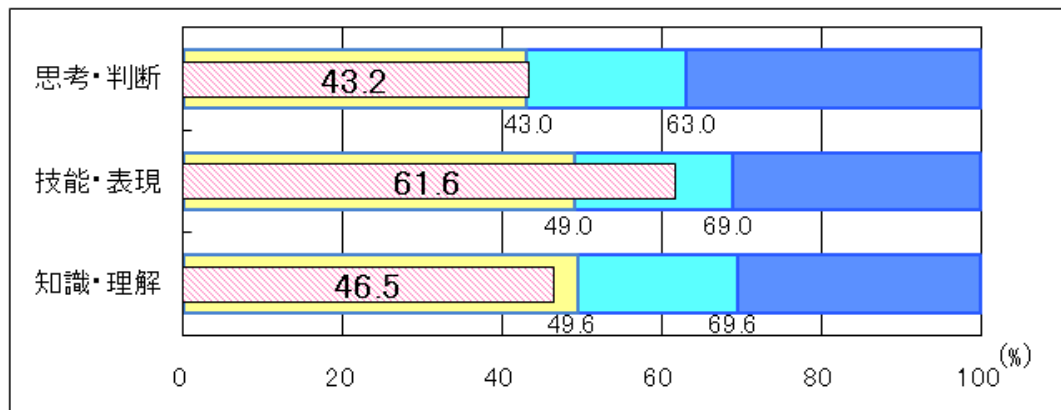


図2 H22年度（中学3年生社会）評価の観点別正答率

「技能・表現」において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「思考・判断」では「おおむね達成」の到達基準を0.2ポイント上回るにとどまり、「知識・理解」においては「おおむね達成」の基準を下回った。「知識・理解」においては、歴史的分野において「近現代の日本と世界」の「知識・理解」に課題が見られた。特に、終戦から戦後改革、高度経済成長の時期についての問題の正答率が低かった。これは基礎的・基本的な歴史的事象についての理解が不十分であったためと考えられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

① 中学2年生

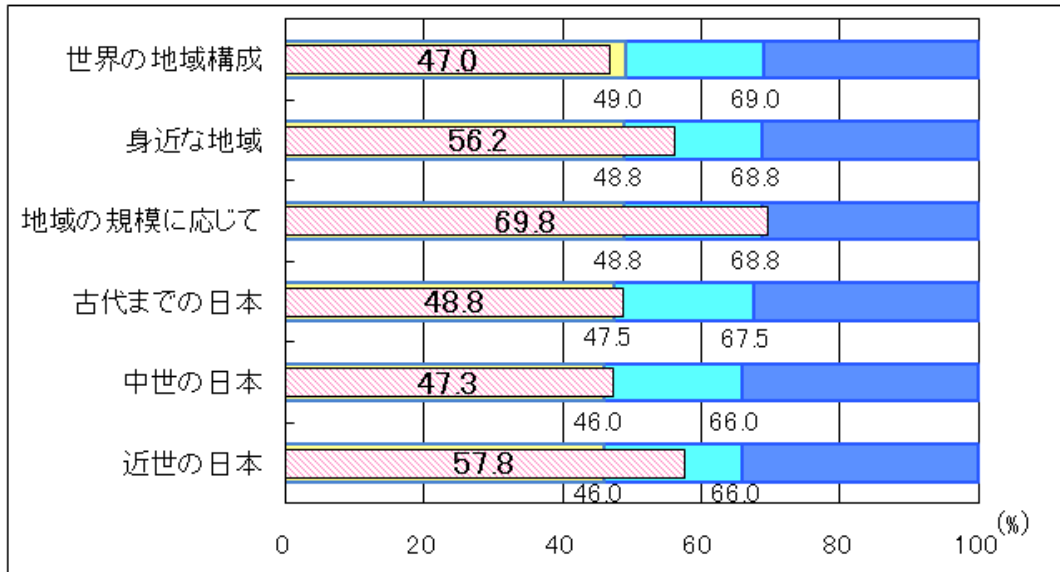


図3 H22年度（中学2年生社会）内容・領域別正答率

中学2年生の地理的分野では「地域の規模に応じて」が「十分達成」の基準を上回り、「身近な地域」は「おおむね達成」の基準を上回ったが、「世界の地域構成」では「おおむね達成」の基準を下回った。その原因として、緯度・経度や時差についての設問の正答率がそれぞれ低いことが挙げられる。歴史的分野ではすべての内容・領域で「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「古代までの日本」「中世の日本」が「おおむね達成」の基準をそれぞれ1.3ポイント上回るにとどまっている。その原因として、東アジアと日本との関係や、複雑な政治背景についての理解が不十分であったためと考えられる。

② 中学3年生

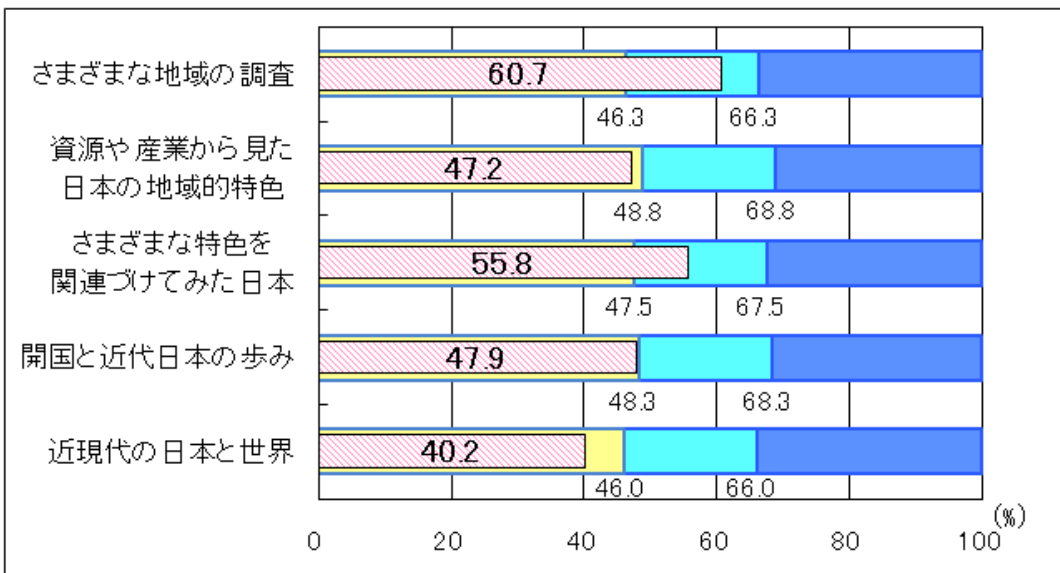


図4 H22年度（中学3年生社会）内容・領域別正答率

中学3年生の地理的分野では「さまざまな地域の調査」「さまざまな特色を関連づけてみた日本」で「おおむね達成」の基準を上回ったが、「資源や産業から見た日本の地域的特色」で「おおむね達成」の基準を下回った。これは、日本の農業の特色についての理解が不十分であったためと考えられる。歴史的分野ではすべての内容領域で「おおむね達成」の基準を下回り、特に「近現代の日本と世界」では「おおむね達成」の基準を5.8ポイント下回った。これは、終戦から戦後改革、高度経済成長の時期にかけての基礎的・基本的な歴史的事象についての理解が不十分であったためと考えられる。

イ 経年比較

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

中学2年生については中学1年生の調査は、小学6年生の内容であることを考慮して平成21年度と平成22年度の同一学年の経年比較により分析をする。

中学3年生については、同一生徒の中学校における社会科学習の変容を見るために、平成21年度と平成22年度の同一生徒の経年比較による分析をする。

結果の概要を受け、(ア)では中学2年生で正答率が低かった「思考・判断」の観点について、(イ)では中学3年生の正答率が低かった「知識・理解」と「思考・判断」の観点について分析していくこととする。さらに、分野別の傾向もそれぞれ分析していくこととする。

(ア) 「中学2年生」の「思考・判断」についての経年比較(同一学年)

① 評価の観点別正答率

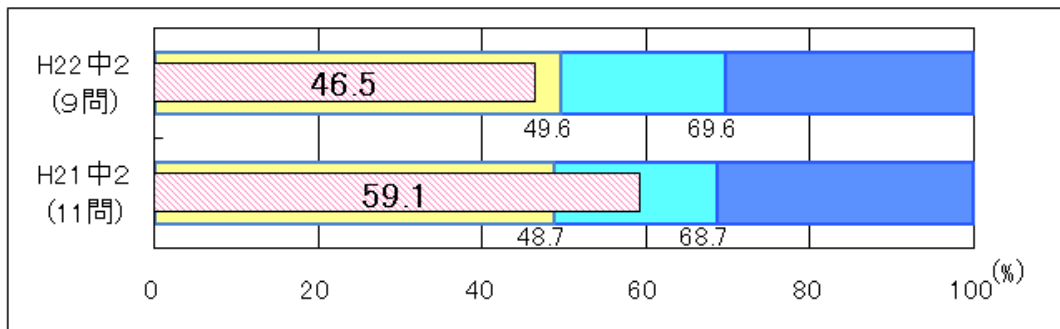


図5 H21・22年度(中学2年生社会)「思考・判断」の正答率

平成21年度は、「おおむね達成」の基準を上回っているが、平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を3.1ポイント下回っている。

次に、分野別正答率の経年比較を行う。

① 地理的分野

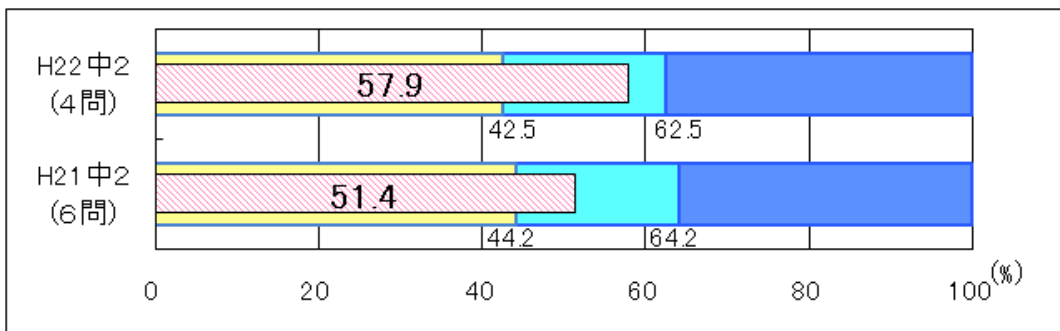


図6 H21・22年度(中学2年生社会)地理的分野の「思考・判断」の正答率

平成21年度、平成22年度とも「おおむね達成」の基準を上回っているが、平成22年度の調査では、平成21年度より6.5ポイント上回っている。

② 歴史的分野

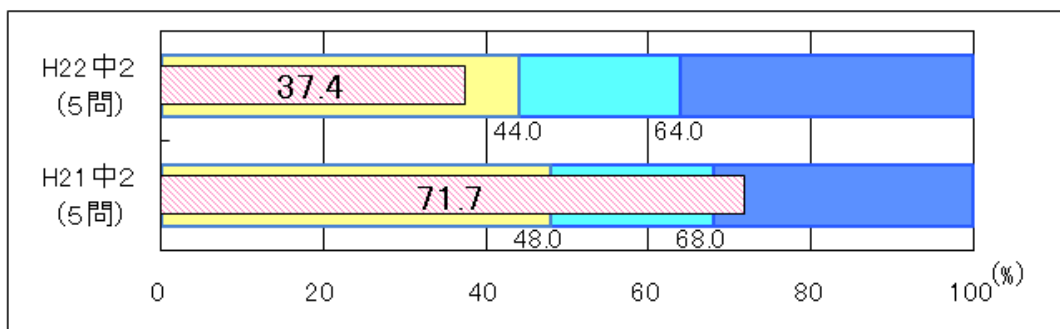


図7 H21・22年度(中学2年生社会)歴史的分野の「思考・判断」正答率

平成21年度の調査では、「十分達成」の基準を3.7ポイント上回っているが、平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を6.6ポイント下回り、平成21年度より34.3ポイント低下している。

図6と図7より、分野別に見てみると、地理的分野より歴史的分野に大きな課題があることが分かる。そこで、歴史的分野の設問内容を比較してみると、平成21年度では時代の大きな流れをとらえることが設問の中心であったが、平成22年度では各歴史的事象について考え、説明することが設問の中心であった。時代の大きな流れをとらえることはできているが、個々の歴史的事象や歴史的背景の理解、その関連などの説明には課題があることが見られる。これは、歴史的事象に関して調べて発表するなど思考・表現する場面が十分確保できていないためと考えられる。

知識をより確かに定着させるために、資料から読み取る「技能・表現」や、歴史的事象の意味や意義を考えるなどの「思考・判断」を伸ばす学習課題や時間を設定し、これらについて調べたり、考えたり、話し合ったりする(討論する)活動を通して、社会的事象の特色や関連付けについての関心や意欲を高める工夫が必要ではないかと考えられる。

(イ) 「中学3年生」の「知識・理解」についての経年比較(同一生徒)

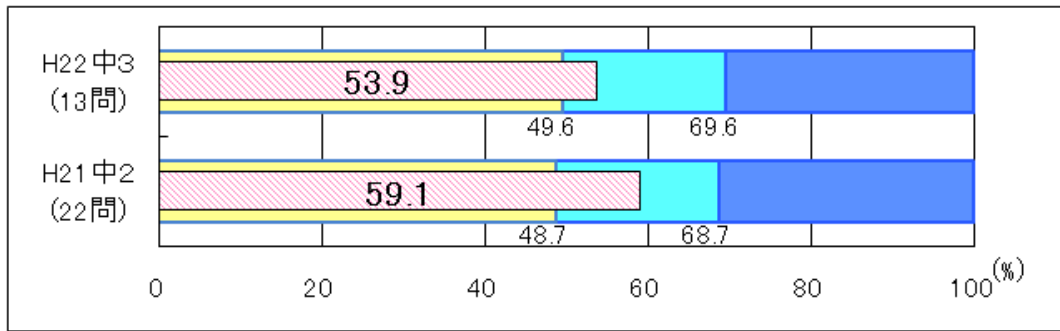


図8 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)「知識・理解」の正答率

平成21年度、平成22年度ともに「おおむね達成」の基準を上回っているが、平成22年度は平成21年度より5.2ポイント低下している。

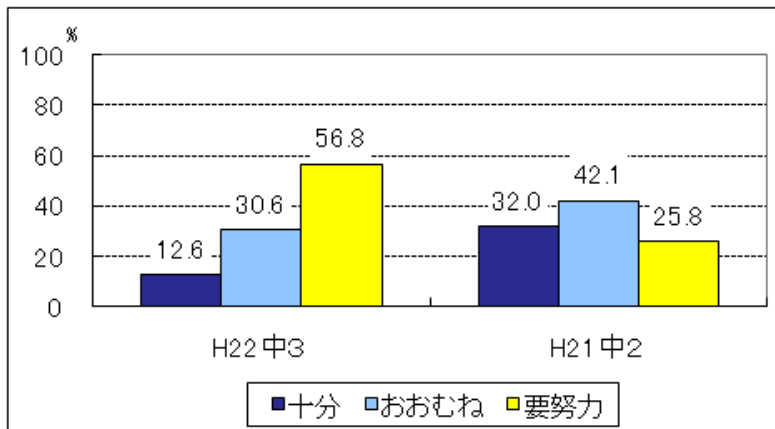


図9 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)「知識・理解」の到達度分布

到達度分布を見てみると、「十分達成」の割合が19.4ポイント減少し、「要努力」の割合が31.0ポイント増加している。

① 地理的分野

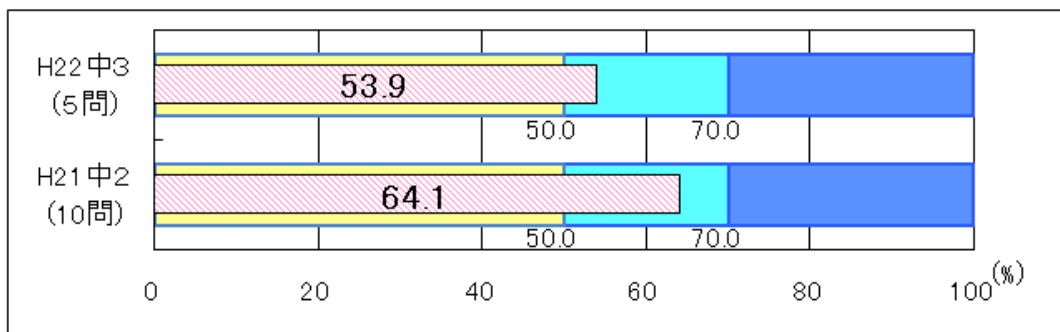


図10 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)

地理的分野の「知識・理解」の正答率

地理的分野は平成21年度、平成22年度ともに「おおむね達成」の基準を上回っているが、平成22年度の正答率は平成21年度より10.2ポイント低下している。

② 歴史的分野

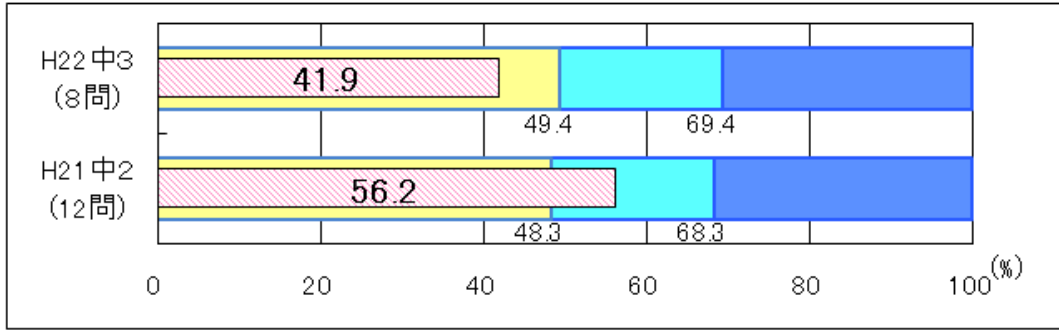


図11 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)
歴史的分野の「知識・理解」の正答率

歴史的分野では平成21年度では「おおむね達成」の基準を上回っているが、平成22年度では「おおむね達成」の基準を7.5ポイント下回り、平成21年度より14.3ポイント低下している。

中学3年生では、地理的分野より、歴史的分野の「知識・理解」の定着に大きな課題があることが図10、図11を比較しても明らかとなった。また、図8において、「知識・理解」の観点については平成21年度、平成22年度ともに「おおむね達成」の基準を上回っているものの、図9では「要努力」の割合が平成21年度より31.0%増加し、過半数を超えていることから、授業の中で、生徒の興味・関心を高めるような適切な事象が提示できていなかったり、歴史的事象の関連や年代等に関する知識の定着を図る時間の設定が不十分であったりすることが考えられる。さらに、学年が上がるにつれて、得意・不得意、好む・好まないなど意欲や意識の面での二極化がすすみ、「知識・理解」の定着に影響していることも考えられる。

(ウ) 「中学3年生」の「思考・判断」についての経年比較(同一生徒)

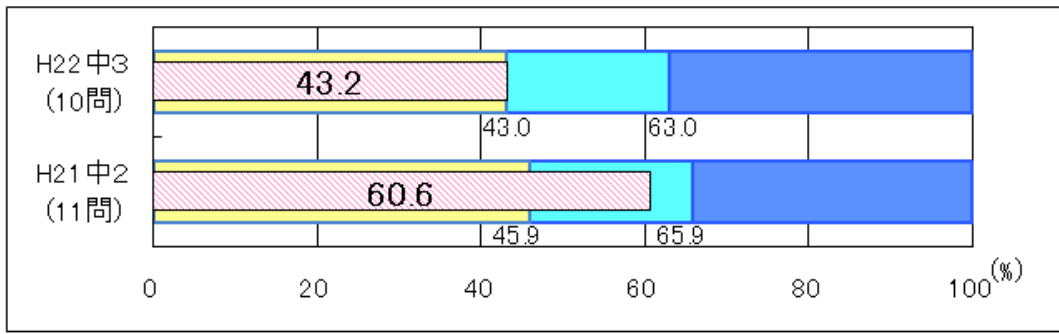


図12 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)
「思考・判断」正答率の経年比較

平成21年度、平成22年度ともに「思考・判断」は「おおむね達成」の到達基準を上回っているが、平成22年度は平成21年度より17.4ポイント低下している。

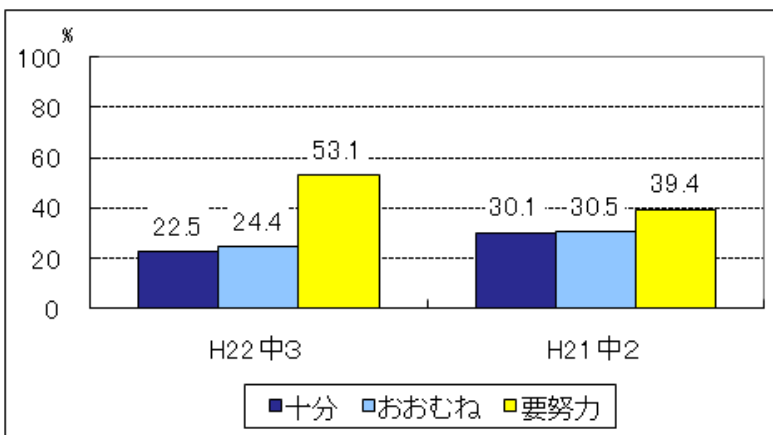


図13 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)
「思考・判断」到達度分布の経年比較

到達度分布を見てみると、「十分達成」の割合が7.6ポイント減少し、「要努力」の割合が13.7ポイント増加し、過半数を超えている。

① 地理的分野

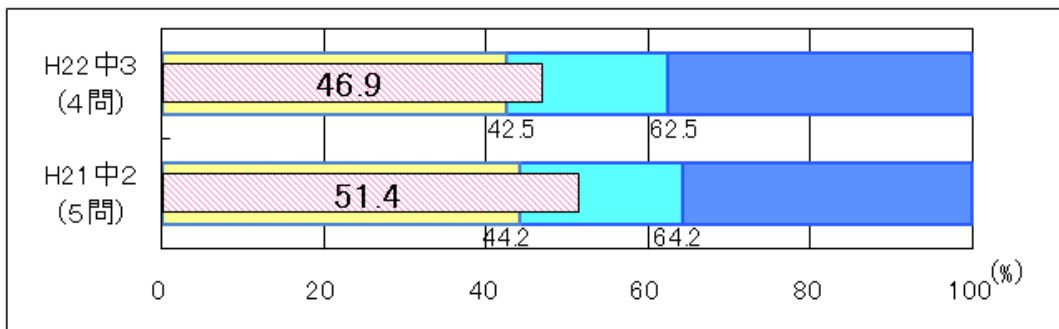


図14 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)
地理的分野「思考・判断」正答率の経年比較

分野別に見てみると、地理的分野は平成21年度、平成22年度ともに「おおむね達成」の到達基準を上回っているが、正答率は4.5ポイント低下している。

② 歴史的分野

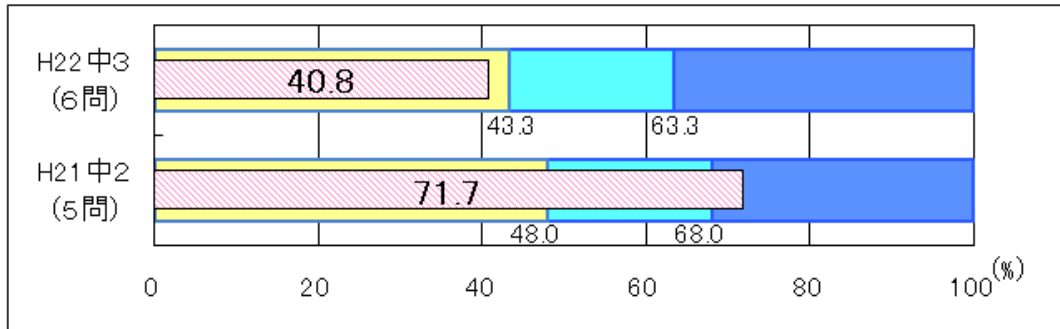


図15 H21年度(中学2年生社会)、H22年度(中学3年生社会)

歴史的分野「思考・判断」正答率の経年比較

歴史的分野では平成21年度では「十分達成」の到達基準を上回っているが、平成22年度では「おおむね達成」の到達基準を2.5ポイント下回り、平成21年度より30.9ポイント低下している。

平成21年度と平成22年度の経年変化を見ると、「思考・判断」において学年が上がるにつれて大幅に低下しており、その傾向は歴史的分野に顕著に見られる。これは、歴史的分野の学習がすすむにつれて、生徒の歴史的事象や歴史的背景の理解に時間がかかっていることや、獲得した知識が断片的なものとなっており、歴史的事象が時代の流れの中で関連付けて理解できていないことも考えられる。歴史的事象について調べたり、考えたり、話し合ったりする(討論する)学習場面において、歴史的事象を歴史の大きな流れで整理・位置づけながら、歴史的事象の特色を見つけたり、関連付けたりすることについて関心や意欲を高める工夫が必要ではないかと考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

上記の「ア結果の概要」と「イ経年比較」から歴史的分野の「社会的事象についての知識・理解」と「社会的な思考・判断」「基礎的・基本的な社会的事象についての知識や概念の理解」に課題があることが分かった。そこで、「知識を基に、資料を関連付けて時代背景を踏まえた説明をする問題」「複数の資料を読み取り、関連させて説明する問題」について分析することとする。

傾向1 **習得した知識を基に、資料から分かる歴史的事象の意味を説明することに課題がある。**

[中学2年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(2)	金属の加工技術の伝来について理解している。 (記述式)	資料を基に大陸(朝鮮半島)から金属器をつくる技術(金属の加工技術)が伝わったことを説明する。	9.5	21.7	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は9.5であり35.0ポイントも大きく下回っている。無解答率も21.7と高い。この問題は、資料を基に倭(日本)と百済の関係、渡来人の存在と渡来人が果たした役割、金属器の製造・加工技術の発展が古代中国で起きたことなどの歴史的事象を関連付けて説明する問題である。これは、資料に示された金属器の類似点から、古代日本の外交・交易関係について想起できなかったことや、自分の言葉で説明する経験が不足していたことなどが理由として考えられる。

○ 指導法改善の手立て

歴史的分野の学習では、普段の授業において個々の歴史的事象を単に「理解させる」にとどまらず、歴史的事象の意味・意義や特色、事象間の関連を説明させたり、まとめさせたりする場面を設定し、それぞれの歴史的事象について説明できる力を育てるとともに、各時代を大観し、その時代の特色を自分の言葉で表現できるような授業に取り組むべきであるとする。

[第3学年大問6の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問6(3)	日本の高度経済成長について、説明することができる。 (記述式)	日本の経済成長率のグラフと、トイレトペーパーを買う人々の写真を見て、1970年代の初めに高度経済成長が止まった理由について記述する。	14.5	29.3	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対し、正答率は14.5であり25.5ポイントも下回っている。無解答率は29.3と高い。この問題は、日本の高度経済成長の終わりりと石油危機(オイルショック)を関連付けるだけでなく、日本が一次エネルギーを石炭から石油へと転換したことにより、石油危機(オイルショック)が日常生活を支える運輸面に大きな影響を与えたことも関連付けて記述する問題である。これは高度経済成長の終わりりと石油危機(オイルショック)という二つの歴史的事象を互いに関連付けることができなかつたためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

普通の授業で個々の歴史的事象を単に「理解する」だけでなく、意味・意義や特色、事象間の関連を説明する場面を設定したり、その当時の日常生活や現代の日常生活とのかかわりを考えたりしながらそれぞれの歴史的事象を説明する力を育てるとともに、各時代を大観しその時代の特色を自分の言葉で表現できるような授業に取り組むべきであると考え。また、各時間や単元毎に前時を想起させたり、定着の度合いを確認し、必要に応じて補充的な指導を行ったりするなど、歴史的事象の語句の確実な理解と定着を図る時間を確保することが必要であると考え。

傾向2 **複数の資料から必要な情報を読み取り、関連させて説明することに課題がある。**

[第3学年大問1の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問1(2)	資料から日本の農業の現状をつかみ、設定された課題を考えることができる。 (記述式)	資料から日本の農業の現状をつかみ、まとめにつながるような課題を設定し、記述する。	33.0	26.4	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0ポイントに対し、正答率は33.0であり、7.0ポイント下回っている。無解答率も26.4ポイントと高い。この問題は、世界的に見た日本の農業の課題について、農産物の自由化や、国際的な価格競争の影響などの背景を資料から読み取り、日本の農業の現状と課題について考える問題である。地理的事象の理解はできても、社会的事象について多面的・多角的に読み取り、読み取ったことを考察したり、自分の言葉で説明したりする経験が不十分であったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

統計や図法、地図などの資料から読み取った結果とそこから考察したことを整理して説明できるように、普通の地理的分野の学習で、資料を基に分析・考察の視点や分析・考察したことについての表現の手立てを明確に示して作業を行わせ、気付いたことを文章に書かせるなどの順を追った手立ての工夫が大切である。

傾向3 **基礎的・基本的な社会的事象についての知識や概念の理解に課題がある。**

[第2学年大問1の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問1(2)	簡単な時差の計算をし、地図上の場所を選ぶことができる。 (選択式)	日本とある都市の現地時間からその時差を計算し、世界地図を参考にして、その都市名を選択する。	34.7	1.2	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は34.7であり10.3ポイント下回っている。日本の標準時子午線が東経135度であること、経度15度ごとに時差が1時間生じること、地球の自転に関することなどの基本的な知識や概念の理解が十分でなかったことや、その他の学習場面で時差を使って世界各地の人々の生活のようすを日本と比較して考えるといった時差を使って考える経験が不足していたことなどが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

社会的な事象を理解するための基本的な技能の1つとして、統計や図法地図などの資料を読み取ったり、適切に使ったりする技能の習得が必要である。社会的事象についての十分な定着のためには、確認テストや補充的な学習だけでなく、地理的分野の学習の中で、読図作業とともに相対的な位置関係や時差などについて触れ、生徒に慣れ親しませることが必要であると考えられる。

[第3学年大問4の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(3)	倒幕までの流れについて理解している。 (選択式)	日米修好通商条約、薩長同盟、大政奉還、薩摩・長州による攘夷決行を、起きた順に古い方から正しく並べかえる。	20.3	1.3	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は20.3であり、24.7ポイント下回っている。この問題は、4つの歴史的事象を順番にすべて正しく並べ替える完全正答の問題である。この時代は、複雑な国際情勢の下、日本国内では内政上の諸問題と外交上の諸問題が錯綜しており、一連の流れとして歴史事象を整理し理解することが難しい時代である。このことが正答率が低い要因となったことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

歴史的事象を理解させるためには、意味・意義や特色、事象間の関連を説明する場面を設定し、それぞれの歴史的事象を説明する力を育てるとともに、各時代を大観し、その時代の特色を自分の言葉で表現させるような学習展開を仕組んだり、ノートなどに自分で時代の大きな流れをまとめたりするような時間を確保する必要があると考えられる。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった課題は、「獲得した知識を基に、複数の資料を読み取り、関連付け、それを基に自分の言葉で表現する」ということである。新学習指導要領においては、社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、自分の考えを述べることなどが求められている。そのためにも、思考力・判断力・表現力の基盤となる知識や技能の定着と指導の充実に継続して取り組んでいくことが必要と考える。

ア 基礎的・基本的な知識・技能の定着

まず身に付けるべき知識・技能を明確にして、しっかりと定着させるために反復学習が大切である。例えば各分野における基礎的・基本的な知識・技能として、次のようなものが挙げられる。

①地理的分野では緯度や経度、大陸と海洋など世界と日本の地域構成の基本的な枠組みに関する基礎的な知識や、グラフや統計資料、地図などから意味や意義、関連を読み取る技能など。

②歴史的分野では年表の表し方や時代区分、歴史的事象にかかわりのある人物とその業績などの基礎的な知識や、個々の歴史的事象を大きな流れに位置付ける技能など。

以上のようなものを基礎的・基本的な知識・技能とし、これらを相互に関連させながら3年間を見通して各分野の学習を進めていく必要がある。そのために、毎時間や単元の終末などに定着の度合いを確認し、必要に応じて補充的な指導を行うなど、知識・技能の確かな定着を図ることが必要である。ただし、単に知識の習得を目指すのではなく、日々の学習の中でさまざまな社会的事象が相互に関連していることや、身に付けた知識・技能を繰り返し想起させ、比べさせたり、活用させたりするような学習を仕組むことも大切である。

イ 「思考力・判断力・表現力」をはぐくむ言語活動の充実

社会的諸事象について学習を深めるために、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察する能力をはぐくむことが必要不可欠である。更に、新学習指導要領では改善のポイントとして、解釈、説明、論述などの言語活動を充実させることが挙げられており、これらの要素は多面的・多角的に考察するためにも必要な要素であると考えられる。そこで、「思考力・判断力・表現力」をはぐくむために次のような学習活動が考えられる。

①解釈については、例えば「明治維新は当時の我が国にとってどのような意味や意義があったのか」など問うことによって、社会的事象の意味や意義の解釈を行う学習活動が考えられる。

②説明については、例えば、歴史的事象についての原因と結果の関連、政策に関しての目的と手段との関連、ある地域と他の地域との地理的事象の関連など、様々な関連を説明する学習活動が考えられる。

③論述については、ある問題が生じたときに自分はどう考えるのか。自分が考えた結論がなぜ妥当なのか、根拠を示しながら論理的に自分の考えを伝えたり、集団の考えを発展させたりするなどの言語活動を重視した学習活動が考えられる。

これらの学習活動を充実させることによって、「思考力・判断力・表現力」をはぐくむことができると考える。

ウ 小学3年生から中学3年生までの7年間を見通した社会科学習づくり

平成22年度の中学1年生の結果でも「我が国の歴史」の中では、特に、明治時代以降の学習内容について正答率が低く、登場する歴史上の人物や取り扱う出来事が多く、時代背景も複雑になるために理解しづらくなる傾向が見られた。また、中学2年生、3年生の傾向と同様に資料から必要な情報を読み取ったり、社会的事象の関連や意味などを説明したり解釈したりすることに課題が見られた。そこで「社会的な思考・判断」の能力や、「資料活用の技能・表現」の能力は、小学3年生から中学3年生までの7年間を見通してはぐくむ必要がある。そのために、中学校に入学した生徒が小学校の学習の中で、どのような学習活動を体験し、知識や技能を身に付けているのかを把握した上で、中学校の社会科と出会わせたい。そのためには中学校区内において小・中合同の教科部会を開くなどして、相互に授業を参観したり、意見交換したりする機会を積極的にもち、相互の連携を深めていく必要があると考える。

オ 授業実践に参考となるリンク



授業に役立つ実践研究



授業・自己研修・校内研修のための資料集

最終更新日:2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> Ⅲ 各教科の調査結果の分析> 中学校数学

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

中学校数学

知識・技能の習得を図り、思考力・判断力・表現力をはぐくむために

平成22年度の中学2年生における正答率は48.9であり、「おおむね達成」の基準を3.7ポイント上回った。正答率を評価の観点別に見ると、「数量、図形などについての知識・理解」の観点は「おおむね達成」の基準を下回り、内容領域別に見ると、「関数」の領域が「おおむね達成」の基準を下回った。「活用」に関する問題については、正答率が「おおむね達成」の基準を上回り、改善が図られてきたと考えられるが、無解答率はまだ高い状況にある。また、新学習指導要領への移行に伴って新しく加わった学習内容の定着と数学的な思考力・判断力・表現力の育成には課題が見られる。これらの結果を踏まえ、今後の指導においては、移行に伴って新たに追加された学習内容や「比例・反比例」についての基礎的・基本的な学習内容の定着を図るための指導の工夫が必要である。また、数学的な思考力・判断力・表現力の育成を図るために、数学的活動の充実を図る学習指導の工夫・改善が求められる。

この後、評価の観点については、以下のよう記す。

- 数学への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし
- 数学的な見方や考え方 → 「見方や考え方」
- 数量や図形などについての表現・処理 → 「表現・処理」
- 数量や図形などについての知識・理解 → 「知識・理解」

ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率



(イ) 評価の観点別正答率

中学2年生

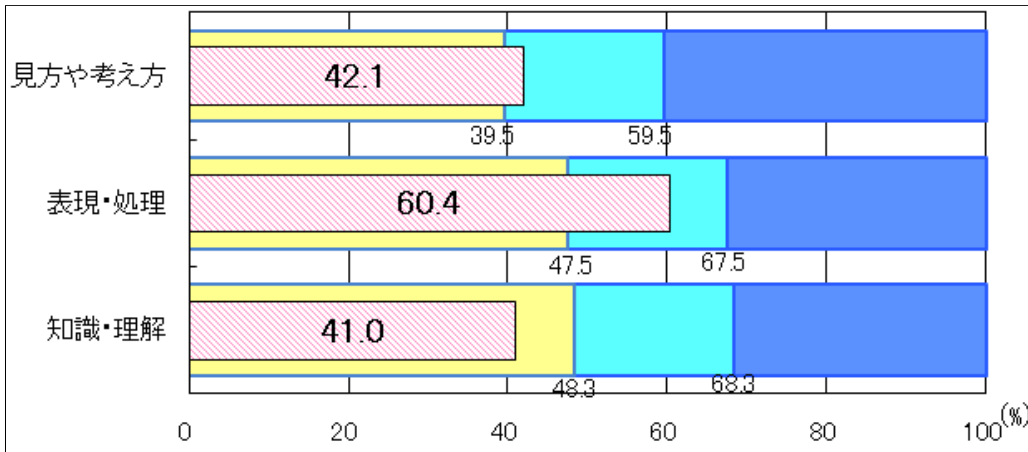


図1 H22年度（中学2年生数学）評価の観点別正答率

「表現・処理」については、「十分達成」の基準には達しなかったものの、「おおむね達成」の基準を大きく上回り、良好な結果であった。しかしながら、平成21年度まで比較的良好であった「知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を下回る結果となった。理由の一つとして球の体積や有効数字など、新学習指導要領への移行措置に伴い新しく追加された学習内容に関する問題の正答率が特に低く、定着が十分でなかったことがあげられる。また、「見方や考え方」においても、「おおむね達成」の基準をわずかに上回る結果にとどまった。「与えられた情報を読み取り、数学的に処理する力」や「数量の関係や問題解決の方法を説明する力」などに課題がみられた。

(ウ) 内容・領域別正答率

中学2年生

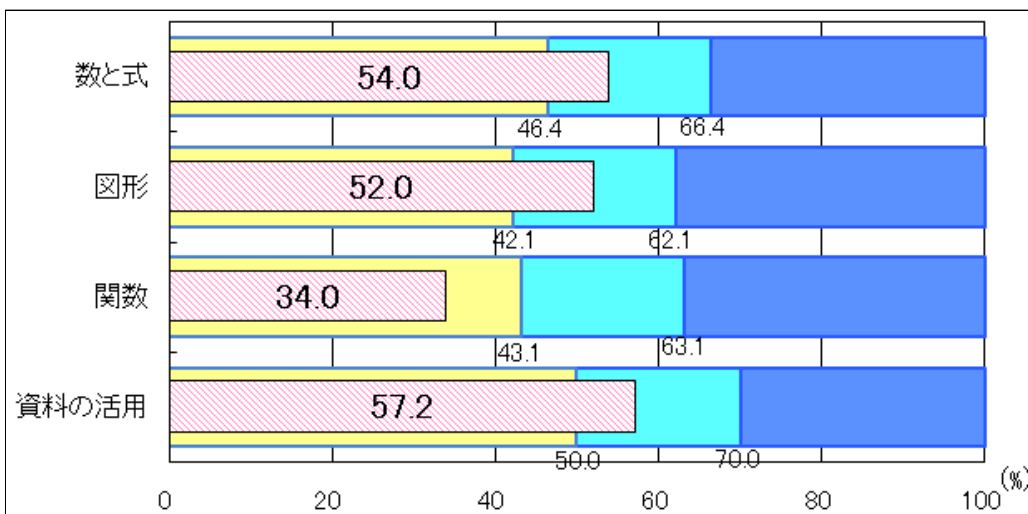


図2 H22年度（中学2年生数学）内容・領域別正答率

新学習指導要領への移行措置に伴い、平成21年度までの3領域に「資料の活用」を加えた4領域（「数量関係」は「関数」に変更）において、平成22年度は出題されている。「数と式」、「図形」、「資料の活用」の領域においては、「おおむね達成」の基準を上回った。また「関数」の領域においては大きな低下が見られ、出題された8問中の7問において、「おおむね達成」の基準を下回る結果となった。理由として、中学1年生の「関数」領域の主要内容ともいえる「比例と反比例」に関する内容の定着が、十分でなかったことが考えられる。

イ 経年比較

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

数学においては、同一学年(平成22年度の2年生と平成21年度の2年生)について、経年比較をすることにより分析を行った。比較する視点については、上記の概要から大きな低下がうかがえる「基礎的・基本的問題」と、平成21年度調査を受けての大きな課題の1つであった「活用する力を問う問題」の2点に絞った。

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較(同一学年)

中学2年生

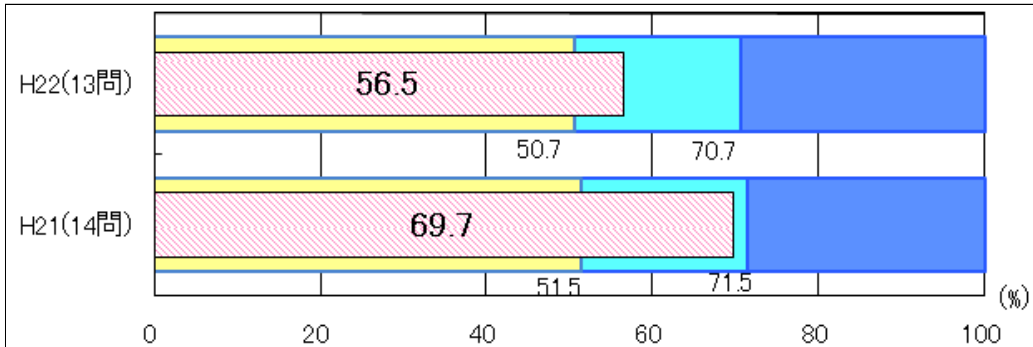


図3 H21・22年度(中学2年生数学)「基礎的・基本的問題」正答率の経年比較

「基礎的・基本的問題」については、平成21年度に比べると、全体として正答率の低下は明らかである。ただ設問別に見れば、新しく追加された学習内容にかかわる問題等、特定の問題についての正答率が大きく落ち込んでいることが大きな要因の1つであることがわかる。

また、下の表1は、「数と式」の領域における「基礎的・基本的問題」(正の数・負の数及び文字の式、方程式における計算の技能を必要とする問題)の正答率を表したものであり、出題形式や難易度もほぼ同等と判断できたので比較した。下の表からは、「数と式」の領域における「基礎的・基本的問題」についても、やや低下の傾向にあることがわかる。

表1 H21・H22年度(中学2年生数学)「主に計算の技能を必要とする問題」正答率の経年比較

問題番号	出題内容	H22正答率	H21正答率	十分達成	おおむね達成
1(1)	正の数・負の数の計算	89.3	88.8	75.0	55.0
1(2)	指数を含んだ数の計算	58.4	64.7	70.0	50.0
1(3)	分配の法則を用いた文字の式の計算	64.3	67.1	70.0	50.0
3(1)	一元一次方程式を解く問題	69.0	84.9	70.0	50.0
全体	計算力を問う問題	70.1	76.4	71.3	51.3

(イ) 「活用」に関する問題の経年比較(同一学年)

中学2年生

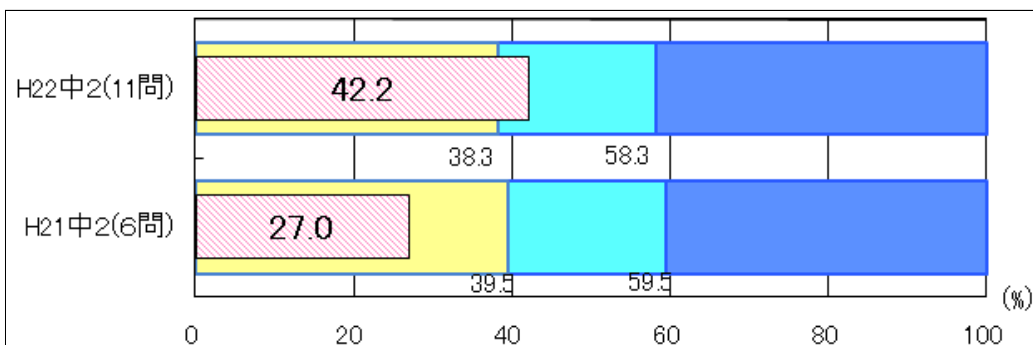


図4 H21・22年度(中学2年生数学)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

「活用」に関する問題については、平成22年度は「おおむね達成」の基準をやや上回り、全体的に向上している。特に「図形」領域の「対称な図形」に関する問題については、「十分達成」の基準を上回り、良好な結果が見られた。しかし、「数と式」領域の「2通りに表される数量を見だし、方程式をつくる」、「文字式を読み取る」などの問題や、「関数」領域における「活用」に関する問題が「おおむね達成」の基準を下回る結果となり、課

題が見られた。また、「活用」に関する記述式の問題について、表2により経年比較をした。

表2 H21・22年度（中学2年生数学）記述式の問題の正答率・無解答率の経年比較

	問題番号	正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H22	5(2)	31.9	42.2	55.0	35.0
	11(2)	31.5	36.1	55.0	35.0
	平均	31.7	39.1	55.0	35.0
H21	2(3)	18.9	30.2	65.0	45.0
	4(2)	15.1	45.2	55.0	35.0
	8(2)	26.3	32.1	60.0	40.0
	13(2)	20.2	37.4	55.0	35.0
	14(3)	40.3	33.9	55.0	35.0
	平均	24.2	35.8	58.0	38.0

平成21年度と比べると、全体正答率において7.5ポイントの上昇が見られるので、成果も上がっているととらえ方もできる。しかし、全体正答率が「おおむね達成」の基準に到達していない点と、無解答率が39.1と高い数値である点を考えれば、今後も「数学的な表現を用いて、思考の過程や判断の根拠などを数学的に説明する力」を高めるための取り組みが必要である。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

上記の「ア 結果の概要」と「イ 経年比較」から、「基礎的・基本的な知識・技能」にかかわる学習内容(特に新しく追加された学習内容)と、「活用」に関する学習内容において、課題が多いことがわかった。そこで、この2点について、正答率が低かった問題と無解答率が高かった問題を取り上げ、設問ごとに分析を行うことで、より詳細に課題を把握し、具体的な改善点や方策を提示することとした。

傾向1 「基礎的・基本的な知識・技能」を問う問題の正答率が低下している。

[中学2年生 大問2の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問2(1)	負の数における2数の大小を理解している。 (短答式)	-0.1 <input type="text"/> -0.01 に不等号を入れる。	53.5	1.7	75.0	55.0

○ 解答状況

正答率は53.5であり、「おおむね達成」の期待正答率55.0をやや下回った。小数や分数について数値的な大きさに関する概念が定着していないものと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

数の大小関係を表す不等号と、負の小数や分数についての大小関係について、知識の定着を図る取り組みが必要である。場合によっては、小学校で学習する内容の正の数の範囲の小数や分数についての復習も必要である。数の大小関係を考える場合は、数直線上に表して考えることが多いと思うが、数直線上の目盛りを細かくとって表すなどの指導の工夫が必要である。

[中学2年生 大問8の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問8(1)	球の体積の求め方を理解している。 (短答式)	$r=3\text{cm}$ の時の、半球容器の体積を求める。	13.2	16.6	70.0	50.0

○ 解答状況

正答率は13.2であり、「おおむね達成」の期待正答率50.0を大きく下回った。球の体積を求めるための公式についての知識の定着が不十分であるといえる。

○ 指導法改善の手立て

新学習指導要領への移行措置に伴い、新しく追加された学習内容である。球の体積の公式の導き方については、中学校の学習では取り扱わないため、図形領域における知識の一つとして、十分な定着を図る必要がある。例えば、「球や半球の容器に水を入れて、体積を求める」などの操作する活動を取り入れれば、学習意欲の向上も期待でき、より知識の定着が図られるものと思われる。

[中学2年生 大問10の(1),(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問10(1)	比例定数の意味を理解している。 (選択式)	$y = \frac{6}{x}$ について、 選択肢から正しいものを選ぶ。	48.1	3.7	70.0	50.0
問10(2)	反比例の関係を表すグラフの特徴を理解している。 (短答式)	点A(6, -2)を通反比例のグラフから、x, yの関係を式に表す。	36.0	16.6	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率はともに50.0であり、(1)は48.1、(2)は36.0と、期待正答率を下回った。しかも(2)に至っては、無解答率も16.6と高い数値であった。yがxに反比例する関係についての基礎的・基本的な学習内容に、大きな課題があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

比例や反比例の学習では、式、表、グラフを関連付けて、ともなって変わる2つの数量の変化や対応について調べることにより、その特徴を見いだしたり、確認したりすることが大切である。またその際、それぞれの式、表、グラフの特徴について、具体的に言葉で書き表したり説明したりするなどの表現活動を取り入れることで、より理解も深められると考える。また反比例の式の形としては、 $y = a/x$ が一般的ではあるが、 $xy = a$ ととらえる見方についても、知識としてはぐくみたい。

[中学2年生 大問15]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問15	有効数字の意味を理解している。 (短答式)	測定値 5.48×10 mlは、何mの位まで測定したものかを書く。	11.1	14.8	70.0	50.0

○ 解答状況

正答率は11.1であり、「おおむね達成」の期待正答率50.0を大きく下回った。有効数字の表し方についての知識の定着が不十分であるといえる。


○ 指導法改善の手立て

新学習指導要領への移行措置に伴い、新しく追加された学習内容である。有効数字については、その有用性について理解をさせながら、知識としての定着を図っていく必要がある。できれば、理科で取り扱われるような実験結果を基にした数値や、日常生活の中にある数値で表された情報などを題材として、生徒の関心・意欲を引き出しながら、理解が深められるようにしていきたい。

傾向2 「数と式」、「関数」の領域における「活用」に関する問題の正答率が低く、無解答率が高い。

[中学2年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(2)	2通りに表される数量を見いだし、方程式をつくることができる。 (選択式・短答式)	$\frac{x-10}{5} = $  に適する式を書き、何が等しいか選択肢から選ぶ。	8.7	4.8	55.0	35.0

○ 解答状況


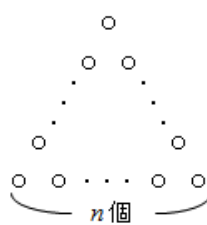
正答率は8.7と、「おおむね達成」の期待正答率35.0を大きく下回った。与えられた情報の中から、数量の関係を的確に読み取り、式に表すという数学的な思考力に大きな課題がある。

○ 指導法改善の手立て

この問題は、まず2つの未知数が問われており、未知数 x の置き方によって2通りの方程式が考えられるものであった。太郎さんの考え(生徒の人数を x とおいて、お菓子の数が等しいことに目を付ける)が一般的であると思うが、花子さんの考え(お菓子の数を x とおいて、生徒の数が等しいことに目を付ける)も理解できるような柔軟な思考力を身に付けさせたいものである。授業においても、このような2通り以上の考え方ができる方程式の問題等を題材として取り扱うことにより、数学的な思考力を培うこともできると考える。

[中学2年生 大問5の(1),(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問5(1)	文字式の意味を読み取ることができる。 (短答式)	ア $3(n-2)+3$ イ $3(n-1)$ ア、イのどちらかを選び、その考え方を  で囲んで、示す 	42.7	10.1	65.0	45.0
問5(2)	文字式を読み取り、説明することができる。 (記述式)	(1)で選んだ全部の石の個数の表し方を、式や言葉を使って説明する	31.9	42.2	55.0	35.0

○ 解答状況

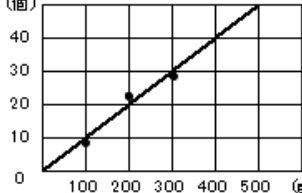
(1)は「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は42.7、(2)は「おおむね達成」の期待正答率35.0に対し正答率は31.9で、ともに下回った。特に(2)については、無解答率も42.2と高い数値であった。文字式の意味を読み取ったり説明したりするために必要となる数学的な思考力・表現力において課題が見られた。

○ 指導法改善の手立て

ある具体的な数量について表された文字式の意味を読み取ったり、逆に具体的な数量を一般化して文字式に表す場合については、幅広い視野での数学的な見方や考え方が必要になる。さらに、(2)のように説明を必要とする場合については、数学的な表現力や言語能力も必要となる。このような問題については、主に課題学習の中で取り扱われることが多いが、図を用いたり数を数えたりするところから、規則性や数量の関係に気付かせ、文字式として一般化させていくような取り組みが大切である。そういった活動を通して、幅広い視野での数学的な思考力が培われていくものとする。また授業の中で、自分が予想したことやその理由等について、書き表したり人に伝えたりする活動も合わせて取り組むことによって、数学的な表現力や言語能力が培われていくものとする。

[中学2年生 大問11の(1),(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問11 (1)	事象における数量関係をグラフから見いだすことができる。 (短答式)	① にあてはまる式をかく 「そうか、ここで重さを x g、個数を y 個とおくと、 y は x に比例すると考えることができるから、 x 、 y の関係は ① という式に表せるね。」 「そうすると、アサリ貝3kgの個数は ② 個と考えることができるね。」	16.7	19.3	65.0	45.0
問11 (2)	問題解決の方法を数学的に説明することができる。 (記述式)	② にあてはまる個数を求め、求め方を式や言葉を使って説明する 	31.5	36.1	55.0	35.0

○ 解答状況

(1)は「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は16.7、(2)は「おおむね達成」の期待正答率35.0に対し正答率は31.5で、ともに下回った。さらに無解答率については、(1)が19.3、(2)が36.1と高い数値であった。事象を数学化する力や、数学的に解釈したり表現したりする力に課題が見られた。

○ 指導法改善の手立て

この問題においては、比例にかかわる基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用する力が求められている。特に比例や反比例を学習するにあたっては、できるだけ身近にあるような題材を用いて、分かりやすいものから取り扱い、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図りながら、少しずつ思考力を伴うような問題へとステップアップしていく進め方がよいと考える。また、正答率が低かった原因の一つとして、目盛りの違うx軸とy軸のグラフの見方や考え方について、慣れていなかったことも考えられる。教科書においては、このような題材の取り扱いも少ないため、別に題材や課題を提示して、そこから思考力や表現力をはぐくむような学習活動を取り入れていく必要がある。

[中学2年生 大問12の(1),(2),(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問12(1)	情報を読み取り、的確に処理することができる。 (短答式)	水を入れる時間を x 分、水面までの高さを y cm として、 x 、 y の関係を式に表す。	23.7	20.6	65.0	45.0
問12(2)	事象の変化を数学的に処理することができる。 (短答式)	水そうの深さを求める。	34.0	24.7	65.0	45.0
問12(3)	事象における数量関係を見いだし、処理することができる。 (短答式)	あふれた水の量が、水そうの深さの何cm分になるかを求める。	38.0	25.0	55.0	35.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率は(1)45.0、(2)45.0、(3)35.0であったが、正答率は(1)23.7、(2)34.0、(3)30.8と、すべて下回った。無解答率も、(1)20.6、(2)24.7、(3)25.0と高い数値を示した。情報を読み取り活用する力や、事象の変化をとらえ、数学的に処理する力などにおいて、課題が見られた。

○ 指導法改善の手立て

(1)については、多くの与えられた情報の中から数量の関係(x 、 y の関係)を見いだす力が求められている。また、(2)、(3)については、与えられた情報を整理して見る力と、そこから見いだされる数量の関係を的確に読み取り、それらを活用していく力が求められている。一つの単元や関連内容の学習が終了する節目となる時間に、このような問題を取り扱った授業を実践することは、数学的な思考力・表現力を高める上においても、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る上においても大きな効果をもたらすものとする。実践にあたって

は、題材や課題の提示、場面の設定などの工夫が大切である。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった指導改善のための重点項目は、次の3つである。

- ア 「知識・理解」に関する学習内容及び基礎的・基本的な学習内容(特に新しく追加された内容)の確実な定着を図ること
- イ 「関数」領域の「比例と反比例」に関する学習内容の確実な定着を図ること
- ウ 数学的な思考力や表現力をさらにはぐんでいくこと

以上のような重点項目を踏まえ、学習指導の改善を図っていく必要がある。数学的活動についても、積極的に取り入れることが大切ではあるが、「授業の中にどのように位置付け、どのような活動をさせた方がより効果的であるか」ということを考えながら、授業の改善を図っていくことが大切である。

※数学的活動は、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けるとともに、数学的に考える力を高めたり、数学を学ぶことの楽しさや意義を実感させたりするために、重要な役割を果たすものである。

ア 「知識・理解」に関する学習内容及び基礎的・基本的な学習内容の確実な定着に向けて

「球の体積」や「有効数字」等、新しく追加された学習内容に関しての課題だけでなく、全体的にみても基礎的・基本的な学習内容の定着にも課題があることがうかがえる。思考力や表現力の向上を目的とした数学的活動を取り入れた授業実践を重視することはもちろん大切であるが、こればかりを重視しすぎれば、逆に活動の基盤となる基礎的・基本的学習内容の定着が低下するといった悪影響も考えられる。数学的活動の役割にもあるように、3つの点(「知識・技能を確実に身に付ける」、「思考力・判断力・表現力を高める」、「数学を学ぶことの楽しさや意義を実感させる」)のバランスと連動性を考えながら、授業改善を図ることが大切である。

イ 「関数」領域「比例と反比例」に関する学習内容の確実な定着を目指して


1学年の「関数」領域の学習内容は、「比例と反比例」が中心であるが、2学年以降の本領域の学習において、関数や座標の意味、グラフのかき方など、基盤となる大切な内容も多い。そのため、今後の本領域の学習過程においては、既習事項の確認を十分行いながら、学習を進めていく必要があると思われる。また、できるだけ身近にあるような題材や興味を引くような題材を取り上げて、分かりやすいものから、少しずつ思考力を伴うような問題へと、段階に応じた学習指導が望まれる。生徒の学習状況や到達度に応じて、適切な題材や課題の提示を工夫することが大切であると考ええる。

ウ 数学的な思考力・表現力の向上を目指して

数学的活動を積極的に取り入れた授業実践を積み重ねることが必要であるが、前にも述べたように授業実践をする上において、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る視点も忘れてはならない。その上で、「概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする活動」、「情報を分析・評価し論述する活動」、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動」などの言語活動を重視した数学的活動を通じた授業の充実を図っていくことが大切である。また、通常の授業で取り扱う題材や課題は、領域の内容を中心としたものが多いため、生徒は各領域の内容を関連性のないものにとらえる傾向がある。獲得した知識・技能を活用するための数学的な思考力・表現力を身に付けるには、各領域の学習やそれらを相互に関連付けたストーリー性のある授業を設定していくことも必要である。

オ 授業実践に参考となるリンク

 **授業に役立つ実践研究**

 **授業・自己研修・校内研修のための資料集**

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>Ⅲ 各教科の調査結果の分析>中学校理科

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

中学校理科

生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導の徹底

教科全体正答率は、中学2年生、3年生ともに「おおむね達成」の基準を上回っている。しかし、内容・領域別正答率は、中学2年生は「大地の成り立ちと変化」と「身の回りの物質」、中学3年生は「天気とその変化」と「化学変化と原子・分子」の正答率が低い。また、設問ごとに見た傾向は、観察や実験の結果を分析して解釈する問題や自分の考えを文章やグラフで表現する問題に課題が見られる。

そこで、地学領域と化学領域を中心に、授業中に学習内容を振り返る時間の確保、家庭学習の充実など、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を徹底する必要がある。また、基礎的・基本的な知識・技能の定着、目的意識をもった観察・実験の徹底、言語活動の充実などを通して、科学的な思考力・表現力の育成を図る必要がある。

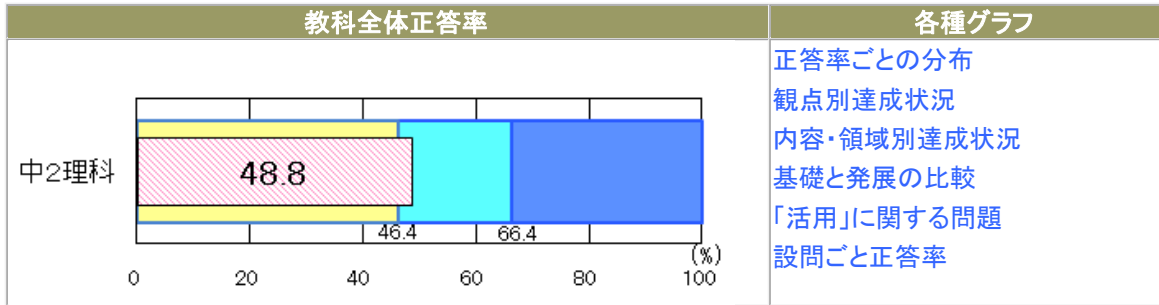
この後、評価の観点については、以下のように記す。

- 自然事象への関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし。
- 科学的な思考 → 「思考」ただし本文中では「科学的な思考」
- 観察・実験の技能・表現 → 「技能・表現」
- 自然事象についての知識・理解 → 「知識・理解」

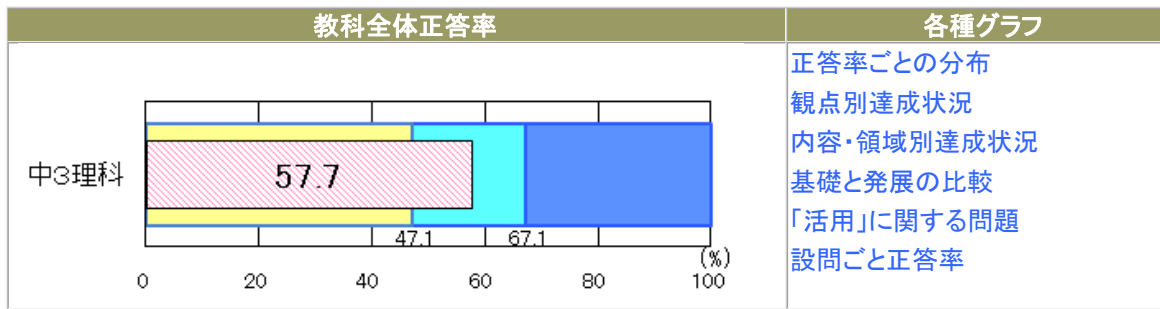
ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率



大問		小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)		蒸散が行われているところを気孔といふことを理解している	70.8	14.0	75	55
	(2)		蒸散量を調べるための実験で、操作上の理由がわかる	90.8	0.3	70	50
	(3)		蒸散の実験結果をもとに、蒸散量を推測し、求めることができる	35.9	0.6	60	40
2	(1)①		種子をつくるかつからないで、植物を分類することができる	76.1	0.7	70	50
	(1)②		根・葉の区別の有無でシダ植物とコウ植物に分類することができる	63.0	0.8	65	45
	(2)		分類表に当てはめて、身近な植物を分類することができる	26.0	3.9	65	45
	(3)		裸子植物の花のつくりを理解している	36.9	17.6	60	40
	(4)		単子葉類と双子葉類の共通点や相違点を理解し、身近な植物に当てはめることができる	78.6	2.8	65	45
3	(1)		音の波形から音の大きさを判断することができる	75.2	0.9	70	50
	(2)		音の高低にかかわる要因を調べることができる	31.6	19.4	60	40
	(3)		雷の光と音の伝わる時間のちがいがから、雷から人までの距離を求めることができる	70.1	6.7	65	45
	(4)		雷の位置と音が聞こえるまでの時間の関係を説明できる	83.5	6.6	65	45
	(5)アイ		日常生活における音の高低の事象を振動数の変化と関連付けて説明できる	35.0	2.4	60	40
4	(1)		圧力を求めることができる	24.9	10.9	70	50
	(2)	上向きの方	水中の物体は上向きの力がはたらき、その力が浮力であることを理解している	50.4	20.8	75	55
	(2)	力の大きさ	浮力の大きさを求めることができる	37.1	20.2	65	45
5	(1)		メスシリンダーを使った固体の体積のはかり方を理解している	70.4	6.7	70	50
	(2)①		質量と体積の測定値から密度を求めることができる	34.7	13.5	60	40
	(2)②		同じ物質であれば、密度の値が同じであることを理解している	33.0	4.8	55	35
	(2)③		水の密度より小さい値をとる固体は水に浮くことを理解している	32.4	4.0	60	40
	(2)④		日常生活で見られる密度の違いによって起こる事象について説明できる	62.1	5.3	60	40
6	(1)		パルミチン酸の融点を測定する場合、ゆっくり加熱する必要があることを理解している	61.6	1.2	70	50
	(2)		融点の意味を理解している	38.4	24.7	75	55
	(3)		物質が溶けている(固体から液体)ときの物質の状態を理解している	50.6	1.3	70	50
	(4)		物質の種類によって融点は決まっており、質量の違いによるグラフ変化について考えることができる	24.4	2.0	55	35
7	(1)		初期微動をおこす波について、P波であることを理解している	60.4	12.1	75	55
	(2)		地震のゆれ方の特徴から、主要動であることを理解している	58.7	14.5	75	55
	(3)		初期微動をおこす波の速さを求めることができる	32.4	3.3	60	40
	(4)		初期微動継続時間と震源からの距離との関係をグラフに表すことができる	35.5	15.8	60	40
	(5)		地震によって起こる災害について日常生活や社会と関連付けて理解している	45.7	24.0	75	55
8	(1)		堆積岩の種類とその特徴を理解している	22.9	14.9	70	50
	(2)		砂岩などの堆積岩のつくりについて理解している	67.8	2.4	70	50
	(3)		代表的な示準化石の姿やその年代を理解している	22.3	23.7	70	50
	(4)		示準化石の特徴を理解している	35.7	2.9	65	45
	(5)		かき層について理解している	32.0	32.3	70	50



中3理科 設問毎正答率						
大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	グラフから電熱線に加えた電圧と流れる電流の関係を理解している	42.0	13.1	75	55
	(2)	グラフから電熱線に加えた電圧と流れる電流の関係から電流の大きさを求めることができる	61.7	5.6	65	45
	(3)	グラフから電熱線を流れる電流の流れにくさを比べることができる	69.0	5.2	65	45
	(4)	並列回路における電流の流れ方や電圧の加わり方を理解している	49.9	10.3	60	40
2	(1)	電力の意味を理解している	90.4	0.8	75	55
	(2)	電力と水の温度上昇との関係を理解している	76.4	0.6	70	50
	(3)	電力について日常生活と結び付けて理解している	84.2	0.7	60	40
3	(1)	磁力のはたらく空間を磁界とすることを理解している	87.7	5.2	75	55
	(2)	鉄粉を撒いたときの模様から、棒磁石のまわりの磁界の様子を理解している	86.0	0.6	70	50
	(3)	電流が流れている1本の導線の回りに磁界があることを理解している	34.3	1.4	60	40
4	(1)	異なる物質同士をこすり合わせると静電気が生じることを理解している	94.0	2.2	75	55
	(2)	帯電した物体間に空間を隔てて引力が働くことを調べることができる	50.0	0.5	70	50
	(3)	帯電した物体間に空間を隔てて斥力が働くことを調べることができる	70.3	0.7	70	50
	(4)	静電気によって起こる身近な現象から、電子の存在を理解することができる	74.2	1.5	75	55
5	(1)	水を電気分解したときの、反応の状態を理解している	50.2	1.0	70	50
	(2)	水を電気分解するとき、電圧を上げると反応が速くなることを理解している	63.6	1.2	70	50
	(3)	物質は分子や原子が構成要素であることを理解し、粒子モデルを使って考察することができる	34.5	14.8	60	40
	(4)	水の電気分解によってできる物質の性質を調べる方法や結果を理解している	32.1	28.9	60	40
6	(1)	だ液にふくまれる消化酵素がはたらく温度を理解している	24.1	15.4	70	50
	(2)	安全な加熱の仕方を理解している	60.8	10.5	70	50
	(3)	実験結果から、だ液の働きでデンプンが変化することを理解している	26.1	1.2	60	40
7	(1)	感覚器官や神経系、運動器官のつくりを理解している	62.9	6.6	75	55
	(2)	反射について、外界からの刺激が受け入れられ反応が起こるまでの神経系の経路を理解している	58.6	0.9	70	50
	(3)	神経系の働きについて日常経験を通して理解している	48.3	0.9	65	45
8	(1)	脊椎動物の呼吸の仕方を理解している	88.2	4.4	70	50
	(2)	脊椎動物のホニュー類の子の生まれ方(胎生)を理解している	59.2	17.0	70	50
	(3)	脊椎動物の子の生まれ方や育て方を理解している	73.9	2.2	65	45
	(4)	脊椎動物の中のホニュー類と鳥類は、体温を保つ仲間(恒温動物)であることを理解している	72.3	6.8	70	50
9	(1)	天気図から天気、風向が推測できる	64.4	1.3	60	40
	(2)	天気図と気象衛星雲画像を正しく関連付けて考察できる	55.3	2.0	60	40
	(3)	前線の通過による気温・風向の変化を理解している	42.4	2.1	70	50
	(4)	前線の通過から天気の前線を推測することができる	28.1	2.2	55	35
10	(1)	気温が下がると、空気中の水蒸気が氷になることを理解している	60.8	9.7	75	55
	(2)	飽和水蒸気量、露点、湿度などを相互に関連付けて考えることができる	20.2	3.0	60	40
	(3)	湿度を計算によって求めることができる	10.4	24.7	60	40
	(4)	上昇気流によって、空気が膨張し、気温が下がると露点に達することによって雲ができることを理解している	70.6	11.2	65	45

(イ) 評価の観点別正答率

① 中学2年生

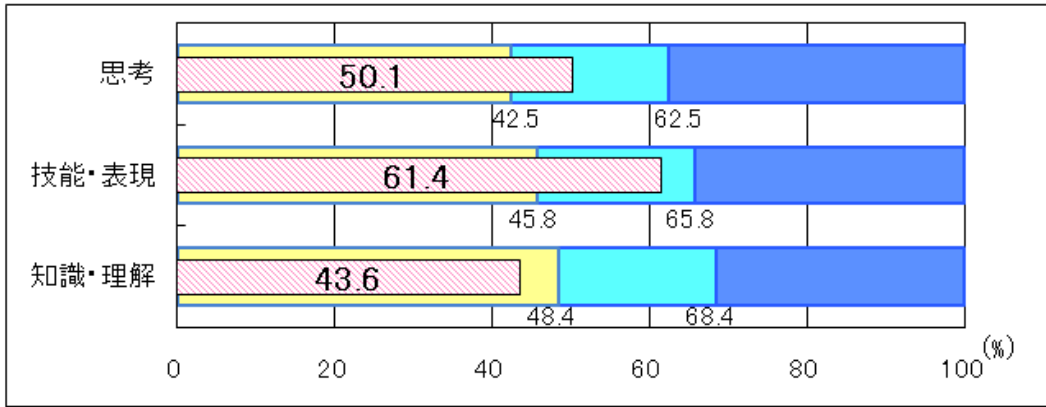


図1 H22年度（中学2年生理科）評価の観点別正答率

③ 中学3年生

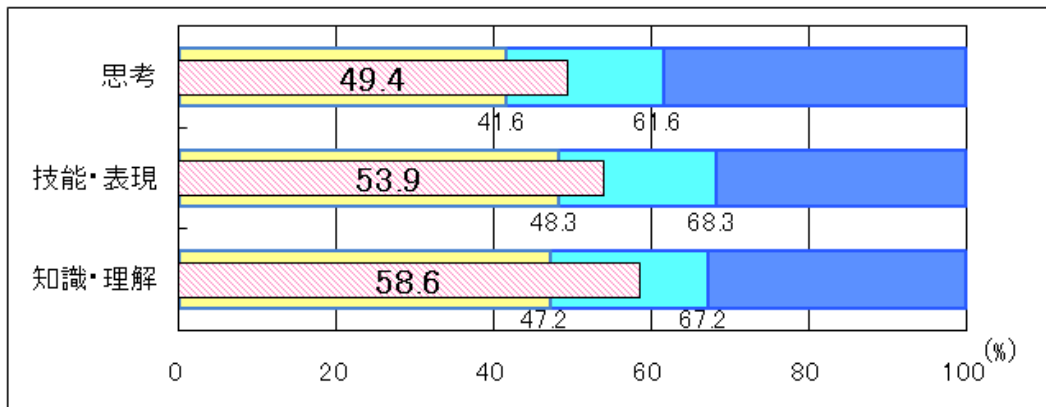


図2 H22年度（中学3年生理科）評価の観点別正答率

中学3年生は、すべての観点において、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。中学2年生は、「科学的な思考」と「技能・表現」は、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「知識・理解」は、「おおむね達成」の基準を下回った。中学2年生の「知識・理解」の観点が低かった原因の一つに、「大地の成り立ちと変化」の正答率の低さがあると考えられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

①中学2年生

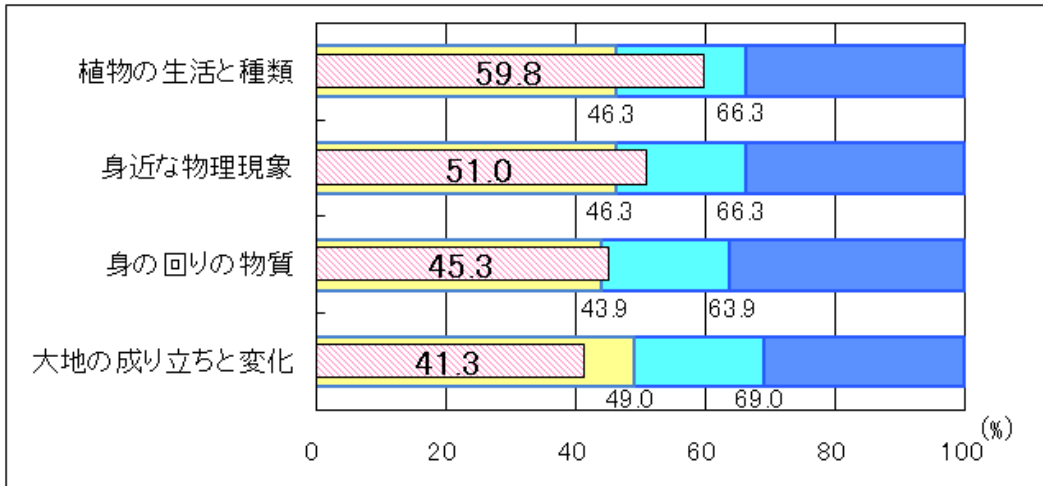


図3 H22年度（中学2年生理科）内容・領域別正答率

「植物の生活と種類」と「身近な物理現象」については、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「身の回りの物質」については、「おおむね達成」の基準をわずかに上回るにとどまっている。また、「大地の成り立ちと変化」については、「おおむね達成」の基準を下回っている。
 「大地の成り立ちと変化」は、学年末に学習することが多い。そのため、定期テストや確認テスト等で学習内容が生徒一人一人に定着しているかの評価と、それに対する指導が十分に行われていないためであると考えられる。

②中学3年生

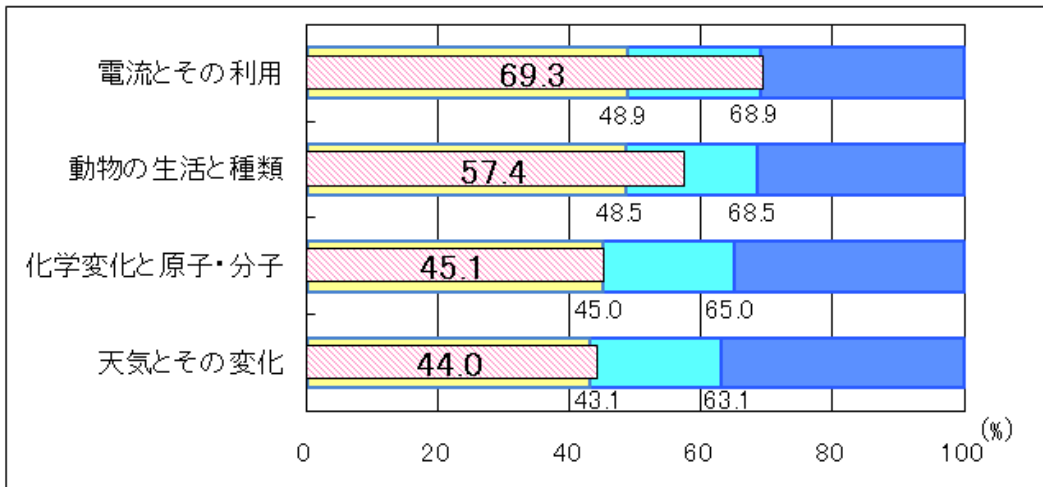


図4 H22年度（中学3年生理科）内容・領域別正答率

「電流とその利用」については、「十分達成」の基準を上回った。「動物の生活と種類」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「化学変化と原子・分子」と「天気とその変化」については、「おおむね達成」の基準をわずかに上回るにとどまっている。地学領域と化学領域の正答率の低さは、中学2年生にも同じ傾向がみられる。「化学変化と原子・分子」と「天気とその変化」とも、記述式で答える問題が多く、生徒一人一人に言語力が十分に身に付いていないためであると考えられる。

イ 経年比較

(凡例) □:要努力(おおむね達成の基準を下回る) □:おおむね達成 □:十分達成

中学2年生は、「知識・理解」の評価の観点別正答率が低く、課題が見られた。中学3年生は、「科学的な思考」の評価の観点別到達度分布に課題が見られた。そこで、平成22年度と平成21年度において、同一生徒を対象に追跡調査し、経年比較を行った。

また、新しい学習指導要領では、言語活動の充実を通して科学的な思考力を育成することが求められており、「活用」に関する問題の正答率を経年比較することも重要なことである。そこで、「活用」に関する問題の正答率についても同様に経年比較を行った。

(ア) 「知識・理解」の経年比較

H22中学2年生とH21中学1年生(同一生徒)

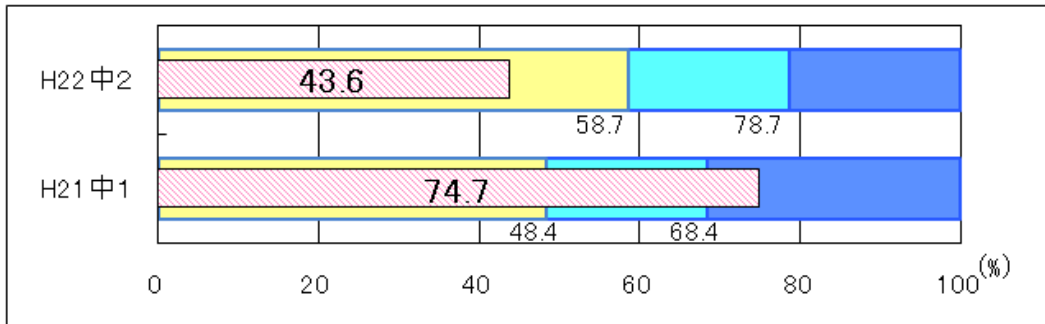


図5 H21年度(中学1年生)・H22年度(中学2年生)「科学的事象についての知識・理解」正答率の経年比較

「知識・理解」について、平成21年度の中学1年生では「おおむね達成」の基準を上回ったが、平成22年度の中学2年生では「おおむね達成」の基準を下回った。中学校理科の学習は、小学校理科の学習と比べて学習内容が多く、しかも授業の進度も速いため、知識・理解の定着が十分に図られていないことが考えられる。

(イ) 「科学的な思考」の経年比較

H22中学3年生とH21中学2年生(同一生徒)

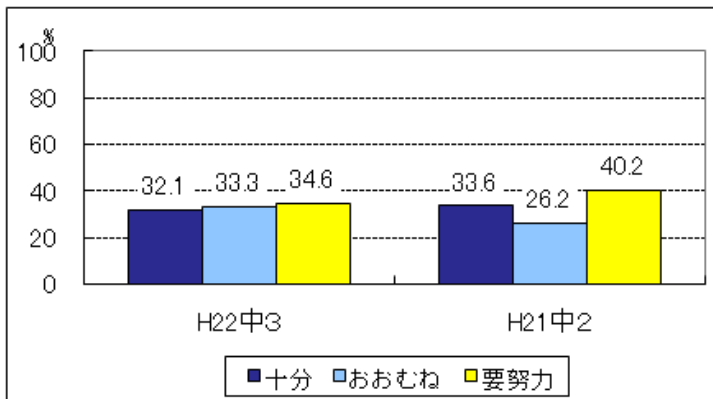


図6 H21年度(中学2年生)・H22年度(中学3年生)「科学的な思考」評価観点別到達度分布の経年比較

「科学的な思考」について、平成21年度の中学2年生では、「要努力」の生徒の割合が40.2%で、「おおむね達成」の生徒の割合が26.2%であった。しかし、平成22年度の中学3年生では、「要努力」の生徒の割合が34.6%と5.6ポイント減少し、「おおむね達成」の生徒の割合が33.3%と7.1ポイント上昇した。このことは、実験や観察で得られたデータや事実を客観的にとらえ生徒自身が考察しまとめるような授業を通して、科学的な思考力の育成に努めてきた成果であると考えられる。しかし、「十分達成」の生徒の割合は、平成22年度は32.1%と、平成21年度の33.6%より1.5ポイント減少しており、生徒一人一人の能力に応じたきめ細かな指導をさらに充実させる必要がある。

(ウ) 「活用」に関する問題の経年比較

①H22中学2年生とH21中学1年生(同一生徒)

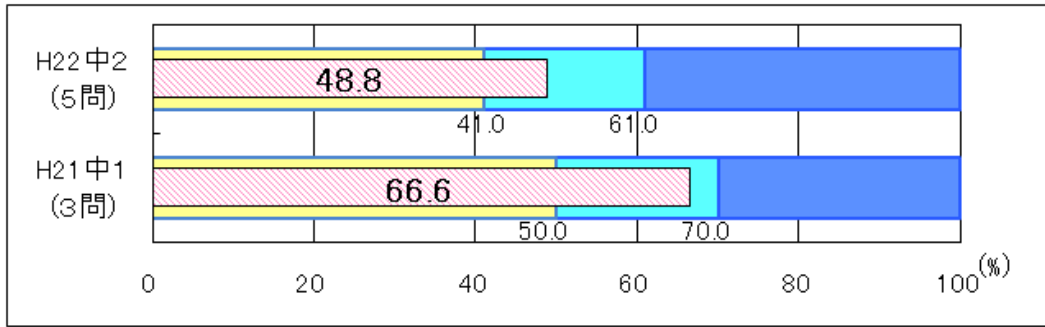


図7 H21年度(中学1年生)・H22年度(中学2年生)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

②H22中学3年生とH21中学2年生(同一生徒)

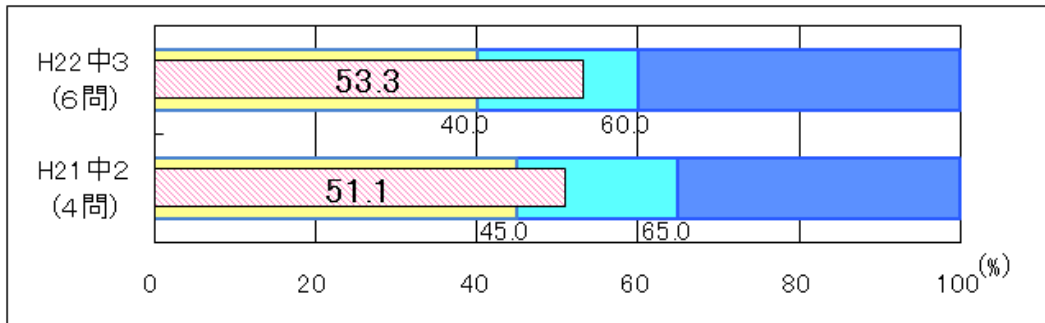


図8 H21年度(中学2年生)・H22年度(中学3年生)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

中学2年生は、平成21年度は「おおむね達成」の基準を16.6ポイント上回り、平成22年度では「おおむね達成」の基準を7.8ポイント上回っていた。また、中学3年生は、平成21年度は「おおむね達成」の基準を6.1ポイント上回り、平成22年度では「おおむね達成」の基準を13.3ポイント上回った。以上のことから、中学校理科における「活用」を問う問題の正答率は、おおむね良好な結果であるといえる。このことは、身の回りの自然事象から問題を見出し、科学的な知識や概念を用いて、主体的に解決する学習を計画的に取り入れてきたためであると考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

経年比較より、「知識・理解」の評価の観点別正答率については、中学1年生から中学2年生にかけて低下するものの中学3年生になると向上している。「活用」を問う問題の正答率についても、同じような傾向が見られる。知識・技能を習得することと、習得した知識・技能を活用することは、車の両輪のように相互に関連し合っている。そこで、知識・技能の習得と活用に関連の深い内容の問題として、「観察、実験の技能・表現に関する問題」「結果を分析して解釈する問題」「日常生活や社会との関連を図る問題」「導き出した自分の考えを文章やグラフで表現する問題」について分析する。

傾向1 **観察や実験の技能・表現に関する問題は良好。結果を分析して解釈する問題に課題。**

[中学2年生 大問2の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(4)	単子葉類と双子葉類の共通点や相違点を理解し、身近な植物に当てはめることができる。 (記述式)	主根と側根の区別がある植物の葉脈の特徴が、網目状に正しく表現する。	78.6	2.8	65.0	45.0

○ 解答状況

「十分達成」の期待正答率65.0に対して正答率は78.6であり、13.6ポイント上回った。無解答率も2.8と低かった。授業中に観察・実験はよく行われており、特に観察・実験の場面で、TTや少人数指導などの指導が活発に行われている。このようなきめ細かな指導が生徒の観察、実験の技能・表現の向上につながっていると考える。

○ 指導法改善の手立て

平成21年度の第2学年で、種子が発芽したときの芽生えの様子から双子葉類の特徴について問う問題を出しているが、「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して正答率は44.3であり、5.7ポイント下回っていた。無解答率も19.7と高かった。しかし、平成22年度では、双子葉類の葉脈の観察結果を正確に表現することができた生徒の割合は78.6%で、「十分達成」を13.6ポイント上回り、良好な結果であった。観察、実験におけるTTや少人数指導などの指導などのきめ細かな指導が、観察、実験の技能・表現の向上につながっていると考える。今後は、目的意識をもって観察や実験を行い、分かったことや気付いたことを記録・分析し、図や文章等で表現する活動を授業に計画的に取り入れていくことにより、観察、実験の技能・表現のより一層の向上へとつながっていくと考える。

[中学2年生 大問6の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問6(4)	物質の種類によって融点は決まっており、質量の違いによるグラフ変化について考えることができる。 (選択式)	パルチミン酸の質量を2倍にしたとき、融点と温度上昇の時間がどのように変化するのかを予想し、適切なグラフを選択肢から選ぶ。	24.4	2.0	55.0	35.0

○ 解答状況

正答率は24.4であり、「おおむね達成」の期待正答率35.0に対して10.6ポイント下回った。日々の授業で、実験で得られたグラフから物質の融点と加熱時間の関係を読み取るなど、結果を分析して解釈する力が十分に育成されていないためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

結果を分析して解釈する力を育成するためには、パルチミン酸の量を変えたときのデータを基にグラフを作成させたり、縦軸と横軸の目盛りの取り方を生徒自身に考えさせたりして、グラフを読み取る能力の育成を図ることが必要であると考えられる。指導に当たっては、少人数やTTで授業を行ったり、グループで協力して取り組ませたりするなど、結果を分析して解釈する場面において、生徒の理解の程度に応じたきめ細かな指導をより一層徹底することが大切であると考えられる。

傾向2 日常生活や社会との関連を図る問題は良好。導き出した自分の考えを文章やグラフで表現する問題に課題

[中学3年生 大問2の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問2(3)	電力について日常生活と結び付けて理解している。 (選択式)	電力の異なる3種類の電気ポット(1200W、700W、500W)を、1500W用のテーブルタップ1本につなぐとき、安全に使用できる組み合わせを選択肢から選ぶ。	84.2	0.7	60.0	40.0

○ 解答状況

正答率は84.2であり、「十分達成」の期待正答率60.0に対して24.2ポイント上回った。生徒の身の回りにある電気ポットとテーブルタップに関する問題であり、学習した内容を日常生活との経験と関連付けて答えることができたため正答率も高かったと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

新学習指導要領にも示されているように、日常生活や社会との関連を図る力をより一層高めるため、科学技術が日常生活や社会を豊かにしていること、安全性の向上に役立っていることについて授業で扱うことは、理科を学習する意義や有用性を実感させ、自然現象に対する関心を高めるのに有効な取り組みであると考えられる。

[中学3年生 大問5の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問5(4)	水の電気分解によってできる物質の性質を調べる方法や結果を理解している。 (記述式)	水を電気分解したとき、電源装置の一極につないだ電極から発生した物質が何であるか確かめる実験方法とその結果について、それぞれ文章で表現する。	32.1	28.9	60.0	40.0

○ 解答状況

正答率は32.1であり、「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して7.9ポイント下回った。また無解答率は28.9と高かった。日々の授業において、「何のためにこの実験を行うのか」「どのような結果になるのか」について、自分の言葉で表現する場面を取り入れた学習活動が十分に行われていなかったためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

導き出した自分の考えを文章やグラフで表現する力を育成するための手立てとして、次の3つの活動を取り入れた取り組みが考えられる。

①観察や実験の計画や検証方法を発表し自分の考えを深める活動

②観察や実験の結果を図、表、グラフに表して考察し、レポートにまとめる活動

③学習内容と関連する身近な事象について、科学的な知識や技能を活用して説明する活動

また、無解答率を減少させるための取り組みとして、観察・実験の「予想」や「考察」、「この実験で何が明らかとなって何が課題として残ったのか」等について、授業の中で生徒自身に自分の言葉を使って文章で表現させることを徹底することが重要であると考えられる。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって、「結果を分析して解釈する内容」「導き出した自分の考えを文章やグラフで表現する内容」に課題が見られた。この課題を解決するためには、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着と科学的な思考力・判断力・表現力の育成の両立を図る授業を展開することが重要である。そこで、次の3つの点を大切に、これからの指導に取り組む必要がある。

ア 目的意識をもった観察・実験の徹底

日々の授業で、観察や実験はよく行われているが、「何を観察するのか」「何のためにこの実験を行うのか」という目的意識をもっていない生徒が少なくない。また、活動すること自体が目的となってしまう、何を確かめるのかわからないまま、「楽しかった」「おもしろかった」だけで終わってしまっていることも多い。重要なのは、生徒に目的意識をもって観察や実験を行わせ、何が獲得でき、何が分かるようになったかを明確にさせて、一連の学習を生徒に自分のものとしてとらえさせることである。そこで、観察や実験を行う前に学習した知識や概念を使って自分なりの仮説や予想を立てたり、観察や実験で得られた結果を分析して解釈し表現したりする活動を、一連の学習活動の中に明確に位置付けて取り組んでいくことが必要である。

イ 言語活動の充実を通して、科学的な思考力・表現力を育成

科学的な思考力や表現力をはぐくむためには、言語活動の充実を図ることが必要である。特に理科においては、観察や実験の結果に基づいてグラフの作成や読み取りができる、考察を言語化し表現できるなどの能力の育成が求められる。そこで、言語活動の充実を図るためには、観察や実験等の生徒の直接体験と結び付けた指導を行うことが重要で、具体的には次のような学習活動が考えられる。

- ① 問題を見だし観察や実験を計画する学習活動
- ② 観察や実験の結果を分析し解釈する学習活動
- ③ 科学的な概念を用いて考察したり説明したりする学習活動

これらの学習活動を、年間指導計画に明確に位置付け、言語活動の充実をより一層図っていくことが重要である。

ウ 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る指導と評価の一体化

科学的な思考力や表現力をはぐくむためには、学習した知識や技能を活用し、科学的に探究する場面を授業に計画的に取り入れることが重要である。そのためには、まず基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることが必要である。そこで、習得させるべき学習内容が確実に定着しているかを確かめる評価を計画的に行い、達成できていない場合は補充的な指導を確実に行うことが重要である。つまり、「指導と評価の一体化」を、今一度、徹底する必要がある。その際、授業中の観察やノートの点検、小テストの実施などの「短いフィードバック・サイクル」によるものと、単元末の確認テストや定期テスト・実力テストのやり直しなどの「長いフィードバック・サイクル」によるものを組み合わせて行うことが重要であると考えられる。個に応じたきめ細かな指導を全学年で継続的に取り組んでいくことが大切である。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > [Ⅲ 各教科の調査結果の分析](#) > 中学校英語

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

中学校英語

書く活動を日常的に取り入れた授業づくり

すべての評価の観点、内容・領域において、「おおむね達成」の基準を上回る成果が見られた。特に中学2年生の「聞くこと」及び中学3年生の「読むこと」の領域で「十分達成」の基準を上回った。しかし、「書くこと」の領域では学年が上がるごとに「要努力」の比率が増加する傾向がある。今後の指導にあたっては、書く活動を日常的に取り入れた授業づくりが求められる。毎回、5分程度で簡単に取り組める活動や毎学期に数回、5文程度の自由英作文を書かせる活動などを増やして、生徒が書くことに慣れ親しむことができるようにしたい。

この後、評価の観点については以下のように記す。

○コミュニケーションへの関心・意欲・態度 → 本調査では設定なし

○表現の能力 → 「表現」

○理解の能力 → 「理解」…英語を聞いたり読んだりして、言語技能として理解する能力である。

○言語や文化についての知識・理解 → 「知識・理解」…言語自体についての知識や理解、また、言葉の背景にある文化を理解する能力である。例えば、「関係代名詞の文の形・意味・用法を理解できる。」が知識・理解にあたる。

ア 結果の概要

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





(イ) 評価の観点別正答率

① 中学2年生

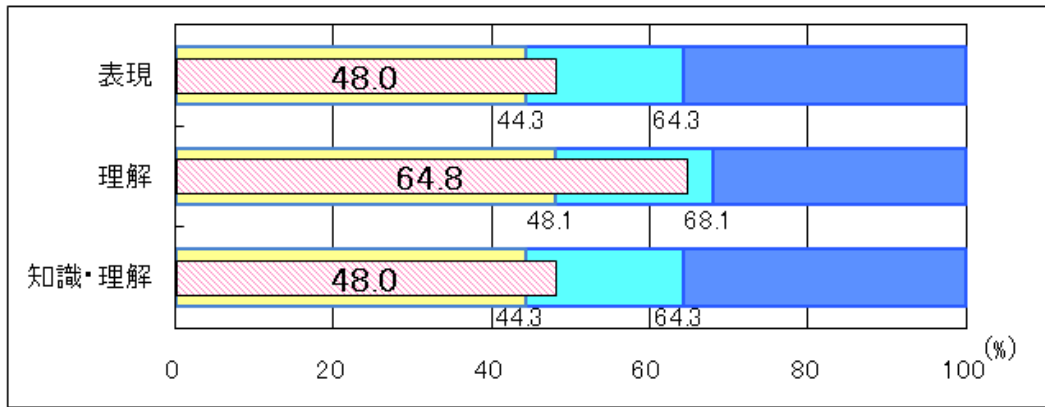


図1 H22年度（中学2年生英語）評価の観点別正答率

「表現」、「理解」、「知識・理解」のいずれの観点も、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「表現」と「知識・理解」については、自分のことを簡単な英語で書くことや文法の理解などで定着が十分ではないと考えられる。

② 中学3年生

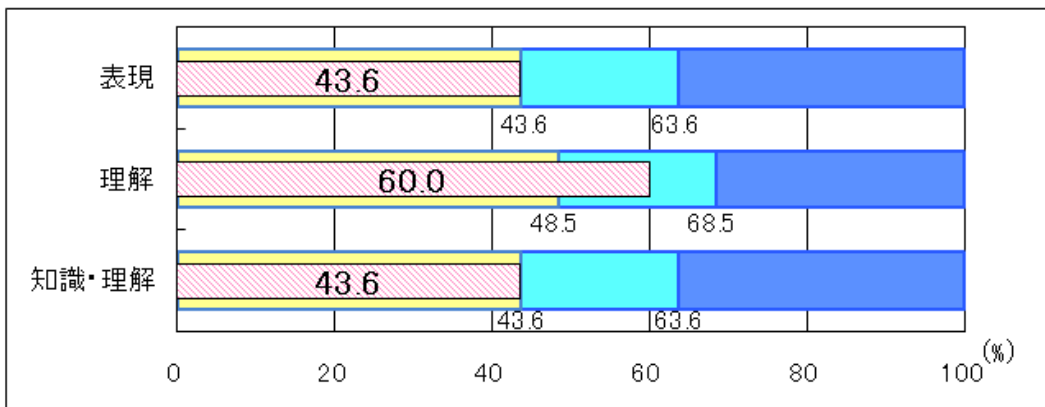


図2 H22年度（中学3年生英語）評価の観点別正答率

「理解」の観点は「おおむね達成」の基準を上回ったが、「表現」と「知識・理解」については、「おおむね達成」の基準と同ポイントにとどまった。語彙や文法の知識を基に、正しい表現ができるような指導が必要である。

(ウ) 内容・領域別正答率

① 中学2年生

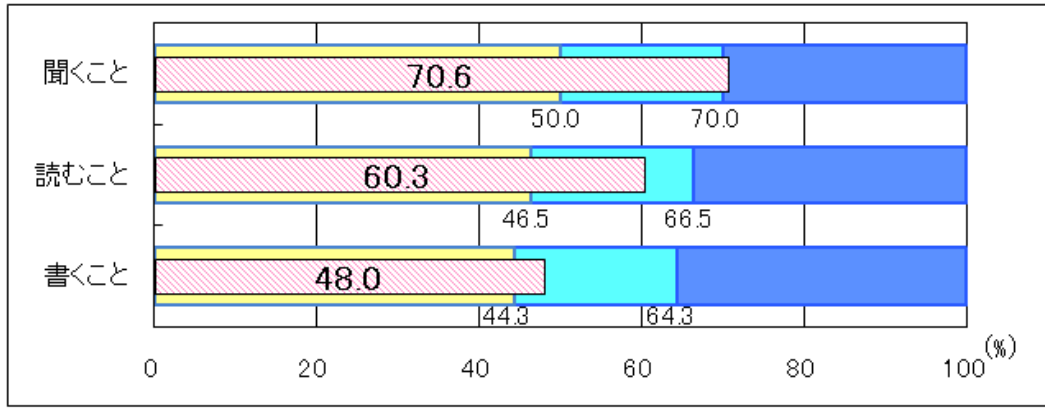


図3 H22年度（中学2年生英語）内容・領域別正答率

「聞くこと」については「十分達成」の基準を上回り、良好だった。しかし、「書くこと」については「十分達成」の基準には大きく届かず、特に、正しい語順に英文を並べ替える問題や自分の考えや気持ちを簡単な英語で書く問題の正答率が低い。書いて表現する場面を授業で設定する必要がある。

② 中学3年生

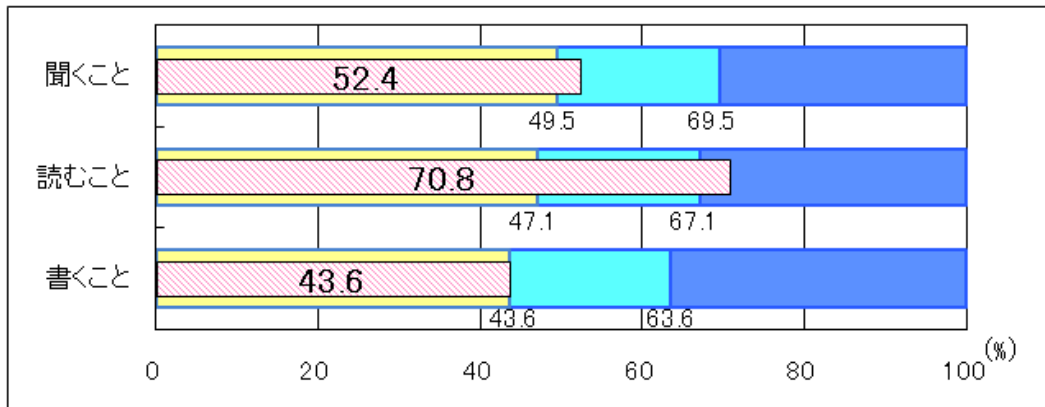


図4 H22年度（中学3年生英語）内容・領域別正答率

「読むこと」については「十分達成」の基準を上回り良好だった。平成21度の中学2年生で「十分達成」の基準を上回った「聞くこと」の領域については、まとまりのある英文を聞き取る問題の正答率が低く、「おおむね達成」の基準を上回るにとどまった。「書くこと」については「おおむね達成」の基準と同じであり、「要努力」や「無解答」の割合が高い、このことは書くことについて生徒が慣れていないことが原因の一つと考えられる。

イ 経年比較

(凡例) ■:要努力(おおむね達成の基準を下回る) □:おおむね達成 ■:十分達成

本調査では、中学2年生に着目し、3つの領域「聞くこと」、「読むこと」及び「書くこと」の到達度分布について、平成21年度と平成22年度の同一学年の経年比較により分析をする。さらに、課題がある「書くこと」について中学3年生に着目し、平成20年度から平成22年度の3年間の到達度分布の経年比較により分析をする。

(ア) 中学2年生の領域別経年比較

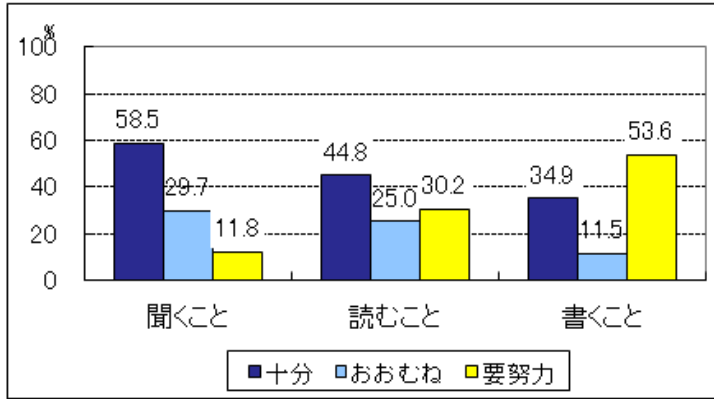


図5 平成22年度 (中学2年生)領域別到達度分布

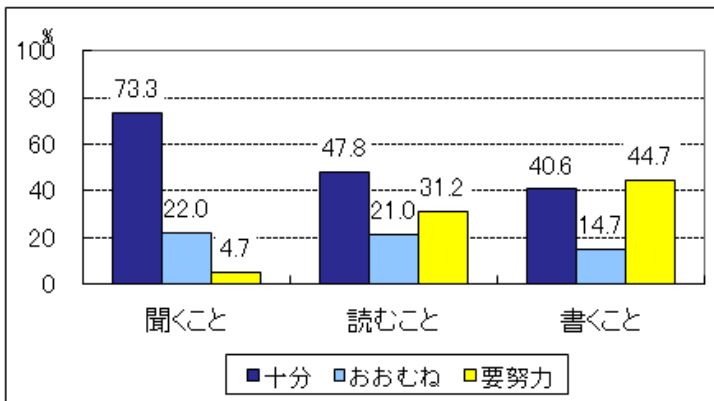


図6 平成21年度 (中学2年生)領域別到達度分布

「聞くこと」及び「読むこと」の領域では大きな変化が見られない。しかし、「書くこと」の領域では「要努力」の割合が8.9ポイント上昇し、平成22年度では50%以上の生徒が「要努力」となった。

(イ) 中学3年生の「書くこと」における到達度分布の経年比較

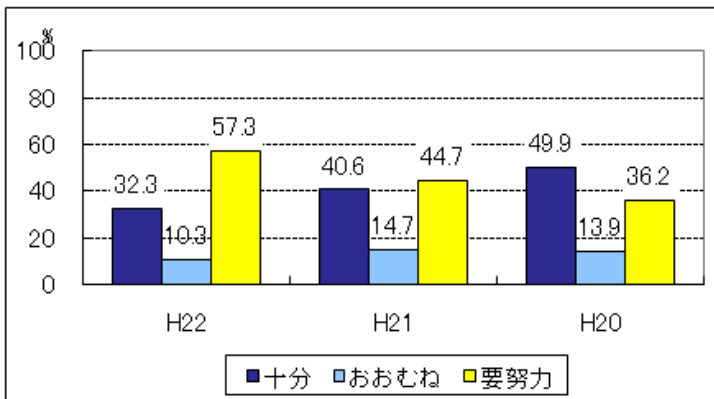


図7 平成20・21・22年度 (中学3年生)「書くこと」の到達度分布の経年比較

要努力の割合が36.2%、44.7%、57.3%と学年が上がるにつれて増加しており、書くことを苦手としている生徒が増えていることが分かる。

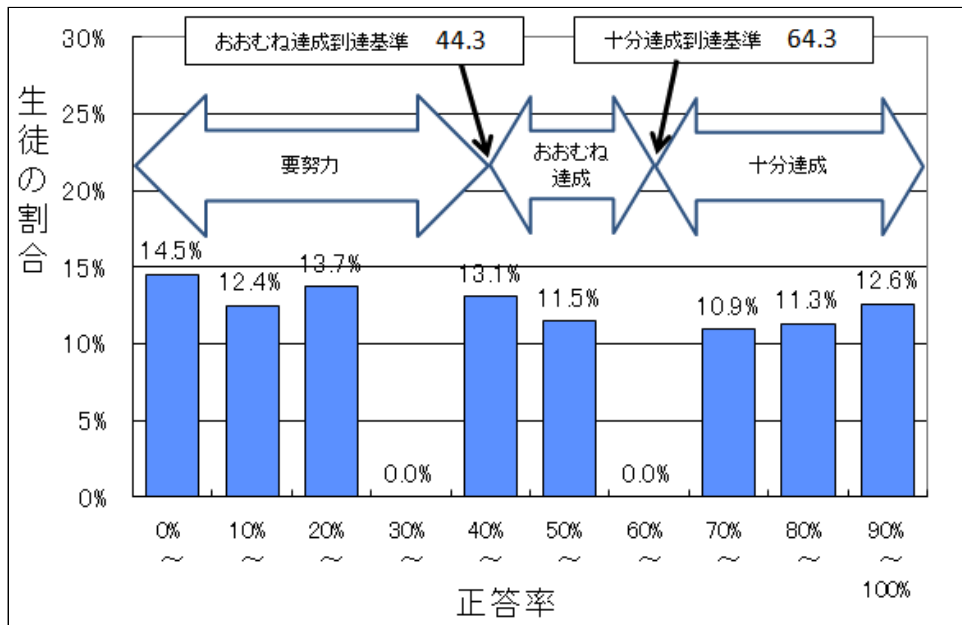


図8 平成22年度 (中学2年生)「書くこと」の度数分布

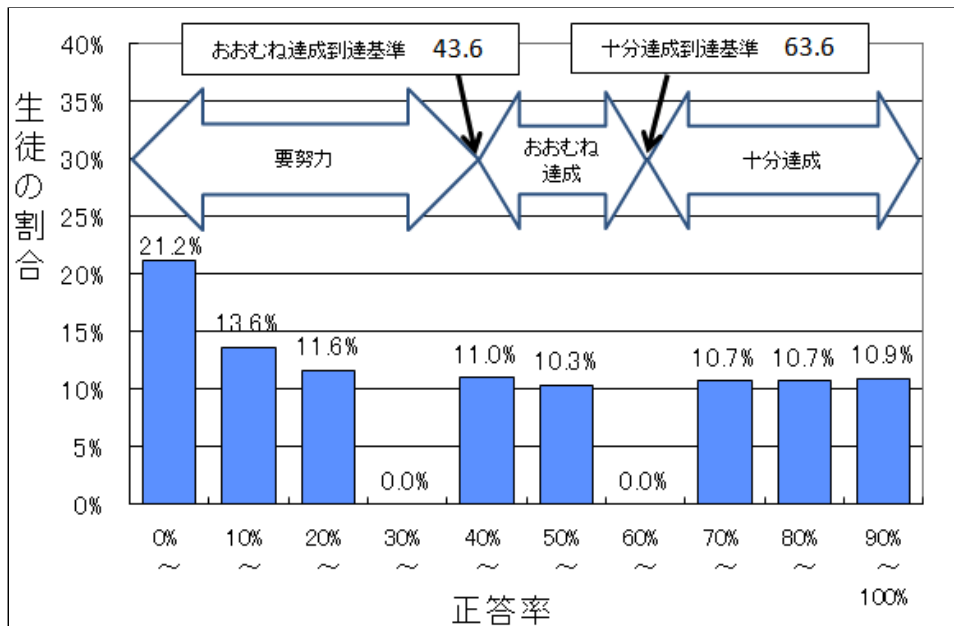


図9 平成22年度(中学3年生)「書くこと」の度数分布

平成22年度の「書くこと」についての度数分布では、中学2年生と中学3年生のどちらも「十分達成」と「要努力」が多く、「おおむね達成」が少ない。特に、中学3年生の到達度度数分布を見ると0～9%が一番多くなっており、「書くこと」の指導が難しい状況がうかがえる。

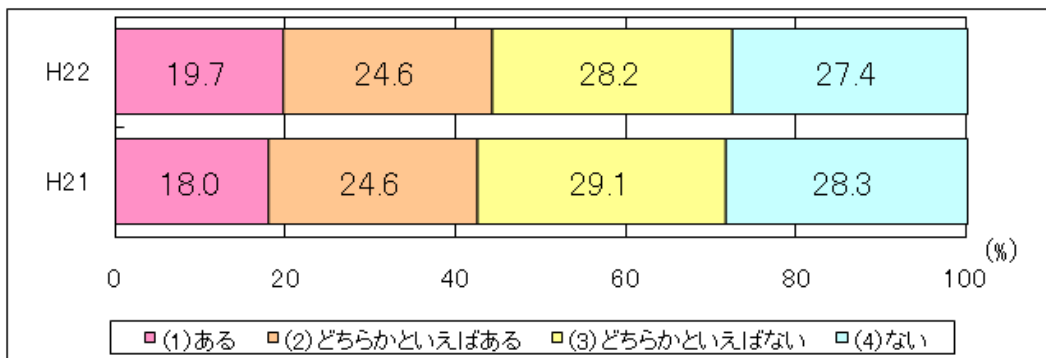


図10 H19・20・21年度 生徒意識調査(書く活動の興味・関心)の経年比較

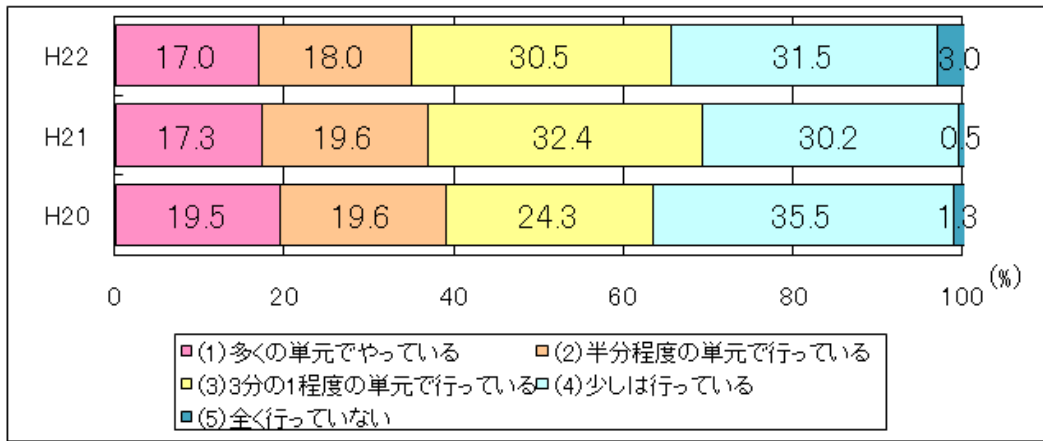


図11 H19・20・21年度 教師意識調査(書く活動の頻度)の経年比較

中学2年生の生徒意識調査から、日記や作文などを書いて表現する活動について「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と答えた生徒の割合は増加している。しかし、中学1・2年生担当の英語教師の意識調査から、日記や作文など書いて表現する言語活動を「多くの単元で行っている」及び「半分程度の単元で行っている」を合わせた割合が徐々に少なくなっている。「話すこと・聞くこと」の言語活動についての同調査では大きな変化がないことから、生徒の「書くこと」についての興味・関心はやや増しているにもかかわらず、教師の指導時間は徐々に減少しており、「書くこと」を意識した授業を行うことが求められる。

(ウ) 「聞くこと」の経年比較

中学2年生

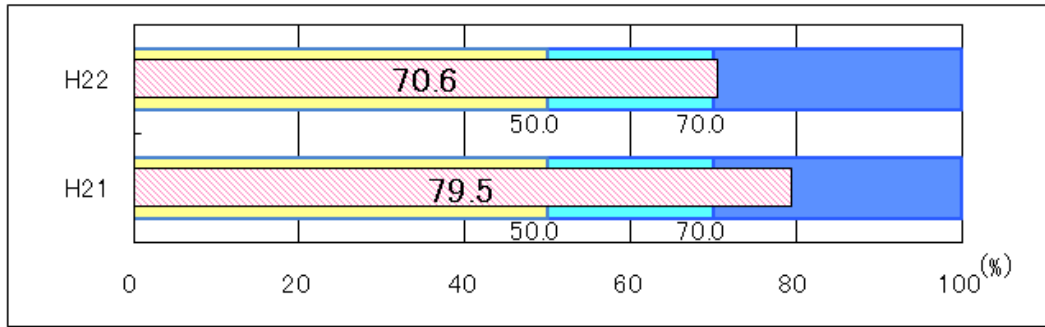


図12 H21・22年度（同一生徒）「聞くこと」の正答率の経年比較

平成21年度の中学2年生(現3年生)と平成22年度の中学2年生は、どちらも十分達成の基準を上回っており、良好であった。「聞く・話す」を中心とした1年次の授業が聞く力の定着につながっていると考えられる。

(エ) 「読むこと」の経年比較

中学3年生

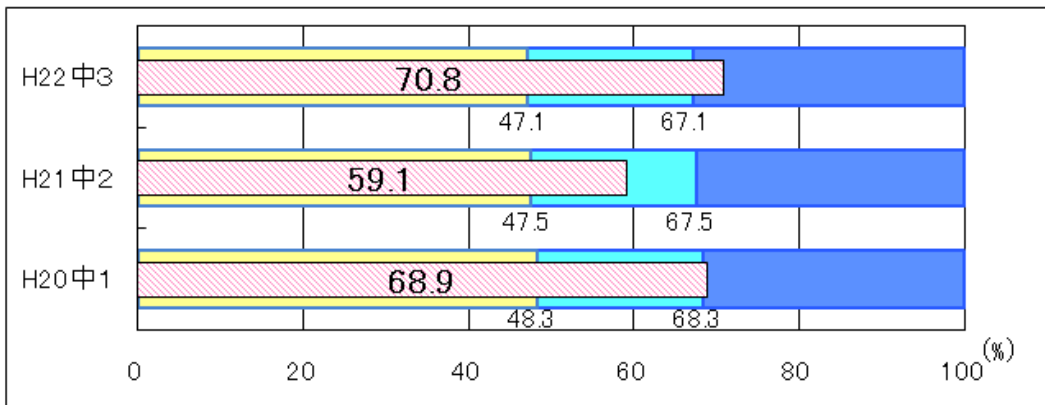


図13 H20・21・22年度（同一生徒）「読むこと」の正答率の経年比較

平成20年度は「十分達成」の基準を0.3ポイント上回り、21年度は「おおむね達成」の基準内だったが、平成22年度は「十分達成」の基準を3.7ポイント上回った。「読むこと」の指導が3年間を通して効果的に行われていることがうかがえる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点

生徒間に定着の差が出やすい「文法事項」と「英作文」について、設問ごとに分析した。

傾向 1 **自分の気持ちや考えを条件に即して簡単な英語で書くことには課題がある。**

[中学2年生 大問8の小問(1)(2)(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問8(1)	質問に対する自分自身のことを適切な表現を用いて英語で書く。 (記述式)	canを使って自分ができていることを I から始めて3語以上で書く。	71.5	7.0	65.0	45.0
問8(2)		自分が昨日したことを I から始めて3語以上で書く。	41.3	16.7	65.0	45.0
問8(3)		Where are you from?と聞かれたときの答えを I から始めて3語以上で書く。	54.9	9.5	70.0	50.0

○ 解答状況

問8(1)の問題は「十分達成」の期待正答率を6.5ポイント上回っている。しかし、過去形を用いた英作文の問8(2)の問題は「おおむね達成」の期待正答率を下回った。問8(3)の問題は「おおむね達成」の期待正答率をやや上回るにとどまった。(1)～(3)ともに3語程度の簡単な英語で答える問題であるが、定着状況に大きな差が生じている。

問8(1)の問題は動詞に語形変化がないが、問8(2)の問題は過去形はedを付けるため正答率が下がっていると考えられる。また、過去形の定着には時間が掛かることも無解答率が高い原因の一つと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

その日学習した新出文法や新出表現を I を主語にして書く活動が必要である。

例えば、問8(1)では「友だちとできることについて話してみましょう。その後であなたができていることを I から始めてノートに書いてみましょう。」という授業はよく行われている。そこで、問8(2)でも、過去形の語形変化についての文法説明よりも、「友だちとの対話の後に自分が昨日したことを I から始まる英文で書いてみよう。」という授業を行うことが効果的である。

その際、「I watched TV after school yesterday, but I always watch it after dinner.」のように動詞の時制に注意を向けるような英作文の指導が効果的である。

また、問8(3)で、「I from Japan.」の誤答例のようなbe動詞が脱落することを防ぐには、4月に行う自己紹介のような活動を継続して行い、そのスピーチ原稿を書かせる指導を行うと効果的である。

[中学3年生 大問8の小問(1)(2)(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問8(1)	英文による質問に対する自分自身のことを適切な表現を用いて英語で書く。 (記述式)	Were you busy yesterday?に対する自分の考えを3語以上で書く。	42.6	16.0	70.0	50.0
問8(2)		What do you in your free time?に対する自分の答えを3語以上で書く。	40.1	22.3	65.0	45.0
問8(3)		What do you want to be in the future?に対する自分の答えを3語以上で書く。	44.0	20.2	60.0	40.0

○ 解答状況

問8(1)～(3)の3問とも「おおむね達成」の期待正答率を下回るか、やや上回る結果となった。

問8(1)は正しく“Yes, I was.”と書くことについて課題がある。(2)(3)は疑問詞で始まる疑問文のため、(1)よりも無答率が20%を超えている。普段の授業で話したり書いたりする活動が不足していることが理由の一つと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

中学2年生の書く活動では、日記や将来の夢などまとまった英文を書かせる機会が増える。いきなり書く指導に入るのではなく、まず口頭で十分に対話練習をして慣れてから、書く活動に入ることが有効である。慣れてきたら、正しく書くために、授業中に“Were you busy yesterday?”と“Did you watch TV yesterday?”という答え方の異なる2つの質問をまとめて行うと効果的である。ただし、文法用語の解説や用法の区別などに深入りしないように留意しなければならない。

傾向2 **文法の知識を用いて、英文を正しく書くことに課題がある。**

[中学2年生 大問9の(1)(2)(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問9(1)	対話文を完成させるために、語を正しく並べ替える。 (記述式)	[big / is / which / yours] ?	44.1	2.6	70.0	50.0
問9(2)		[often / she / the / plays / guitar]?	48.2	3.0	65.0	45.0
問9(3)		[is / Ken / with / talking / she]?	37.9	4.7	60.0	40.0

○ 解答状況

問9(1)は疑問詞whichを含む英文の並べ替え問題であり、「おおむね達成」の期待正答率を下回った。平成21年度の類似問題(whoseを含む英文)の正答率を14.1ポイント下回り、定着に課題が残る。問9(2)は副詞oftenを含む英文であり、平成21年度の同一問題の正答率を2.8ポイント上回った。問9(3)は前置詞withを含む現在進行形の英文の並べ替え問題であり、「おおむね達成」の期待正答率を2.1ポイント下回った。主語がKenなのかsheなのか判断することに課題が残る。

○ 指導法改善の手立て

単語の意味や働きから単語間の結び付きを理解させ、適切な語順で文を書くことができるように指導することが求められる。具体的にはwhで始まる疑問文、前置詞や副詞を含む文などの構造を十分理解した上で繰り返し練習し、活用できるまでに高める指導が求められる。

[中学3年生 大問9の(1)(2)(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問9(1)	対話文を完成させるために、語を正しく並べ替える。 (記述式)	[open / I / this / may]?	42.1	2.5	70.0	50.0
問9(2)		[drink / coffee / after / usually / guitar]?	47.9	3.9	65.0	45.0
問9(3)		Let's [play / if / tennis / free / you're] tomorrow.	61.1	3.7	60.0	40.0

○ 解答状況

問9(1)は助動詞mayを含む4語の比較的平易な英文の並べ替え問題だったが、「おおむね達成」の期待正答率を下回った。代名詞thisの用法に慣れていないためと考えられる。問9(2)は副詞usuallyを含む英文であり、平成21年度の同一問題の正答率を2.5ポイント上回った。問9(3)は接続詞ifを含む複文の6語並べ替え問題であり、正答率を低く予想したが、「十分達成」を0.1ポイント上回り良好だった。

○ 指導法改善の手立て

問9(3)Let's...if.....の正答率が予想以上に高かった理由は、Let's playから始まる英文が生徒にとって繰り返し使ったことがある表現だったからと考えられる。したがって、問9(1)も教室で“May I use this?”などの表現を実際に使う場面を設定することが効果的だと考えられる。

傾向3 **形式ではなく内容をとらえて応答することに課題がある。**

[中学3年生 大問1の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問1(3)	英語での問いかけに適切に 応答する。 (リスニング問題。選択式)	学校で友達が Do you have any plans for next Sunday? と尋ねたときの適切な応答を選択肢から選ぶ。	36.5	5.2	65.0	45.0

○ 解答状況

“No, but why do you ask?”が正答であるが、正答率は「おおむね達成」の期待正答率を下回った。“Do you...?”と聞かれて“Yes, I do.”や“No, I don't.”などの文形式どおりの選択肢がないことが誤答の原因と考えられる。文形式ではなく内容をとらえて応答するこのような問題については、平成21年度の調査同様定着が十分ではない。

○ 指導法改善の手立て

文形式ではなく意味をとらえて応答することや、“Do you ?”に対して“No, but why do you ask?”のようないくつかの答え方があることを指導していく必要がある。実際のコミュニケーションの場面では“Do you...?”の質問に“Yes, I do.”と正確に答える場面のほうがむしろ少ないかもしれないことから、“Yes, I do.”と応答した後で、さらに一文加えて会話を続けさせる指導の工夫が必要である。

エ これからの指導に向けて

小学校段階での外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地が育成されることを踏まえ、中学校段階では不足している「書くこと」の指導を充実させ、4つの領域をバランスよく指導し、授業を英語で行う高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習へとつなげなければならない。これまで「時間がない」ということで新出文法の説明や口頭練習だけで終わっていた授業は、授業時数の増加に伴って、「話すこと」や「書くこと」を通じて、自分の考えや気持ちなどを英語を通して表現する活動を盛り込んだ授業に変えなければならない。今回の調査から、「聞くこと」や「読むこと」については成果が出ていることがうかがえるが、「書くこと」については改善が必要であることが分かる。また、形式どおりではない応答やいろいろな動詞を使って自分のことを表現することに課題があることから、次の3点を具体的に指導する必要がある。

ア 毎時間の書く活動の位置付け

「ノートに何も書かなかった。」ということが日々の授業でないようにしたい。授業で「聞くこと・話すこと」を中心に展開しても、授業の終わりにはIを主語にして自分のことを簡単な英語を用いて書かせる授業展開が必要である。さらに、以前取り扱ったことがあるトピックを再度書かせることで定着を図ることが効果的である。例えば、中学1年生で書いた自己紹介文に2年生や3年生で新しく学習した文法や表現を加えていけば、生徒にとって復習にもなるし、自分の英作文の定着状況も確認することができる。また、佐賀県教育センターの「[中学校英語科プロジェクト研究](#)」で紹介しているように、ライティングノートを用いて毎時間5分程度書く活動を行うことも有効な指導法である。

イ 活用することを通して文構造を正しく理解する指導

“Yes, I did.”と“Yes, I do.”の違いについて文法の説明を行うよりも、“Were you busy yesterday?”のような応答を授業の中で多く取り入れるように授業を改善することが必要である。自己紹介や将来の夢のスピーチをさせる前に、“What do you usually do after dinner?”や“What do you want to be in the future?”などの質問とその応答を教師と生徒、生徒同士で行う場面を設定することが必要である。それらの言語活動を通して文法の定着を図るように指導法を改善することが望まれる。

ウ 意味をとらえて応答することや、依頼や申し出などの応答表現の習熟を図る。

実際のコミュニケーションは、文形式ではなく意味をとらえて応答することが大切であり、文法指導と併せて指導する必要がある。また、依頼や申し出などの応答表現の習熟を図るためには、授業中に教師と生徒、生徒同士でこれらの表現を用いる機会や場면을意図的に作っていく必要がある。自己紹介やハンバーガーショップなど話題が日常的なものほど正答率が高いことから、さまざまな場面を用意して、意味内容を理解させる活動が必要である。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「生活習慣」「家族関係」「地域における生活」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 同一学年での定点比較(昨年度の中学1年と今年度の中学1年というような比較)
- ③ 同一児童生徒での経年比較(昨年度の中学1年と今年度中学2年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年は4教科、中学1年は4教科、中学2年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。
(※小学5年と中学3学においては、全国学力・学習状況調査のなかで意識調査をおこなっており、この調査では意識調査を行っていない。)

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	8,361人	8,528人	98.0%
中学1年	8,319人	8,548人	97.3%
中学2年	8,013人	8,266人	96.9%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年は4教科、中学1年は4教科、中学2年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

1 学校生活

- 学校での生活は楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学校・中学校とも8割を上回っている。[図1]
- 「学校は楽しい」、「落ち着いて勉強することができる」と回答している児童生徒ほど、ともに正答率が高くなっている。[図3][図6]
- 「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」の問いに、「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて高くなっている。[図9]
ただし、先生に相談する児童生徒の割合は、各学年とも年々増加している。[図7]

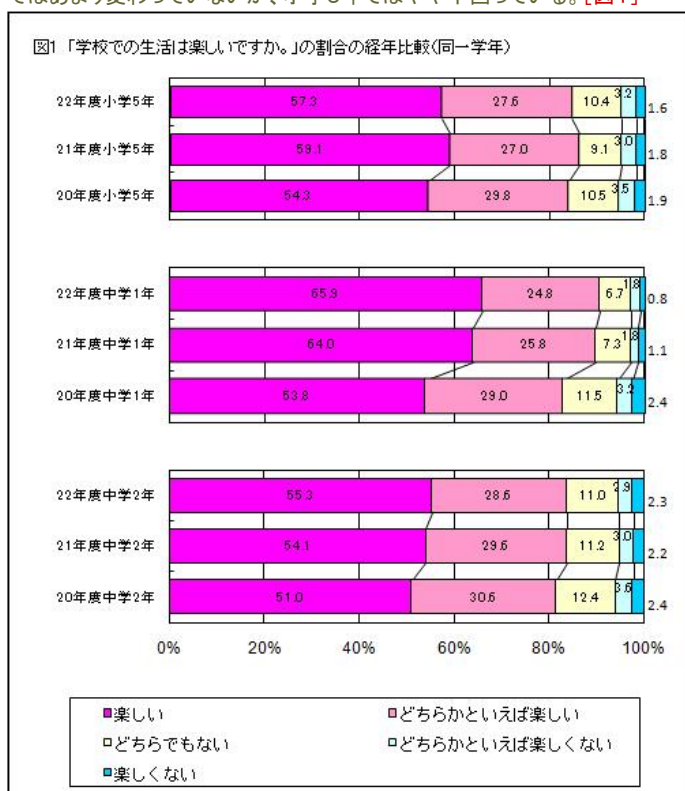
ここでは、[学校適応]と[友達関係への志向性]の2つのカテゴリーからなる設問を通して、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさ、勉強に対する興味、学習状況や教師との関係、友達をつくることについての考えなどの設問について分析した。

(グラフ中の20年度調査結果については、12月に調査を実施しての結果である。)

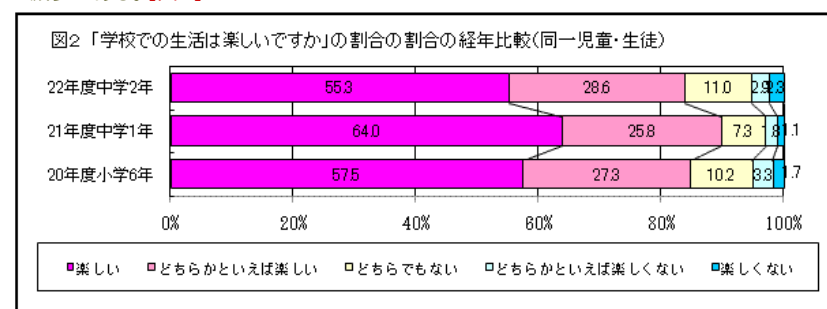
「学校での生活は楽しいですか」という設問について

「学校での生活は楽しいですか」という設問については、「楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年57.3%、中学1年65.9%、中学2年55.3%になっている。「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合を合わせると各学年とも8割を上回っている。

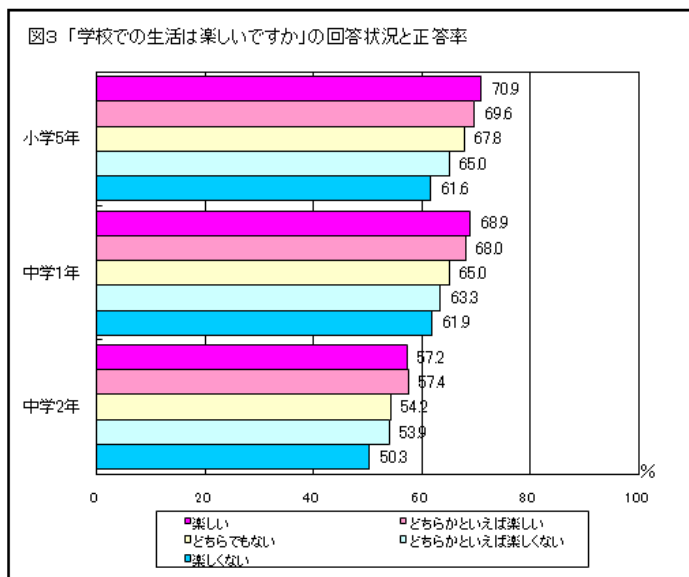
この設問について前年度調査と比較すると、「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合は、中学1年と中学2年についてはあまり変わっていないが、小学5年ではやや下回っている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけては5.0ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては5.9ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては0.9ポイントの減少である。[図2]



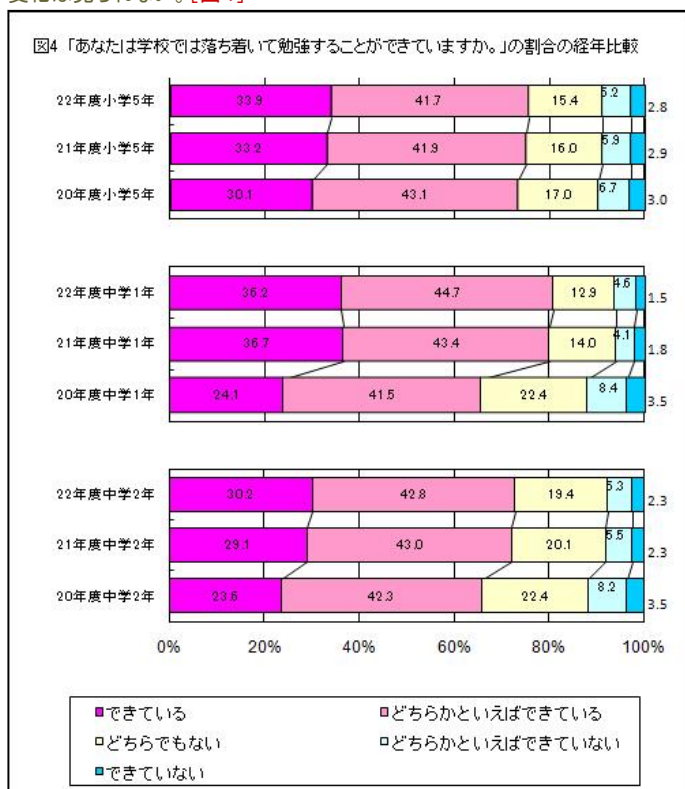
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。[図3]



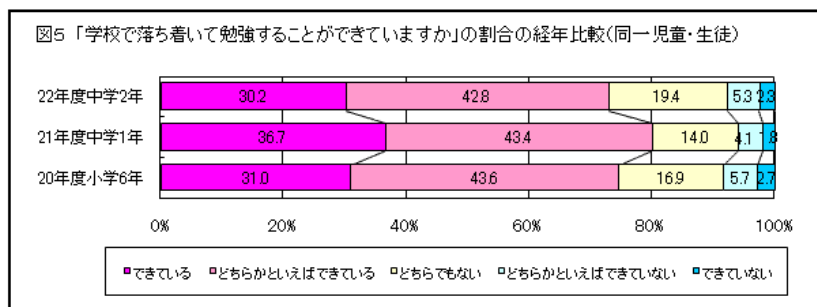
「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問について

「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問については、「できている」と回答した児童生徒の割合は、小学5年33.9%、中学1年36.2%、中学2年30.2%になっている。「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも7割を上回っている。

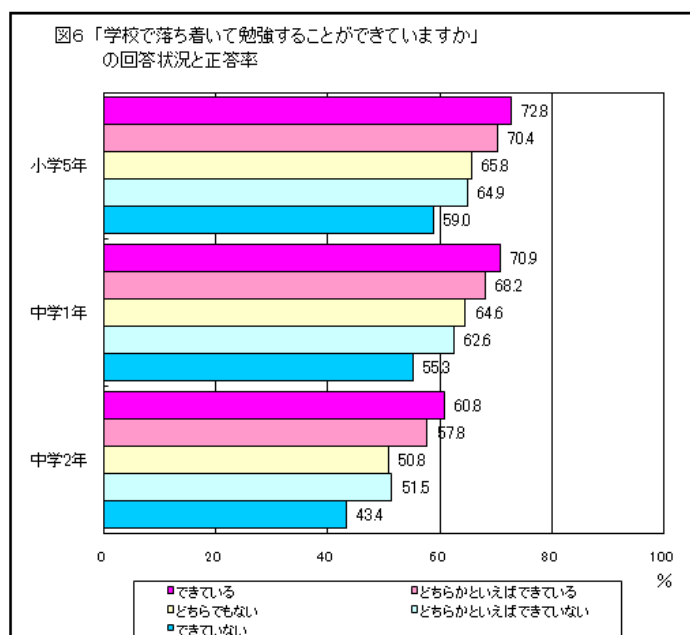
この設問について前年度調査と比較すると、「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも大きな変化は見られない。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合が小学6年から中学1年にかけては5.5ポイント増加しているが、中学1年から2年にかけては7.1ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては1.6ポイントの減少である。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「できている」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。[図6]



「学校での生活は楽しいですか」と「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問の関連性について

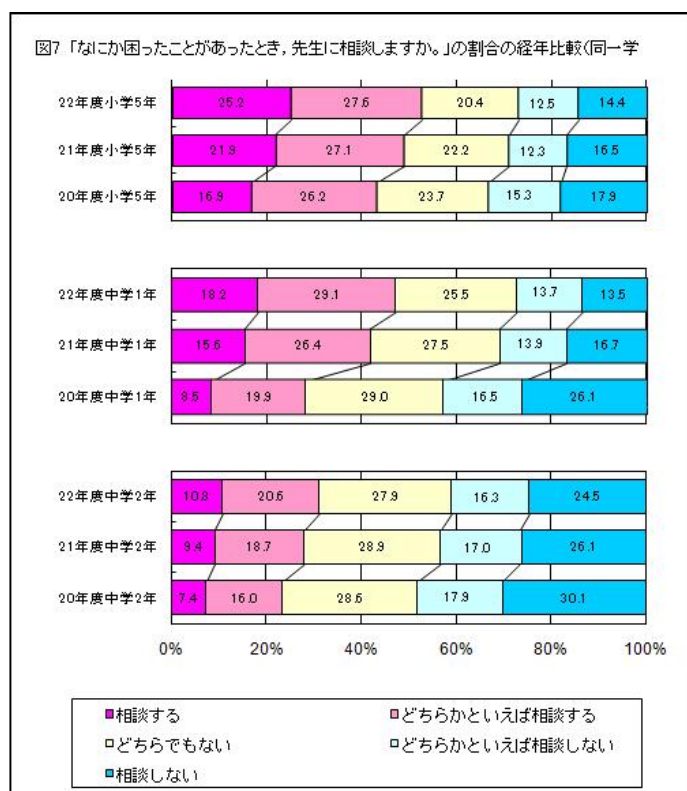
この2つの調査から、「学校生活の楽しさ」と同様に「落ち着いた学習への取り組み」と学力の定着には関係があるといえる。また、共通して小学5年から中学校2年にかけて「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合が、わずかではあるが同じような減少化傾向が見られた。このことは、発達の段階や学習内容など様々な原因が考えられるが、課題として受け止めるべきである。小学校と中学校の接続については、学校区単位での児童生徒にかかわる情報交換や授業交流などの小中連携の取組をなお一層進めていくことが重要であるとする。

また、落ち着いて学習に取り組むことができる環境を整えることや、そのための指導体制づくりに学校全体で取り組むことが、学力向上に向けての足掛かりとなる。

「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問について

「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問については、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学5年52.8%、中学1年47.3%、中学2年31.4%であり、学年が上がるにつれて低下する傾向が、本年度の調査においても見られた。また逆に、「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学5年26.9%、中学1年27.2%、中学2年40.8%であり、学年が上がるにつれて、高くなっている。

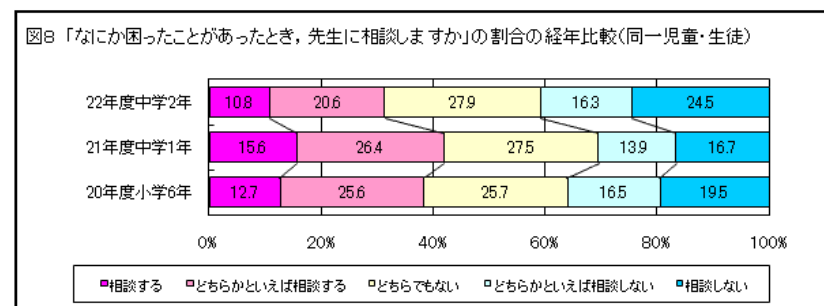
この設問についての経年比較をすると、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は各学年とも年々高くなり、逆に「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合が各学年とも年々低くなっている。【図7】



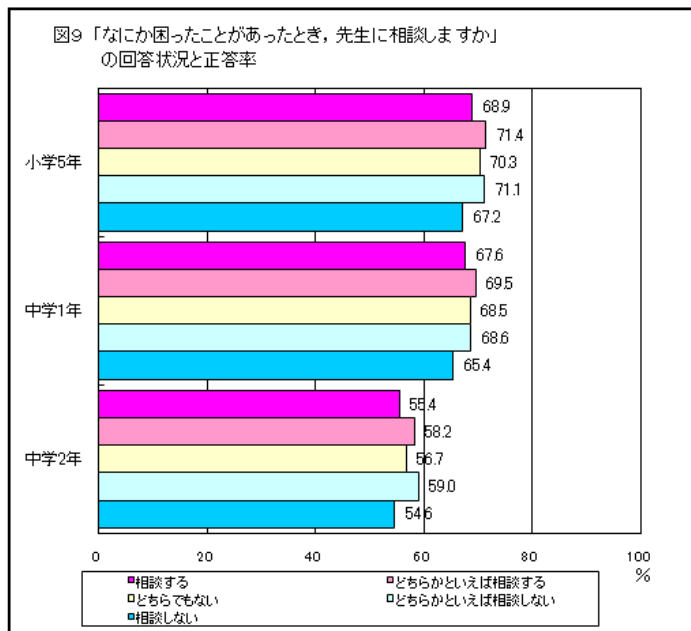
同一児童生徒の経年比較で見ると、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて3.7ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては、10.6ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては、6.9ポイントの減少である。

また逆に、「相談しない」「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて5.4ポイント減少しているが、中学1年から中学2年にかけては、10.2ポイント増加している。つまり、小学6年から中学2年にかけては、4.8ポイントの増加である。

【図8】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、各学年とも明らかな特徴は見られない。[図9]

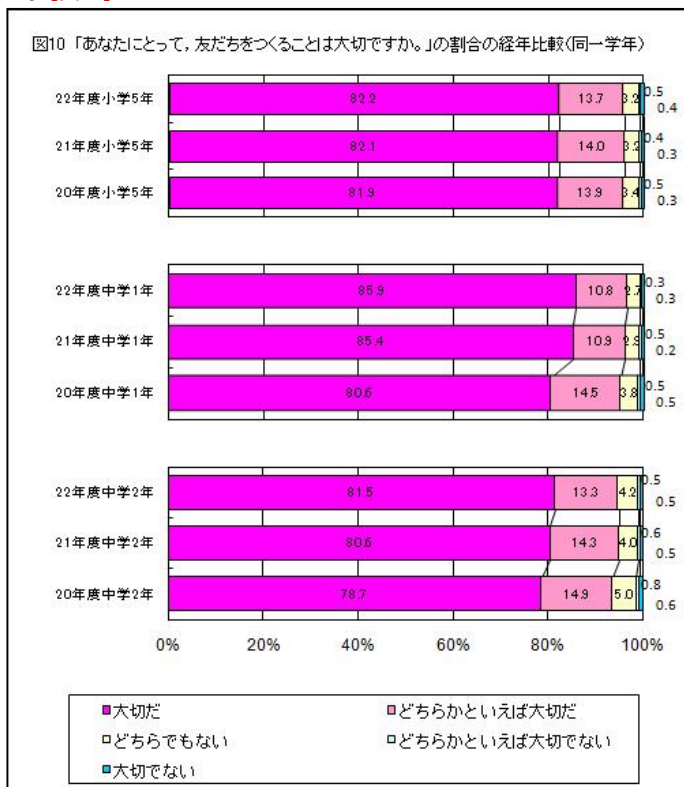


児童生徒の発達段階に応じて児童生徒と教師が良好な関係を保つことは大切なことである。教科担任制となる中学校においても、学級担任のみならず、教師が個々の生徒とのよりよい関係を構築する工夫が必要であろう。

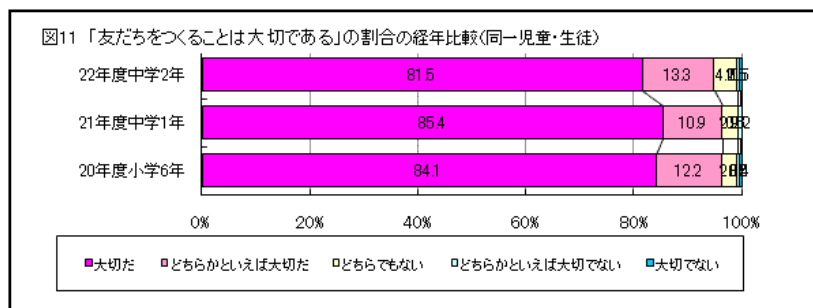
「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問について

「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問については、「大切だ」と回答した児童生徒の割合は、小学5年82.2%、中学1年85.9%、中学2年81.5%になっている。「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

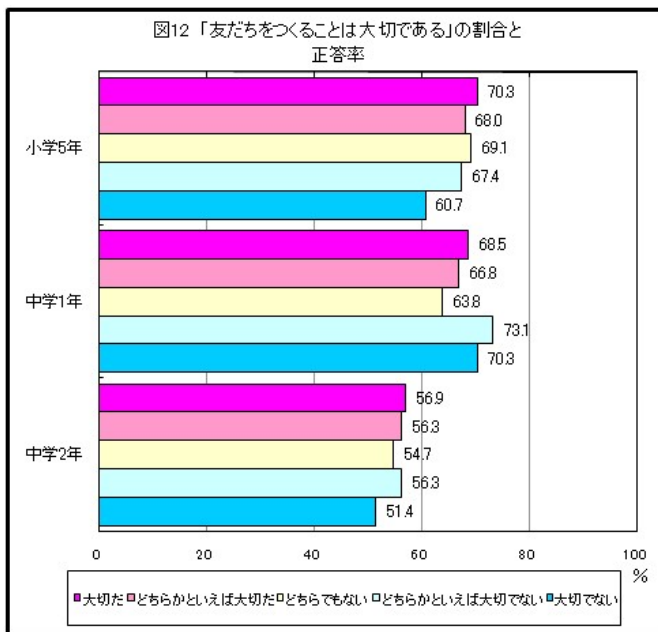
この設問を前年度調査と比較すると、「大切だ」、「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも大きな変化は見られない。[図10]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「大切だ」、「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合が小学6年から中学1年にかけては大きな変化は見られないが、中学1年から中学2年にかけては、やや低下している。[図11]

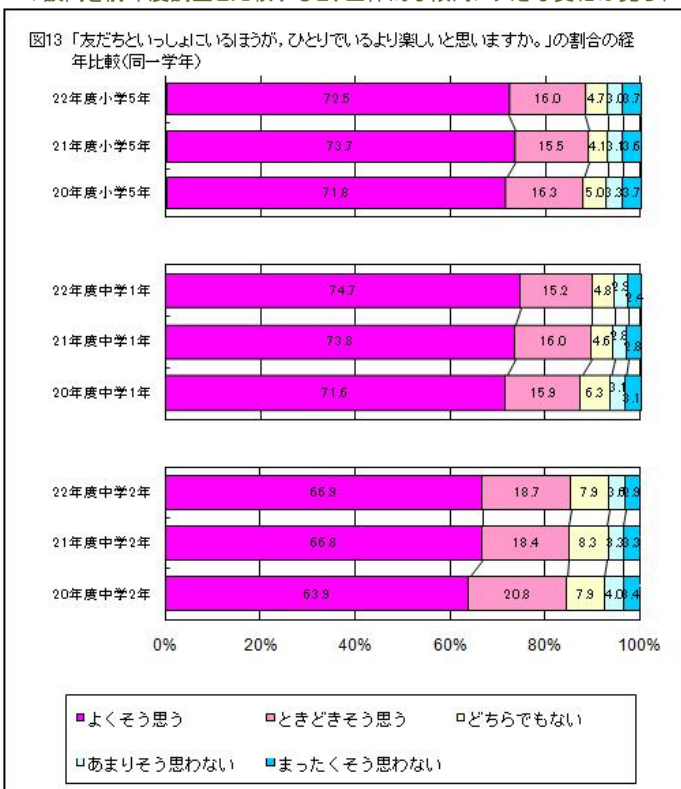


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年と中学2年では、「大切だ」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっており、以下については全体的に正答率が低くなっている。中学1年では、同様の傾向は見られないが、「どちらかといえば大切でない」、「大切でない」と回答した生徒の人数の割合は0.6%と小さいため、比較する際には注意が必要である。[図12]

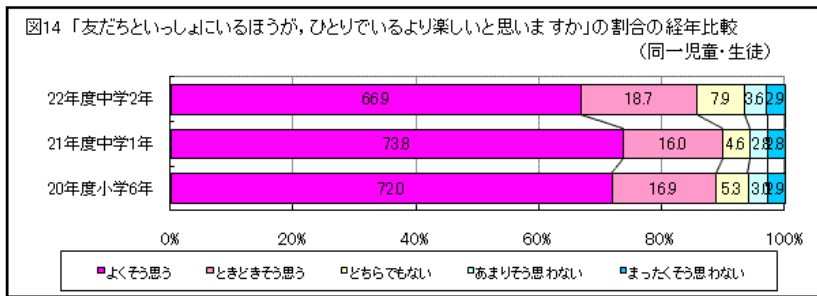


「友だちといっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思えますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年72.5%、中学1年74.7%、中学2年66.9%となっており、中学2年が他学年に比べて低くなっている。しかし、「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも8割を上回っている。

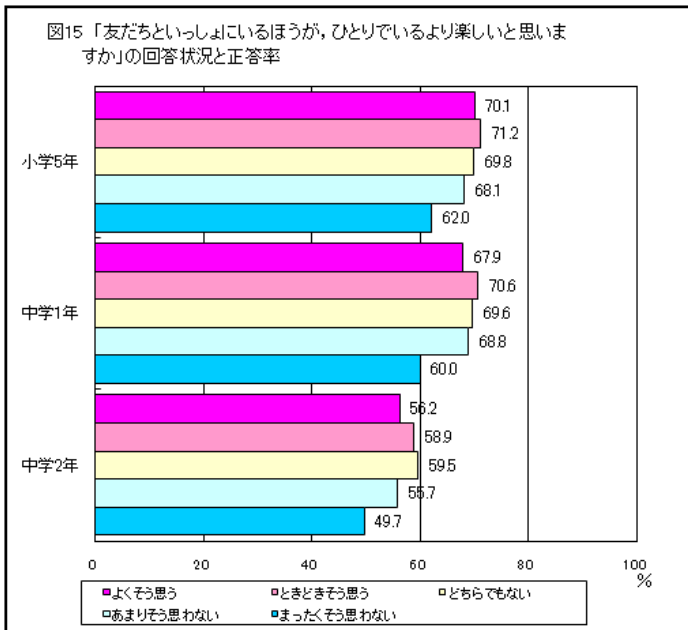
この設問を前年度調査と比較すると、全体的な傾向に大きな変化は見られない。[図13]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒が中学1年から中学2年にかけて6.9ポイント減少している。[図14]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図15] ただし、図14に示しているように「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%前後と小さいため、比較する際は注意が必要である。



最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

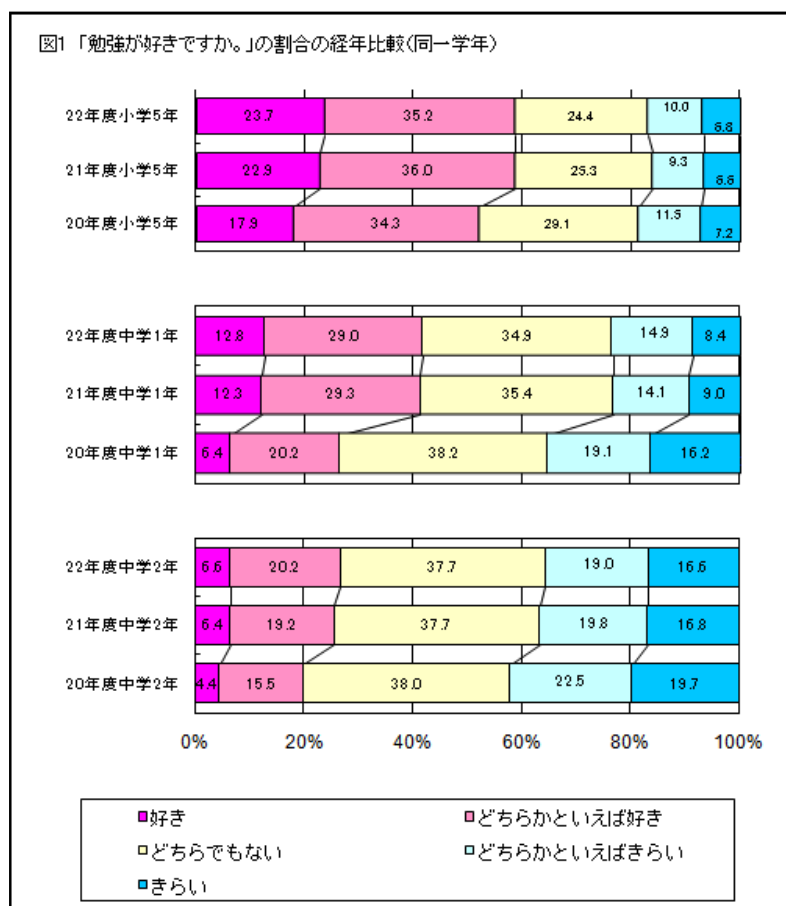
2 学習動機

- 「勉強が好き」と回答している児童生徒は、学年が上がるにつれて減少する傾向が見られる。しかし、勉強が好きな児童生徒は、各学年とも年々増加している。[図1][図2]
また、勉強が好きな生徒ほど、正答率が高くなっている。[図3]
- 学校での勉強は、大人になって役に立つと思っている児童生徒の割合は、小学校は9割、中学校は7割を上回っており、年々その割合は増加している。[図4]
また、役に立つと思っている児童生徒ほど、正答率が高くなっている。[図6]
- 「大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がある」と答えた児童生徒は、小学校は8割、中学校は7割を上回っており、年々その割合は増加している。[図7]

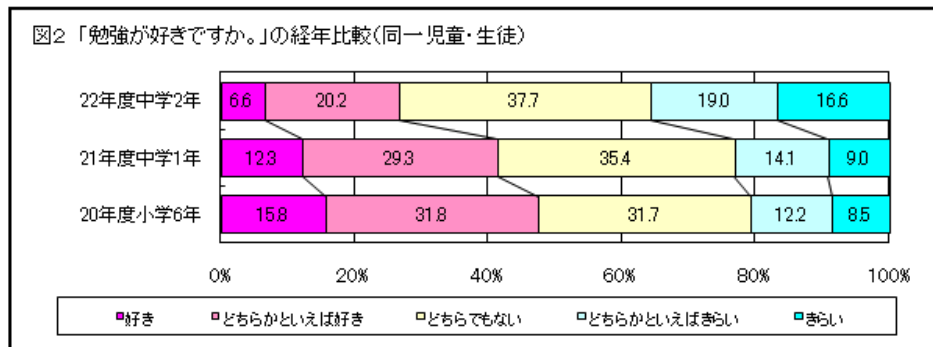
ここでは、勉強に対する興味・関心やその有用性、大人になってからかなえてみたい仕事(小学校では夢)の有無などについての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

「勉強が好きですか」という設問については、「好き」と回答した児童生徒の割合が小学5年23.7%、中学1年12.8%、中学2年6.6%になっている。「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では5割を上回っているが、学年が上がるにつれて低くなっている。

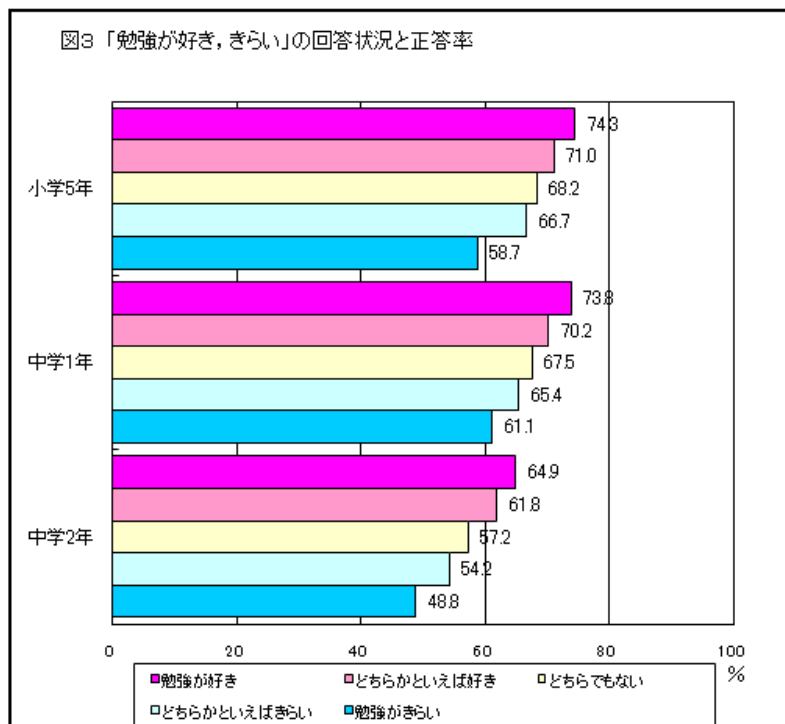
この設問を前年度調査と比較すると、「好き」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっているが、小学5年生で0.8ポイント増加、中学1年で0.5ポイント増加、中学2年で0.2ポイント増加と伸びは小さい。。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「好き」、「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて6.0ポイント減少している。中学1年から中学2年にかけては14.8ポイントと大きく減少している。【図2】



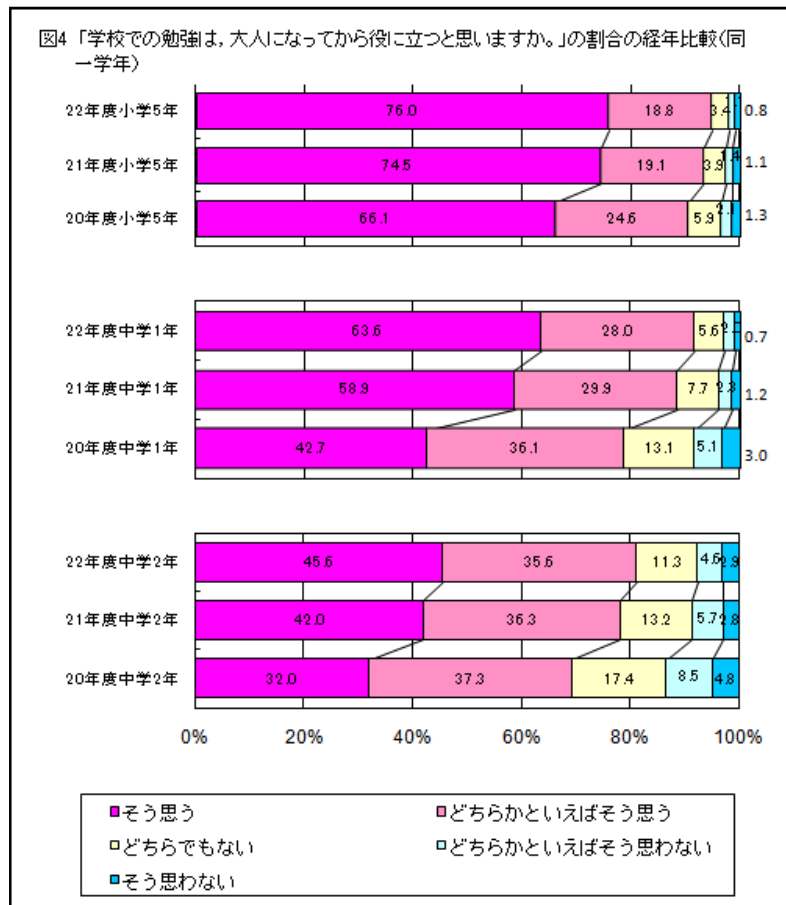
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「勉強が好き」と回答した児童生徒の正答率もっとも高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。【図3】



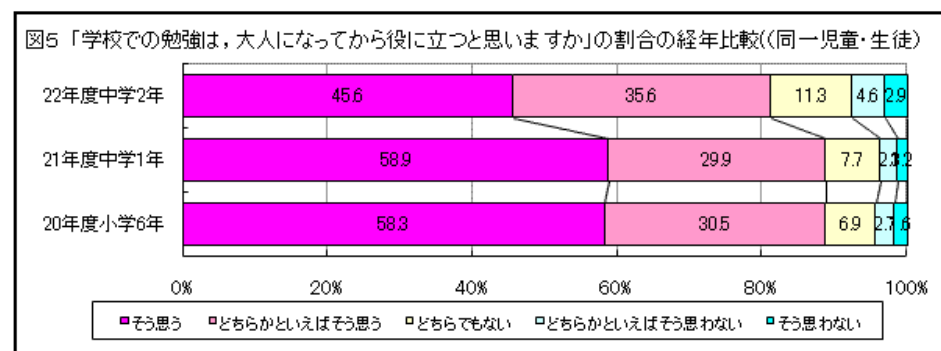
この調査から、勉強が好きということと学力の定着には深い関係があるといえる。学年が上がるにつれて勉強を好きな児童生徒が減ることについては、発達の段階や学習内容に起因することも考えられるが、大きな課題である。小学校と中学校のスムーズな接続や中学校における指導法改善等を図っていくことが大切である。

「学校での勉強は、大人になってから役に立つと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年76.0%、中学1年63.6%、中学2年45.6%になっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校は9割、中学校は8割を上回っている。

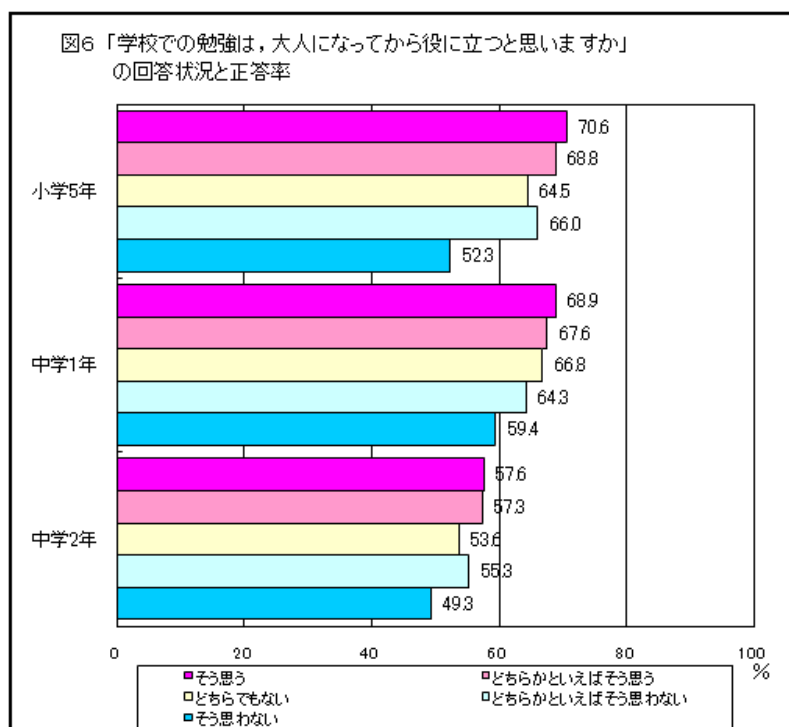
この設問を前年度調査と比較すると、「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。一方、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した児童生徒の割合は、減少しているが、中学2年での割合が他の学年に比べてやや高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては大きな変化は見られないが、中学1年から中学2年にかけて[そう思う]、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合は7.6ポイント減少している。これに対し、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した生徒が4.0ポイント増加している。[図5]



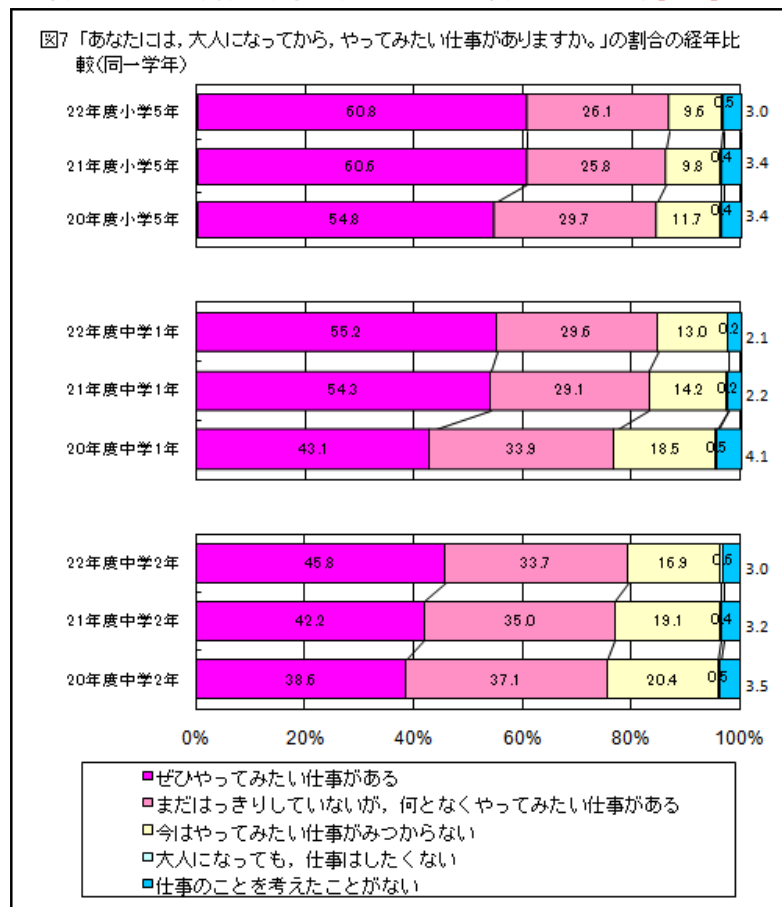
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下だんだんと正答率は低くなっている。[図6]



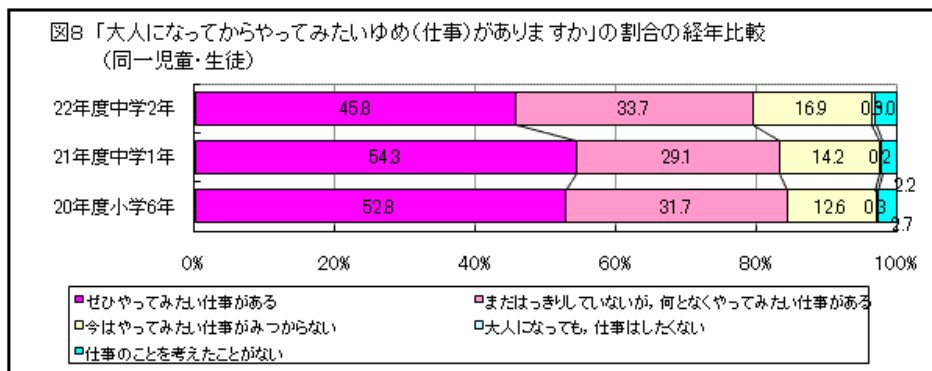
各教科の学習が、知識の習得だけで終わることなく、日常生活との関連や将来における社会とのつながりなどを意識した指導となるよう工夫が求められている。また、キャリア教育との関連性を含め、知識の習得と活用が将来的に生きていく上でどのように役に立つのかということ、小学校の段階から系統的に提示していく必要がある。

「あなたは大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がありますか」という設問については、「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合が小学5年60.8%、中学1年55.2%、中学2年45.8%になっている。「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学5年と中学1年は8割、中学2年は7割を上回っている。

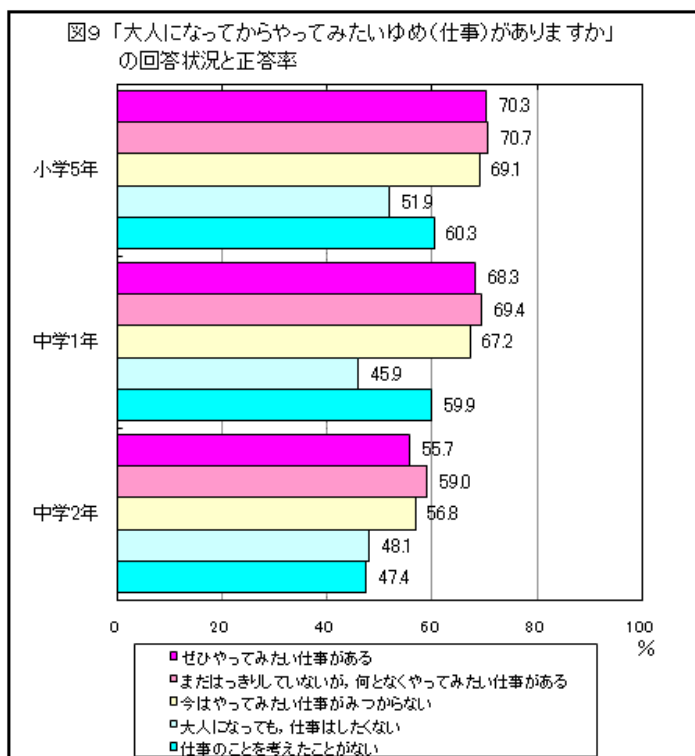
この設問を前年度調査と比較すると、「ぜひやってみたいと仕事がある」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっており、特に中学2年で3.6ポイント高くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較で見ると、中学1年生から中学2年生にかけて「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した生徒の割合が8.5ポイント減少している。[図8]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「ぜひやってみたい仕事がある」、「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の正答率が全体的に高くなっており、「大人になっても、仕事はしたくない」、「仕事のことを考えたことがない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図9]



民間の教育機関が行った調査では、中学生・高校生について「将来の職業に興味をもったとき」や「将来行きたい学校がはっきり決まったとき」に学習意欲が高まるとの調査結果が出されており、将来の夢や目標をもたせることは大切である。従来の特別活動における進路指導に加えて、キャリア教育の視点などを加味した継続的・系統的な指導が必要である。夢やあこがれの職業、就きたい仕事、なりたい人物像、夢や目標を達成するために何をすればよいのか等について、児童生徒が自分の将来についてより具体的に考え、希望を持てるように支援することが望まれる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

3 学習活動(教科全般)

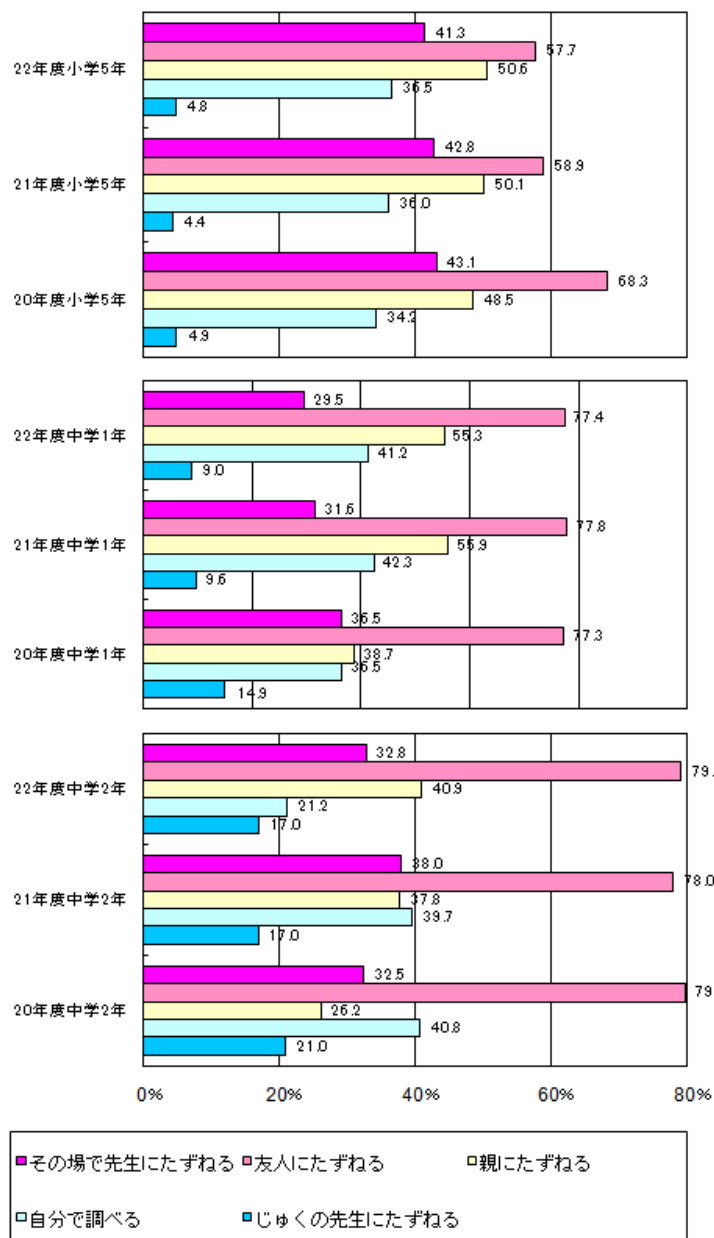
- 授業中で分からないときは、「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合がすべての学年で最も高く、学年が上がるごとに増加する傾向が見られる。[図1] 「そのままにしておく」と回答した児童生徒の割合は小学5年と中学1年は1割以上、中学2年は2割以上であり、課題である。[図3]
- 家庭学習の時間は、全体的に学年が上がるにつれて、増加している。[図4][図5]
- 学校の授業以外の勉強については、中学校では、「試験があれば、それにそなえて勉強する」の割合が高くなるが、逆に「興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする」の割合が低くなっている。[図7][図8]

ここでは、授業で分からないときの対応、授業以外の勉強時間や勉強の方法、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学校内外における学習活動についての設問から児童生徒の教科全般における学習活動についての調査結果を述べる。

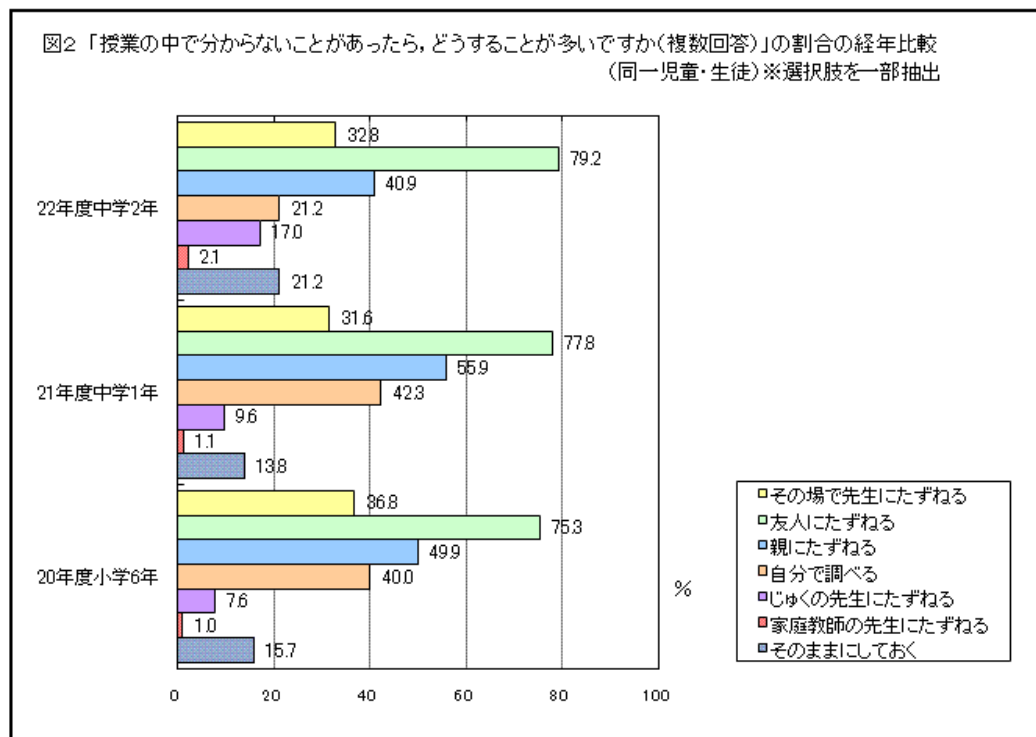
「授業の中で分からないことがあったらどうすることが多いですか」(複数回答)という設問については、すべての学年において「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年57.7%、中学1年77.4%、中学2年79.2%と、学年が上がるにつれて、その割合が高くなる傾向が見られる。以下、小学5年と中学2年については「親にたずねる」「その場で先生にたずねる」、中学1年では「親にたずねる」「自分で調べる」の順になっている。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年と中学1年では、全体として大きな変化は見られないが、中学2年では「自分で調べる」、次いで「その場で先生にたずねる」と回答した生徒の割合がやや低くなっていることが、気にかかる。[図1]

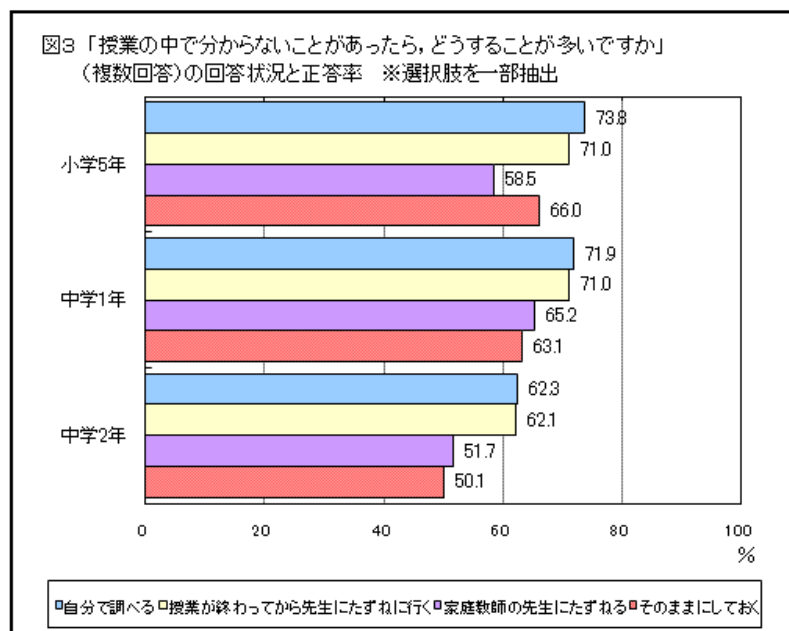
図1 「授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか。(複数回答)」の割合の経年比較(同一学年) ※選択肢を一部抽出



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては、各解決方法の項目において「その場で先生にたずねる」以外は数値が増え、逆に「そのままにしておく」が減っている。しかし、中学1年から2年にかけては、数値が増えている解決方法の項目もあるが、「自分で調べる」と「親にたずねる」が大きく減っており、逆に「そのままにしている」が増えていることが気にかかる。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校5年と中学校1年では、「自分で調べる」「授業が終わってから先生にたずねに行く」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。中学校2年においても、同様の特徴は見られるが、小学5年や中学1年と比べると、分からなかったところをそのまま放置しておく傾向が強い。[図3]



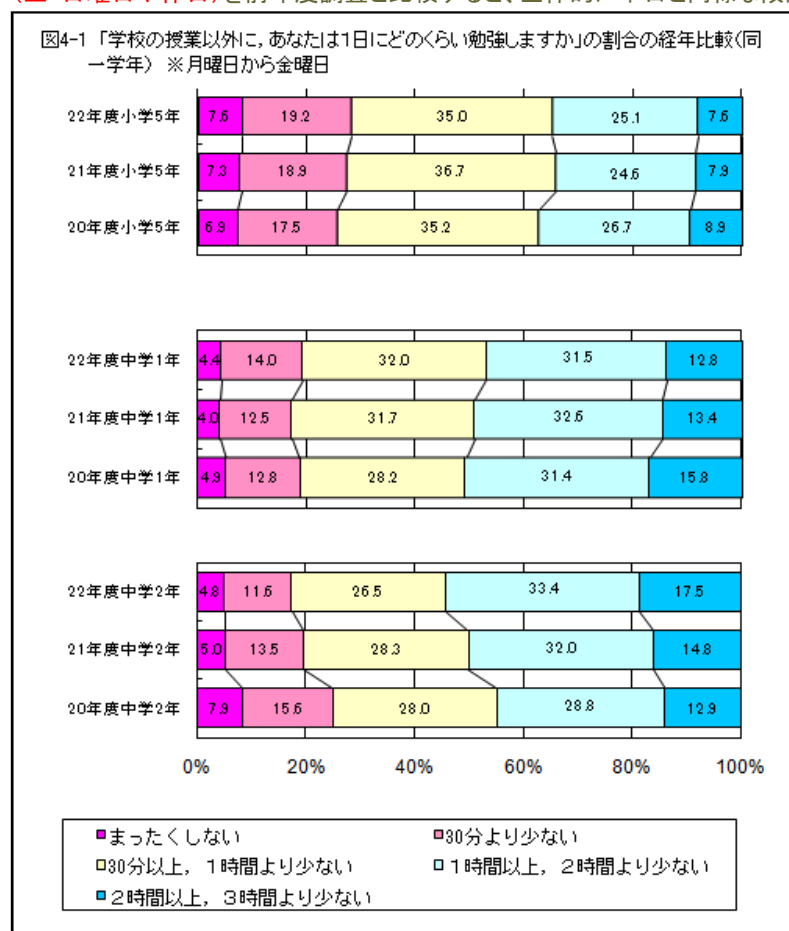
自分で調べようとする意欲や授業後に先生に尋ねて解決しようという態度は学習にもよい影響を与える。分からないことをそのままにしている児童生徒はますます分からなくなり、意欲も更にながるといふ悪循環に陥っている。まずは、「そのままにしておく」と回答した児童生徒に対する個別の対応を行う必要がある。改善に向けての方策としては、個々の児童生徒の状況を把握する中で、わずかでも得意と思われる教科や興味を示す学習内容などを拾い出し、その部分を足がかりにして学習意欲の向上につなげるような指導が考えられる。

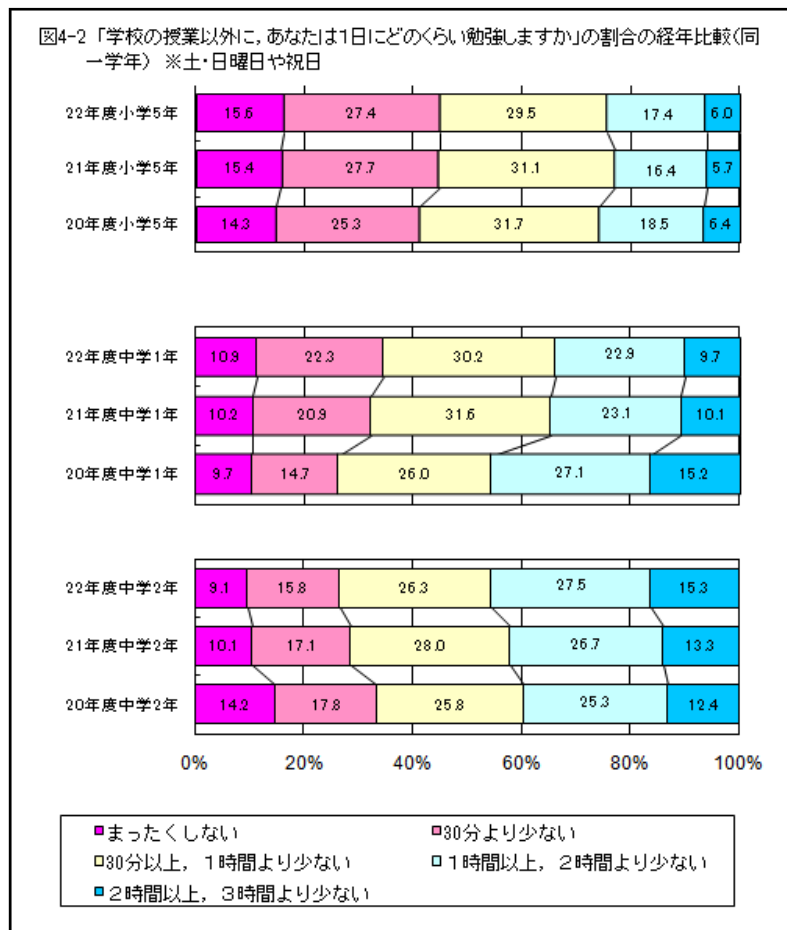
「学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか」(月曜日から金曜日)という設問については、学年が上がるごとに2時間以上勉強している児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。このことは土・日曜日や休日についても同様である。「30分以上1時間より少ない」又は「1時間以上2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合は小学5年60.1%、中学1年63.5%、中学2年59.9%であり、どの学年においも、約6割を占めている。

(土・日曜日や休日)については、平日よりも勉強時間が少なくなる傾向が見られる。学習時間が1時間より少ないと回答した児童生徒の割合が小学5年は72.5%、中学1年は63.4%、中学2年は51.2%と、学年が上がるにつれて少なくなる傾向は見られるが、各学年とも5割を上回っている。

この設問(月曜日から金曜日)を前年度調査と比較すると、小学5年については、全体的に大きな変化は見られないが、中学1年ではやや勉強時間が減少している傾向が見られる。中学2年では全体的に勉強時間が増加している傾向が見られる。

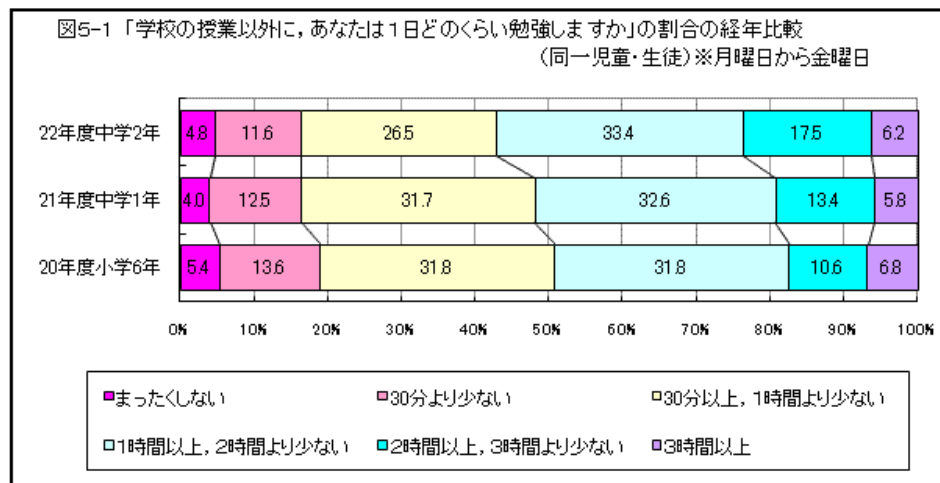
(土・日曜日や休日)を前年度調査と比較すると、全体的に平日と同様な傾向が見られる。[図4]

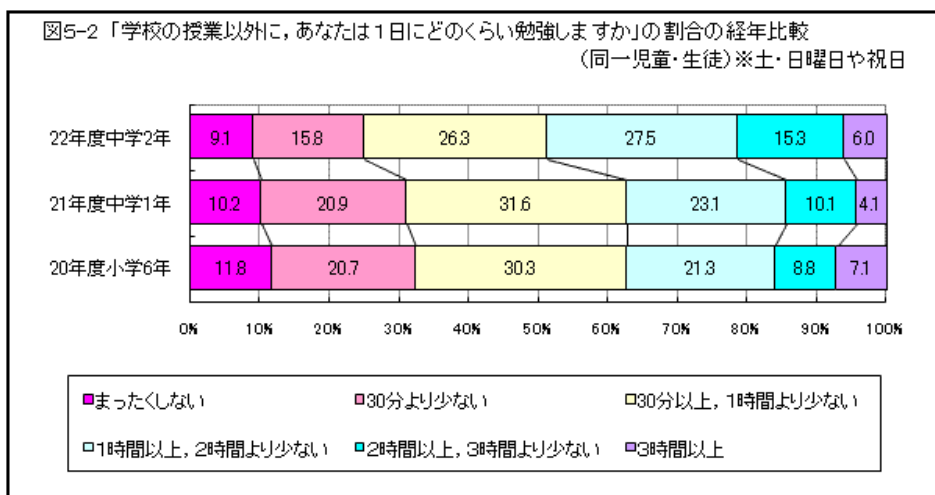




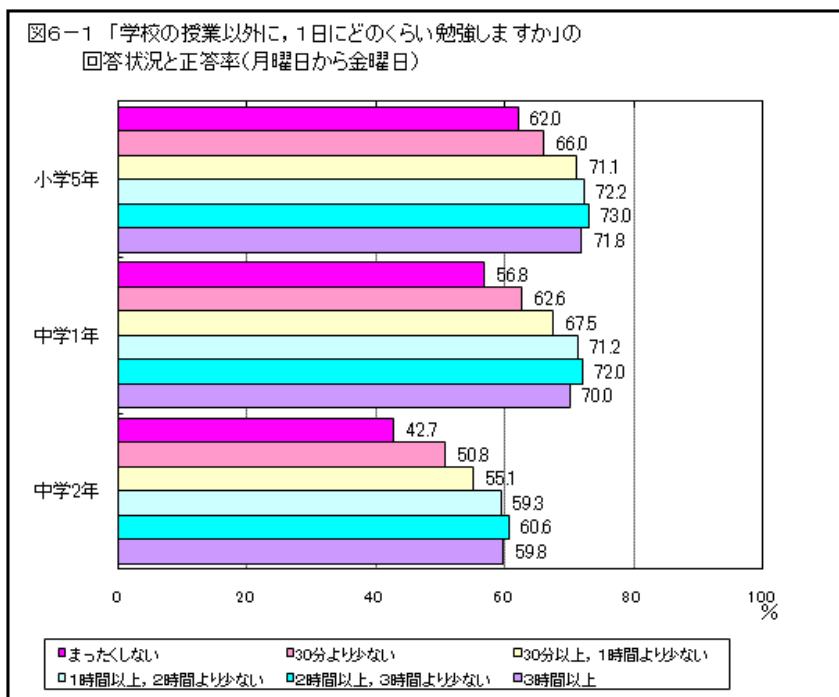
同一児童生徒の経年比較で見ると、(月曜日から金曜日)について、学年が上がるにつれて、全体的に勉強時間が増えている。

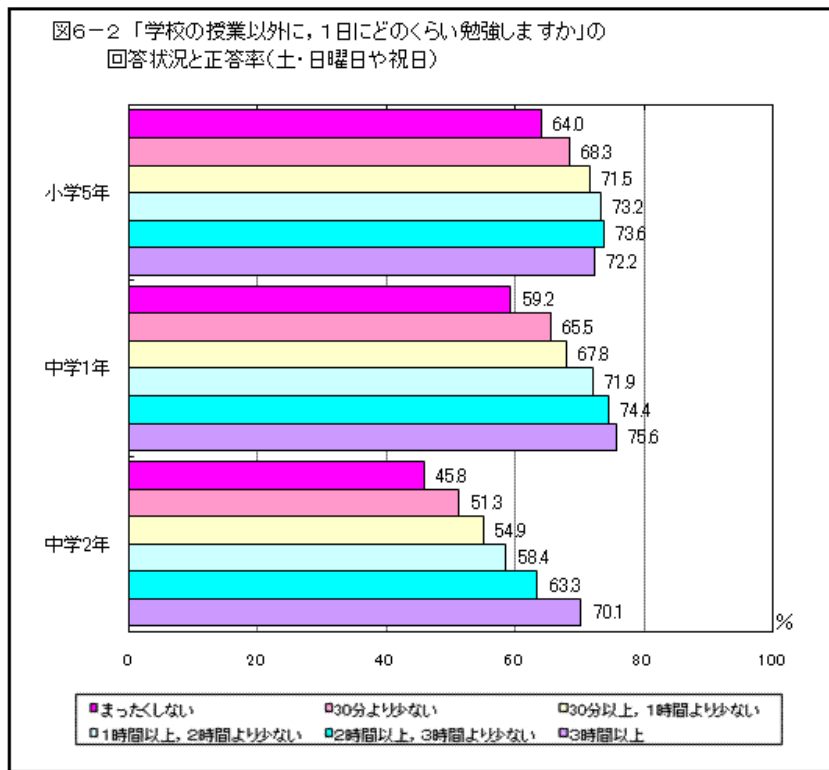
(土・日曜日や休日)についても、平日と同様学年が上がるごとに勉強時間も増えている。[図5]





回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、(月曜日から金曜日)(土・日曜日や休日)共に、全体的にすべての学年において勉強時間が長い方が正答率が高くなる傾向が見られ、「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。[図6]



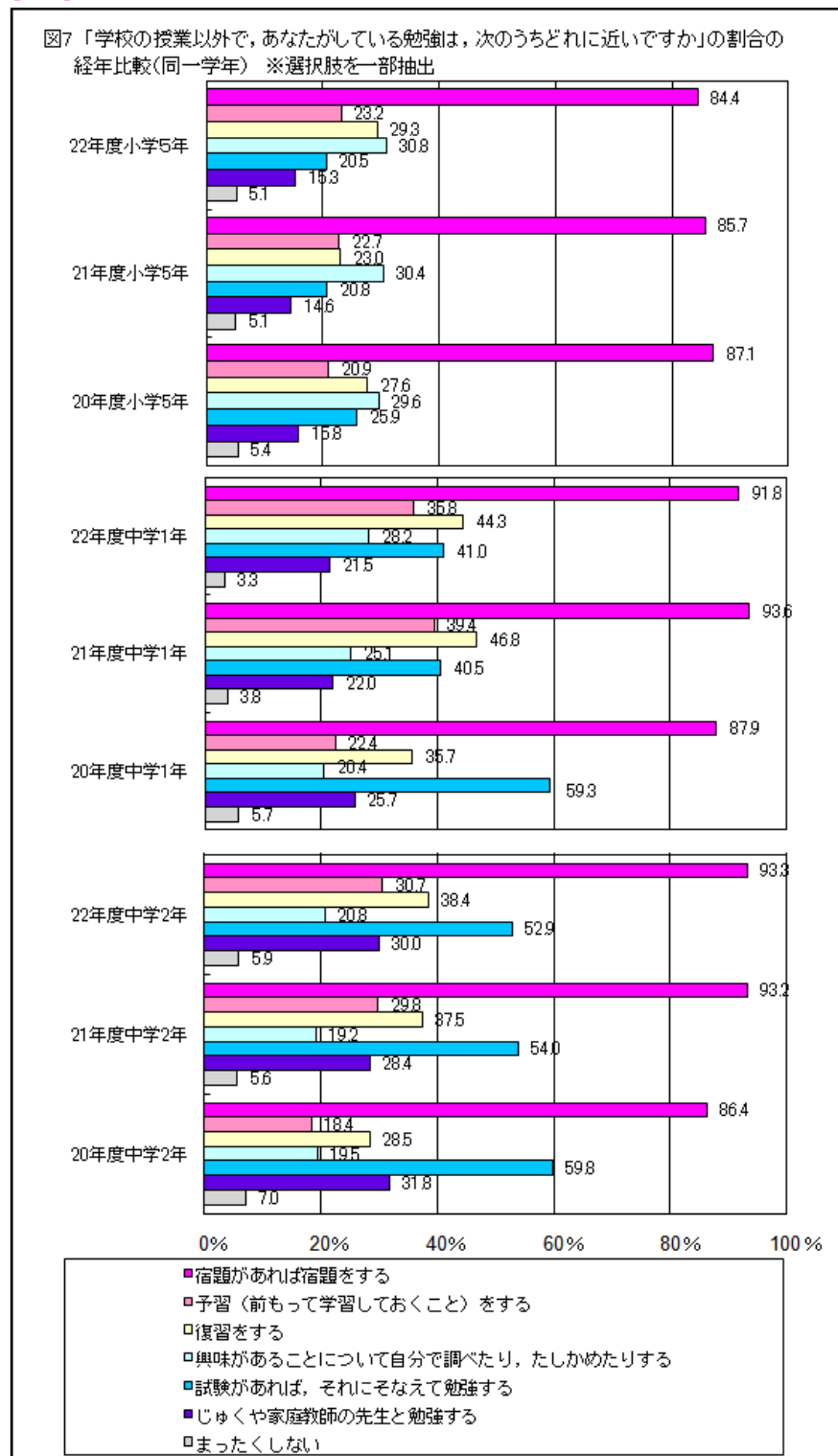


家庭学習に取り組む時間をのばすためには、家庭学習をはじめとする授業以外の学習の重要性について指導するとともに、オリエンテーションの場を設けるなどして、予習・復習の仕方等について具体的に繰り返し指導することが必要であろう。また部活動等により、家庭で過ごす時間が全体的に少なくなる中学生については、1日の生活時間を見直させて、学習時間を確保することが望まれる。

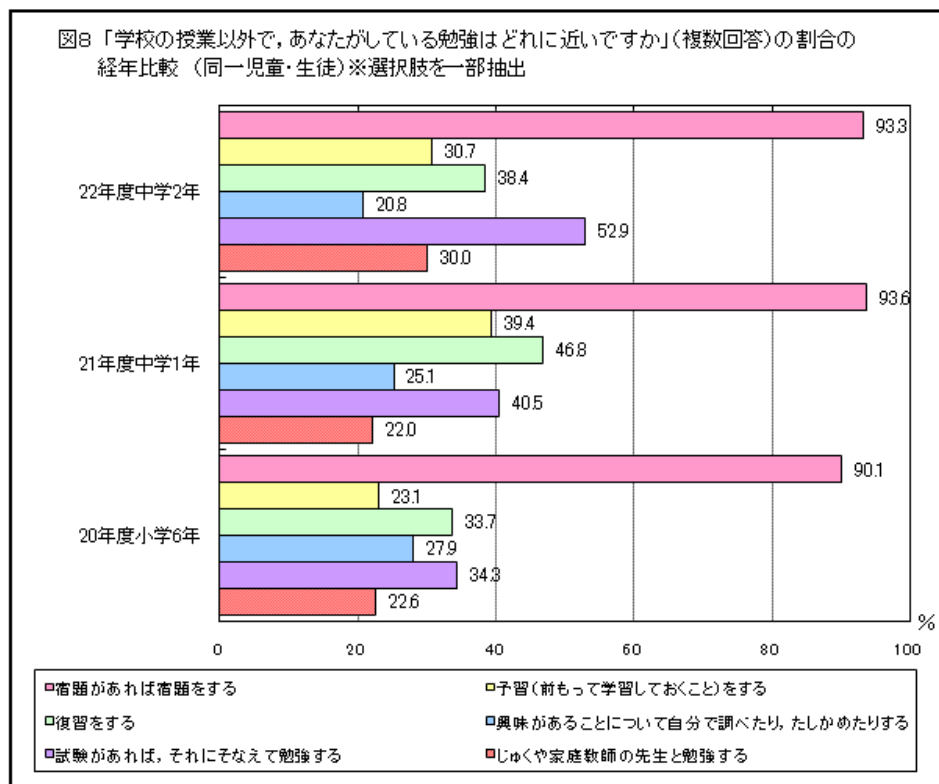
「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」(複数回答)という設問については、中学生は小学生に比べて試験に向けた勉強をする割合が高くなる傾向が見られる。すべての学年において「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年84.4%、中学1年91.8%、中学2年93.3%になっている。以下、小学5年では「興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする」「復習をする」、中学1年では「復習をする」「試験があれば、それにそなえて勉強する」、中学2年では「試験があれば、それにそなえて勉強する」「復習をする」の順になっている。

この設問を前年度調査と比較すると、各学年ともいづらかの数値的な変化はあるが、全体的に大きな変化は見られない。

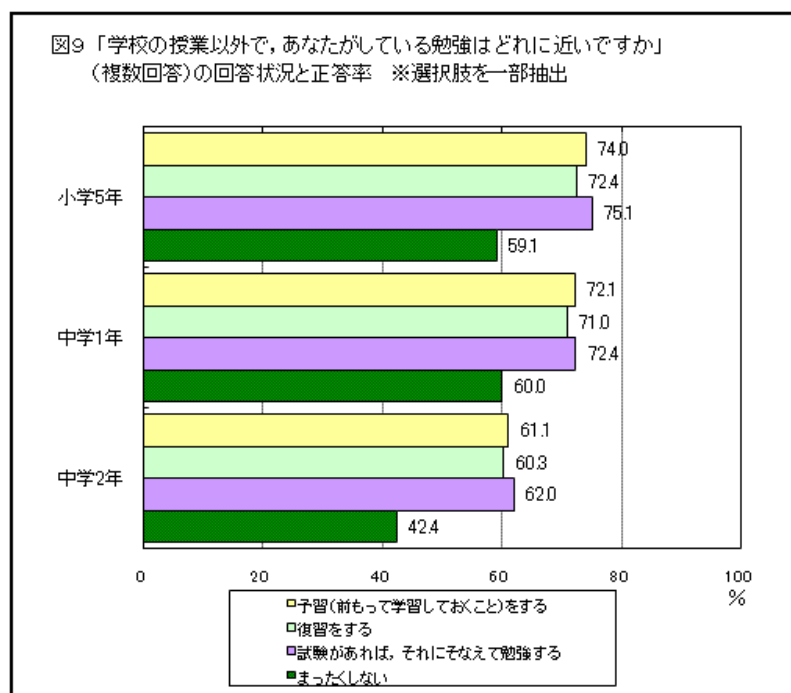
【図7】



同一児童生徒の経年比較で見ると、各学年とも「宿題があれば宿題をする」が高いことは明らかであり、少しずつ数値も上がっている。また、特徴の一つとして、学年が上がるにつれて「試験があれば、それにそなえて勉強する」が増えているのに対し、「興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする」が減っている。〔図8〕



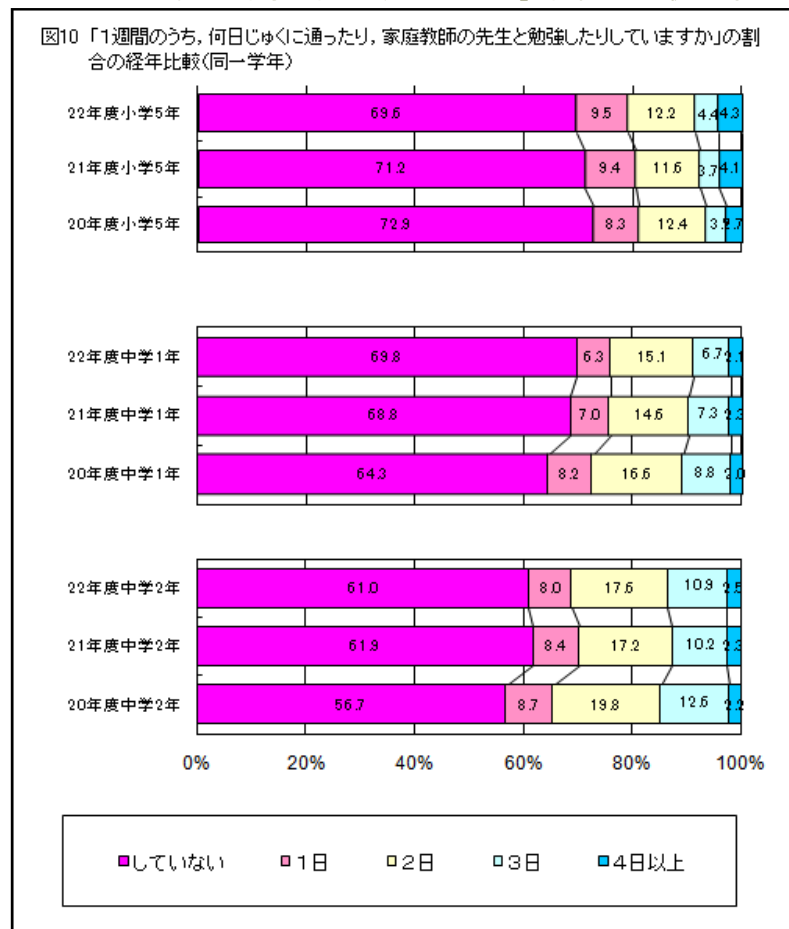
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないが、各学年に共通して勉強は「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。〔図9〕



「まったくしない」と回答した児童生徒が各学年5%ほどの割合である。そして図6と図9で明らかなように、勉強は「まったくしない」と回答した児童生徒の平均正答率は他と比べて低くなっている。各学校においては、勉強をまったくしないと回答している児童生徒を把握し、学力面や家庭環境などの視点からその理由について考え、個別に改善に向けての取組や支援をしていくことが必要である。全体的な取り組みとしては、学習の手引きを活用したり、学習の意義等について家庭との連携を図ったりすることが考えられる。また、「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が約9割に上ることから、宿題の出し方や授業への生かし方等について、各教科や学校全体で検討し、改善していくことも、学力の向上に大きな効果を生むものと考えられる。学年の発達の段階に応じた学習に対する内発的な動機を高めることが大切である。

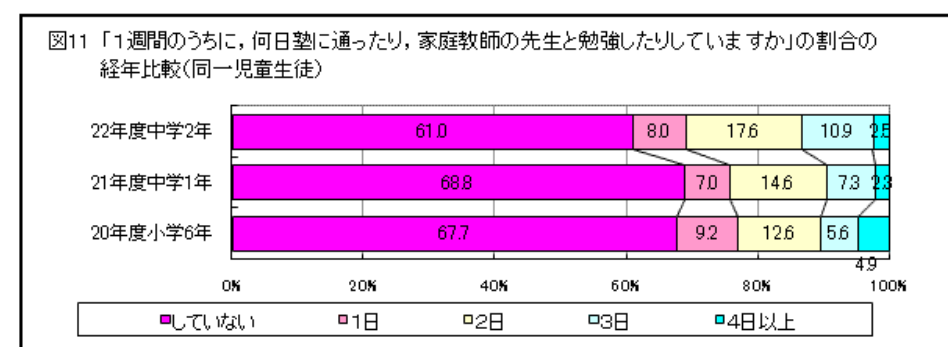
「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という設問については、すべての学年において「していない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年69.6%、中学1年69.8%、中学2年61.0%になっており、次いで「2日」と回答した児童生徒が多くなっている。また学年が上がるにつれて、「2日」「3日」と回答した児童生徒の割合が、わずかではあるが高くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年と中学2年では、わずかではあるが、「していない」と回答した児童生徒の割合が減っている。逆に中学1年では、「していない」と回答した生徒の割合が少し増えている。[図10]

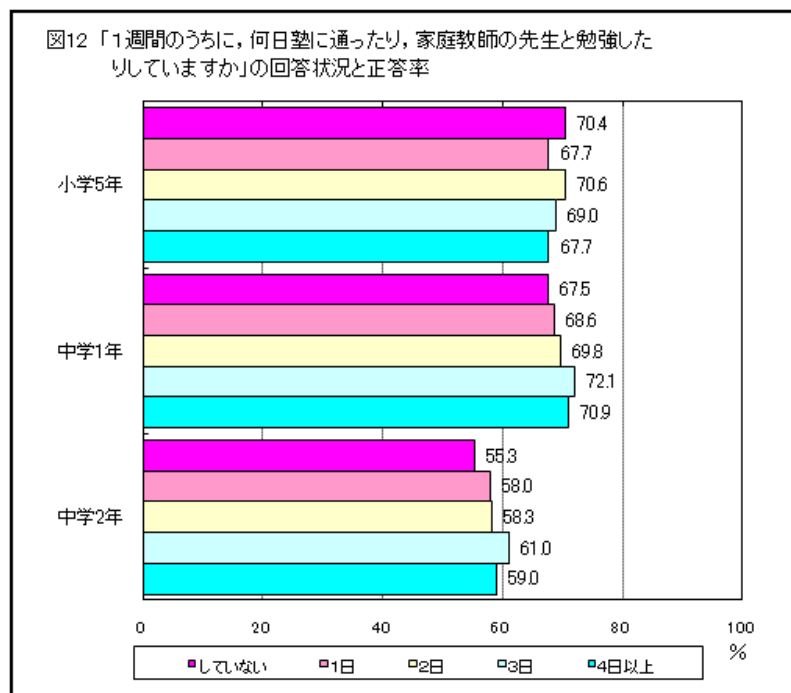


同一児童生徒の経年比較で見ると、中学1年から中学2年にかけて、「していない」と回答した生徒の割合が減っている。

[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では明らかな特徴は見られないが、中学1年と中学2年においては、「3日」「4日以上」と回答した生徒の正答率がいくぶん高くなっている。[図12]



「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」という設問と「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という2つの設問を比較すると、この2つの設問に共通する「まったくしない」という回答が年々減少しているということから、学校外での学習に関する意識が高まっていることが分かる。より一層の家庭学習に関する指導強化と、学校と家庭の連携が学力向上の鍵となるであろう。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 児童生徒意識調査の結果の分析

4 生活習慣

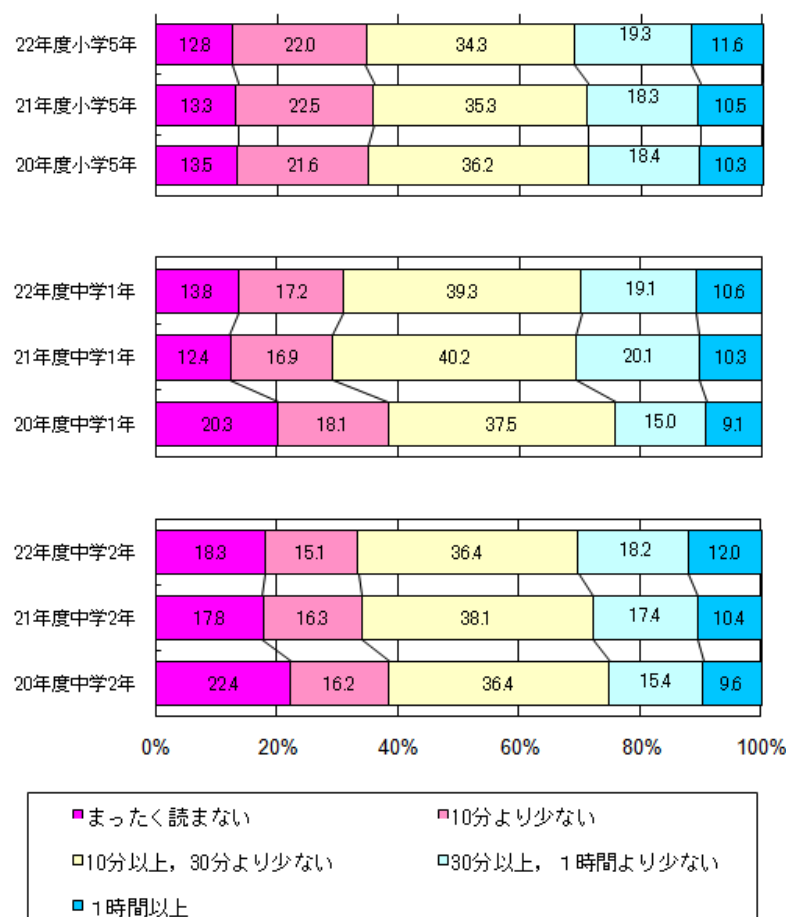
- 読書の時間について、「まったく読まない」、「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも3割以上を占めている。[図1] また、各学年において、読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなっている。[図3]
- テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間が3時間以上である児童生徒の割合は、小学5年15.8%、中学1年17.0%、中学2年19.5%であり、学年が上がるにつれて増加している。[図4]
- 朝食を毎日とると回答した児童生徒の割合は、各学年とも8割以上である。[図10]また、朝食をきちんととっている児童生徒ほど正答率が高く、学習面にも良い影響を与えていると思われる。[図12]

この節では、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、情報収集の手段など生活習慣全般についての設問から、児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

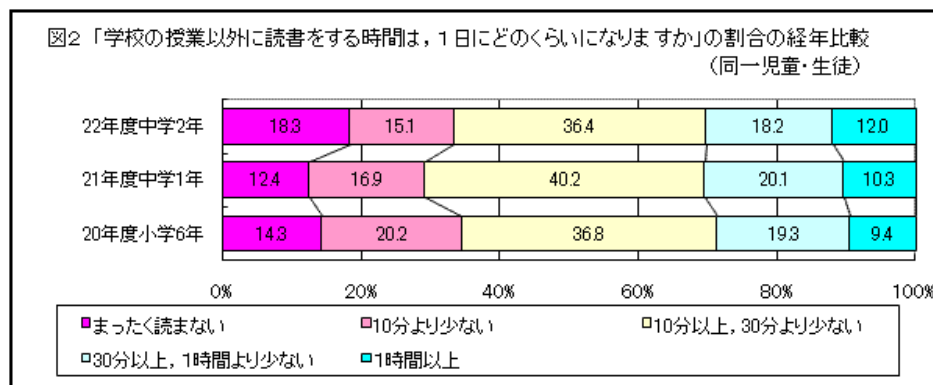
「学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「10分以上30分より少ない」と回答した児童生徒の割合がすべての学年において最も高く、小学5年34.3%、中学1年39.3%、中学2年36.4%になっている。「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は小学5年11.6%、中学1年10.6%、中学2年12.0%になっており、各学年の約1割を占めている。また、「まったく読まない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなっている。

同一学年の経年比較をすると、小学5年と中学2年では、少しずつ「30分以上、1時間より少ない」「1時間以上」と回答した生徒の割合が高くなり、読書の時間が増えている。中学1年においては、昨年度と比べると、「まったく読まない」「10分より少ない」と回答した生徒の割合は少し高くなっていて、わずかではあるが読書の時間が減っている。[図1]

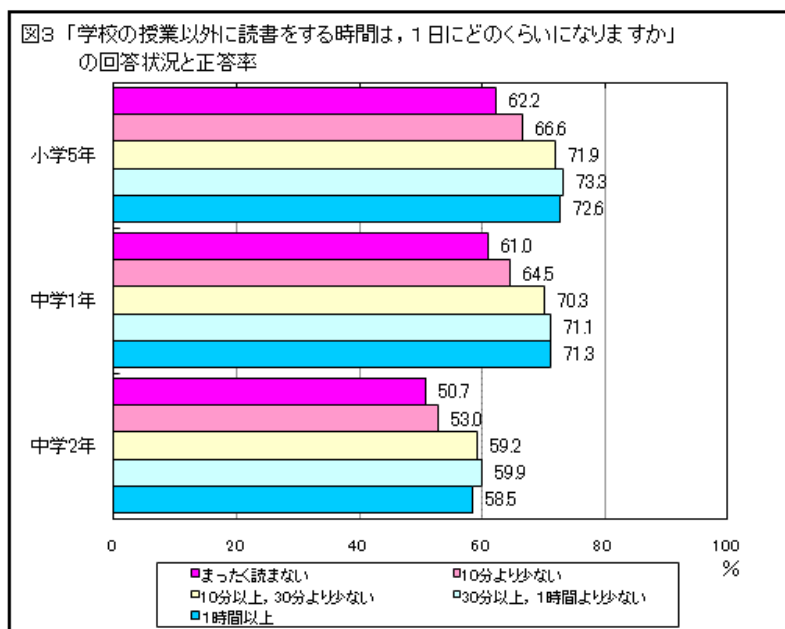
図1 「学校の授業以外に読書をする時間は、1日にどのくらいになりますか。」の割合の経年比較(同一学年)



同一児童生徒の経年比較を見ると、「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は、中学1年から中学2年にかけて1.7ポイント増加している。しかし、小学6年から中学1年にかけては、「まったく読まない」又は「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合が5.2ポイント減少するなど、読書をする時間は増加傾向にあったが、中学1年から中学2年にかけて「全く読まない」と回答した生徒が5.9ポイント増加し、中学1年と比べて読書する時間が増えた生徒より、読書をしなくなった生徒の割合が高くなっている。[図2]



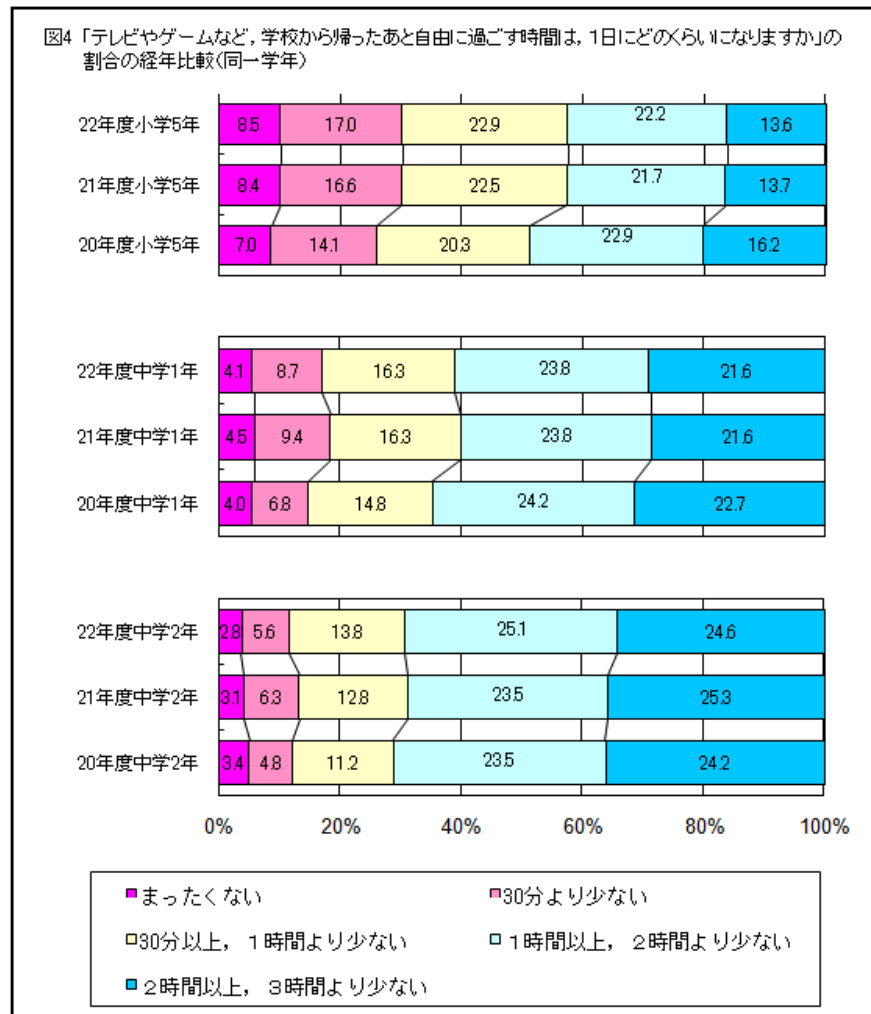
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく読まない」と回答した児童生徒の正答率が最も低く、小学5年と中学1年では読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなる傾向が見られる。中学2年では、「10分以上、30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなってはいるが、全体的には同様の傾向が見られる。[図3]



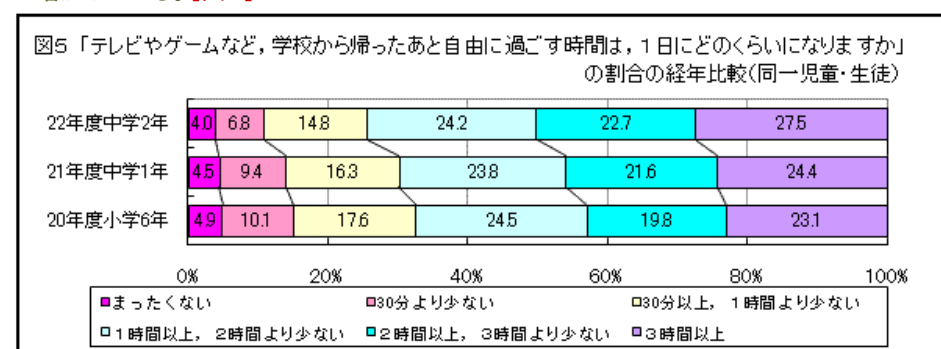
読書をする時間と全教科平均正答率との関連が見られることから、小学校段階で家庭での読書習慣を確立させ、中学校に上がっても継続して読書ができる環境を整えることが大切である。また、各学校において10分間読書や家庭との連携を工夫することが望まれる。

「テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間は、読書の時間をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「3時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学5年15.8%、中学1年25.5%、中学2年28.1%になっており、中学1年と中学2年で一番多くを占めている。また、学年が上がるにつれて、時間が増えている。

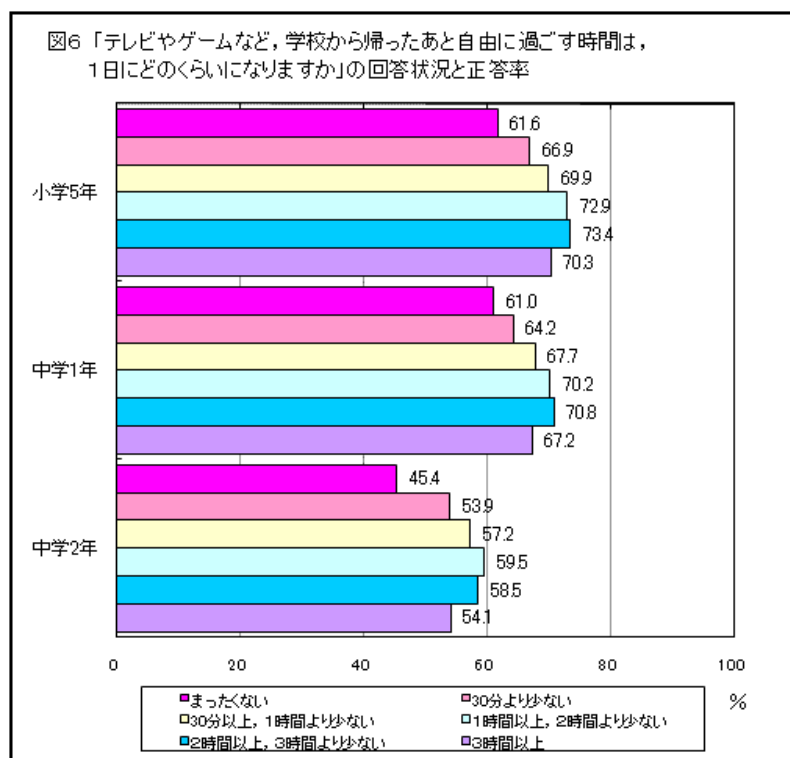
同一学年の経年比較をすると、小学5年と中学2年では、2時間以上と回答した児童生徒の割合が、少しずつ低くなっているが、中学1年では、前年度調査と比較するとやや高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、2時間以上と回答した児童生徒は、小学6年から中学1年にかけては3.1ポイント、中学1年から中学2年にかけては4.2ポイント増加しており、学年が上がるにつれ、テレビやゲームなど、自由に過ごす時間が増加している。[図5]



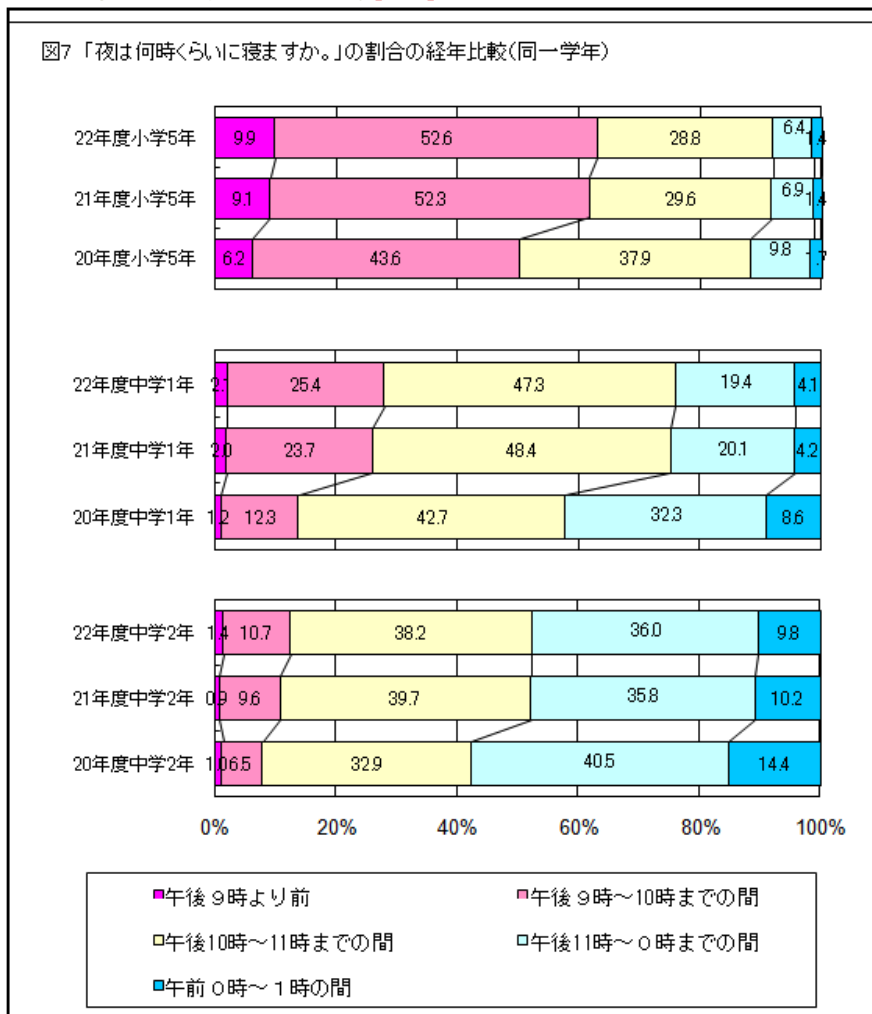
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年で「1時間以上2時間より少ない」又は「2時間以上3時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなる傾向が見られる。また、すべての学年において「まったくない」と回答した児童生徒の正答率は最も低くなっている。[図6]



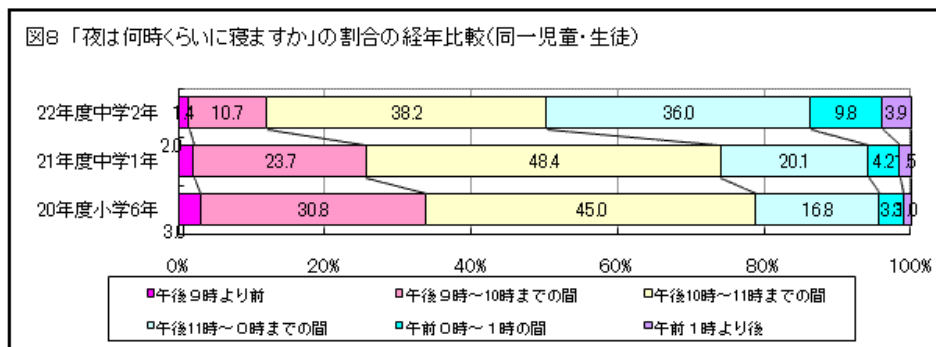
「まったくない」と回答した児童生徒の部活動や家庭での状況が把握できないが、「3時間以上」と回答した児童生徒は学習だけでなく、就寝時刻など家庭での基本的な生活習慣にもよくない影響を及ぼしている可能性がある。学校から帰宅後、就寝までの限られた時間の中で、自律的にテレビやゲームの時間を考えられるように指導することが大切であろう。

「夜は何時くらいに寝ますか」という設問については、小学校では「午後9時から10時までの間」と回答した児童の割合が最も高く、小学5年52.6%になっている。また、中学校では「午後10時から11時までの間」と回答した生徒の割合が最も高く、中学1年47.3%、中学2年38.2%になっている。午後11時以降と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなっている。

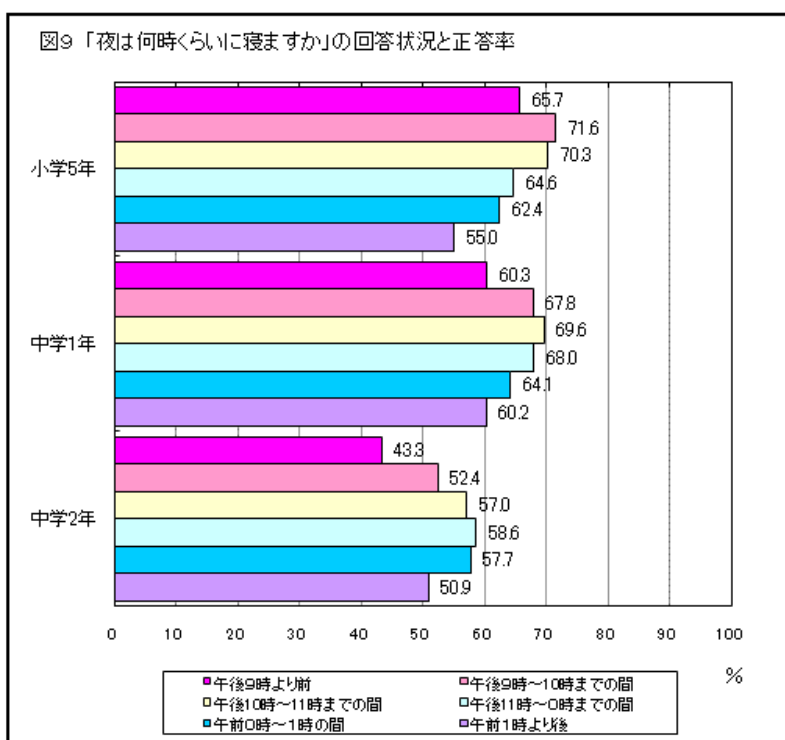
同一学年の経年比較をすると、中学校では11時までと回答した児童生徒の割合は高くなっており、11時以降と回答した生徒の割合は逆に低くなっている。小学5年では、10時までと回答した児童の割合は、高くなっており、10時以降と回答した児童の割合は逆に低くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較を見ると、全体として学年が上がると就寝時刻は遅くなるのが明らかである。小学6年から中学1年にかけては、10時以降と回答した児童生徒の割合は8.1ポイント増加している。中学1年から中学2年にかけては、11時以降と回答した児童生徒の割合は23.8ポイント増加している。【図8】



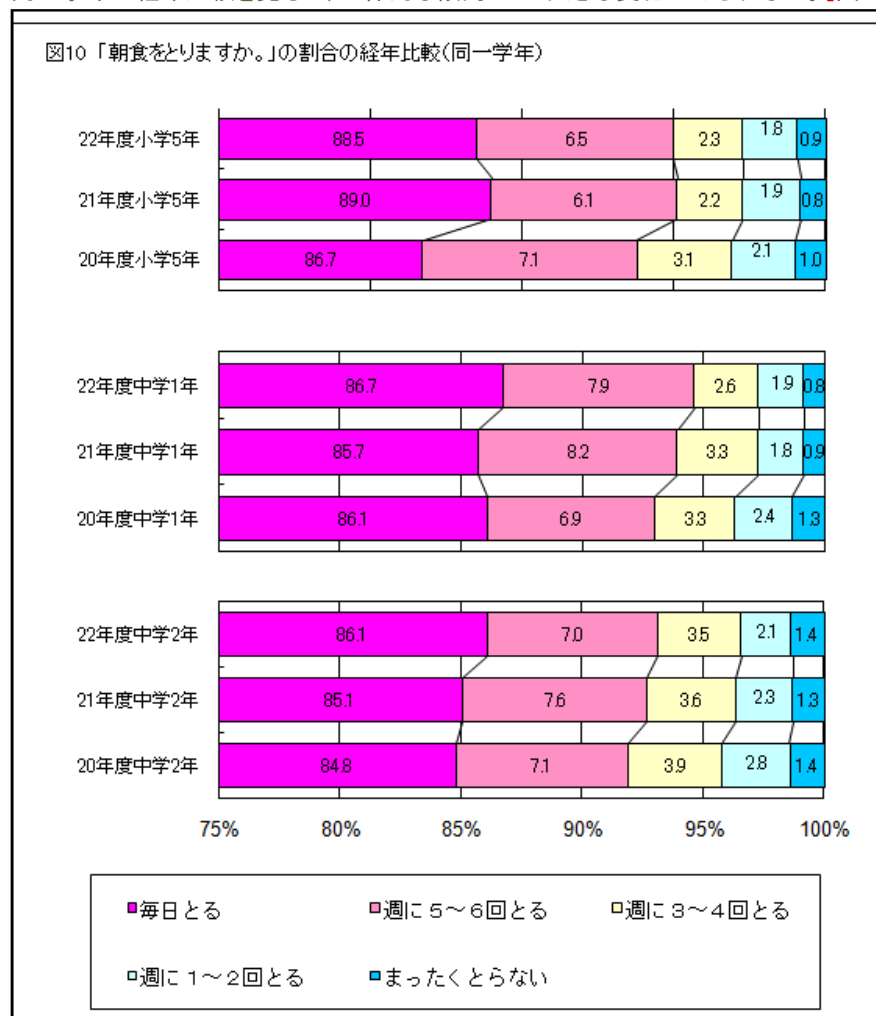
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では「午後9時から10時までの間」、中学1年では「午後10時から11時までの間」、中学2年では「午後11時から0時までの間」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。また、特に中学校において「午後9時より前」又は「午前1時より後」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。【図9】



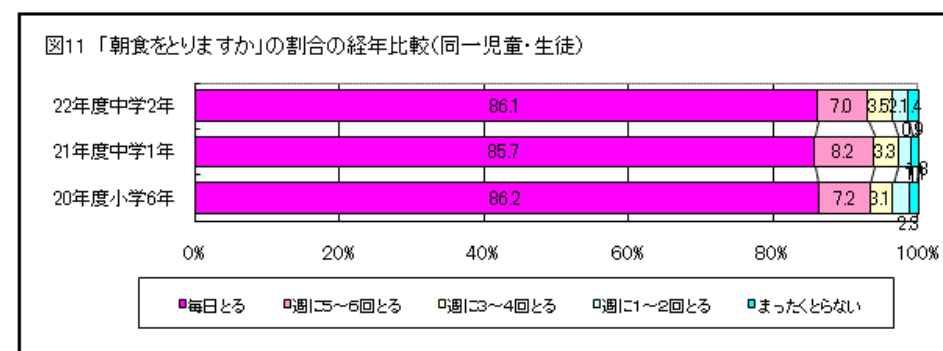
家庭学習の時間や読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間を考えると、就寝時刻が早ければよいというわけではないが、極めて遅い就寝時刻は、学習面において悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

「朝食をとりますか」という設問については、「毎日とる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年88.5%、中学1年86.7%、中学2年86.1%になっている。「週に5～6回とる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

同一学年の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化はみられない。[図10]

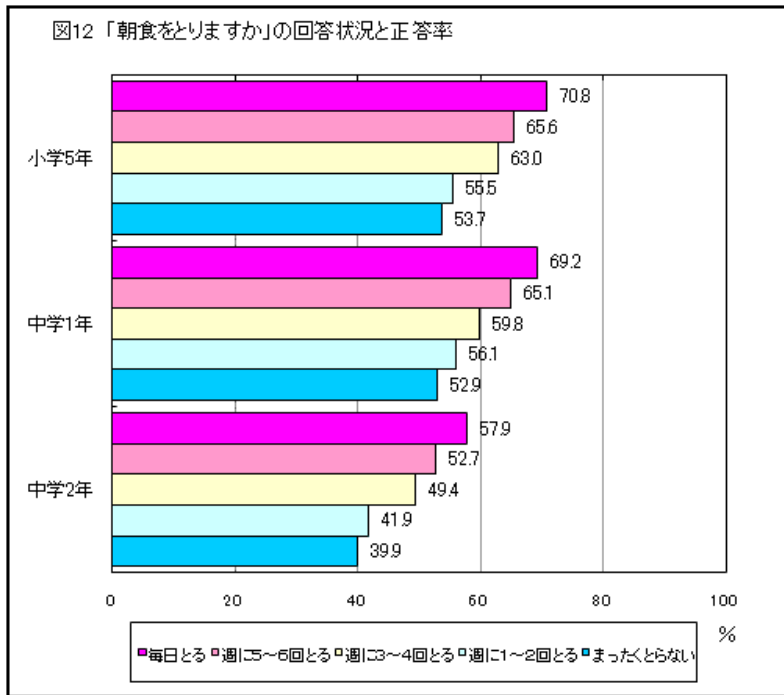


同一児童生徒の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「毎日とる」と回答した児童の正答率が最も高く、朝食をとる日数が減るにしたがって、正答率も低くなっている。

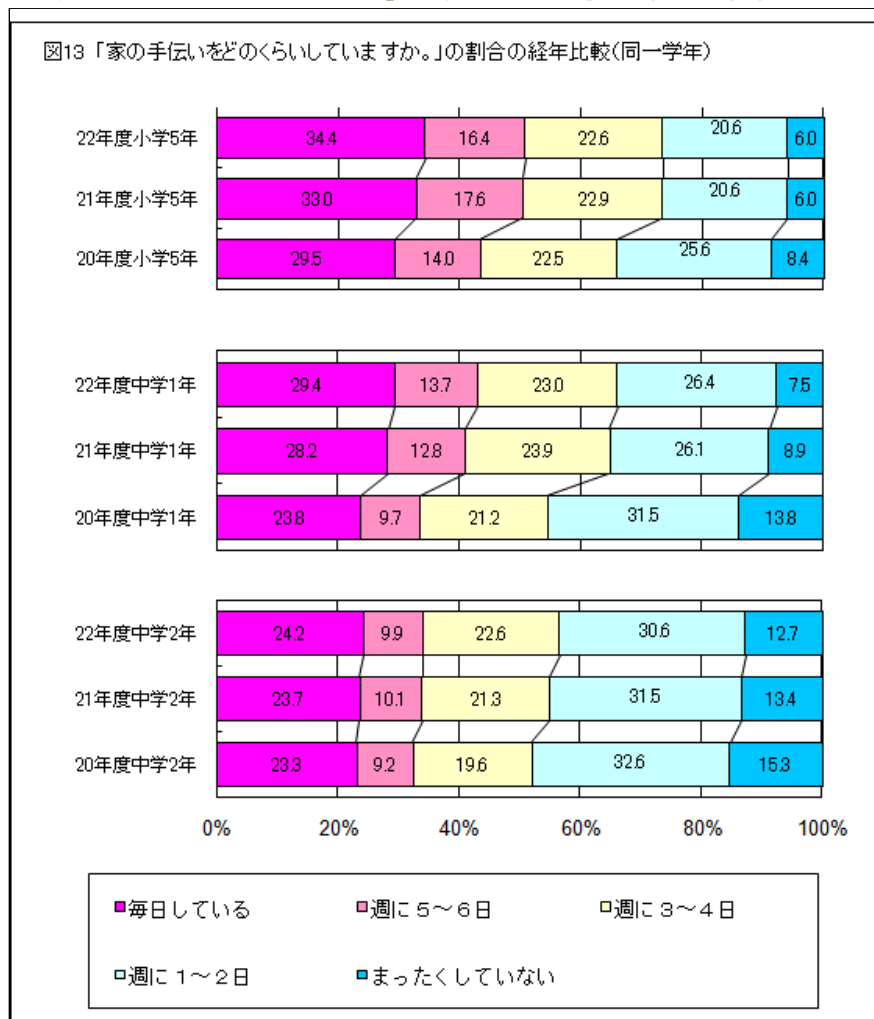
ただし、図10を見たら分かるように「まったくとらない」又は「週に1～2回とる」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。[図12]



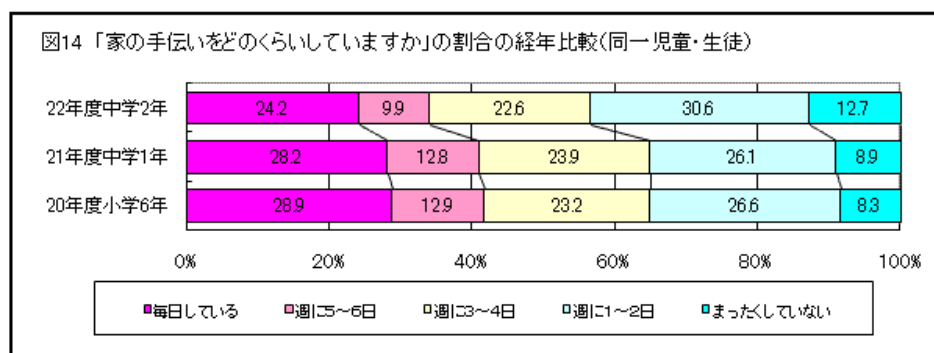
朝食をとることが、学習面にもよい影響を与えていることが考えられる。これからも家庭と連携し、食事をとることの大切さについての啓発をしていくことが望まれる。

「家の手伝いをどのくらいしていますか」という設問については、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年34.4%、中学1年29.4%、中学2年24.2%になっており、すべての学年で最も高くなっている。「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて低くなり、逆に「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。

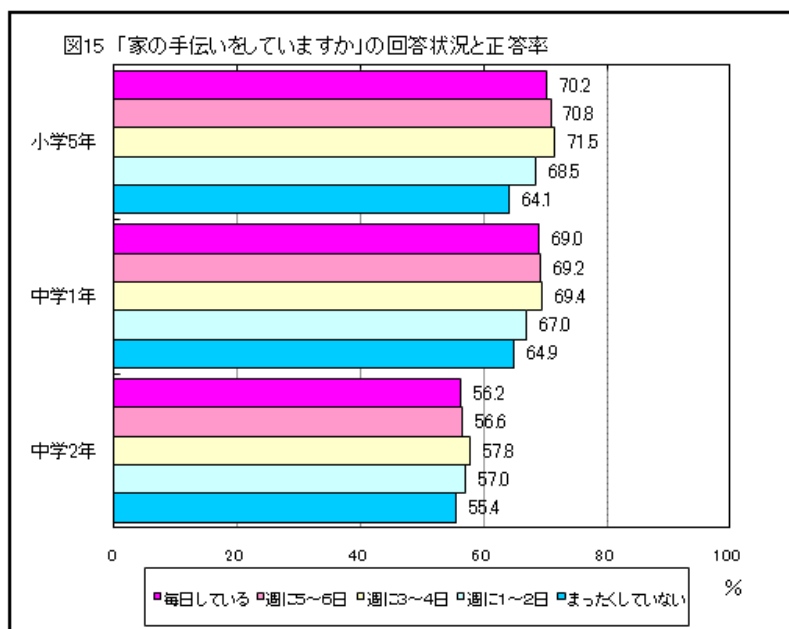
同一学年の経年比較をすると、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、すべての学年において少しずつ高くなっている。また逆に、「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも低くなっている。[図13]



同一児童生徒の経年比較を見ると、学年が上がるにつれて「毎日している」と回答した児童生徒の割合は低くなり、逆に週2日以下と回答した生徒の割合が高くなっている。[図14]



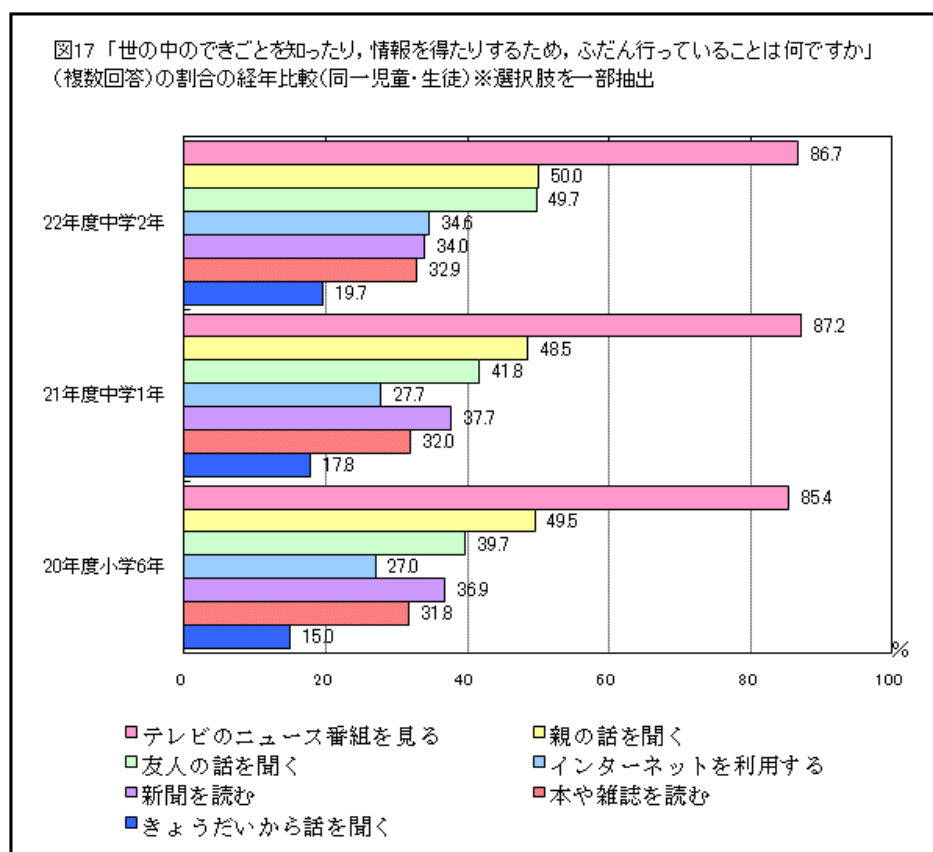
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られない。[図15]



このことから学年が上がると部活動や学習に多くの時間を費やすために、家の手伝いを「まったくしない」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向がうかがえる。生活体験を豊富にするためには、各家庭において責任をもたせた家での仕事や役割を決め、習慣化を図れるように学校と家庭とが連携して啓発していくことも大切である。

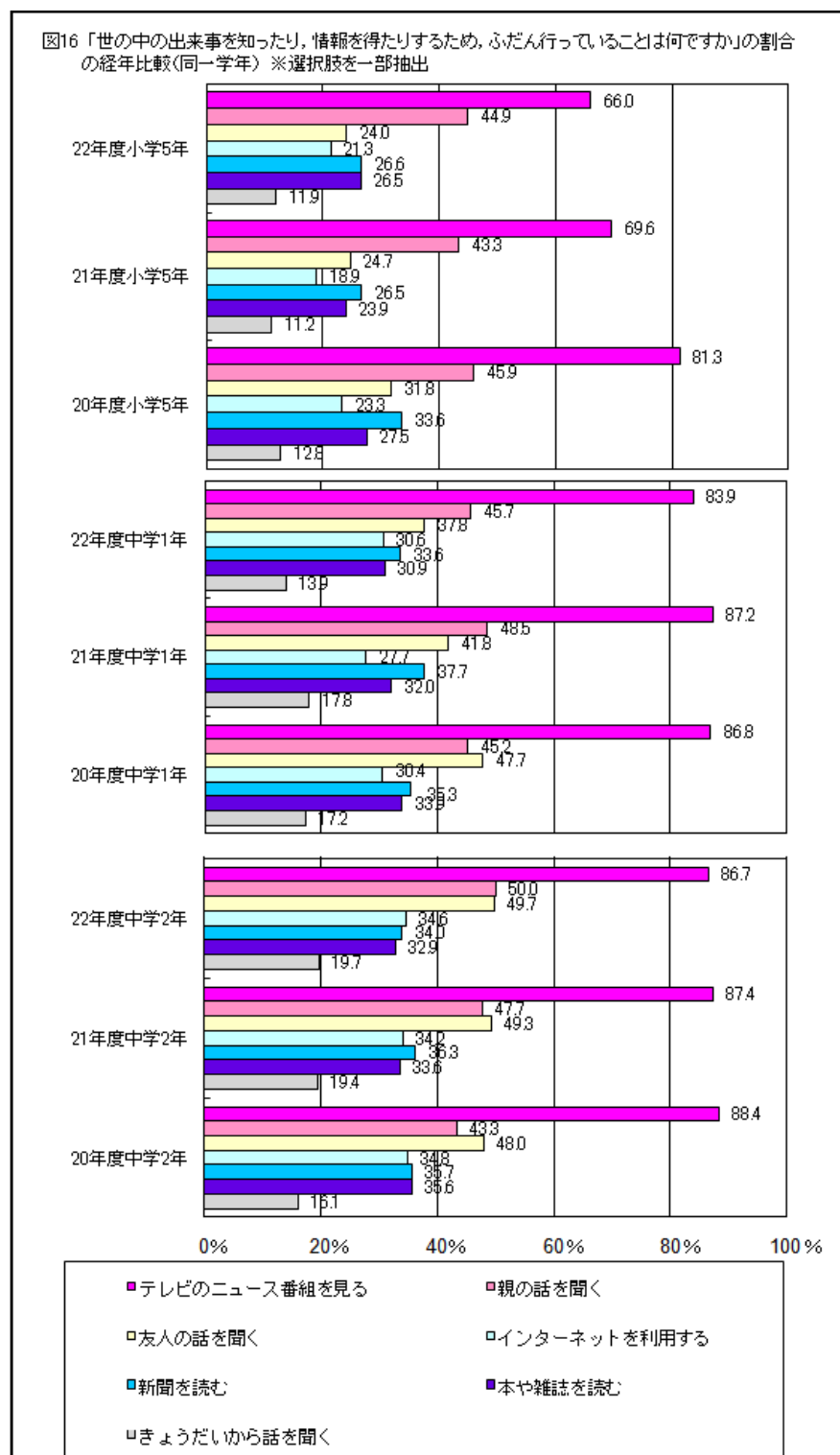
同一児童生徒の経年比較を見ると、中学1年から中学2年にかけて、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合は6.9ポイント、「友人の話を聞く」は7.9ポイント増加している。その他の項目については大きな変化は見られない。

[図17]

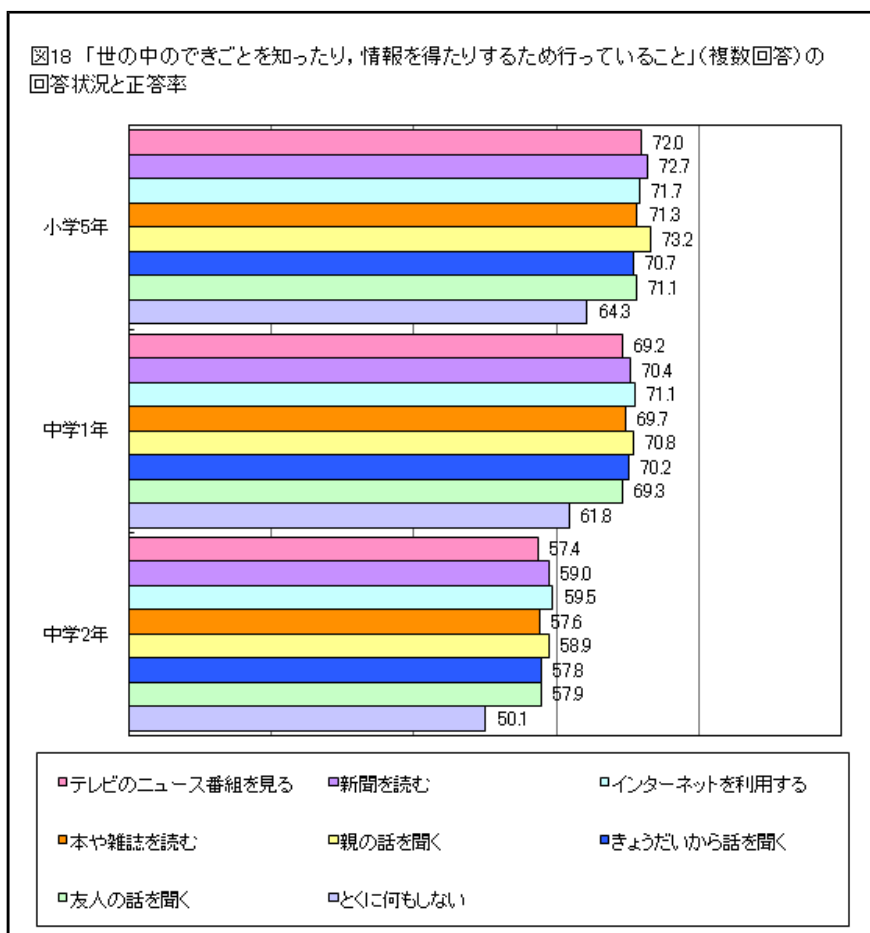


「世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするため、ふだん行っていることは何ですか」(複数回答)という設問については、学年が上がると「友人の話を聞く」、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向が顕著に見られる。「テレビのニュース番組を見る」と回答した児童生徒の割合は、小学5年66.0%、中学1年83.9%、中学2年86.7%になっており、各学年ともいちばん多くを占めている。

この設問を前年度調査と比較すると、中学2年では「親の話を聞く」と回答した生徒の割合はやや高くなっている。小学5年の「テレビのニュース番組を見る」「友人の話を聞く」と回答した児童の割合と、中学1年の「友人の話を聞く」と回答した生徒の割合は低くなっている。[図16]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないが、すべての学年において、「とくに何もしない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図18]



これら2つの結果から、学年が上がるごとに、インターネットを利用し情報を得ることができる児童生徒の割合が増加していることがうかがえる。また、正答率との関連を見ると、わずかではあるが、インターネットを利用する児童生徒の正答率が高い傾向にあることが分かる。逆に「とくに何もしない」児童生徒の正答率が低いことも分かる。いろいろな手段で情報を得るスキルと習慣を身に付けさせることが重要であると言える。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

5 家族関係

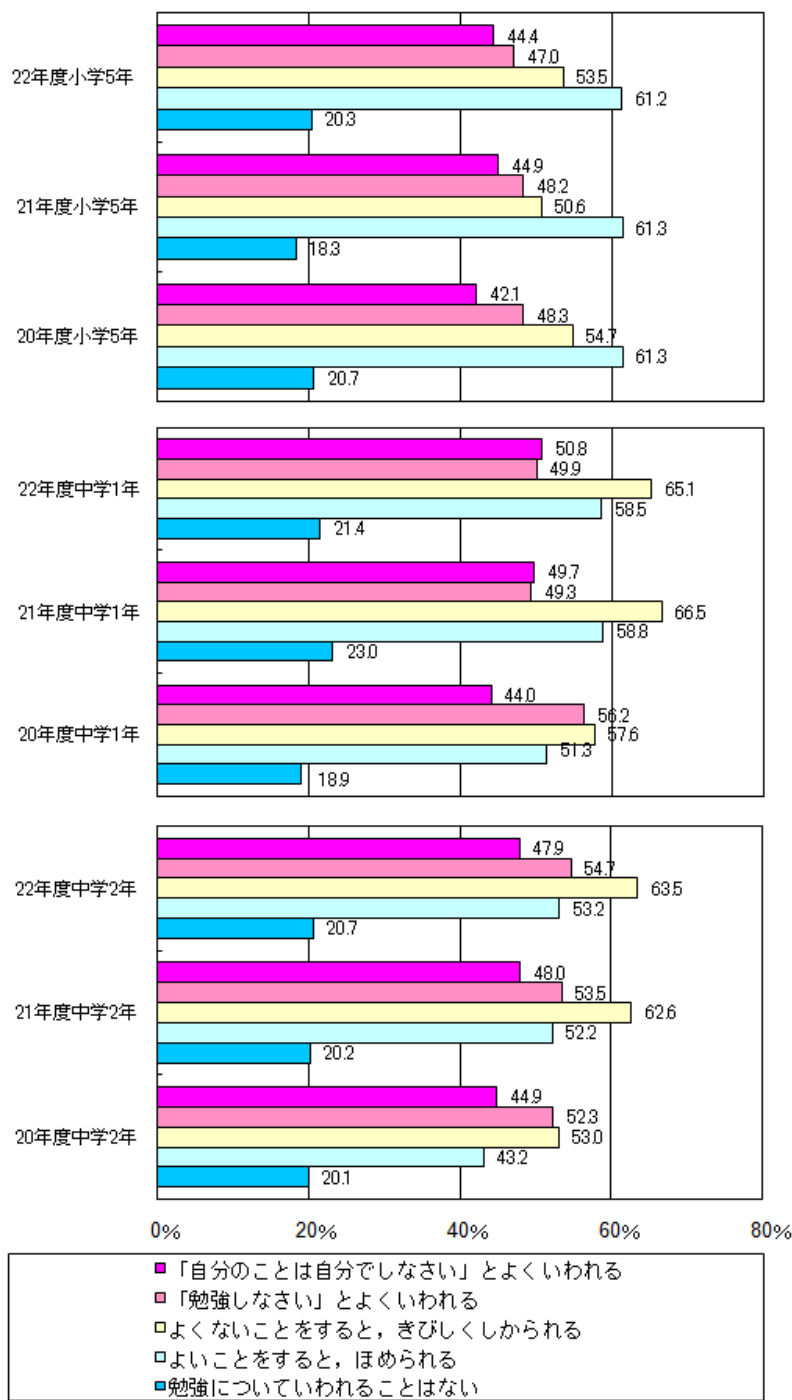
- 家の人といっしょにいる方が楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学5年と中学1年で8割、中学2年で7割を上回っており、前年度と比べると高くなっている。[図4]
- 日ごろ家の人が自分にかまうことはほとんどないと感じている児童生徒の平均正答率は、低くなっている。[図3]

この節では、きょうだい数、家族の接し方、家族に対する意識についての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

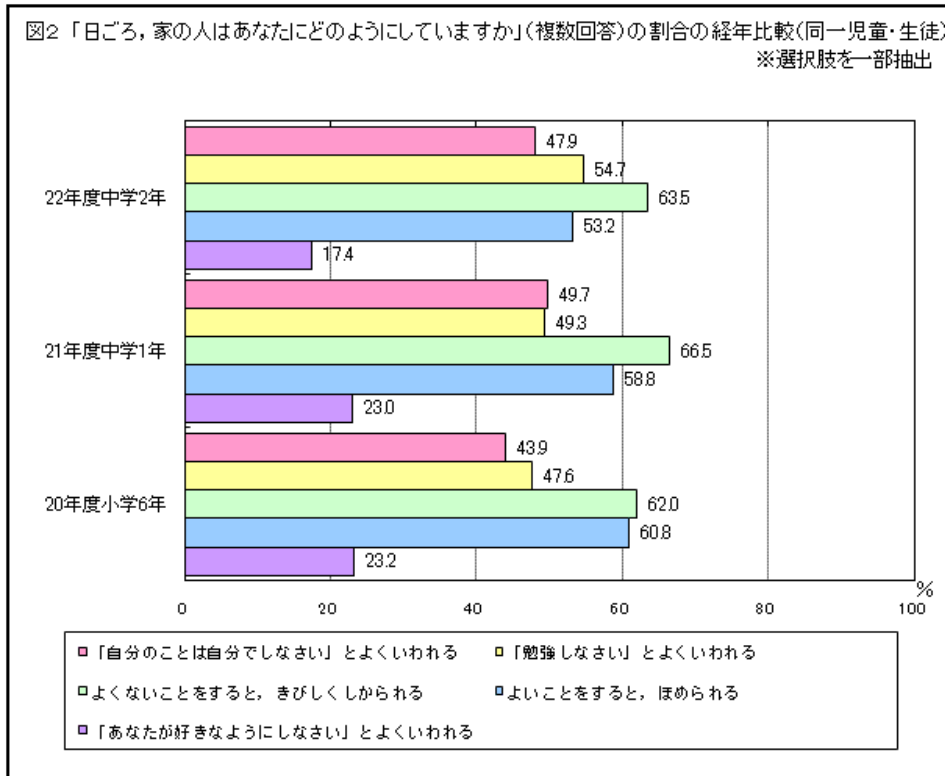
「日ごろ、家の人はあなたにどのようにしていますか。」(複数回答)という設問については、すべての学年において「よいことをすると、ほめられる」、「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合が高く、いずれも全体の5割を上回っている。しかし、学年が上がるにつれて「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が低くなる傾向が見られる。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学1年では特に「よくないことをすると、きびしくしかられる」、「よいことをすると、ほめられる」、「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」、「勉強しなさいとよくいわれる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学2年でも「よくないことをすると、きびしくしかられる」、「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が特に高くなっている。[図1]

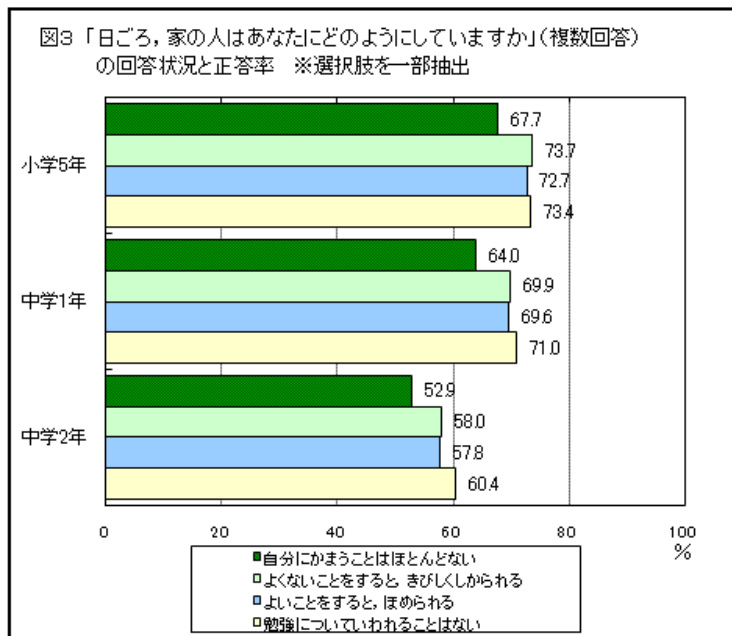
図1 「日ごろ、家の人はあなたにどうしていますか。(複数回答)」の割合の経年比較(同一学年)
※選択肢を一部抽出



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」5.8ポイント、「よくないことをすると、きびしくしかられる」4.5ポイント、「勉強しなさいとよくいわれる」1.7ポイントと、それぞれの項目に回答した児童生徒の割合は増加している。また、中学1年から中学2年にかけては「勉強しなさい」が5.4ポイント増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないものの、「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図3]

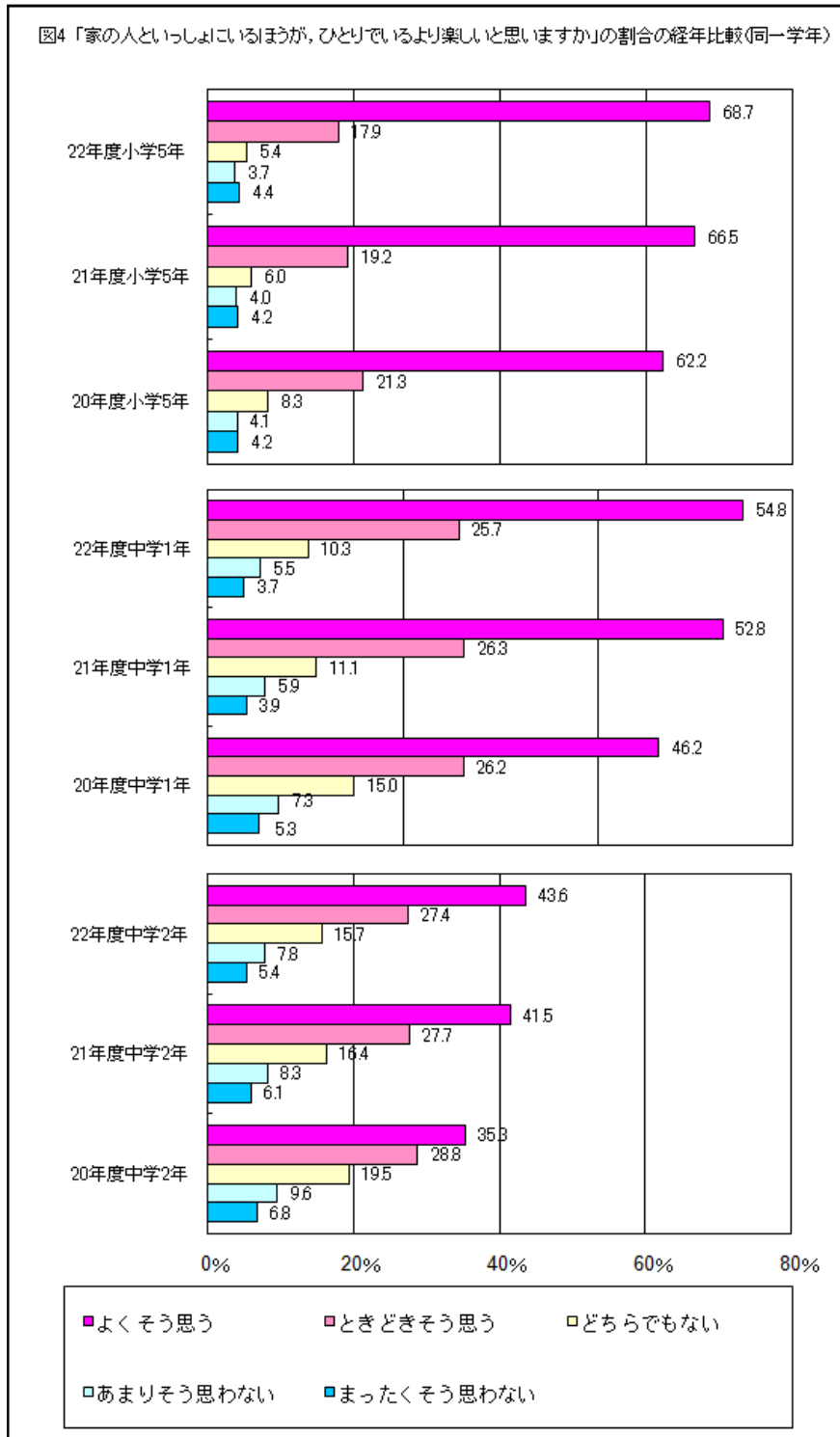


児童生徒の発達の段階に応じた家族の対応とも考えられるが、学年が上がると児童生徒の「家の人からほめられる」という意識が低くなっていくことは気になる点である。家族との温かなかわりは生徒にとって自己有用感を喚起するなどのよい影響を及ぼすであろう。

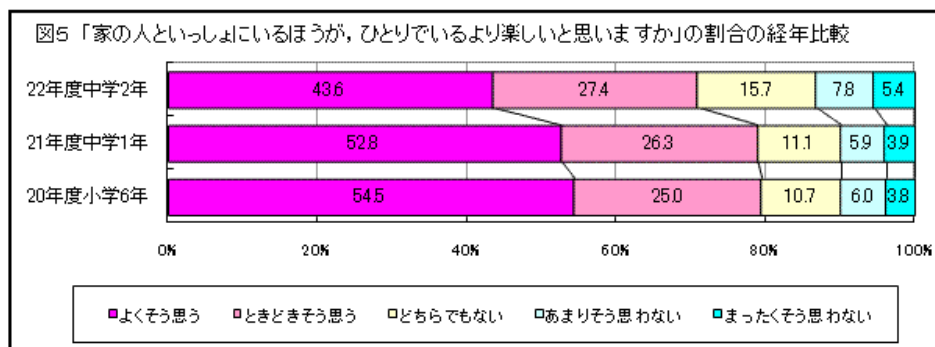
「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒は少数ではあるが、これらの児童生徒に対して、教育相談などの個別の対応が望まれる。

「家の人といっしょにいるほうが、ひとりでいるより楽しいと思いますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年68.7%、中学1年54.8%、中学2年43.6%になっている。「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせても、学年が上がるにつれて、低くなる傾向が見られる。

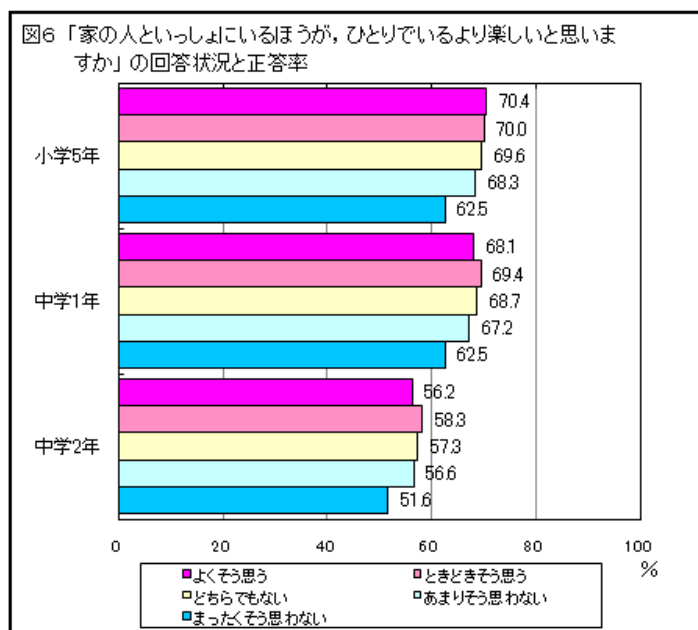
この設問を前年度調査と比較すると、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。また、中学校では「どちらでもない」と回答した生徒の割合はやや低くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒は、中学1年から中学2年にかけては9.2ポイント減少している。小学6年から中学1年にかけては全体の傾向として大きな変化は見られない。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないものの、「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図6]



「まったくそう思わない」と回答した児童生徒については、保護者との面談などを通して家族とのかかわり方を把握して、必要に応じて教育相談などの対応が望まれる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

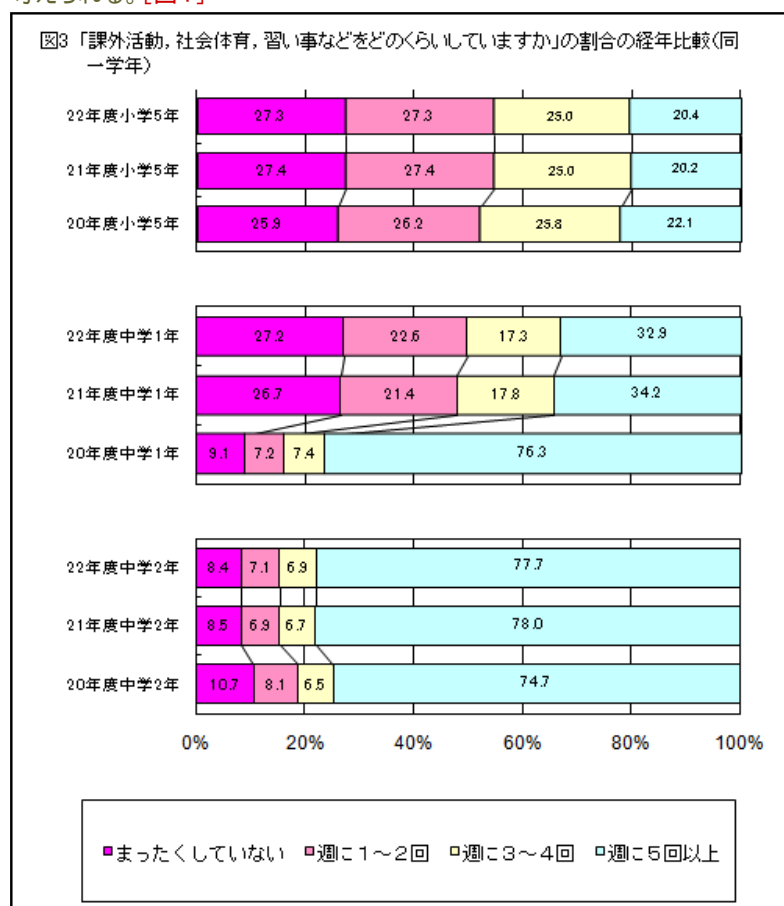
6 課外活動や部活動・地域における生活

- 課外活動や習い事を「まったくしていない」と回答した児童生徒の平均正答率は、各学年において最も低くなっている。[図3]
- 学年が上がるにつれて、地域行事やボランティア活動に「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。また、同一児童生徒の比較においても同様の傾向が見られる[図4][図5]

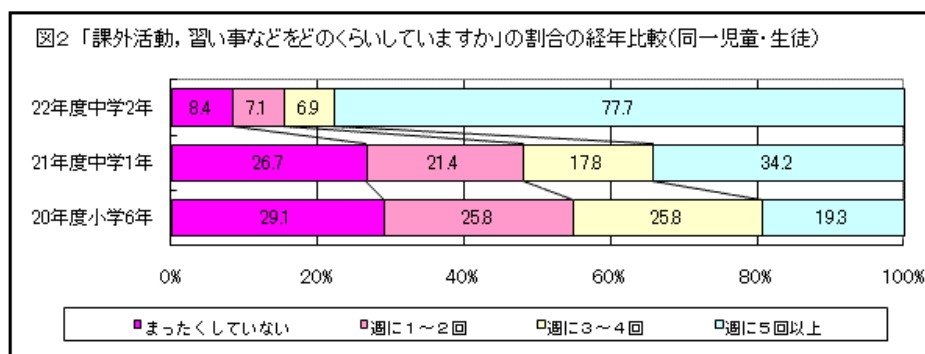
ここでは、課外活動や習い事の頻度、地域における行事などへの参加の頻度についての設問から児童生徒の地域における生活についての調査結果を述べる。

「課外活動(中学校では部活動、社会体育)、習い事などをどのくらいしていますか」という設問については、小学校では「まったくしていない」、「週に1～2回」、「週に3～4回」、「週に5回以上」と回答した児童の割合は、約20%から28%とほぼ均等になっている。中学校では「週に5回以上」と回答した生徒の割合は、中学1年32.9%、中学2年77.7%になっており、それぞれの学年で一番多くを占めている。

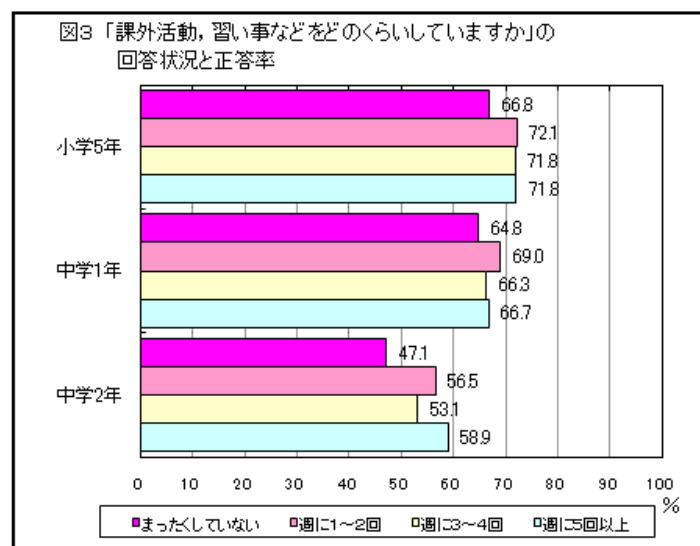
この設問を前年度調査と比較すると、すべての学年で全体的な傾向として大きな変化は見られない。平成20年度の中学1年では「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合が高くなっているが、12月調査であり生徒の入部状況が違うためだと考えられる。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて14.9ポイント、中学1年から中学2年にかけて43.5ポイントと大きく増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくしていない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。また、中学2年では、「週に5回以上」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。[図3]

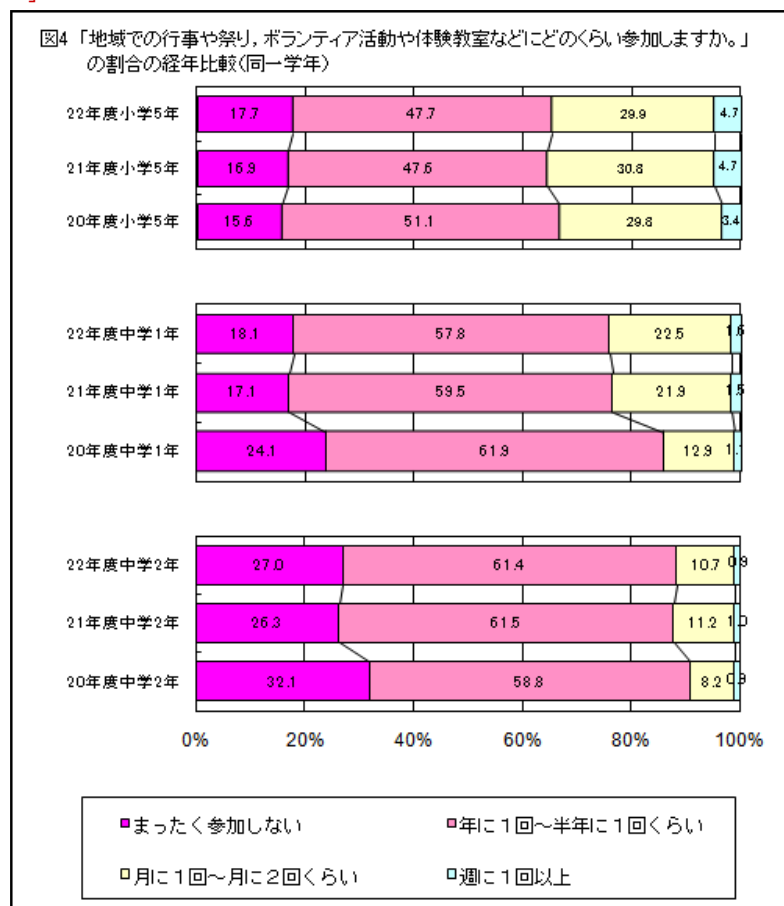


特に中2での「まったくしていない」と回答した生徒の正答率が低いことについて、放課後の自由に使える時間が多いにもかかわらず、有効に活用できていないことが考えられる。

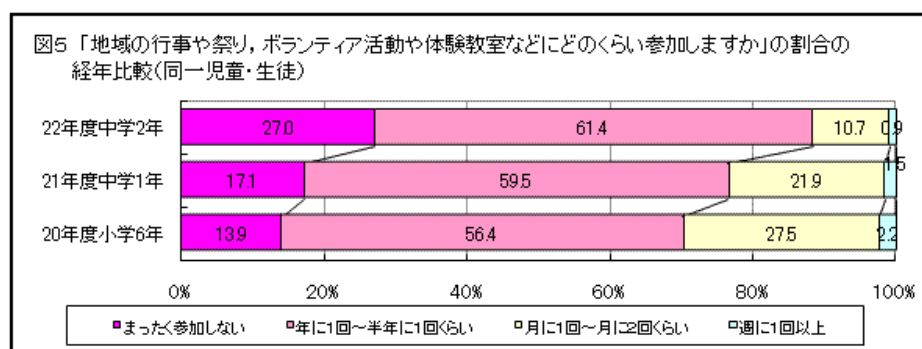
帰宅後、何もしていない生徒については、学校と家庭の連携を深めつつ生活指導の充実を図り、家庭学習に取り組むことができるようにすることが重要である。

「地域での行事や祭り、ボランティア活動や体験教室などにどのくらい参加しますか」という設問については、「年に1回～半年に1回くらい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年47.7%、中学1年57.8%、中学2年61.4%となっており、各学年ともいちばん多くを占めている。学年が上がるにつれて、月に1回以上と回答した児童生徒の割合は低くなり、「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、中学校では「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合が高くなっている。[図4]

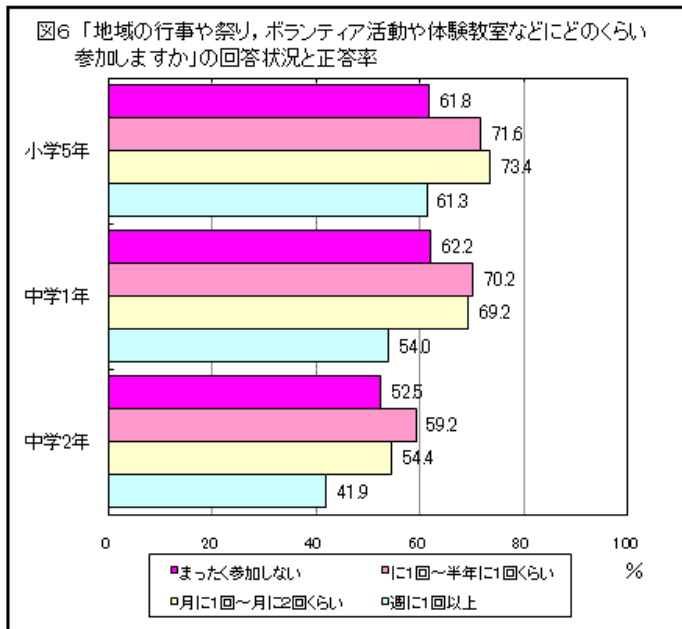


同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学2年にかけて「全く参加しない」、「年に1回～半年に1回」と回答した児童生徒が18.1ポイント増加しており、学年が上がるにつれて参加する割合は減少傾向にある。中学校では、部活動へ参加する生徒も増え、地域の行事や祭りなどへの参加は少なくなっている。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく参加しない」と回答した児童生徒と「週に1回以上」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図6]

ただし、図5を見たら分かるように「週に1回以上」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても2%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。



学校は、各家庭と地域を結んだり、地域行事をサポートする等が考えられる。また、児童生徒が地域や社会に目を向け、関心をもち主体的にかかわれるように、日常の学校生活や学習活動の中で働きかけることが望まれる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」「TT・少人数指導の成果と課題」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第6学年、中学校第1学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

	回答者数
小学校	971人
中学校	669人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第 I 章の [註](#) を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 教師意識調査の結果の分析

1 教科全般における指導法の工夫

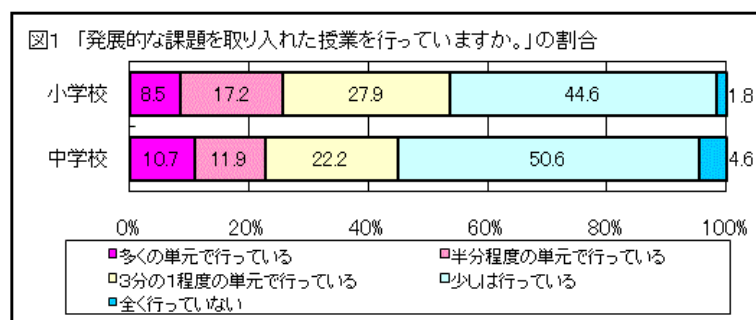
- 発展的な課題については、児童生徒の実態や学習の内容に応じて適宜取り入れていくことで効果が上がると考えられる。
- 表現する活動については、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することで効果が上がると考えられる。
- 単元の学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や指導計画に取り入れて指導を行っている教師の割合は高い。

この節では、

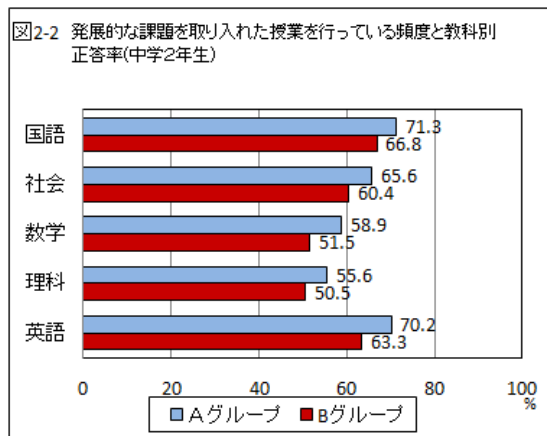
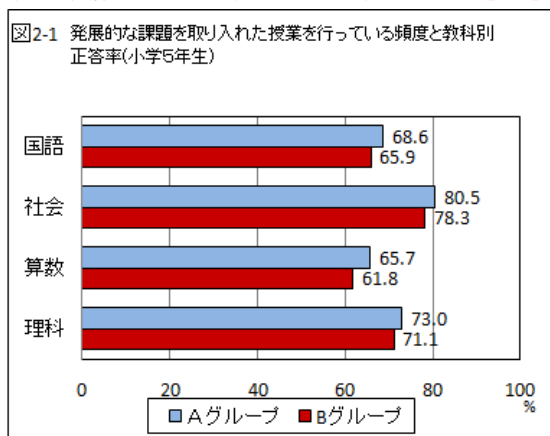
- ・ 発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況
- ・ 書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)
- ・ 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導
- ・ 学習方法についての指導状況、学習形態の工夫
- ・ 目標や評価規準を明確にした授業の実施

などの設問から、発展的学習・補足的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況について分析する。

「発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は8.5%、中学校教師の割合は10.7%と小学校教師より中学校教師の意識調査の結果がやや高くなっている。[図1]

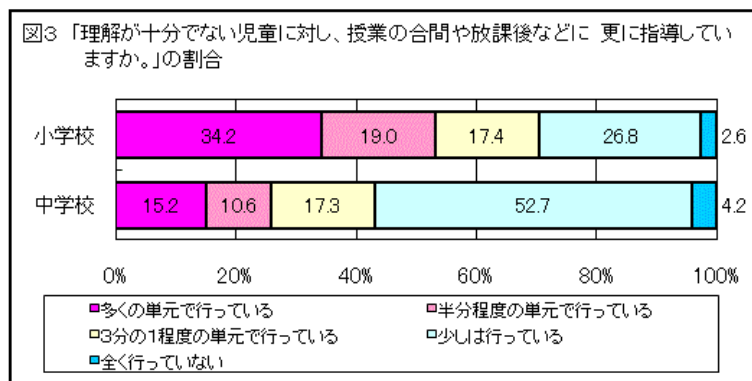


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、数学と英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]

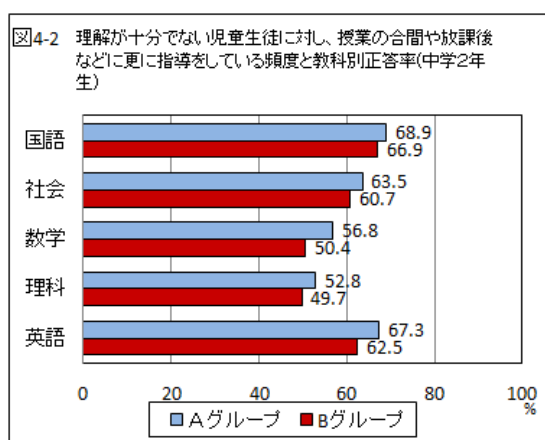
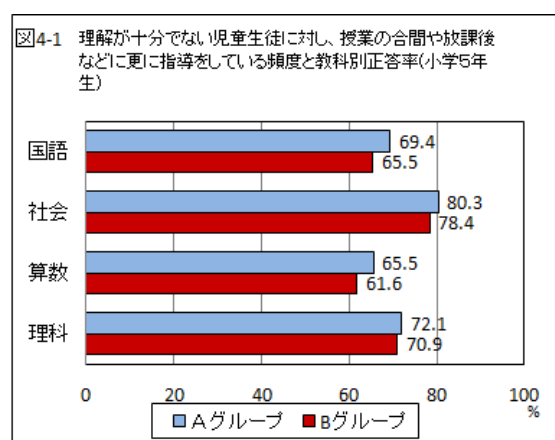


この設問から分かることは、図1のグラフから、小学校に比べ中学校において発展的な課題を取り入れた授業を行っている教師と、そうでない教師の二極化が見られるということである。また、正答率の比較から、できるだけ発展的な課題を授業のなかで行うことが児童生徒の学力向上につながっているということが分かる。

「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は34.2%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると53.2%である。これは中学校教師の意識調査の25.8%に対して、約2倍以上高くなっている。[図3]

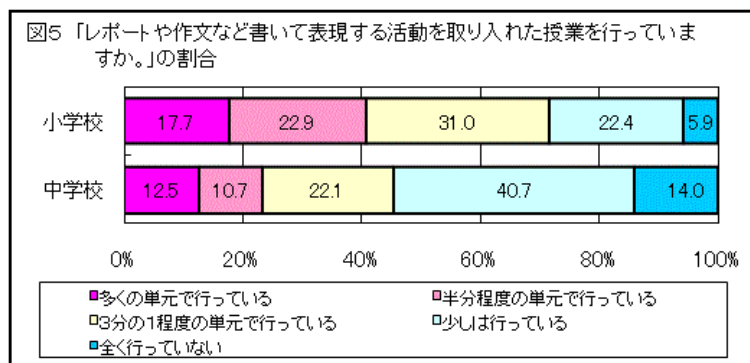


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、数学においては顕著な傾向が表れている。[図4]

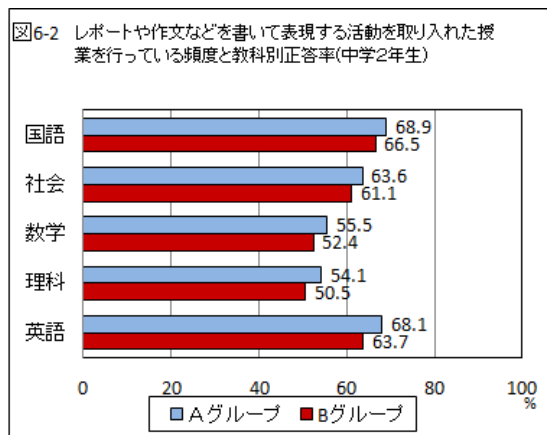
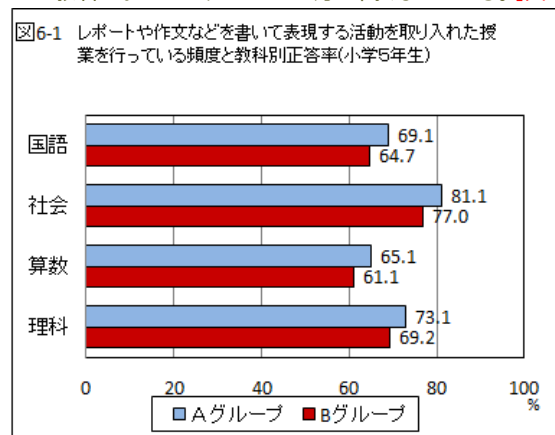


小学校に対し、中学校の場合、放課後の時間は多くの生徒が部活動を行うことから補充的な時間に充てることができにくい。しかしながら、できるだけ授業の合間などを利用し、理解が十分でない生徒に対して補充的な支援を行うことが重要であることが正答率のグラフからうかがえる。

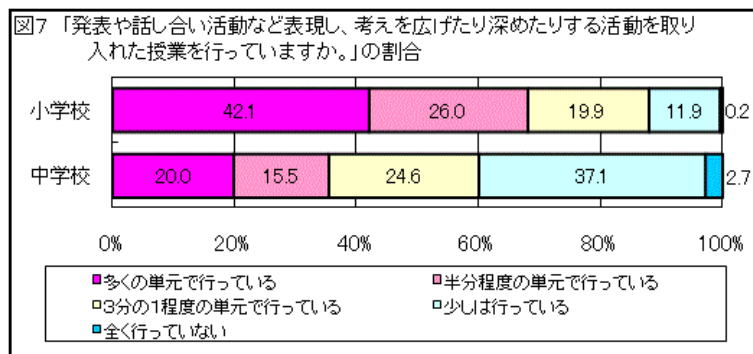
「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は17.7%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると40.6%である。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図5]



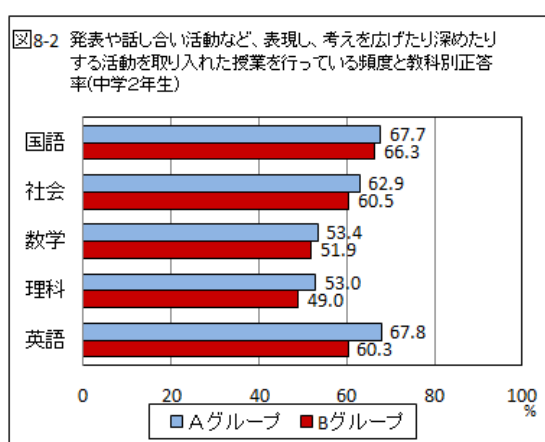
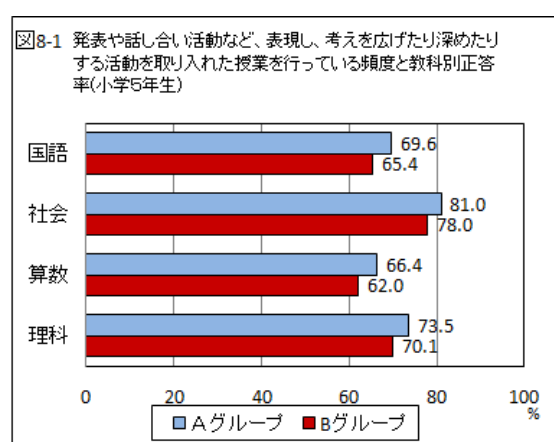
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともに明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。[図6]



「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は42.1%、「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合を合わせると6割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果の3割ほどに対して約2倍になっている。[図7]

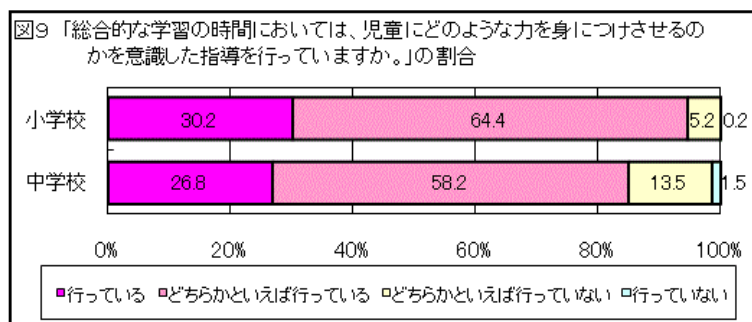


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、英語においては顕著な傾向が表れている。[図8]

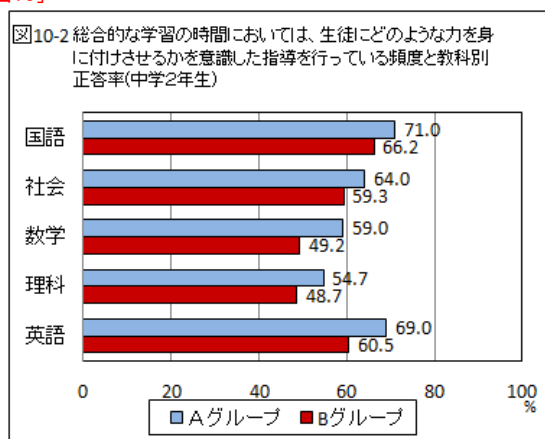
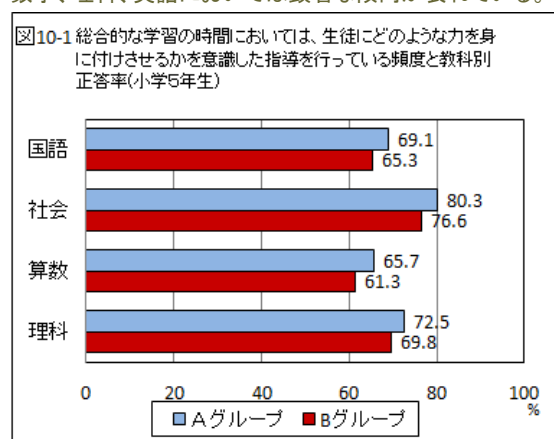


言語活動の充実を図るためにも、授業のなかで、児童生徒が感じたことや考えたことをレポートや作文などの形で書かせることや、話し合い活動などで説明させることは重要である。自分の言葉で書いたり、説明したりすることで、思考を整理し、理解を深めることにもつながる。このことが図6や図8に見られる正答率の高さにもつながっていると考えられる。

「総合的な学習の時間においては、生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識した指導を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は30.2%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっているが、中学教師の割合も8割を上回っている。【図9】

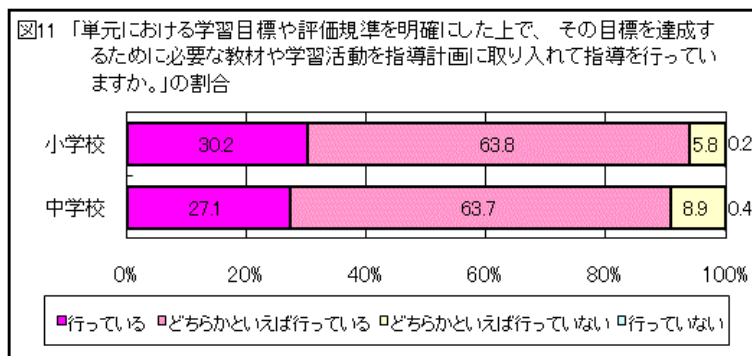


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、数学、理科、英語においては顕著な傾向が表れている。【図10】

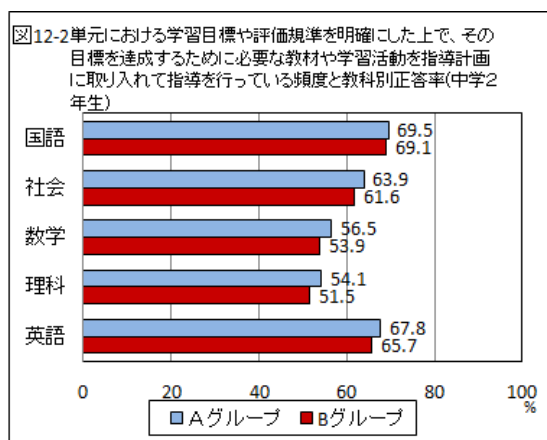
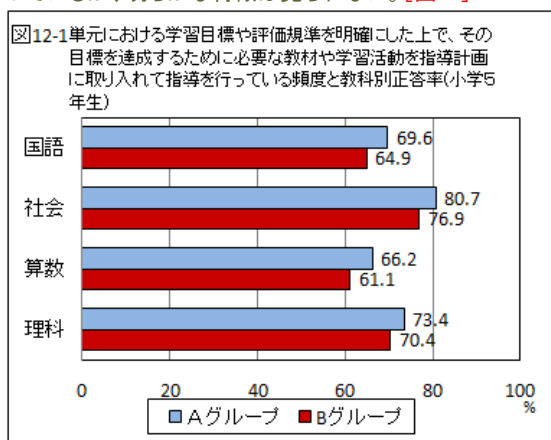


小学校、中学校ともに、多くの教師が、総合的な学習の時間において、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかということを意識して行っており、ねらいを明確にした上で活動できていることが分かる。図10の結果から、中学校において、AグループとBグループを比較した場合に正答率の差が小学校に比べ大きいことは、教科で得た知識などを、意識的に総合的な学習の時間のなかで使うことが正答率につながっている可能性があるということが分かる。

「単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は30.2%、「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。同様に、「行っている」、「どちらかといえば行っている」と回答した中学校教師の割合も9割を上回っている。[図11]

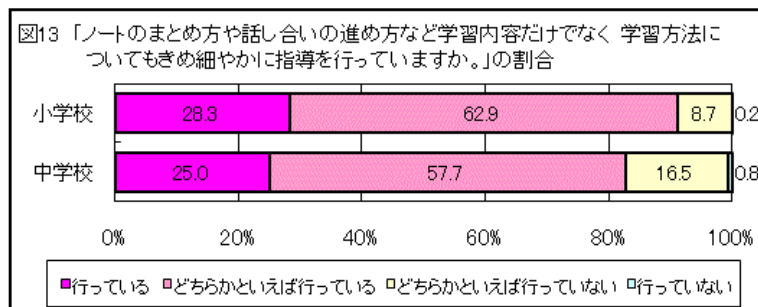


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校ではすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、算数においては顕著な傾向が表れている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が高くなっているが、明らかな特徴は見られない。[図12]

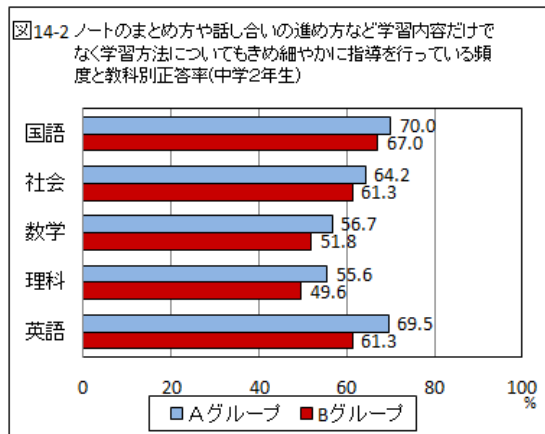
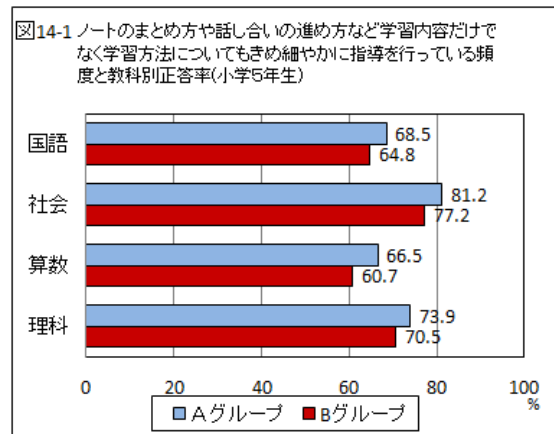


学習目標や評価規準をきちんと設定し、学習活動を行っている教師が、小学校と中学校それぞれ9割以上の割合でいるということから、AグループとBグループに正答率において大きな差が見られないということにつながっていると考えられる。新学習指導要領においてもきちんとした学習目標や評価規準の設定を行うことが重要である。

「ノートのとめ方や話し合いの進め方など学習内容だけでなく学習方法についてもきめ細やかに指導を行っていますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は28.3%、「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると約9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっているが、中学教師の割合も8割を上回っている。[図13]

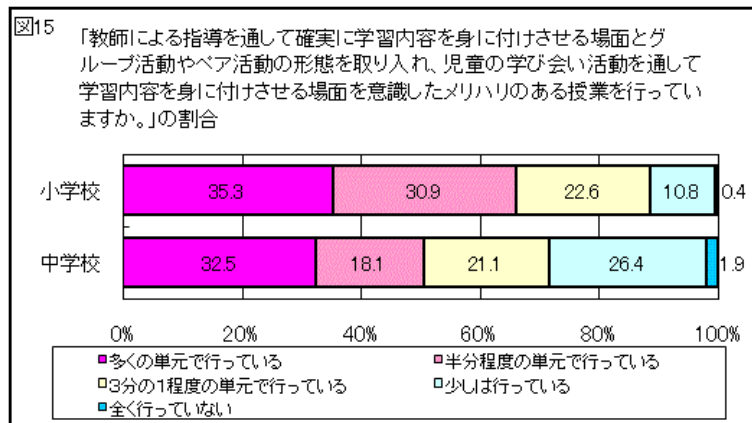


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともにすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に、小学校の算数、中学校の理科、英語においては顕著な傾向が表れている。[図14]

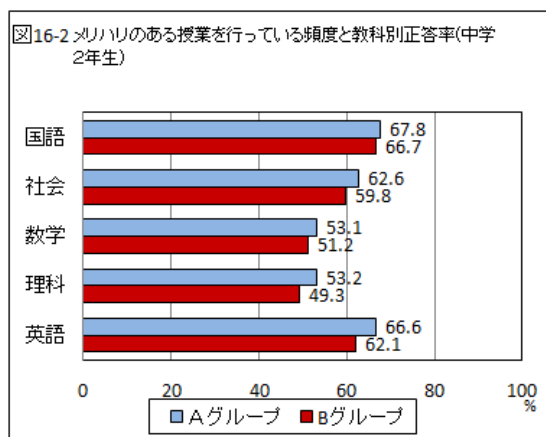
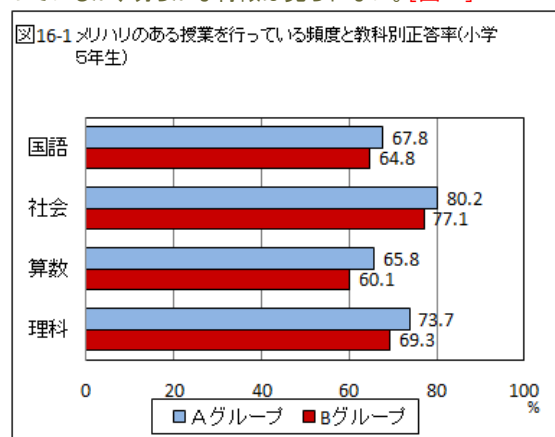


これらの結果から、ものごとを論理的に考える必要がある算数、理科、そして文法などを整理しながら学習する必要がある英語などは、学習内容と学習方法をきちんと指導することで、児童生徒の学力に結びつくことが分かる。

「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は35.3%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると6割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。【図15】



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校ではすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、算数においては顕著な傾向が表れている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が高くなっているが、明らかな特徴は見られない。【図16】



これらの結果から、特に小学校においては、教師主導の学習形態と学び合い活動などの学習形態を、教師が意識的に行うことが学力の向上につながっていることが分かる。

＜これからの指導に向けて＞

発展的な課題を取り入れた授業

知識や技能は獲得された段階でとどまることなく、その知識や技能を活用することによって、更に確かな定着へとつながると考えられる。発展的な課題を取り入れた授業を実施することは、児童生徒の学びの面白さや楽しさを誘発するだけでなく、学習内容の理解や獲得した知識・技能の定着についても有効に働くと考えられる。授業においては、単元ごとに児童生徒一人一人の実態をしっかりと把握し、必要に応じて、児童生徒の実態に合った発展的な課題を取り入れていくことが有効であると考えられる。これは学力の重要な要素のすべてに有効に働くであろう。

今回の学習指導要領改訂において、多くの教科の授業時数が拡大され〔※1参照〕、このような学習活動を展開するための時数が確保されたことも今後、有効に生かしていく必要がある。

※1 授業時数の拡大

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）
平成20年1月17日 30～39ページ及び150ページ

表現する活動を取り入れた授業

今回の調査においても、表現活動についてのより詳細な分析を進めるため、「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業」の実施と「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業」の実施に分けて、意識調査を行った。その結果、前年度調査と同様、発表や話し合い活動などの表現活動を取り入れた授業に比べ、書いて表現する活動を取り入れた授業の頻度がいくぶん少ない傾向にあることが分かった。

発表や話し合い活動などの表現活動は十分にその有効性が認められるが、そのような活動に取り組む前の準備として、自分の考えを明確にしたり、発表したいことを、要点をまとめて分かりやすくまとめたりする活動があれば、発表活動や話し合い活動は充実する。また、レポートや作文など書いて表現する活動はそれのみで終わるのではなく、そのレポートや作文を発表する場が位置付けられていたり、そのレポートや作文を評価してもらう機会が与えられたりすることで、児童生徒にとっても活動の必然性が生まれ、満足感や更なる意欲にもつながると考えられる。

大切なことは、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することが、児童生徒の知識・技能の定着、思考力・判断力・表現力の育成に有効ということである。今後、更に言語活動を意識した指導の工夫が望まれる。

なお、表現活動においては、結果の評価のみではなく、その取り組みの過程で丁寧な評価をフィードバックすることにより、表現活動そのものの質も高まり、児童生徒の満足感や更なる向上への意欲にもつながる。また、表現活動の充実という視点において、コンピュータや学校図書館など学習環境の効果的な活用を図ることも一つの有効な方策である。

身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導

総合的な学習の時間において、身に付けさせたい力を意識した指導を行うことによって、児童生徒の問題解決能力の育成につながり、教科学習における言語表現力や理解力により影響を与えていることがうかがえる。また、児童生徒の学習意欲の喚起や自己学習への態度化にもつながると考えられる。なによりも、総合的な学習の時間における教師のカリキュラムマネジメントは、教科をつなぐだけでなく学級や学年間などの教師集団の連携にもよい影響を与えていることが予想され、身に付けさせたい力を意識した教師の指導は教科指導においても発揮されていると思われる。

中央教育審議会の答申（平成20年1月17日）においても、総合的な学習の時間の学校間、学年段階間の取り組みの実態に差があることを課題としており〔※2参照〕、学校としてのカリキュラムマネジメント能力の向上が求められている。学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の縮減はあるもののその重要性については、更に強調されることとなる。各学校におけるカリキュラムマネジメント能力の向上がおおいに期待されることである。

※2 総合的な学習の時間の課題

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）
平成20年1月17日 130ページ～132ページに記載されているので、参照していただきたい。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

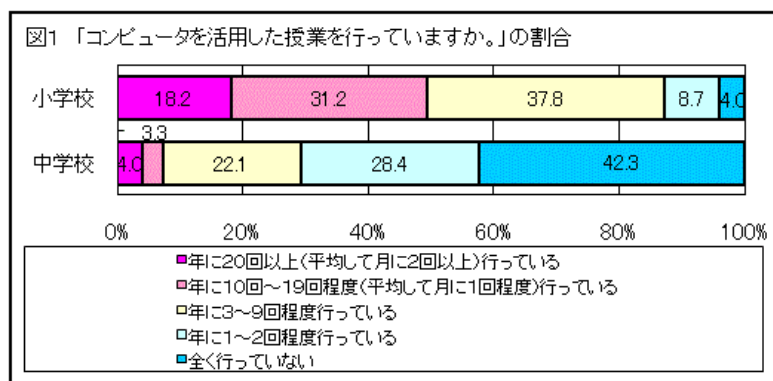
教師意識調査の結果の分析

2 学習環境の活用

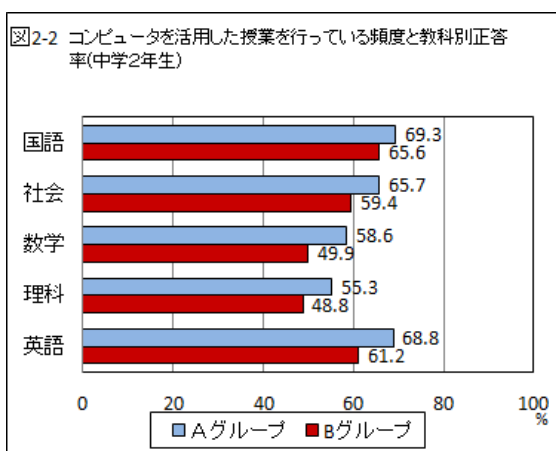
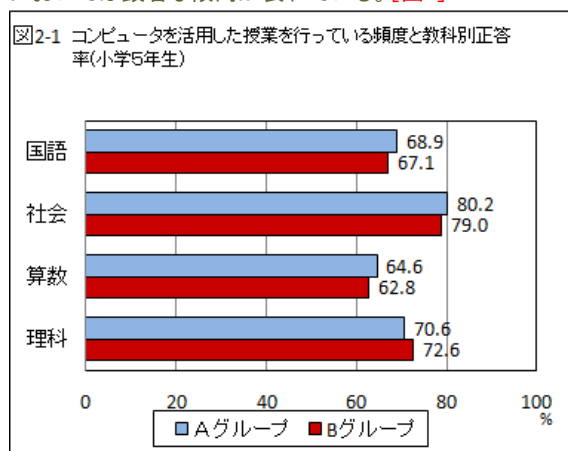
- コンピュータ、学校図書館ともに、活用頻度や活用目的に小中学校の違いが見られる。児童生徒の実態や学習の内容に応じて、明確な目的をもって取り入れていくことで効果があがると考えられる。

この節では、授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を分析する。

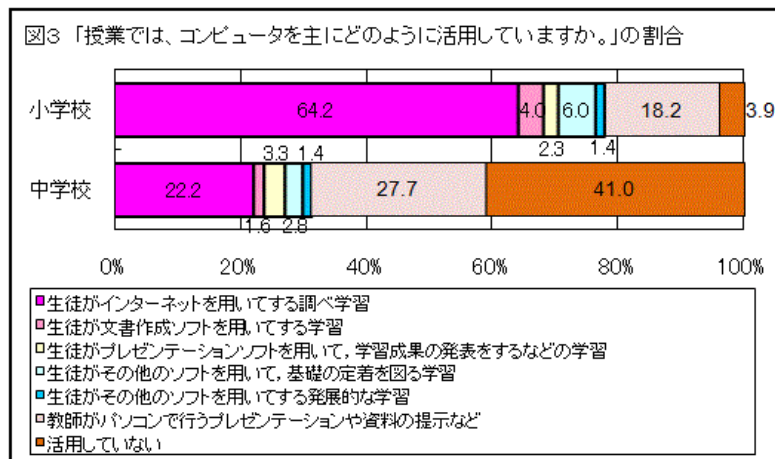
「コンピュータを活用した授業を行っていますか」という設問については、「年に20回以上(平均して月に2回以上)」と回答した小学校教師の割合は18.2%であり、「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)」と回答した教師の割合を合わせると49.4%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、かなり高くなっている。[図1]



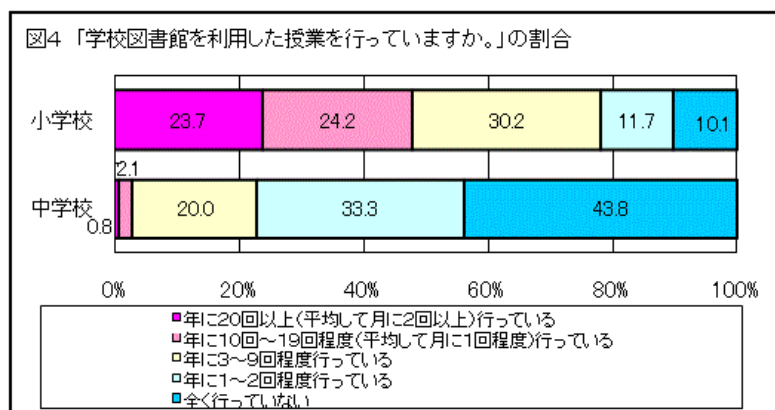
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では国語、社会、算数においてAグループの方がわずかに高くなっている。中学校ではすべての教科においてAグループの方が高くなっている。特に、社会、数学、理科、英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]



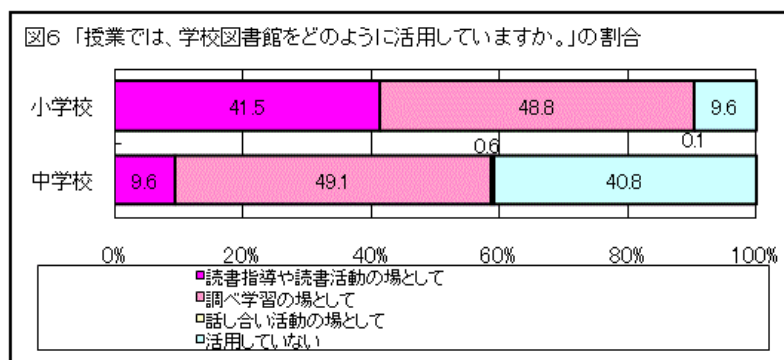
「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」という設問については、小学校では「インターネットを用いて調べ学習」と回答した教師の割合が最も多く、64.2%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて約3倍程度高くなっている。中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」として活用する割合が小学校よりも高くなっている。[図3]



「学校図書館を活用した授業を行っていますか」という設問については、「年に20回以上(平均して月に2回以上)」と回答した小学校教師の割合は23.7%であり、「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)」と回答した教師の割合を合わせると4割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、かなり高くなっている。[図4]



「授業では、学校図書館をどのように活用していますか」という設問については、小学校では「読書指導や読書活動の場として」と回答した教師の割合が最も多く、41.5%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、かなり高くなっている。中学校では「調べ学習の場として」活用する割合が小学校よりもやや高くなっている。[図6]



〈これからの指導に向けて〉

コンピュータを活用した授業

平成22年度佐賀県における学力向上重点対策の3「学習環境の改善充実」の中で、「ICT活用の個に応じた指導の充実」があげられ、佐賀県内の各学校においても、電子黒板やPCなどの環境の充実が図られ、公開授業や研究会などが行われている。ICTを活用することは、教師の指示を明確にしたり、見せながら話すことで説明が分かりやすくなったするなど、様々なよさがある。さらに、インターネットで最新の情報にふれたり、学習素材やソフトウェアで知識や技能を定着させたりすることにもつながったりすることもある。今後、教師のICTを活用するスキルアップ研修や児童生徒への情報モラルにかかわる教育などについても計画的に行っていく必要があると考えられる。

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

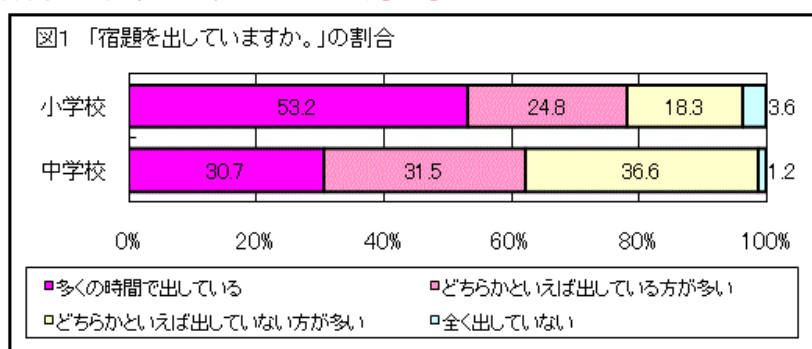
教師意識調査の結果の分析

3 家庭学習の関与状況

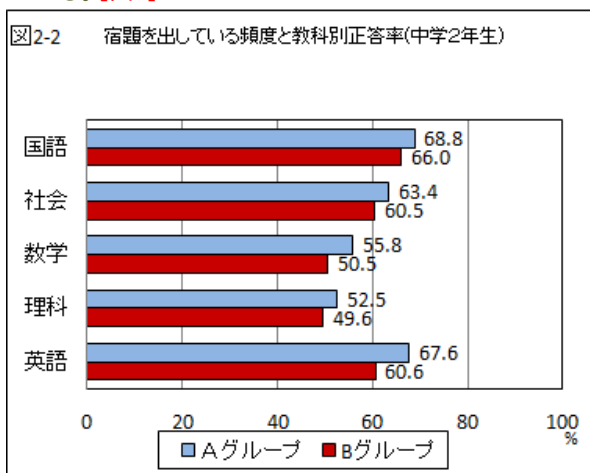
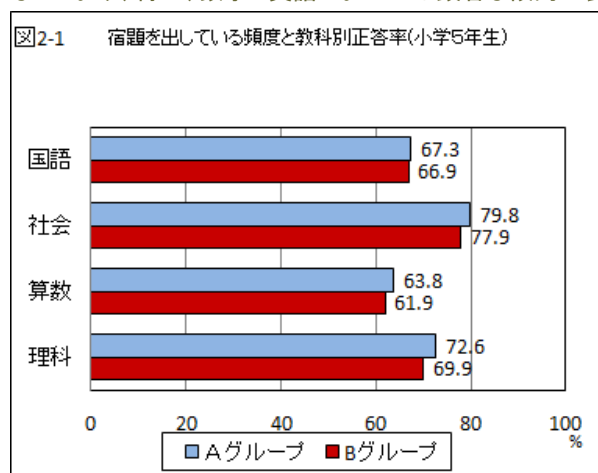
○ 宿題については、予習的な学習と復習的な学習をバランスよく組み合わせていくことで、学習事項の定着や家庭学習の習慣化のみならず、学習への意欲向上へも効果があがると考えられる。

この節では、宿題を出している頻度及び出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を分析する。

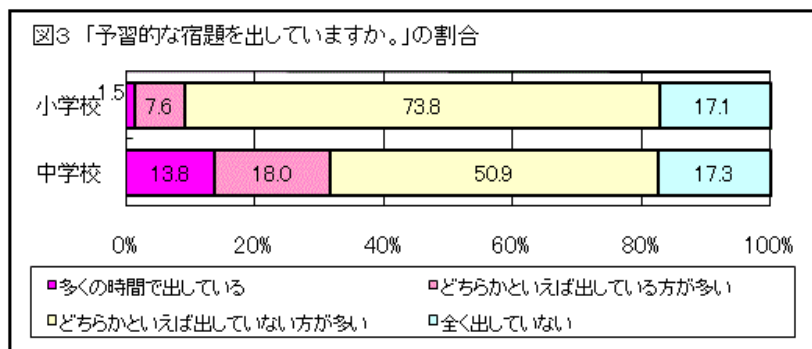
「宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間で出している」と回答した小学校教師の割合は53.2%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると約8割となっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図1]



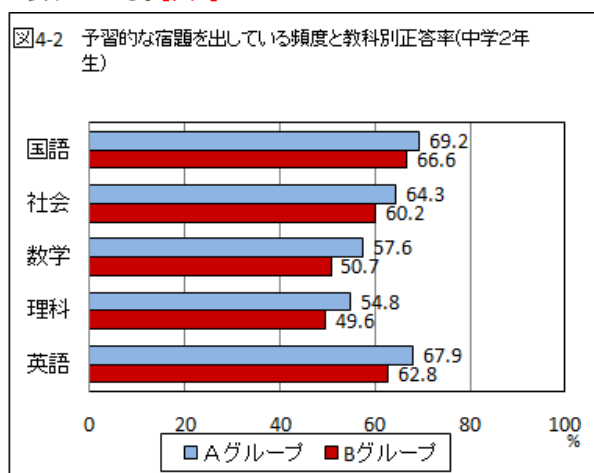
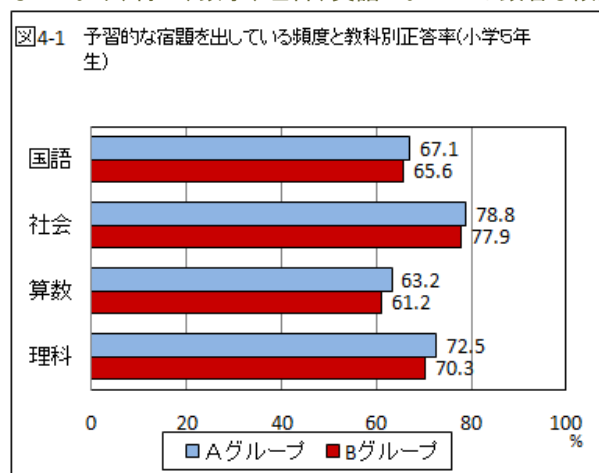
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方がやや高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの正答率が高くなっており、特に、数学と英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]



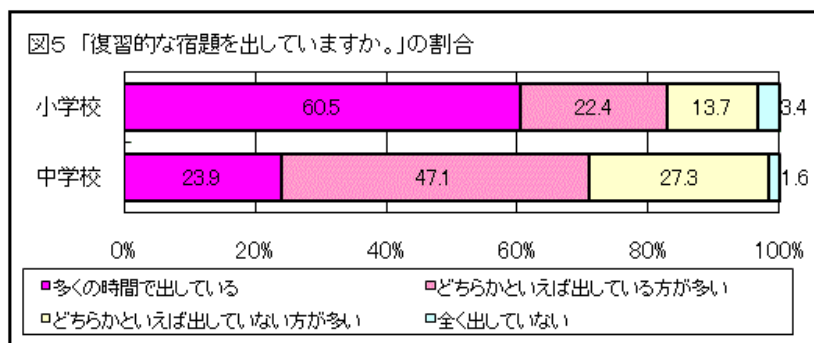
「予習的な宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間を出している」と回答した小学校教師の割合は1.5%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると9.1%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもかなり低くなっている。[図3]



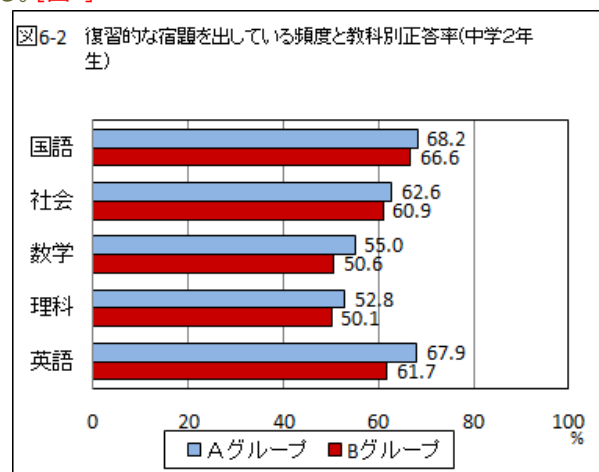
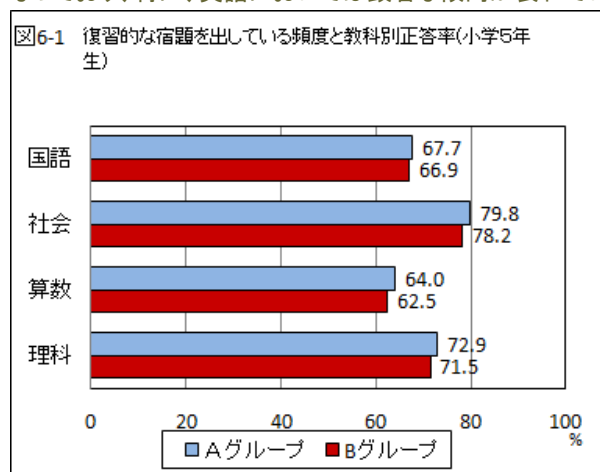
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方がやや高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの正答率が高くっており、特に、数学、理科、英語においては顕著な傾向が表れている。[図4]



「復習的な宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間を出している」と回答した小学校教師の割合は60.5%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると約8割になっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方がやや高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの正答率が高くなっており、特に、英語においては顕著な傾向が表れている。[図6]



<これからの指導に向けて>**予習的な宿題と復習的な宿題**

小・中学校共に、多くの教師が宿題を課しており、その多くは復習的な内容の宿題である。宿題が授業における学習事項の定着や学習の習慣化を目的とされており、これらの結果から効果を挙げているといえる。一方で小学校においては、中学校と比べて予習的な内容の宿題を課す割合は極めて少ないことが分かる。予習的な内容の宿題は、授業における児童の主体的な活動を促す手立てとして、児童の自己学習力を育てる上においても、大切な要件であると考えられる。

平成19年6月に公布された学校教育法の一部改正により、学力の重要な要素〔※3参照〕として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲の三点が明確に示された。予習的な宿題を工夫し、その宿題と授業における学習活動をうまくかかわらせることによって、授業への関心や意欲を高め、主体的な学習活動に結び付けることが学習意欲を喚起するための手立ての一つとして有効であろう。また、復習的な宿題においても、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、知識・技能を活用して課題解決を図るような視点での内容について検討されることが望まれる。

※3 学力の重要な要素

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』(答申)

平成20年1月17日 10ページ

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

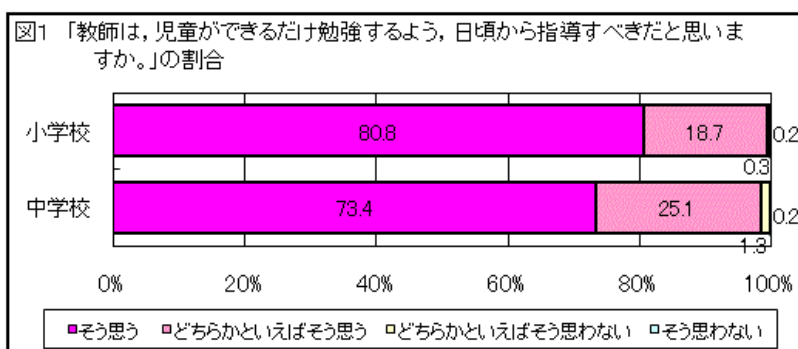
教師意識調査の結果の分析

4 教師の指導観

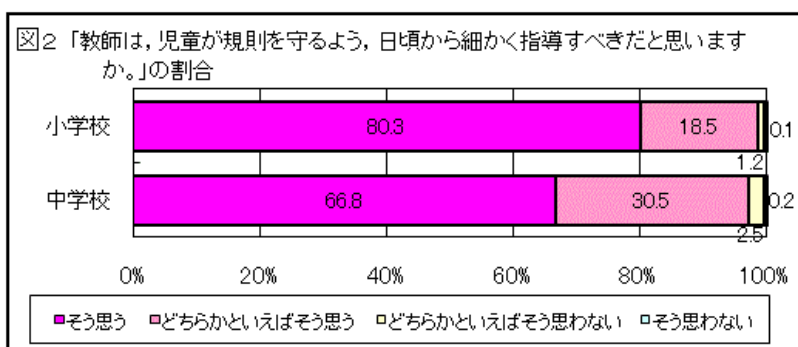
- 教師は、子どもたちができるだけ勉強するように、日ごろから指導し、勉強のことについて気軽に話しかけられるようにすべきだと思っている。
- 小・中学校の教師とも、すべての項目で意識が高い。しかし、「教師は、学級で何か問題が起こったとき、常に児童生徒に意見を求めるべきだと思いますか」という設問については、他の設問と比べると「そう思う」と回答した教師の割合は高くない。

この節では、教師の指導行動を主に課題達成の意識、集団維持の意識から問うことにより、教師の指導観を分析する。

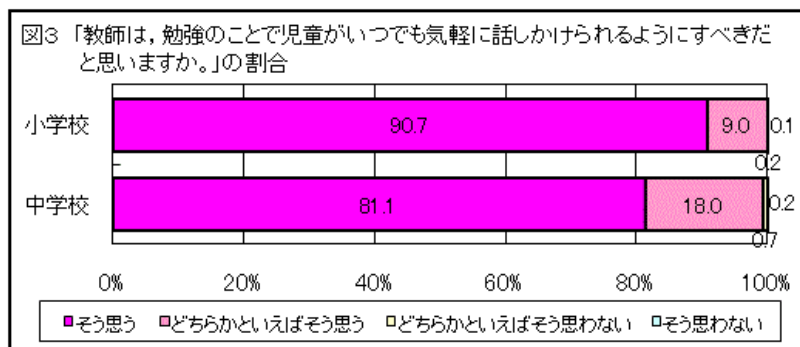
「教師は、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日ごろから指導すべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は80.8%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、ほぼ100%に近い割合となっている。これは、中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらない。【図1】



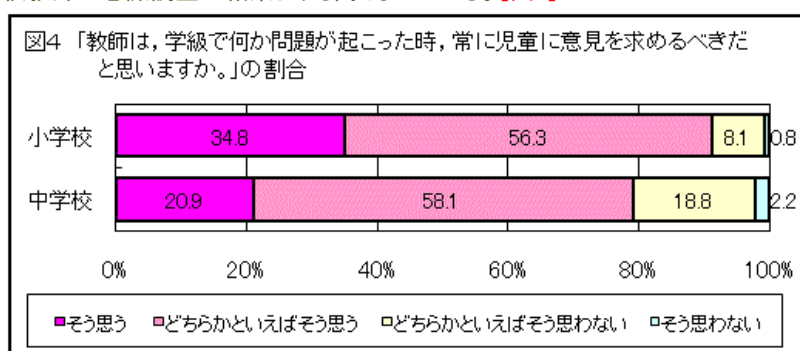
「教師は、児童が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は80.3%、「どちらかといえばそう思う」まであわせるとほぼ100%に近い割合となっている。これは、中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらない。【図2】



「教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は90.7%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、100%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらないが、「そう思う」の割合だけ比べると9.6%高くなっている。〔図3〕



「教師は、学級で何か問題が起こったとき、常に児童に意見を求めるべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は34.8%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。〔図4〕



これらの結果から、教師の指導行動について、勉強に関することや学校や学級の秩序維持など、学習環境に直接的及び間接的に関することについては、非常に高い意識を持っていることが分かる。しかし、学級で何か問題が起こったとき、常に児童生徒に意見を求めるかという設問に対しては、小学校、中学校ともに、どちらかといえばそう思うと回答した教師が半数以上おり、学級経営における指導観に教師間の差があることがうかがえる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

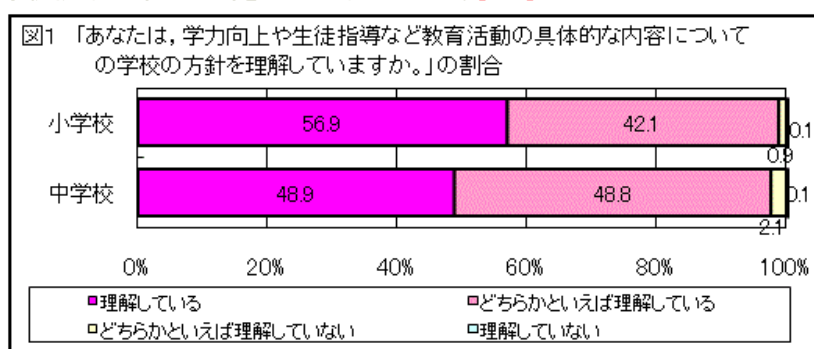
教師意識調査の結果の分析

5 学校組織のマネジメントに対する意識

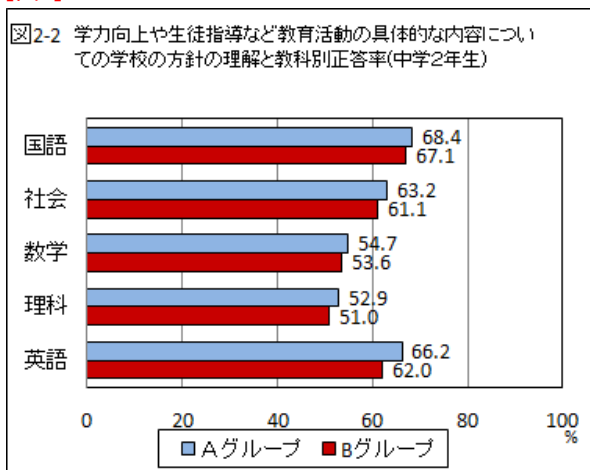
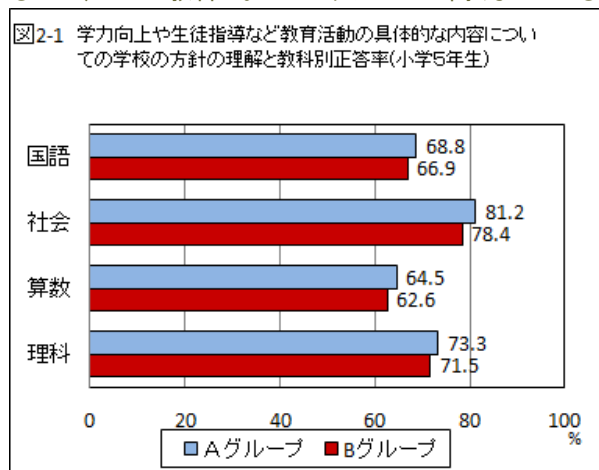
- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っている。
- 教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を大きく上回っている。

この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織のマネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

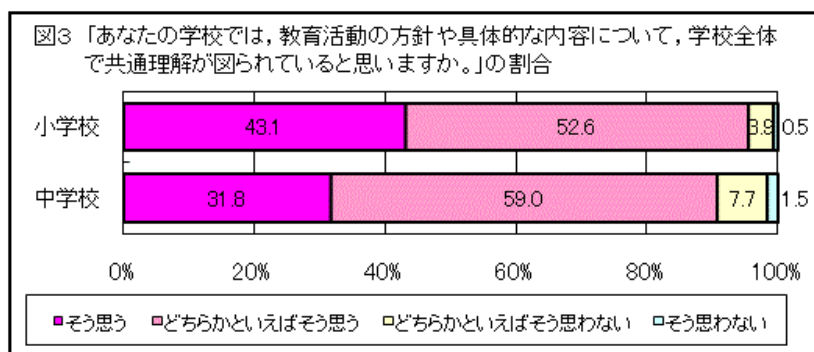
「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」という設問については、「理解している」と回答した小学校教師の割合は56.9%、「どちらかといえば理解している」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を大きく上回っている。同様に「理解している」、「どちらかといえば理解している」と回答した中学校教師の割合も9割を大きく上回っている。[図1]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともに明らかな特徴は見られないものの、全ての教科においてAグループが高くなっている。[図2]

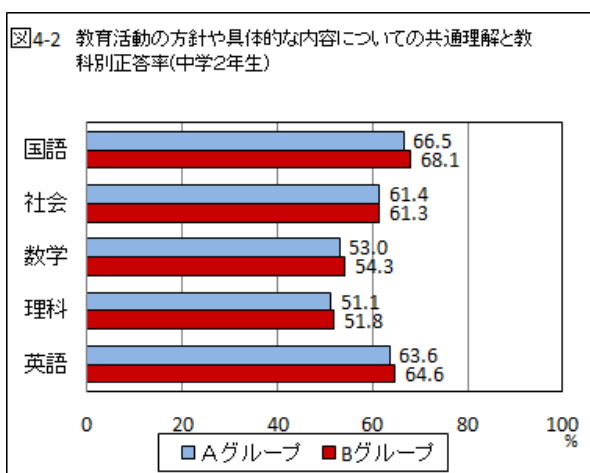
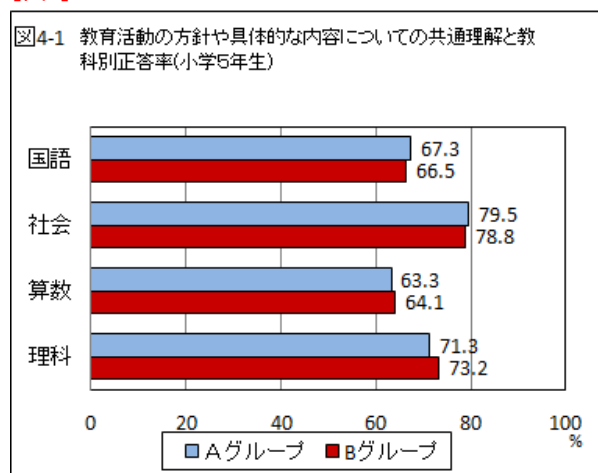


「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は43.1%、「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。同様に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した中学校教師の割合も9割を大きく上回っている。[図3]

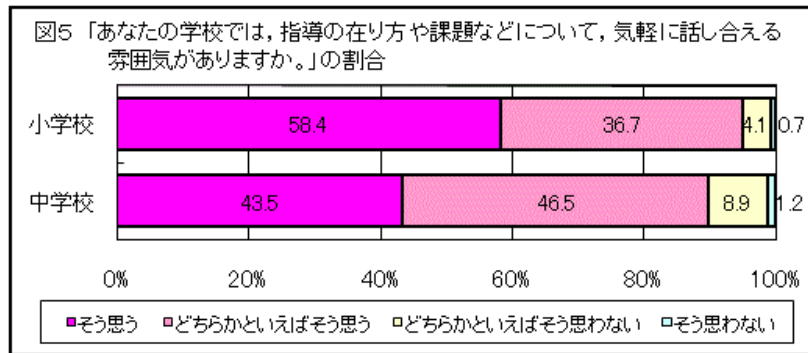


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では、国語と社会においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。また、中学校では社会においてAグループの方が平均正答率がやや高くなっている。

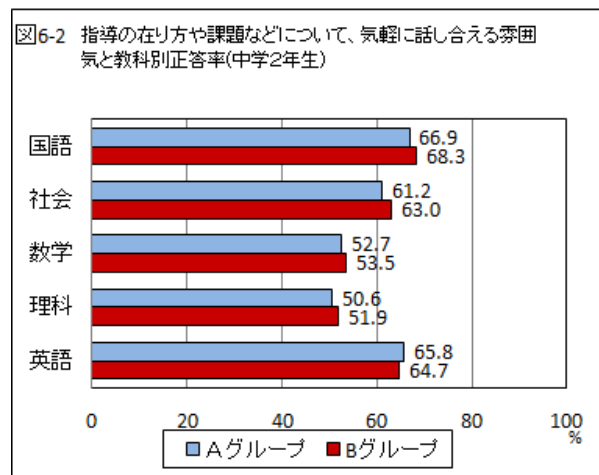
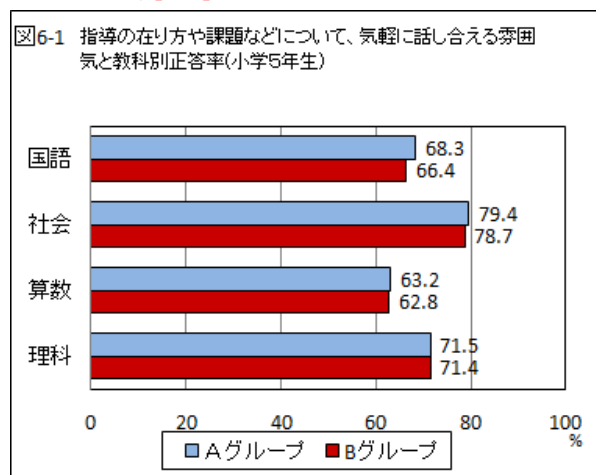
[図4]



「あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は68.4%、「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。「そう思う」と回答した小学校教師の割合は中学校教師の意識調査の結果と比べてやや高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校では、英語においてAグループの方がやや平均正答率が高くなっている。[図6]



<これからの指導に向けて>

学校組織マネジメントに対する意識との関連

指導法の改善、充実を図るためには、学校全体での取り組みが重要であり、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。今回の調査結果からも、県全体として学校組織マネジメントの視点から見た場合、おおむね良好であるといえる。その中でも、学校全体として学校組織マネジメントへの意識が高い学校においては、正答率も高くなる傾向が見られた。これは、教師集団が目的を共有化しており、教師間の連携・協働体制が有効に働き、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表われであり、教師の意欲や指導力の向上が、児童生徒の学力向上につながっている結果であると考えられる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

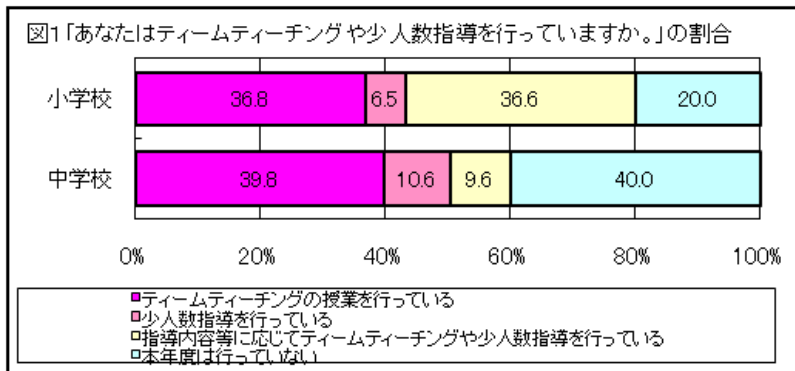
教師意識調査の結果の分析

6 TT・少人数指導の成果と課題

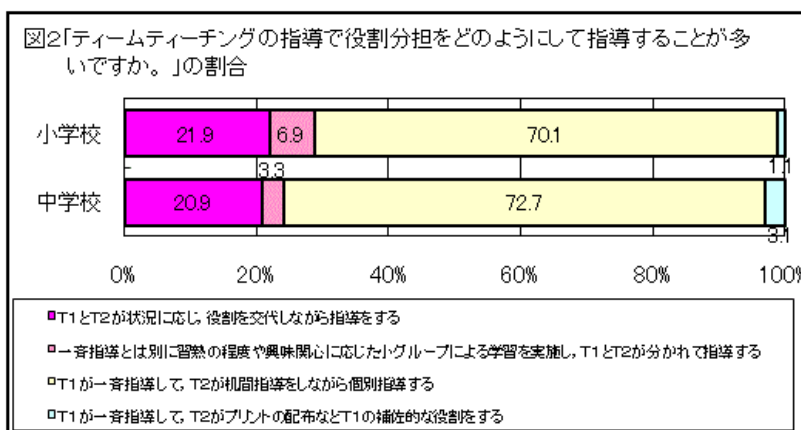
- TT・少人数指導の成果としては、小中学校ともに「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」と回答した教師の割合が多くなっていることが挙げられる。
- TT・少人数指導の課題としては、打ち合わせ時間の確保についての工夫・改善と、学習状況が十分な子どもを更にはばす手立て、教師の役割分担などについて再検討の必要性の3点が挙げられる。

この節では、チームティーチングや少人数指導に携わる教師を対象に、チームティーチングの際の役割分担や少人数指導における習熟度別編成の導入頻度など実施方法にかかわる現状、指導法改善の頻度、チームティーチングや少人数指導の成果と課題について問うことにより、県の施策であるきめ細かな指導の実現状況と基礎学力定着の状況を分析する。

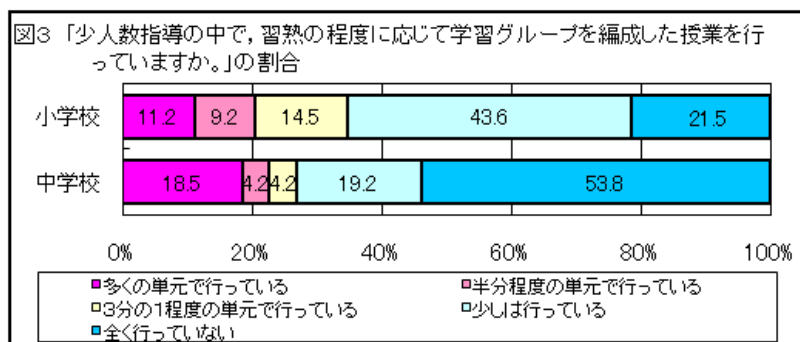
「あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか」という設問について、小学校では「チームティーチング」と回答した教師の割合が最も多く、36.8%である。次いで「指導内容に応じてチームティーチングや少人数指導を行っている」と回答した割合が36.6%となっている。これは中学校教師の意識調査の結果9.6%と比べて高くなっている。[図1]



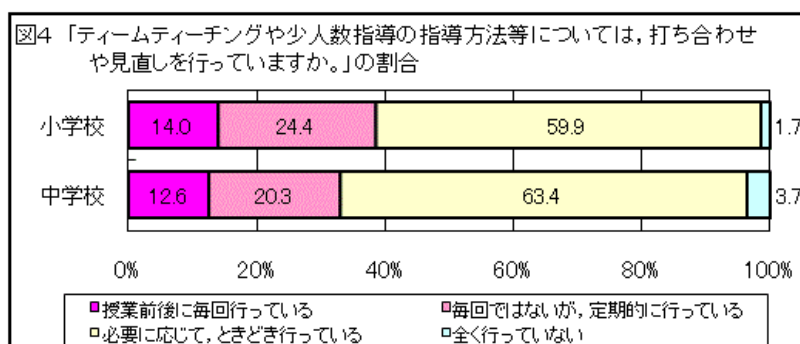
「チームティーチングの指導で役割分担をどのようにして指導することが多いですか」という設問について、小学校では「T1が一斉指導して、T2が机間指導しながら個別指導する」と回答した教師の割合が最も多く、70.1%である。次いで「T1とT2が状況に応じ、役割を交代しながら指導する」と回答した割合が21.9%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べてほとんど変わらない。[図2]



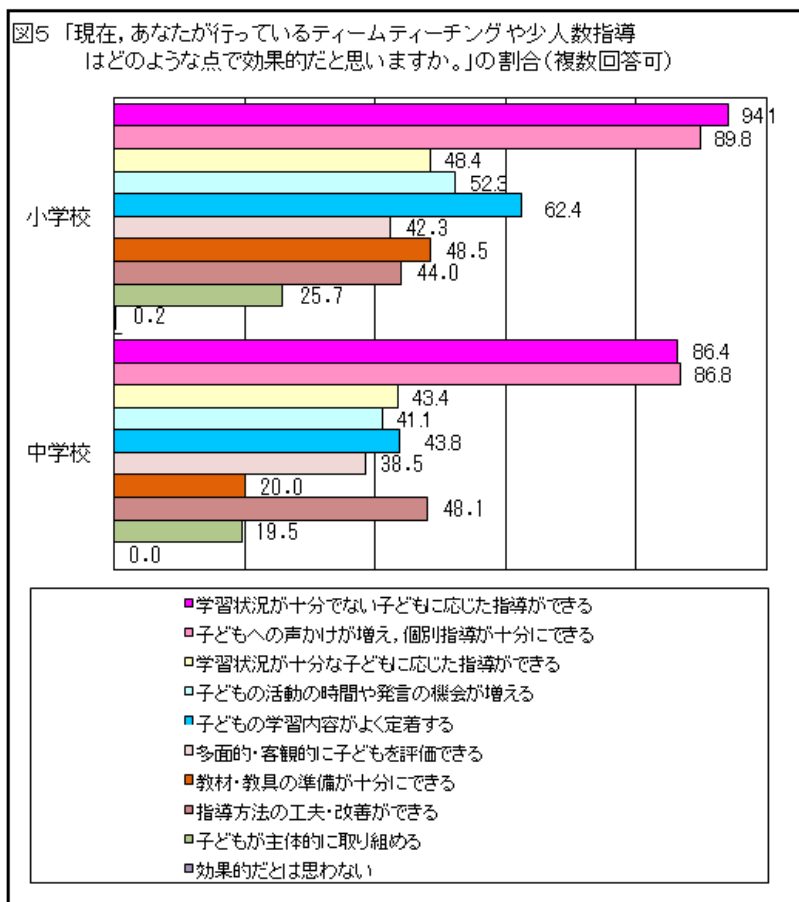
「少人数指導の中で、習熟の程度に応じて学習グループを編成した授業を行っていますか」という設問について、小学校では「少しは行っている」と回答した教師の割合が最も多く、43.6%である。ついで「まったく行っていない」と回答した教師の割合が21.5%となっている。「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は、中学校教師の意識調査の結果と比べて低くなっている。[図3]



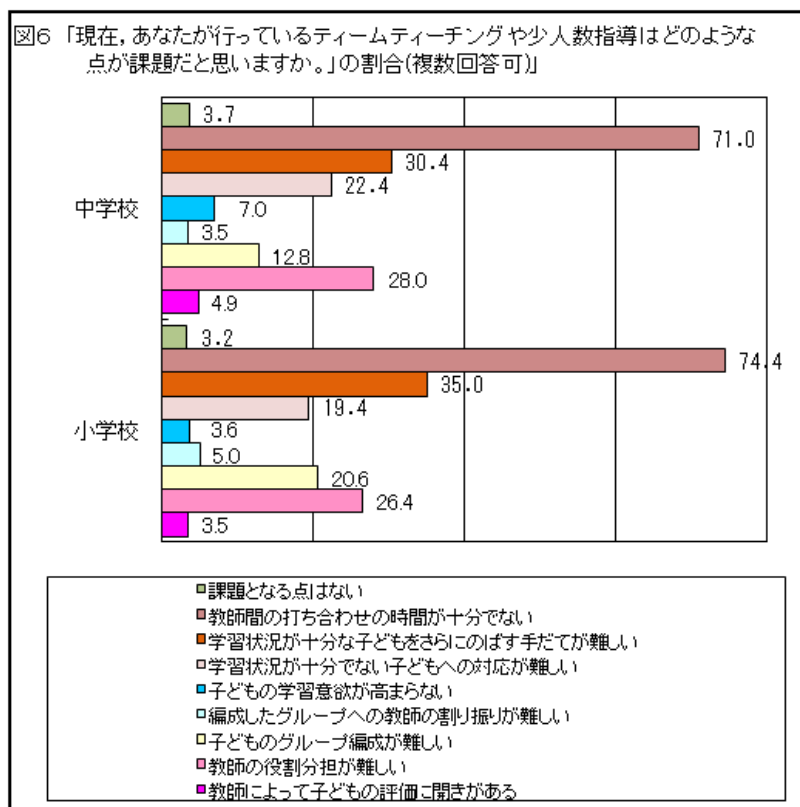
「チームティーチングや少人数指導の指導方法等については、打ち合わせや見直しを行っていますか」という設問については、小学校では「必要に応じて、ときどき行っている」と回答した教師の割合が最も多く、59.9%である。ついで「毎回ではないが、定期的に行っている」と回答した割合が24.4%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べてほとんど変わらない。[図4]



「現在、あなたが行っているチームティーチングや少人数指導はどのような点で効果的だと思いますか。(複数回答可)」という設問については、小学校、中学校ともに「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」と回答した教師の割合が多く、8割を上回っている。ついで、小学校では「子どもの学習内容がよく定着する」と回答した割合が62.4%、中学校では「指導法の工夫改善ができる」となっている。また、「教材・教具の準備が十分にできる」と回答した教師の割合は、小学校では48.5%、中学校では20.0%と差が見られた。[図5]



「現在、あなたが行っているチームティーチングや少人数指導はどのような点が課題だと思いますか。(複数回答可)」という設問については、小学校、中学校ともに「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」と回答した教師の割合が最も多く、7割を上回っている。ついで、「学習状況が十分な子どもを更にのばす手立てが難しい」と「教師の役割分担が難しい」と回答した小学校教師の割合が高くなっている。[図6]



<これからの指導に向けて>

チームティーチング・少人数指導

チームティーチング・少人数指導については、多くの教師がチームティーチングや少人数指導の効果について認めている。小学校では約8割、中学校では約5割の教師が「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」を効果的な点として挙げており、以下、「子どもの学習内容がよく定着する」「指導方法の工夫・改善ができる」などを挙げている。課題としては、小・中学校共に「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」を挙げており、以下、「学習状況が十分な子どもを更にのばす手立てが難しい」「子どものグループ編成が難しい」「学習状況が十分でない子どもへの対応が難しい」などを挙げている。特に、チームティーチングを実施する場合には、教師間の授業前における十分な打ち合わせや授業後の評価についての情報交換などが欠かせないのであるが、このような時間が十分に確保できていない現状が見受けられる。

チームティーチング・少人数指導においては、目標の明確化や学習形態の工夫などを充実させることによって、その効果が際立つと思われる。その結果、児童生徒の学習に対する楽しさ、充実感・満足感がより確かなものとなり、学力向上へとつながると考えられる。

また、チームティーチング・少人数指導については、児童生徒のグループ編成の方法、教師の役割分担などについて更に検討を重ねるとともに、打ち合わせ時間の確保については、その原因を究明し、施策としての対応、及び各学校においての工夫・改善を図る必要がある。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > V 自校データの分析と活用

V 自校データの分析と活用

調査結果の分析から学校改善へのステップ

1 学習評価を踏まえた教育活動の改善

平成22年3月24日に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」が文部科学省のホームページ上で公開された。学習評価を踏まえた教育活動の改善については、次のように示されている。

○ 教師や学校にとっては、

【1】学校における教育課程の編成や、それに基づいた各教科等の学習指導の目標や内容のほか、評価規準や評価方法等、評価の計画も含めた指導計画や指導案の組織的な作成

【2】指導計画を踏まえた教育活動の実施

【3】児童生徒の学習状況の評価、それを踏まえた授業や指導計画等の評価

【4】評価を踏まえた授業改善や個に応じた指導の充実、指導計画等の改善

といった、Plan(【1】)、Do(【2】)、Check(【3】)、Action(【4】)のPDCAサイクルを確立することが重要である。

このようなPDCAサイクルは、日常の授業、単元等の指導、学校における教育活動全体等の様々な段階で繰り返されながら展開されるものである。学習評価を通じて、教師が授業の中で児童生徒の反応を見ながら学習指導の在り方を見直したり、一連の授業の中で個に応じた指導を図る時間を設けたりすることや、学校における教育活動を組織として改善したりしていくこと等が求められる。

○ このような学習指導に係るPDCAサイクルは、学校評価全体の枠組みの中で適切に位置付けられ、実施されることが必要である。

各教科等の学習評価を通じて、例えば、思考力・判断力・表現力等に課題があることが明らかになれば、それらをはぐくむ学習活動を学校の教育課程全体の中で推進する等、学習評価を個々の授業の改善に加え、学校における教育活動全体の改善に結びつけることが重要であり、そういった取組を学校評価の枠組みを通じて行うことが考えられる。(※1)

学習評価の推進については、学校や教師が今まで以上に意識的に取り組むことが必要になるが、「学習指導と学習評価に対する意識調査」(平成21年度文部科学省委託調査)によると、

「学習状況の評価の資料の収集・分析に負担を感じる」小・中学校の教師は約63%に及ぶとともに、「学習評価を授業改善や個に応じた指導の充実につなげられている」と感じていない教師が約29%いる。(※2)

といった報告がなされている。つまり、指導と評価の一体化については推進が図られているものの、その実現については十分でない状況だと言える。

2 学習状況調査のデータを基にした指導方法の工夫改善にかかわる教育センターの支援

佐賀県教育センターでは、学校の学習状況調査のデータを自動的にグラフ化するプログラム(分析ツール)を平成19年度から提供している。また、学校の状況に応じた指導方法の工夫改善にかかわる支援を平成20年度から行っている。支援の目的及び内容は、以下の通りである。

《目的》

- ① 分析ツールを使った学習状況調査の結果の分析方法についての周知と理解を図る。
- ② 結果データなど各学校の児童生徒の実態に基づく指導方法の工夫改善の進め方についてワークショップを通して理解を図る。
- ③ 学習状況調査の結果をはじめとする客観的な数値による評価資料の有用性について教師の認識を高めるとともに、教師のPDCAサイクルへの意識化・具体化を図る。

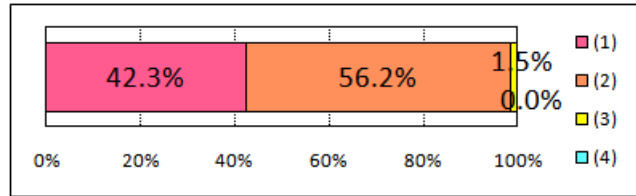
《内容》

- (ア) 分析ツールの使い方及び出力される各グラフの見方についての説明
- (イ) 学習状況調査の結果から見える学校の状況についての説明
- (ウ) 校内研究や学校評価等に照らし合わせた学習状況調査等の結果の見方についての説明
- (エ) PDCAサイクルにおける学習状況調査等の位置付けについての説明
- (オ) 各学校の要望に応じた情報提供
- (カ) 指導方法の工夫改善へ向けた校内研修の進め方についての説明及び演習

平成22年度は、12月15日現在で62件(小学校・中学校・各種研修会等)の支援に出向いた。本支援については、今年度よりアンケートによる評価を行っている。以下のグラフは、12月15日現在(小中を合わせた回答数843名)の集計結果である。

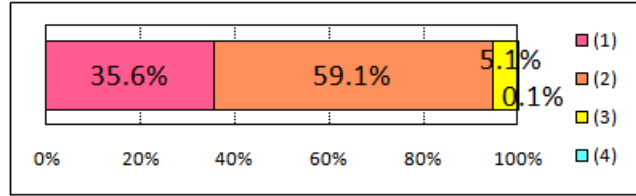
分析ツールから出力されるグラフの見方について分かりましたか。

(1) 分かった	42.3%
(2) だいたい分かった	56.2%
(3) あまり分からなかった	1.5%
(4) 分からなかった	0.0%



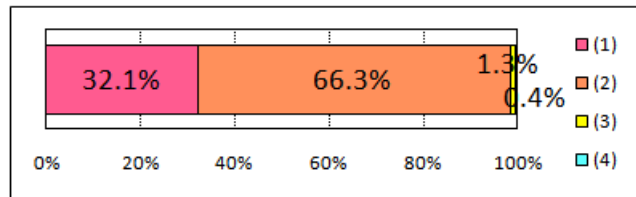
分析ツールを使って、児童生徒の様子についてさらに詳しく分析したいと思いますか。

(1) 詳しく分析したいと思う	35.6%
(2) 少し分析したいと思う	59.1%
(3) あまり分析したいと思わない	5.1%
(4) 分析したいと思わない	0.1%



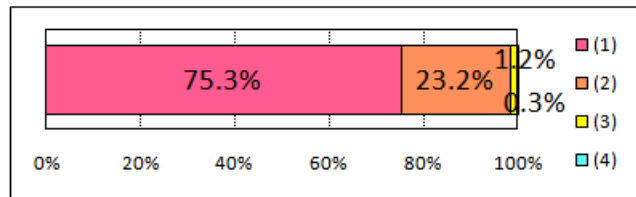
これからの実践にかかわるPDCAサイクルについてどう思いましたか。

(1) 実践したいと思う	32.1%
(2) できる分で実践したいと思う	66.3%
(3) あまり実践したいと思わない	1.3%
(4) 実践したいと思わない	0.4%



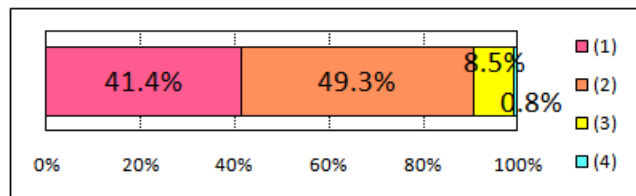
児童生徒のよさや課題について校内での共通理解を図るための今回のような演習についてどう思いましたか。

(1) 有効な方法だと思う	75.3%
(2) やや有効な方法だと思う	23.2%
(3) あまり有効な方法だと思わない	1.2%
(4) 有効な方法だと思わない	0.3%



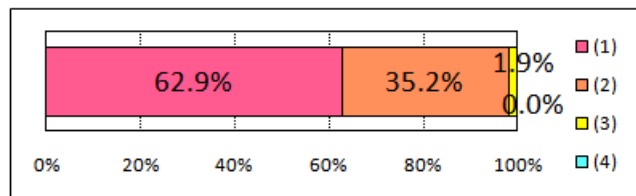
10月に公開予定の平成22年度県学習状況調査報告書(Web報告書)を読みたいと思いますか。

(1) 読みたいと思う	41.4%
(2) 少し読みたいと思う	49.3%
(3) あまり読みたいと思わない	8.5%
(4) 読みたいと思わない	0.8%



今回の研修は、あなたの学校の学力向上に役に立つと思いますか。

(1) 思う	62.9%
(2) やや思う	35.2%
(3) あまり思わない	1.9%
(4) 思わない	0.0%



3 学校の状況に応じた指導方法の工夫改善へ向けて

平成20年度から始まったこの支援については、のべ140回を超えた。現在は、依頼のあった学校の学習状況調査データについて佐賀県教育センターの学習状況調査担当所員が分析を行い、支援を行っている。今後も学校のニーズに合った支援をさらに進めていく一方で、学校独自のPDCAサイクルを踏まえた指導方法の工夫改善への取組については、各教師が以下のことを意識しながら進めていく必要がある。

- (1) 学習状況調査の結果と学校の取組を結び付けることが分析の第一歩であること。
- (2) 学校の状況に応じた指導方法の工夫改善へと向かうには、職員自らが児童生徒の状況を把握し、一体となって取り組むことが大切だということ。
- (3) 合意形成を図るためのワークショップ型の協議を行うためには、ある程度時間を確保する必要があるが、職員自らが分析から改善へと向かうステップを踏むことにより、学校の状況を把握することができ、課題及び課題に対する取組を共有することができること。

指導と評価の一体化だけでなく、評価したことから改善へ向かう取組については、教師や学校がこれまで以上に意図的・組織的に推進していくことが重要である。しかし、前述の「学習指導と学習評価に対する意識調査」(※2)の結果にもあるように、その実現については難しい状況があるのも事実である。PDCAサイクルを踏まえた指導方法の工夫改善への取組を具現化するためには、学校の状況に合わせて、より具体性のある、また、実現性のある計画を立てて実践していくことが大切であろう。

《引用文献》

※1、2 文部科学省 『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』 2010年3月24日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm

最終更新日: 2011-1-31